生長の家聖典全集

生命の實相

第九巻

宗教問答篇

東京 光明思想普及會發行

『生命の實相』第九巻目次

宗教問答篇

第一章　生活に生きる宗教

内容――昭和九年十一月十日、東京市有樂町華知講堂にて開催せる人類光明化運動講演會は聽集椅子席無慮九百に聽講者立錐の餘地なく谷口先生の二時間半に亘る大講演は多大の感銘を與へた。此講演を聽いたゞけで病氣の治つた人もある。

唯今生命の藝術社の佐藤彬さんが『生長の家』の理論的方面をお說き下さいました。そのお話になつた處をかいつまんで申しますと、羊と狼とは仲よく遊んでゐるのが存在の實相である。それが狼が肉食動物として羊を食んでゐるやうに見えてゐるのは、吾々が色眼鏡をかけて見てゐるからさう見えるのである。人間は神の子であつて既に無限の富の後嗣者である、貧乏に見えるのは自分が心の色眼鏡をかけて見てゐるからである。貧乏なんて本來無いのである。人間は神の子であつて既に無限に健康である。今病氣であるやうに見えても無限に健康である。それが病氣に見えるのは自分が色眼鏡をかけて見てゐるからである。病氣なんて本來無いのである。ところが其れが解らないで、貧乏と云ふ物質的狀態が實際にあると云ふことを信ずる以上はその物質的狀態を無くするために、何らかの物質的手段に訴へなければならない。左翼思想の起るのは當然で

ある。それは人間に病氣と云ふ物質的狀態があると信ずる以上は何らかの物質的治療、化學的治療法や、外科的治療法に訴へなければならないと同じことである。その意味に於て貧乏と云ふ物質的狀態を本來アルと信じてをられる間は佐藤彬さんも左翼思想を是認して左翼運動に同情を持つてゐられた。ところがたうとう佐藤彬さんは生長の家に來られて『貧乏本來なし、既に人間は無限の富者である』との信仰に入られたために左翼思想からスッカリ轉向せられた。此の左翼思想は本來人間が神の子であり無限の富者であることを自覺しない一種の心の病氣である。『生長の家』ではよく肉體の病氣が治る、そのために何か病氣の治療所のやうに誤解されたりしてゐる人もあるけれども、心の病氣も斯うして治るのである、心の病氣は治つてゐても外から見えないものだから證據を示すことが出來にくい、從つて、人間は神の子であつて本來どんな不幸もないと云ふことを眼に見える形に示すために病氣の治つた實例がより多く擧げられてゐるのであつて、心の病ひが治ればこそ肉體の病ひも治るのだとザッと斯う云ふ意味のことを佐藤彬さんは申されたのであります。これから私も病氣の治つた實例などを申すことになると思ひますが其のお積りでお聞き下さりたいと思ふのであります。

そんなことを云つても實際此のやうに、貧乏してゐるのに貧乏が本來ないと云つたり、實際此

のやうに病氣してゐるのに病氣が無いなどと云ふのは少し亂暴だと思はれる方があるかも知れません。併し實際病氣をしてゐる方で、私がする話を聽いたゞけでその病氣が忽然消えて了つたり、私が話す代りに書いた文章を讀んだゞけで病氣が治つて了ふ方が實際あるのは何故でせうか。これは實際の話であつて、其爲にこそ皆の人が私に話をしてくれと云ふ。此處へ斯うして來て話したり、私の書いたものを出版するために皆が集つて光明思想普及會を作つたりしてくれたので、これは多勢の人がその事實を認めた結果であります。斯う云ふ現象が起る原理はと考へて見ると、人の病氣をしてゐるのは假相卽ち假りの相、ウソの相であつて本來健康なのが本當の相だからであります。此の本當の相のことを生長の家では實相と云つてゐるのであります。先日も大阪新町の佛教會館で講演を致しました處が、その講演を一回聞いたゞけで病氣が治つたと云ふ報告があります。唯今その實際の報告文を皆さまの信仰を强めるために讀んで見る事にします。

『小生知己の神崎と申す誌友の報告にては十月の御講演を拜聽したるだけにて年來の神經痛の全治例有之候。その人は小學教師の妻にて二人の子供あり。昨年は國元へ歸り養生しをりしもハカ〲しからず、本年歸阪の後だん〲烈しく炊事迄主人が致しをりし位に進みをりし由、然るに神崎氏の勸により、十月に聽講し、痛みを忘れ、洗濯を始め、主人は素より子供まで氣が變になつたのではないかと心配せし位にて

其後難有い難有いの連發で全く神恩を感謝する念一杯の由に候。又同氏の話に今夏家政塾にて御高話を承りし二十六歳の娘さんは嘗て腹膜を患ひ婚嫁すれば再發するとて結婚不能と信じをりし處、忽然として悟り、本月神戸に嫁入りし、今後は神戸の誌友として永く信仰に進まんことを希望しをられ候由。尚昨夜は遲く船橋先生來席され最近子宮癌の婦人にて慢性腸加答兒を伴ひ、全く骨と皮となりたる衰弱し切りたる人を機緣ありて診療することゝなり一回の話と送念により、翌日にかけて、大いにケミカライゼーションを起し、翌々日より急轉直下恢復に向ひ健康便を排出し、苦痛なく、癌のオリ物たる臭氣の發する事もなくなり先生自身も一驚を喫したりと申し居られ候。

斯う云ふやうに私の話によつて數年の病ひが治つたり、同じく『生長の家』の誌友である船橋先生が一回話をして一回思念を送つただけで、醫者としては難治の神經痛や、癌などと云ふ病氣が一も二もなく簡單に消えて行きますのは、病氣はアルかのやうに見えても本當は存在しないからではないでせうか。此の船橋先生と云ふ人は日露戰爭當時出征せられたことのある軍醫であつて、從來から熱心な基督教信者であります。軍醫であられた當時は病人の取扱ひ方などでも命令するやうな言葉の力でお治しになつたやうな經驗がある。兵卒が××病などに罹つて痛むなど云つて來たやうな場合には、何か塗藥を處方して與へて、翌日診察に來た場合には『もう治つたら

う』と命令するやうに呶鳴りつけると、軍醫は將校であり、患者は兵卒なので、上官の命令であるから反抗することが出來ませんので『氣を付け』の姿勢になつて『ハイ治りました！』と云ふ。自分で『ハイ治りました！』と明言し、その言葉の力で治るのであります。病氣と云ふものは多くの場合、最も同情され易いものであつて、病氣と云ふ武器をとつて起てば如何なる强者と雖も病人に刄向ふことが出來ない。弱々しい體格の人でも病氣と云ふ武器を以て起つ場合は、咳一つで眠つてゐる母親を跳び上らしめ、看護人を狼狽せしめて、藥局へでも、醫者へでも走らせることが出來るのです。だから誰でも病氣になれば家庭の中で一躍暴君になつて了ふ。實に病氣と云ふものは、弱者が强者を『操り人形』のやうに跳らせるための電氣スヰッチ見たやうなものである。此の電氣スヰッチを押すことを覺えると、どんな人間でも自由自在に操縱することが出來るのでありますから、病人は此の『病氣』と云ふ電氣スヰッチを握つたが最後離したくないと云ふ誘惑を感じ易いものであります。此の誘惑に拍車をかけるものが看護人の『甘き同情』であります。病氣になつた時に周圍から『甘い同情』を受けたゝめに、その『甘い同情』の甘美さが忘れられないために、世間にはもつと早く治るべき病氣の治癒を遲らせてゐる人が澤山ある。其處へ行くと軍醫が兵卒を治すのは、『氣を付け、前へ進め！』式に命令でドシドシ治して了ふ。若し『ま

だ治りません』などと云ふものなら、患部を一層深くグリグリ剔りとつて了ふ。軍人のことだから『甘い同情』などの持合せがない。麻醉劑も何も使はないで肉をグリ〳〵剔りとつて『これで治る』とやられるのですから、『病氣』と云ふ電氣スヰツチを握つても周圍の人達を走らせたり走らせたりすることが出來ないものだと云ふことが分りますから、患者がいつまでも『病氣』と云ふ危險な電氣スヰツチを弄ばないで棄てゝ了ふと云ふことになるのです。これを『生長の家』では『愛深き冷淡療法』と云つてゐる。冷淡に見えてゐて其實その患者を生かすところの最も愛深き行爲なのであります。先日も私はこの『愛深き冷淡』で病氣を治しました。と云ふのは或る日一人の奧樣が尋常五年生になる男の兒を連れて來られました。顏を見ると蒼褪めて大變憔悴してゐる。『どうしました？』と訊きますと『どうも此の兒がお腹が痛いと云つて一ケ月も前から學校に出ないのです。醫者に見せるとサホドのことはないから學校へ出ても好いと云ふのでございます。併し學校へ出ましても、運動するとお腹に響いて痛いから、一人さびしく教室でじつとしてゐなければならぬのが氣兼で、學校へ往くのは嫌だと云つて出ないのです。』とお母さんが云はれるのです。『學校が嫌ひなのぢやありませんか』と云ひますと、『學校は大變好きなんですけれど、お腹が痛いから出られないと申しまして、自分も眞劍に食養生しまして食パンと牛乳のほか

何もたべないで。それでゐてお腹が痛い痛いと云つて毎日痩せて行くのです。醫者がどこもそんなに悪くないと申しましても、實際お腹が痛いと申しまして承知しません。』『其處で私は申しました。『お母さんが、子供が病氣だと云ふとあまり勞はり過ぎるから、いたはつて欲しくなつたら病氣だ病氣だと云ふのでせう。今度お腹が痛いと云つたらお腹よりも痛く撲り付けてやんなさい。それでも痛いと云つたら後手に縛つて天井からブラ下げて棒で撲つてやんなさい。』『いゝえ私は決して病氣をいたはつたりなどしないつもりでございまして、お醫者さんがどこも悪くないと被仰るのだから「何處も悪くないのですよ」と申しきかすのですが、中々承知しないのです。子供の癖に醫學書などを持ち出して來て、その解剖圖を指差して、醫者がどう云つても、此の腸の内臓のこゝの處がかうなつてゐて此處が食前空腹時に痛むのだから、此の病氣に違ひない。此處に書いてある症狀と全く同じだから僕の病氣は此の病氣だと云つて承知しないのでございます。』

『成る程、それはお腹の病氣ではない。子供のヒステリーですね。ヒステリーと云ふのは病氣が無いのに病氣の恐怖症に罹つてゐるのです。併し子供がさう醫學書を引出して病氣を指摘して可怖がるやうになるまでには隨分親達が病氣と云ふものを恐れて親自身が通俗醫學書などを見て子供を恐怖に導いたにちがひないのです。やつぱり親達が病氣をいたはり育てたのです。』と云つて

私は子供の方を向いて『醫者が何處も惡くないと云ふのに、子供に惡いと云ふことが分るものか。』と、窘めるやうに云ひますと、母親は『醫者が惡くないと云ひましても、パンと牛乳を少しばかりしか食べずにお腹が痛いと云つて、だん／＼衰弱して痩せて行きますから、醫者が何か誤診してゐるのではないか、何か重大な病氣が潜伏してゐるのではないかと私はまた心配になるのでございます』と今度は母親が子供の病氣を辯護してゐるのです。斯う云ふやうに親が可愛がりすぎて子供の病念を育て上げるやうなことをしてゐると、何時までも其の病氣が治らないと云ふことになるのであります。

そこで私は申しました。『パンや牛乳ばかりを食べてゐるから、お腹が痛くて痩せて行くのだ。パンや牛乳や柔いものばかりを食べて、食べる毎に「私は病人だからこんな柔いものだけしか食べられない」と思つてゐるから胃腸が働かないのだ。胃腸と云ふものは固いものを食べて、自分の胃腸はこんな固いものでも食べられる――こんなに丈夫な胃腸であると思ふやうにすれば胃腸はその思ふ通りにズン／＼働いて丈夫になるのだ。君はパンの力が御飯よりも消化が好いやうに思つてゐるけれども、榮養學者の實驗による食物消化時間表を見ると、食パンは四時間も胃中に停滯してゐるけれども、米の飯は一時間半で腸へ入つて了ふ。パンなんて柔かいものは刺戟がに

ぶいので胃腸が眠つてじつとしてゐて働かないのだ。固い物を食べるほど胃腸が刺戟されてよく働いて消化が好い。君は今日から何でもたべられる、固い物ほど胃腸のために好いのだ。まづ歸つたら握り飯をして貰つて、それを火の上で網にかけて燒き、出來るだけバラ〳〵に固くしてそれを嚙んで食べなさい。お菜は澤庵でもゼンマイでも固いもの程好い。君は何のお菜が好きだ』と訊きますと、その子供は『僕は野菜が好きなんですけど、お母さんが野菜は滋養にならないと云つて肉やら刺身などを食べよ食べよと云ふのです』と云ふのです。『君が野菜が好きなら野菜が好い、何でも好きなものを食べたら、それが滋養になるのだ。野菜をたべたら滋養にならぬなどと云ふことは決してない。牛は草ばかり食べてあんなに肥えてゐるぢやないか。何でも好きなものを喜んで食べれば滋養になるのだ。「これは嫌ひだ、嫌ひだ」と排斥するやうな氣持で食べたら何をたべても身にならぬ。好きだ好きだと喜んで食べれば滋養になる。滋養になると云ふのは同化吸收すると云ふことだ。同化吸收すると云ふのは仲よしになつて一つになることだ。朝鮮人と同化すると云ふのは朝鮮人と仲好しになると云ふことだ。誰とでも仲好しになれば、向ふがこちらの爲めになつてくれる。此の「向ふがこちらの爲めになつてくれる」ことが、食べ物で云へば滋養になることだ。「こいつは嫌ひだけれども食べないと滋養にならぬ」などゝ考へてゐるのは、

「此の人間は嫌ひだけれども一つ利用してやらねば此方が損だ」と思つて交際つてゐるのと同じである。こんな態度で人間と交際したら向ふは「何ぢや、此奴は僕に一つも好感を持つてゐないでゐながら、利用しようと思つてゐやがるな」などと思つて「利用されてタマルものか！」となる。是は人間のことですが、食べ物でも嫌や／＼ながら自分の滋養になるやうにだけ利用してやらうなどと考へてゐると、食べ物の方でも「利用されてタマルものか」となる。それで同化吸收されないで胃腸の中で異常醱酵を起して却つて胃腸を害すると云ふことになるのです。朝鮮人でもこちらが同化するやうな心持を持てば同化して日本人のためになるし、毛嫌ひして同化しない心を持てば、いつまでも異分子として存在して日本のためにならないことをしようとする。「肉體も環境も心の影」「食物も朝鮮人も心の影」で、すべて一切此世の出來事は自分の心の思ふ通りが形に顯れたものなんです。』こんなことを話してゐるうちに、その子供がお腹が減つたと云ひ出したのです。見ると時計は十二時十五分前であります。『君はお腹が空いた時に痛むと云つたが、今痛いか』と訊くと、『痛くない』と云ふ。『ソーラ、もう癒つたのだ。始めから君の胃腸など病氣でないのだ。又御飯の時が來たら、いつもの嫌やなパンと牛乳ばかり食べねばならぬと思ふから、お腹の方で嫌がつて痛がつて見せて食べまいとしてゐたのだ。それと、も一つはお腹が痛いと云

つたらお母さんが吃驚して同情して呉れるから、同情して勞はつて欲しくなつたら病氣を起してゐたのだ。ところが、もう嫌やな牛乳やパンを食べなくとも好い、何でも好きな物を食べよと云はれたから、その上お腹が痛いなどと云つたら好きな物がたべられなくて損だからお腹痛は止めにしたのだ。その上、今度お腹が痛いなどと云つたら、後手に縛つて天井から吊り下げてお腹痛よりも痛いほど擲れと云はれたので、もうお腹痛を起したら損だから、お腹痛を起さなくなつたのだ。もう君の腹痛は治つたのだ。もう何處も惡くない。好きな物を食べて明日から學校へ行きなさい。斯う云つて私はその子供の病氣に最後の止めを刺したのです。それから三日後に靖國神社の祭禮で小學校の休日がありましたが、その時にまた此の坊ちやんはお母さんと一緒に私のところへ來られた。スッカリ顏の血色がよくなつてゐるし、三日前よりもズツと肉がついてゐる。あれ以來お腹は痛まない。何でも好きなものを食べて食慾が出て元氣に學校へ通つてゐる。今朝もお父さまと力一杯角力をとつて來たと云ふ程になりましたので、今日は祭日で學校が休みなのを幸ひ、お禮にあがりましたと云ふやうなことでありました。

　此の實例でも分ります通り、すべての物と心の中で仲好しになりますと、その念の具象化として一切のものは吾らを害しなくなるのであります。食物とでも仲好しになると食物が吾等を害す

るなどと云ふことはなくなる。生長の家聖典の第一頁に『天地一切のものと和解せよ』と云ふのがあるのはそのためであります。併し仲好しになるのは好いけれども、同情して欲しいと求めると病氣や不幸な境遇を招び寄せることになります。『同情して欲しい』と思ひますと、同情して貰ふためには同情に價ひする狀態を作り出して置かなければならない。他から見て同情に價ひする狀態とは何であるかと申しますと、病氣とか不幸とかの狀態であります。この病氣とか不幸とかは一面、自分も非常に苦しいのでありますけれども、同情して貰ひたい人はその自分の苦しさと云ふ犧牲を拂つてさへも人から同情して貰ふためにその潜在意識で病氣や不幸を創作してゐる場合が澤山あります。

京都に大變『生長の家』に御熱心な奧さんがあります。此の奧さんは、もう二十年來の持病の常習頭痛の持主で、頭痛のする時は極量一錠の何とか云ふ頭痛藥を三錠も五錠も飲む程でありました。一燈園の『光』と云ふ雜誌で『生長の家』をお知りになり『生命の實相』をお讀みになるに伴れて次第にその頭痛が薄らいで來たのです。今迄、半丁位の距離しかない市場でさへも、頭痛と眩暈と心悸亢進の恐怖とで一人で出掛けることが出來なかつたのが、兎も角も『生命の實相』を一回讀むだけで、京都から住吉の生長の家本部まで汽車にすれば一時間四十分の距離を一

人で來られるほどになりました。そして本部へ來られて私達と一緒に一度神想觀を致しますと、二十年來の常習頭痛が拭ふが如くとれて了つたのであります。それ以來此の奧樣は大抵毎月一回の本部の誌友會には京都から住吉へお出になつて、一緒に座談會にお加りになつたのでありますが、或る月の誌友會にお越しになつて十分間程そこに坐つてをられましたが、どうしたのか何時の間にか見えなくなつてゐる。どうせられたのかと思つてゐると、隣室の子供部屋で寢てゐられる。時々起きて『廁所』へ往つてはまた寢てゐられる。やがて誌友會も果てゝ午後九時頃になつたのですが、其の奧さんは『頭が痛い』と云つて寢たまゝお歸りにならないのです。京都から三人程一緒に來られた婦人のお友達が介抱してゐられて、『先生、此の奧樣の額に手を當てゝあげて下さい』と云はれるのです。『額に手など當てたとて治りませんぜ』と私は云ひましたけれども、手を當てゝ呉れと請願んで承知されないのです。それで止むなく額に手を當てゝあげますと、其の奧樣が下から斯う云はれるのです『先生、私、昨晩良人と口爭ひ致しました。生長の家の結構なと云ふ話を良人にしましたら、良人が冷淡な冷かすやうな態度をとりますから、私、腹が立ちまして、色々云ひたいことをグッと押へまして、もう貴方には何にも申しません。生長の家の話など一切致しませんと云つて言葉を切つて了つたのです。今それを思出しました。云ひたい事が

澤山あるのを無理に嚥み込んで腹に持つてゐましたから、それが具象化して先刻から吐き氣がして廁所へ參りまして澤山吐きました。ホンのぽつちりお茶を頂いたゞけだのに、よくあんなに水が吐けるものだと云ふ程、澤山の水がいくらでも吐出るのでした。これは自分の腹に溜めた思ひが「形」になつて出るのだと判りました。私が悪うございました。もう腹を立てたり致しません』と被仰つたのです。これは懺悔であります。『懺悔』と云ふものは溜つてゐる思ひを吐出すことであります。溜つてゐる思ひを懺悔の形で吐出さないで押へてゐれば、思ひ（念）と云ふものは他の形をとつてゞも其の具象化の力を滿足させようとするのです。斯うして懺悔されましたので、吐き氣はスツカリ治つたのですが、頭痛の方はまだ中々治らない。私が手を當てゝゐても中々治らないのです。もう時間も遲くなりましたし、ホンの少し樂になつたので、頭痛を怺へて其の奧様はお友達と一緒に京都までお歸りになりましたが、それから二日間、どうしても激しい頭痛が止まらないのです。その時にフト奧さんは誌友會の前夜に、夫婦で爭はれた時のことを思出されたのであります。餘り良人が『生長の家』に冷淡なので、冷淡と云つても、忙がしいから『生命の實相』など讀む暇がないと被仰るのでありますが、明日は幸ひに日曜日で良人の會社は休日であり、そして生長の家本部では誌友會がある。私が生長の家の誌友會へ往つて、頭痛が起つて

家へ歸ることが出來なかつたら、良人は會社の休日でもあるから生長の家本部へ私を迎ひに來て、それが動機で生長の家の信仰に入つてくれるであらう――斯う云ふ考へがフト此の奧さんの頭を掠めたのです。それは其儘其時迄忘れてゐたのでありましたが、『誌友會で自分が頭痛で寢てゐたら自分を迎ひに良人が來てくれるであらう』と云ふ此の考へが具象化して此の奧さんは誌友會に來て常に頭痛で寢てゐられたのでありました。『ア、悪い事を思つた』と氣がついて心で懺悔をされましたら、それ切りスーツと頭痛が消えて了つたとの事であります。

先日斯う云ふ奧樣が生長の家本部へ五六歳の女のお兒さんを連れてお越しになつたことがあります。その奧樣は非常に不幸な方でありまして二人の子供があつたのに夫婦別れしてゐられると云ふのです。男の方の子供は良人が引取り、今年六歳のその女の兒はその奧樣が引取つて生活してゐられるのですが、噂にきくと、その別れた良人に後妻が出來て、その後妻が藝者であるがそれにまた子供が出來たと云ふことなのです。そして後妻は藝者でありましたのでその家庭などは成つてゐない。後妻に子が出來た以上、それに繼子に對する憎惡など〻云ふ事も加はつて來るであらうと思はれますので、其の奧樣は良人にやつた幼い長男のことを思ふと、もう殆どゐても起つても慰まない悲しい心になつて來るのであります。それで毎日たゞ泣き濡れて生活してゐる。

夜も碌々眠つたことがないと云はれるのです。それで私は色々と眞理の話をしました。『自分の子供だ、自分の子供だ』と思はないこと、自分の子供ならば、自分が何とか工夫しなければ善い子にならないと云ふ惧れもあらうけれども、人間は神の子だから、どこに置いといても神樣が可いやうに育て給ふのである。實母が側にゐなければ其の子が惡くなるやうなものではない。實母が側にゐて甘やかした爲めに不良青年になる子供もある。こんな實母は、人間を神の子だと見ないで自分の子だと思つて、我執の愛で育てるから善くならないのです。我執を絶したところに神が出て來る。貴女が子供の側にゐないで、我執の愛で育てないで、神樣にすつかりお委せして置いた方が善い子になるかも知れない。三界は唯心の顯れなのだから、貴女がこちらにゐて神想觀をし、貴女の子が、其の實相は神樣の子であつて常によく護られて居り、良人も繼母も子供も貴女もすべて神の世界では、實相に於て調和してゐて決して不調和なことは起らないものであると云ふことを心平和に思念なすつたら、貴女の子供は何處に置いとかれても善い兒に成長するのだとお話ししたことでありました。すると其翌晩その奧樣が來られまして『大分、心が開けてまゐりまして樂になり、昨夜はいつになくよく眠りました』と云はれた。それから一週間ほどすると、此の奧樣が例の六歳位の女の兒を連れて來られまして云はれるには『實は此の兒は毎晩夜尿をし

て困つてゐたのでした。一晩に五度位は子供を起してお厠へつれてまゐるのですが、それでも夜尿をはづして困つてゐたのでした。ところが先生のお話を聞きまして自然に私の心が樂になつて來ますと、不思議に此の子が夜尿をしなくなり、私も熟睡致しますものですから一度も起さぬことになりましたが決して夜尿をはづすことなく昨夜などは小用を催して來たときには自分でお厠へ往つてゐました。』三界は唯心の所現――こんな風に母親の心持の變化は子供に影響するのでありまして、母親の泣き濡れた感じが反映して夜尿に變化してゐたのでした。

それとよく似た話でありますが、今年の十月に私は北陸石川縣の七尾に於ける誌友會へ參りましたが、其時に私は興味ある話をきいたのであります。それは七尾町で或る婦人會のリーダーをしてゐられる奥さんの話であります。その奥さんに六歳位の男のお兒さんがある。そのお兒さんの脚が激しい内反足でありまして、兩足が歩くたび毎に衝突し縺れ合つて眞直に揃うた足並みで歩けないのであります。此奥樣は私が阪神間住吉にゐました頃に『生長の家』へ來られまして『先生、何日間位滯在したら此の足は直りませうね？』と訊ねられたものです。その樣子がまるで醫者に對するか、何か靈術家に對するやうなのです。『どうも此の奥さんは見當違ひをしてゐるな。』と思ひましたから、『何日間も滯在しないでも好い。直ぐお歸りになつて聖典「生命の實相」をお

讀みなさい』と云つたのです。奧さんは子供を治して欲しいと思つて態々石川縣から住吉までお越しになつたのですのに、斯う云ふ劍もホロロの挨拶なものですから、『谷口先生があゝ云はれるのは、此の子供の脚はもう治らないから、あゝ宣言されたに相違無い』とお思ひになり、悲觀して歸つてから二日二晩一睡もせられなかつた。そして色々お考へになつたのですが、兎も角『谷口先生が聖典「生命の實相」を讀めと被仰つたのだから、それを讀んだら何か病氣治しの手蔓があるかも知れぬ』とお思ひになつて熱心に聖典『生命の實相』をお讀みになり始められたのであります。「生命の實相』を讀んでお驚きになつたことには、こんな本を讀んで病氣が治るなんて、そんな馬鹿々々しい話があるものかと思つてゐられたのでありますが、讀んで見ると、自分の胸にヒシ〳〵とこたへる事が書いてある。まるで自分の心の缺點を剔り出して眼の前に突き付けられたやうに感ぜられるのであります。『成る程これでは谷口先生が私の兒の病氣を治さうとせられないで「生命の實相」を讀めと云はれたのは尤もだ』と氣付かれたのであります。そして『これは私が悪かつた、自分の心を治しませう』と大いに懺悔の心を奮ひ起されました所が、翌日スッカリ朝御飯の食卓の空氣が一變して了つたのであります。どう一變したかと云ひますと、此の奧さんは二人の女の子のある所へ後妻に來られた。そして後に生れた自分の子供が其の内飜足の男の子な

のであります。『繼子扱ひすまい、すまい』と思ひながらも、何日の間にか繼子の方から繼子根性になつてゐて、例時も食卓についたときには繼子の長女が全家族のお茶碗に御飯を盛つてあげることになつてゐたのですが、その後妻の男の子にだけは御飯を盛つてやらなかつたのです。別にその男の子は何とも不平を云はないけれども食卓の空氣が何となく冷たく索然としてゐたのであります。ところが、此の奥さんが前日の晩に『生命の實相』をお讀みになつて心機一轉して、繼子、本子一視同仁に見る心になられましたら、何も云はれないのに、その翌朝此の食卓の習慣がスツカリ一變して了つたのであります。卽ち先妻の長女が後妻の男の子には御飯を決して盛つてやらない習慣でありましたのに、今日はどうしたものか、繼母の心境一變が感應して長女が自發的に其の男の子に、『御飯を盛つてやるからお茶碗をお出し』と云ふのです。そして男の子は御飯を盛つて貰ふと長女に向つて實に朗かに快活に『お姉さん、難有う』と禮を云つた。それ以來、食膳が全く光明化して了つたのです。母の心境變化がこのやうに子供の生活にあらはれる。『子供が惡い、子供が惡い』と思つてゐたら、それは皆な親の心が映つてゐたのであります。誠に三界は唯心の所現であり、環境は我が心の影だと云ふことが解るのであります。それでは、その男の子の內飜足は母親の心境變化で治つたかと申しますと、治るには治つたが、半分ばかり治つたの

であります。どう治つたかと云ふと、親の見てゐる前では、兩足を衝突させずに眞直に歩くやうになつたのです。併し親の見てゐない所では矢張り兩足を衝突させ喧嘩させて歩いてゐる。それで其の奥さんに親しい生長の家誌友が、その奥さんの精神分析をして『貴女はまだ少し實子繼子の區別が内心にあるのではありませんか。だから人の見てゐる所では子供が兩足を平等に歩かせてゐるが、人の見てゐない所では、どうしても實子繼子の區別の心が足にあらはれて兩足が衝突するのではありませんか』と指摘したのです。『そんなことはない』と其の奥樣は一旦は打消されましたが、また反省して見られて『私の心のどこか奥にまだ繼子實子の區別爭ひの殘滓が殘つてゐる。私の心でこゝまで治つた此の子供の内飜足であるから、もつと私の心が治つたら此の子供の足も治ると今では安心して修養してゐる』と云ふ話でありました。

此の奥さんは子供の教育上、色々興味ある現象を體驗して私にお話し下さいました。それは長女が來年は女學校へ行くと云ふので、熱心に勉強させてゐられるのでありますが、中々勉強に熱心になつてくれないのです。心が散漫であつて、勉強してゐるかと思ふと、何時のまにかどこかへ出て遊んでゐる。『勉強なさい』と云ふと其の場だけ勉強して直ぐ遊びに出るのです。『どうして此の子は本氣に成つて勉強しないのだらう』と思つて此奥樣が反省して御覧になると、奥樣自身

お本氣になつてゐないと云ふことに氣がついたのです。落第したら、繼兒だから勉強を見てやらないで放つたらかしたのであらうと批難される。つまり『人前を飾る』ために『勉強せよ、勉強せよ』と云つてゐる自分を見出したのです。だから子供も人前を飾るために勉強してゐる。見てゐないと外へ飛び出して遊んでゐるのです。『あゝ、これは私が悪かつた。人前を飾るためでは可けない。此兒自身の發達のために勉強させてやらなければならない』と此の奧樣が心の中で懺悔されますと、その翌日から、その女の兒が人が見てゐないでも外へ飛出さないで勉強するやうになつたのです。斯う云ふやうに親の心持と云ふものは子供の病氣を治すだけではなく、子供の生活も治し、性質も治し、習慣も治して行く力があるものなのです。此の奧さんの、もう一つの面白い體驗は、子供が眠つてゐる間に算術の公式を言つて聞かせてそれを記憶させたと云ふ話です。或る日、明日は算術の試驗で、公式を六種類、記憶して置かなければならないと云ふ日でありましたが、來客か何かの都合で子供が勉強出來なくて、夜も時間が遲くなつて眠つて了つたのです。そこで、生長の家の教へでは『生命の實相』を眠つてゐる病人に讀んで聞かせても感應して病氣が治ると云ふ話であるから、算術の公式も、眠つてゐる間に讀んで聞かせてあげても記憶するかも知れないと思ひまして、眠つてゐるお孃さんの前額に輕く掌を觸れ、片手に算術書を持

つて恰も起きてゐる子供に云つて聞かすが如く、その六個の公式を口述してゐられたのです。其處へ御主人がお歸りになつて、『一體お前は何しとるのぢや』と云はれた。それにも答へないで奧樣は尙暫く、眠つてゐるお孃さんに算術の公式を口述してゐられたのです。そして翌朝そのお孃さんの眼が覺めると早速『貴女、あの六つの公式を云つて御覽』と云はれた。お孃さんは吃驚して『お母さん、どうしてそんな事を云ふの？』と變な顏をしてゐるのです。『どうしてと云ふこともないが、兎も角、云へる筈だから、あの公式を云つて御覽。』さうしますと、お孃さんはスラスラと一つも行詰らないでその算術の公式が六つとも云へたのです。成る程これで『生長の家』で云ふ眠つてゐる病人にでも、一字も理解せぬ幼兒にでも『生命の實相』を讀んできかせれば感應があると云ふことが本當であると解つたと大變お喜びになりました。

子供の學校の成績でも此樣に母親の念の具象化であります。序でにそれに似た話を一つ申しませう。

それは東京落合に住んでゐられる誌友で松本茂三郎と云はれる誌友の話であります。此の誌友に今年小學六年生のお孃さんがあるのですが、どうも今年の七月初め頃迄は成績がよくなかつた。殊に算術の成績が惡い。先生も御兩親もお孃さんの頭腦が惡いのだとばかり思つてゐたので

す。受持の先生が云はれるには、この兒はどうも頭が惡いから女學校へ入學させることは斷念した方が好いと云ふやうな譯です。學校の先生にして見れば、その兒の『頭腦』と云ふ物質が惡いと思つてゐたのです。ところが豈に計らんや『頭腦』と云ふ物質が惡いのではなかつたのでありまして、『心』が惡い。『心』と云つても其のお孃さんの『本心』が惡い譯ではなかつたのでありまして、心の表面に浮んでゐる『念』が惡かつたのであります。『自分の頭腦は惡い。』と云ふ念が始終そのお孃さんの心の上に印象されてゐたのであります。先生がさう云ふ――『此の兒の頭腦は惡い。』親たちがさう云ふ――『此の兒の頭腦は惡い。』自分の信頼し尊敬してゐるところの先生も兩親もさう云ふのですから、そのお孃さんはさう信じてゐる。つまり此のお孃さんの心の表面には『自分の頭腦は惡い、自分の頭腦は惡い』と云ふ念が波立つてゐたので、何も頭腦そのものは惡くなかつたのであります。受持の先生にさう云はれたので『生長の家』の姉妹雜誌『生命の藝術』を編輯してゐられる佐藤彬さん宅へお出でになつて御相談になつて、そして『此の兒はどうも算術が嫌ひで出來が惡いのです』と云はれるのです。すると佐藤彬さんが『本當は此の兒は算術は大變好きなんですよ。皆が算術が嫌ひだと云ふもんだから嫌ひだと思つてゐたに過ぎないのです。』から母親の方へ云つてからお孃さんの方へ向き換つて『ねえ、貴女は算術が好きなんで

すねえ、明日から大變算術がお上手になりますよ。問題を考へる時には神樣をじつと念じなさい。そして神樣が必ず教へて下さるから出來ると信じてやりなさい。必ず出來ます。』斯うハッキリ佐藤彬さんから斷言されて、それから神想觀と云ふ佛教なら坐禪、基督教なら祈りとも云ふべき神の無限の智慧を受ける生長の家の行法を一緒に實修されたのであります。すると翌日からそのお嬢さんは算術が百點になつた。先生も兩親も大變驚いてどうしてこんなに出來の惡い子供が出來るやうになつたのであらうかと不思議がられたのであります。併し何も不思議がるには及ばない。人間は神の子であるから無限の力が宿つてゐるのです。その力に、先生や親達が言葉の力で栓をしてゐた。その栓が佐藤彬さんの言葉の力で除れて了つたのであります。言葉の力で、人間は自己の內に宿つてゐる無限の力に栓をすることも、栓を拔くことも出來るのです。學校でも一寸生徒の出來が惡いと、先生が目に角たてゝ『こんな出來の惡い子供はない。もつと勉强せんか』と呶鳴りつける。先生が癇癪聲を出して、特にその印象深くなつた言葉の力で呶鳴り付けるものですから、子供の方でも『恐らく自分は出來の惡い子供に相違あるまい』と信じて了ふ。自分は出來の惡い人間だと信じて了ふとその子供は本當に出來の惡い人間になつて了ふのです。だから『もつと勉强せんか』とあとを續けて呶鳴りましても、勉强するのが嫌になつてしまふ。』自

分は出來が惡いんだから勉強したつてどうせ駄目だ』と云ふことになつて了ふ。また假令勉強し、偉くならうと努力しましても、『自分は出來が惡いんだからどうせ覺えられない』と云ふ觀念が働きますから、覺えられない。また覺えられてゐましても必要な時に思出さない。思出さなければ結局覺えてゐないのと同じ結果になつて了ふのであります。だから學校の先生は、たとひそれが子供の成績をよくしてやらうと思つた結果であるにしても、腹を立てゝ、『こんな出來の惡い子供は無い。』などと云へばそれこそ大變で、その出來の惡い子供を言葉の力で益々惡くして了ふと云ふことになるのです。その反對に常に出來の惡い子供でも、偶々一題でも出來た時に、『ヤア旨く出來たねえ、全く君は天才だ。』なんて賞めてやることにしましたら、其の子供は『自分は天才だ、出來るに違ひない』と學習に興味が湧いて來まして本當に出來がよくなるのです。斯う云ふやうに子供でも、言葉の力で『自己に宿る無限能力』に栓をすることも出來れば、栓を拔き放つて無限能力を噴湧させることも出來るのです。この自己に宿る無限能力を噴湧させるには善き言葉の力――特に讃嘆の言葉、讃美の言葉が必要である。『生長の家』は人類を讃嘆し讃美するために生れたのです。今の世界には餘りに人類を侮辱する言葉が多すぎる。新聞を見ると人殺しや、夫婦喧嘩や泥棒の記事は大袈裟に出てゐて、親孝行をしたと云ふやうな事は小さく出てゐ

る。夫婦仲が好いなど〻云ふことは少しも出てゐない。善い事は言葉に現はさないで、惡い事ばかり大袈裟に書いてある――これは言葉の力で人類を暗黒化しようと云ふ働きも同然であります。此の人類暗黒化運動に反抗して蹶然起つたのが『生長の家』の人類光明化運動なのです。今迄の宗教家は(それは教派にも據りますけれども)大抵は人類を善くしてやらうと思ひながら『罪惡深重の凡夫』であるとか、『小慈小悲もない衆生』であるとか、『罪人よ、罪人よ』とか云つて人類を罵つてゐる。それは丁度、先刻云つた小學校の先生が、生徒を善くしてやらうと思ひながら『こんなことを能う覺えぬのか。お前は本當に出來の惡い子供だな』と怒號しながら言葉の力で子供の出來を益々惡くしてゐるのと同じことなのです。人類は『罪人呼ばはり』をせられると善くなるかと云ふと實際は決して善くならない。罪人呼ばはりされると『どうせ自分は罪人であつて決して善くなれつこはないのだ』と意氣銷沈するか、自暴自棄に陷つて了ひやすいのです。どんな善人でも雇主から『貴樣は惡人だぞ』と始終罵られてゐたら『えゝ、糞忌々しい、殺つ付けてやれ』と云ふやうな氣になつてその雇主を殺して了ふやうになる。即ち言葉で云はれた通りにその人間は惡人になつて了つたのです。それで先刻の松本茂三郎さんのお孃さんですが、言葉の力で成績不良から成績優良になつて來た。一學期も終り、暑中休暇も濟みますと、休暇の惰力でゞ

もありますか、お嬢さんの勉强に弛みがついて來たのであります。此のお嬢さんは二階で勉强してゐるのですが、階下で母親たちが何か話をしてゐますと、その聲をきゝ付けて直ぐ降りて來まして大人の話の仲間入りをするのです。『二階へ上つて勉强しなさい』と云ふと、また上つて往つたかと思ふと、いつの間にか二階から逃げ出して遊んでゐると云つた調子で、勉强に少しも實が入らない。それで成績も落ちて來て先生から注意されるやうになつて來た。丁度その頃、生長の家本部は阪神住吉から東京へ移つて來てゐましたから、今度はお母さんがそのお嬢さんをお連れになつて私の宅へやつて來られた。それで私は申しました。『今日から此のお嬢さんは勉强がすきになれますよ。あまり勉强を怠りはしないか、怠りはしないかとお嬢さんを心で見詰めるやうにするから、見詰められると誰でも心の視線で縛られてゐるやうで窮屈だから、逃げ出さうとするのですよ。今日から、もう人に話すのでも此の兒は勉强せぬ、勉强せぬなどゝ云ひなさるな。よく勉强する兒だ、よく勉强する兒だと話すやうになさいませ。そして心の中でも同様に、此の兒はよく勉强する兒だと信じて、自由に子供自身の勉强心にまかせて置くやうになさいませ。屹度よく勉强するやうになりますよ。本來このお嬢さんは頭腦も好いし、勉强も好きなのです。それにお母さんが勉强嫌ひではないか知らと思つて、見詰めるやうにしてゐたから勉强嫌ひの眞似をし

てゐたのです。今日からお姉さんは、お母さんに勉強せよと云はれないでも自發的に喜んで勉強されますよ。ねえ、お姉さん、貴女は勉強が好きですねえ。』かう云つて皆さんと、お姉さんも一緒に神想觀をなすつたのでありますが、その翌日からお姉さんはスツカリ勉強がお好きになつたのです。もう大人たちが階下で話してゐましても二階から降りて來て話し込むなどゝ云ふことがなくなつた。その次の日から模擬試驗や準備考査がありましても、また常に百點を得ることになつたのです。御兩親も大變お喜びになるし、學校の先生も生徒の成績が急變してよくなつて來たので大變お驚きになつたのです。御母樣が『生長の家』へ來られて云はれるには、『やつぱり私の心の持方が悪かつたのです。自分の子供を神の子としての信頼の仕方が足りなかつたのでございます。「また勉強しない、また勉強しない」と子供を見詰めるやうな心持でゐましたが、その私の念の作用で、子供の神の子としての實相を隠してゐたのでございます。本當は此の子供は良く勉強する兒でございました。』斯う云ふやうに今迄成績不良の子供がたゞ一回の神想觀と、母親の心の持方の轉換とで治つて了つたのです。矢つ張り子供の成績は親の念の具象化であつたのです。此の子供の學級で或る日國語の試驗があつたのです。國語の試驗だのに此の子供は其の朝、何となく五年生の時の國史が讀みたくなつて、五年生の國史の本を披いて讀んでゐたのです。此の子供

は六年生であるのに五年生の國史の本を讀んでゐたのです。すると試驗場へ臨むと、六年生の國語の試驗問題が五年生の國史の本から引用してあるのです。斯うして此の子供は國語の試驗にもまた滿點をとつたのです。それ以來、この子供は毎晩（毎晩午後九時から午後九時半まで神想觀があるのですが）毎晩神想觀に來て大人と一緒に坐つて神想觀をして居られるのです。そしてほかの子供は準備試驗の激烈さに日々痩せ細つて青褪めて行きますのに、この子供は試驗毎に百點で、試驗と云ふものに恐れることなく益々肥え太つて血色もよくなつて行つたのであります。斯う云ふやうに人間は内部に無限の力の因子卽ち導火線が宿つてゐる。此の導火線に火をつければ『無限の力』が我が力となつて了ふ。この『無限の力』が神であつて、必要に應じて必要なところのものを敎へ給ふのであります。六年生の國語の試驗にでも「五年級の國史の本を見よ」と敎へ給ふのが此の『無限の力』であります。宗敎と云ふものを死後の用だと思ふのは間違ひである。本當の宗敎と云ふものは今、此の『無限の力』の導火線に火をつけて此の『無限の力』を我がものとする働きをするものであります。神と云ふ『無限の力』を遠くに眺めて渇仰したり、神の前にひれ伏してお辭儀をしたりするのが宗敎ではない。神と一つになつて生きるのが宗敎なのです。神を自分のうちに摑み込んで自分が神と一つになつて了つて生きるのが本當の生きた宗

教なのです。此の世は因緣假和合の世界である、假りの世界であるからどうにもならぬ世界であると諦めて了ふのが宗教ではない。因緣假和合の世界であればこそ、幻術師の現ずる幻のやうな世界であればこそ、映畫技師の映寫する活動寫眞のやうな世界であればこそ、よきフィルムを作りさへすればどんなに結構な世界にでもすることが出來るのです。だから三界は唯心の所現――『形あるものは全て心の影』と云ふことは、どうにも成らぬ世界だと投げやつたり諦めたりするための教へではない。どうにでも心次第で自由になる世界だと云ふことを肯定するための教へであつてこそ、その宗教が生きて來るのであります。

それから先刻お話しになつた佐藤彬さん、此の人の奧樣が姙娠中に齲齒が痛んでお困りになつたことがあります。なか〳〵激烈に痛んでどうしてもその痛みが止まないのであります。どうせ齲齒の痛みであるから齲齒を拔けば治るであらうとお思ひになつたのでありますが、姙娠中に齲齒を拔いては害があるなどと云ふ言ひ傳へも思ひ出されたものですから拔く氣にもなれないのであります。佐藤彬さんは『手のひら療治』も知つてゐられ、『放靈療法』と云つて鼻から息吹をかけて治す療法も知つてゐられるので、『手のひら療法』で思念して見たり、放靈療法をやつて見たりして齒痛を治さうとせられましたけれども、治らない。そこでヒヨイと思ひつかれて『君、そ

んなに痛ければ泣いて見ないか、思ひ切つて泣いて見たら痛みがとれるかも知れない。』と云はれたのです。すると痛い時には泣けるもので、尤も心に痛みがあればこそ、それが齒痛とも現れてゐるのですが、奥様は最初はシク／＼泣いてゐられたが、しまひには聲をたてゝ嗚咽せられた。三十分間ばかり聲を立てゝ泣いてゐられるかと見てゐますと、突然奥様は笑ひ始められたのです。『君、どうかしたのかい』と佐藤彬さんが訊かれますと、『齒痛がスツカリ治つちやつて、ちつとも痛くないのに泣いてゐると可笑しくなつたわ。』と云ふやうな譯であります。齒痛が治つたとか云ふやうな話は實に小さい話である。何でもない話なのでありますけれども、哲人は一木一草を見てさへも眞理を悟るのであります。こゝが肝腎である。ニユートンは林檎の落ちるのを見て地球の引力を悟つた。それでは齒痛が起つたとか治つたとか云ふやうな事を見ても眞理が悟れないと云ふことはないのであります。普通の人は齲齒が痛むのは、齒が物質的に腐蝕して、そのために何か物理的化學的刺戟が起つて痛むのだと思つてゐるのでありますけれども、物質的に治療しないのですから、物質的刺戟は依然として同じだのに、それが泣くことによつて痛みが止つた。すると此の齲齒の痛みと云ふものは、齒が物質的にどうかなつてゐるから痛んだと云ふやうな種類のものではなく、心が痛かつたのだと云ふことが出來るのであります。妊娠中などと云ふ

ものは心がどうもデリケートになり易くて何でもないことにも心が痛むものです。ところが、心がひとたび痛みの念を起しますと、『念即ち念ひと云ふものは具象化する』――これは『生長の家』の說く横の眞理でありまして、佛敎で云へば、『三界は唯心の所現である』と云ふことに當るのでありまして、吾々が何か念ずる――即ち心に『念』を有ちますと、それは現象界に其の念ひに相應した形で顯れやうとするのであります。昔から日本婦人は『喜怒色に現さず』と云ふことを以て婦德の上々としてゐる。そのために、心に悲しみ痛みの念が起りましても、外國人のやうに早速とはそれを形にあらはさない。內部から地熱のやうに悲しみ痛みの念が起つて來ましても修養を積んだ人ほどそれを表面から押へ押へしてゐる。併し、『念』即ち『念ひ』と云ふものは表面から壓迫されたゞけでは消えるものではない。それは噴火口を蓋するやうなものであつて、悲しみ痛みの心の地熱のある限りは、他のところに表出口を求めて地震となつたり溫泉となつたりして具象化しようとするのであります。この地熱の鬱結が地震となつたり溫泉となつたりして具象化しますやうに、心の痛み悲しみを押へて置きますと、その鬱結が、他の象徵的な形に具象化されて齒痛となつたり、胸の病ひとなつたり、胃腸病となつたり、子宮癌となつたりして顯れるのであります。病氣と云ふものは、念が、念そのまゝを眞直に表面にスーツと顯し具象化せしめなか

つたので、念の具象化力が肉體の上に象徴的な形をとつて顯れたものであります。『生長の家』ではこれを『肉體は心の影』と云ふ箴言で顯はしてゐるのであります。天理教祖なども『病ひと云うて本來無いけれども皆その人の心を顯すのやで』と云つてゐられる。近頃はやる『ひとのみち』でも『病氣は心の間違ひから起るから心の間違ひを治せば病氣が治るのだ』と云つて、お前の病氣は斯う云ふ念の間違ひだから此れを治せと云つて御神宣で指摘される。そして念が一變すれば病氣が治る實例があるのは、『肉體は心の影だ』と云ふことを立證してゐるのであります。『三界は唯心の所現だ』と云ひましても、成る程自分の肉體は、腹が立つたら血液が逆上して顏が赤くなり、心配したら毛孔が閉ぢて顏が青くなり、恐怖したら心臟がドキドキするやうに、すぐ念の影だと云ふことが判るけれども、自分の肉體と離れてゐる周圍の人々、環境、境遇なども自分の心の影だと云ふことはどうも受取れないと云ふ人があります。併し周圍の人の心が自分の肉體に影響する例では盛岡から一時間位の距離に黒澤尻と云ふ處がある。此處に三浦さんと云ふ造り酒屋さんがある。この方の奥さんが子宮癌であつて臭い臭いオリ物がしてゐた。その御主人が光明思想普及會の佐藤勝身さんから『生命の實相』を讓られた。それを半分許り讀んだら其奥樣の子宮癌のオリ物が止つて健康になつた。奥樣は主人がどんな本を讀んでゐるかと云ふことも知ら

れないのです。併し主人の心境が聖典を讀んで一變したので、その精神波動の影響で子宮癌のオリ物が止つたのであります。

先日阪神の生長の家誌友會に參りましたらこんな話がありました。神戸に野間菊子さんと云ふ女醫の經營してゐられる『衛生病院』と云ふのがある。概ね毛布の全身温罨法で病氣を治して藥劑を用ひないのでありますから、さほど『生長の家』の無藥無病の思想と衝突しない。此の衛生病院に勤務してゐられる醫師に小永井さんと云はれる方がある。此の方の一歳半になる幼兒が腸炎を患つて重態になつた。御自分が醫者であるからどの位重態であると云ふことは判るのであります。これは大變重態であるから普通内科の醫師としては、もう御自分の梃子に合はないと思はれまして小兒科專門の醫師をお迎へになられたのであります。ところが、その小兒科專門の醫師が云ふには『もうこれは自分としても梃子に合はない。幸ひ君がさう云ふ病院に勤めてゐられるのであつたら病院の方が設備が完全であるから病院へ移されたらどうですか。入院させてから自分も出來るだけのことは手を盡して見よう』と云はれたのであります。それでその幼兒を入院させて、毎日、その小兒科專門醫が來て應急の注射などをして歸るのでありましたが、それでゐて幼兒の容態は益々悪くなつて來て、全身が萎びて皺だらけになつて了ふ。皮膚には一面チアノ

ーぜと云ふ紫色の斑點が出來て、もう醫者から見ても誰から見ても到底助からない狀態になつて了つた。丁度その時、八月十九日に神戸支部で誌友會があつた。その席にこの小永井さんがお越しになつたのであります。其時に私が偶然三澤さんの愛兒が腸炎を患つた時の講演をした。その話をかいつまんで申しますと、神戸の『大丸』前に三澤商店と云ふ婦人の最新流行の裝身具を賣つてゐる店がある。その店の弟さんの赤ちやんが腸炎に罹つて神戸第一の小兒科の稱ある吉馴病院の院長がやつて來て葡萄糖の注射や、リンゲル氏液の注射をやつてゐるが、奥さんが、今迄一人の子供を同じ腸炎で亡くした經驗があるので、今度も死ぬと云ふ恐怖の念を送つてゐられるために、益々衰弱が加はつて往つたのです。その時にその奥さんが『生長の家』へ來られて信仰が一變して、今迄子供の側で『今にも死にはしないか、どうも死にさうだ、死ぬぞ、死ぬぞ』などと云ふ心配の念を送つてゐられた遣り方を變へて了つて、『神の子に病氣は無い』と云ふ念に一變して了つたら、その翌日の晝頃からその幼兒が一人で起きて遊ぶやうになり一週間ほどのうちに全治して了つたのであります。此の話をお聞きになつた小永井さんが思はれるのに『どうも妙な似た話もあればあるものである。自分も既に二人の子供を腸炎で亡くしたので、これで三人目である。三度目のこの子供も、醫者としては既に救からない容態であるけれども、三澤さんと同じ

やうにやつて見たら救かるかも知れない』斯う思ひになつて病院へお歸りになると、早速幼兒に附添うてゐる奥樣に對つて、『お前この子供を救けたいと思つたら、側について居つて今迄のやうに「もう死にはしないか、今に死にはしないか」と恐怖の念を送つてはならぬ。恐怖の心を送つたらその精神波動で病氣がひどくなるし、又お乳も毒素に變ずるのだ。平和な心でお乳を出せばそれが藥に變ずる、恐怖してゐる暇があつたら此の本を讀め。此の本を讀んで信念を强くして、この兒は神の子であるから、決して病氣で死ぬものでない、もう治るのにきまつてゐるのだと念ぜよ』と云つて聖典『生命の實相』の分冊を奥さんにお渡しになつたのであります。奥樣もその氣になつて一生懸命に聖典をお讀みになる。御主人はその病院に勤務してゐられる御醫者さんでありますから、授乳の時間にはやつて來られて、幼兒に授乳してゐる母親の背後に斯う（兩掌を背中にあてる恰好をして）手を按て、『人間は神の子であるから病氣で決して死ぬものではない、旣に治つてゐるのである。』と云ふ意味のやうなことを念ぜられたのであります。『三界は唯心の所現』であり『肉體は心の影』でありますから、急に幼兒に食慾がついて來まして、翌日からズン／＼肥え太つて來たのであります。幼兒などと云ふものは健康になりかけて來ますと、まるで筍のやうに面白い位に肥つて來る。二三日するとまだ熱があるのにもう見違へるほどに血色も

よくなり、皮膚も緊張して來たのであります。これにはお醫者さんの小永井さんも驚かれた。と云ふのは醫者の見地では腸炎で熱があるのはまだ腸炎が進行中である證據である。病氣が進行してゐるのにそれで元氣が回復し肥え太つて行くのですから醫學的立場からすればまるで奇蹟であります。かうして半月もするとスツカリ此の幼兒の健康は回復したのであります。昔から『近親者は重病者の看護をしては可けない』と云ふ諺がありますが、近親者はそれだけ病人が可愛くて執着がある。執着があるだけそれだけ恐怖する。『此の病人はもつと惡くなりはしないか、死にはしないか』と恐怖する。『死にはしないか』と恐怖すれば、八十パーセントは『死ぬぞ、死ぬぞ。死にさうだ』と云ふ惡念を送つてゐるのと同樣である。惡念を送ると云ふことは、呪ふのと同じことである。執着の念から起つた恐怖の念は、斯う云ふやうにして表面は愛の心であつたにしても其實は呪ひの念波に變つて行くのです。だから母親が側にゐて『死ぬぞ、死ぬぞ、死にさうだ』と云ふ念を送つてゐられた間はその御子さんの病氣がズン／＼惡くなつて往つてゐたのが、母親の氣持がスツカリ變つて了つたゝめに速かに快方に趣かれたのは當然であります。斯う云ふやうに側に附いてゐる人の心持——特に精神上密接な關係のある母親の心持と云ふものは子供に非常に影響するものでありますから、母親が心配したり恐怖したりしながら、子供だけを小兒科

の醫者へ連れて往つて、『この子供のお腹だけを治して下さい』などゝ云つても仲々治らないのであります。病源は母親の恐怖心にあるのですから、子供が病氣の場合には寧ろ母親を醫者へ連れて往つて、『この母親の子供が病氣ですから、どうぞ此の母親を治して下さい。』と云ふ方が本當なのです。（聽衆一同笑ふ）笑ひ事ではない。本當のことなのです。『生長の家』の誌友に理化學研究所に勤めてゐられる松本重夫さんと云はれる方があります。この人が或る日『生長の家』の住吉本部へ來られて云はれるには、自分の知人に原醫學博士と云ふ小兒科專門の醫者がある、その醫者は或る時松本さんに『小兒科の病氣は母親を籠絡して了へば治る』と云つたさうであります。此の小兒科の醫者はなか〳〵名醫である。『籠絡』と申しますと一見變な言葉でございますが、『好い具合に云ひくるめて瞞して得心させる』と云ふ意味であります。子供の病氣には『母親を好い具合に云ひくるめて得心させる』と治るのであります。醫者が患者に對しまして、脈をとりながら小首を傾げて『どうもコイツは變だな』と云ふやうな態度をするやうでは、その醫者は病人を惡くしてゐるやうなものなのです。病人と云ふものは――特に醫學を信賴してゐる病人と云ふものは、醫者が唯一の依り處なのでありますから、醫者の態度表情に對しては、それはそれは實に神經過敏である。醫者の眉の一つの顰みは、十日間の服藥の效果を『無』に歸して了ふ位のもので

す。（醫者の悠揚迫らざる態度を眞似しながら）『よし、好矣！斯う云ふ病氣は幾らも治した實例がある。これは普通の醫者ではどうか知らぬが私の經驗では最も治りやすい病氣である。よい藥を處方して置いてあげるから、あとでとりに寄越しなさい。それはそれは實に覿面に效く藥ですよ。』斯うユッタリと構へて醫者自身も安心した態度を示してゐると、患者が安心し、患者の近親者が安心し、看護人が安心し、その精神波動が影響して速かに治癒的効果を見るに到るのであります。斯う患者を安心させるやうな悠然として迫らざる態度を示し得る醫者は名醫なのであります。吾吾は醫者に藥代を支拂つてゐるやうでありますが、實は『ヤレ／＼あの醫者にかゝつてゐれば大丈夫だ、まづ安心だ』と安心させて貰ふその安心料を支拂つてゐるのであります。安心すれば自然療能が強くなるので癒るのであります。どんな醫者でも『藥が病氣を治す』などゝ信じてゐる醫者は今の世界に一人もないのであります。藥は『自然の治癒機能』を促進する媒介になるだけのものであつて、病氣を治すのは『自然の治癒機能』なのであります。それですから折角藥を與へても、小首を傾げて不安な顏をしたり、患者や家族を心配させる言葉を出して『自然の治癒機能』を沈滯せしめ、病念を一層深く植ゑつけて、『念の具象化力』によつて、病氣の顯れ方を一層ひどくして了ふやうなことでは幾ら藥を與へても何にもならない。松本重夫さんの知人の原

醫學博士の云つたやうに『籠絡』でも何でも好い、先づ『安心』させて病念を一掃すると、人間は本來『神の子』であつて、病氣は本來無い。『病氣』と顯れてゐるのは病念の具象化でありますから、病念の一掃と共に本來神の子たるわが生命の實相が顯れて形の病氣も一掃されて了ふのであります。此の人間は本來『神の子』であると云ふのは生長の家の說く實相の眞理、縱の眞理——卽ち久遠から一貫した確固不動の眞理なのであります。

人間の實相は神の子であり病むことなく苦しむことなしと云ふのが、實相の眞理——久遠を貫く眞理でありますが、横の眞理卽ち空間に具象化すると云ふ眞理から申しますと、三界は唯心の所現でありますから斯う云ふやうに病氣でも病人だけを治療しても治らないで、周圍の人を治療しなければ、互ひ互ひの精神感應によつて良くもなれば惡くもなるのであります。『將を射んとすれば先づ馬を射よ』と云ふ諺がある。病人を治さうとするには、先づその近親者を癒し、先づその主治醫を癒さねばならない。だから若し、病人が出來たら主治醫を先づ『生長の家』へ連れて來て主治醫の病的觀念を一掃してからその醫者にかゝるが好いとでも云へるのであります。こんな話があります。阪神間の蘆屋に住んでゐられた檢事さんの奥さんが、或る日一人の男の子を連れて來られて、數ケ月前から、主人から奥樣、子供に到るまで悉く肺炎に罹つて、『未だに此の

兒童の咳が治らないで時々熱が出るから治して欲しい』と云はれるのです。それはまだ私が阪神間の住吉に住んでゐた時のことでありますが、そのお母さんに私は『それは此のお子さんの病氣ではない、貴女の病氣なのです。貴女が「病氣、病氣」と思つてゐるから、その念ひが子供に反映して病氣をあらはしてゐるのです。貴女の病氣を治してあげませう』と云つて、子供を治して欲しいと云つてゐる母親の背中から十分ばかり手を當てゝゐたのです。『將を射んとすれば先づ馬を射よ』『子供を治さうとするには先づ母を治せ』と云ふ譯でありました。子供が病氣だのに母親に手を當てる――妙なことをするものだと其奥さんは不平がましい顏をして誌友にもならずにお歸りになりましたが、其の日と翌日一ぱいとはそれで子供の咳が止つて了つたのです。翌々日が過ぎるとまた子供が咳をはじめた。病人に手を當てゝ治るのなら『手のひら療治』と云ふ譯でありますが、健康な母親に手を當てゝ病人の子供が治るのですから、手のひらが病人を治したのではない。それで此の母親は、母親に手を當てゝ子供の病氣が治ると云ふ不思議な母子の相關的關係に氣付かれまして、たうとうまた『生長の家』へ來られまして聖典『生命の實相』をお求めになり誌友におなりになつたのです。誌友になり『生命の實相』をお讀みになつたら、母親の精神波動が光明化されて來ますから、その精神波動が影響して別に手を當てゝ念ずるなどゝ云ふ必

要がない。それでゐて、今迄家族ぢゆう交替に病氣してゐた其の檢事さんの家にはそれ以來誰も病氣するものがなくなつて了つたのであります。病人だけを病氣の時に醫者に連れて行つて治して貰つてゐては、たとひその一人の病氣が治つたにしても、末長く全家族の病氣が治るなどゝ云ふことは出來ないのであります。全家族ともに末長く病氣と云ふものと絶交するには、どうしても家族の精神的葛藤と云ふものを根本から解いて了ふと云ふことが必要であります。此の家族全體――日本國全體が生長の家の光明思想になつて病氣を實際にしなくなつたらそれこそ地上天國の一端が實現したことになるのであります。

先日神戸で或る婦人團體が東北の饑饉によつて困窮してゐる農村の人々を救濟せんがためには吾々は何を節約すれば好いかと云ふ會議を開いたのでありますが、中には絹織物を節約してその金額を義捐したらば好いでせうと云ふ人や、そのほか色々華美に見える物を節約してその金額を義捐しませうと云ふ人などがありましたが、絹織物を着なければ、絹が餘つて、さらでだに繭の値段が下がつて困窮してゐる農村の人々を更に一層困窮せしめることになる、一方で農村の人々を一層困窮せしめながら、さうして得た金を義捐して農村を救濟しようとしても、それは結局、左の手を切りとつて右の手に與へるのも同樣だと云ふことになり、甲論乙駁、何を節約しても節

約したもので他方に與へれば結局一方で搾りとつて一方で施してゐることになつてゐるから何にもならないと云ふ結論になり、結局何を節約すべきかと云ふことに問題が行詰りまして、『それでは病氣を節約するのが一等好い』と云ふことになつたさうであります。病氣を節約して醫者に支拂ふ金を困窮した人々に廻すやうにしてやることに結論か出來たと云ふのであります。さうすると、醫者とか藥屋とかゞ困ることになるだらうと云ふ人があるかも知れませんが、お醫者さんが『生長の家』思想になると病人に對する態度がスツカリ異つて了ふ。醫者は投藥しないで病人に對して態度や言葉や思念で病氣を治して了ふ。この話の最初に手紙を讀みました中にある舟橋醫師のやうに投藥もしないで話や思念で癌などゝ云ふ病氣でも治すことが出來るやうになる。斯うなると斯う云ふ醫者は醫者として存在の必要がある――尤もそれは醫者は主として心を直す働きをする宗教家のやうな役目になる譯でありますが、物質的治療よりもその方がよく治ると云ふことになりますと、別にお醫者さんは失業する必要はないのであります。それでは製藥業者はどうなるかと申しますと、別に病氣を治すための藥品を造る必要はない。國家に必要な化學藥品などを製造するのに懸命になることが出來る。日本全國の製藥所がたとひ民間の經營でありましても陸軍科學研究所の附屬工場のやうになりますと、大變國家としては力强いことであります。

病氣の話が大分出ましたが、『生長の家』は何も病氣治しばかりをするところではない。『生長の家』の說くところは一切宗教の眞髓である。何教でなければならぬと凝り固つた宗派ではない。また宗門でもない。派生したものならば、その流れて行く方向が異ふかも知れぬ、また宗門でありましたならば、それは門でありますから、東門と西門とは全く別方向を向いてゐるかも知れぬ。別方向に流れたり、別方向を向いてゐたら、イヤ此の教は東向きぢや、イヤ此の教は西向きぢやと云つて互ひに爭はなければならぬかも知れぬ。けれども『生長の家』はどの方向へも偏寄つてはゐないから、宗派爭ひ、宗門爭ひをする必要がない。お前の宗教を止めて『生長の家』へ這入れとは云はない。また云ふ必要がない。すべての宗門もそれで宜しい。併しもつと奥へ這入れ、その堂奥に『生長の家』があると云ふことを說くのであります。基督教の人は基督教でそれで好い。佛教の人は佛教でそれで好い。神道の人は神道でそれで好い。併し宗教と云ふものをただ講座や、哲學や、乞食のやうな拜み倒しや、死に際の用だと思つてはならない。宗教はその眞髓まで深く入つて來るとき必然的に實生活にまで生きて來なければならないのであります。宗教が實生活にまで生きて來ないとき、宗教は無用の長物視され、閑人の閑事業視され、老人の玩弄物視されて了ふのであります。ところが宗教が實生活にまで生きて來ますと、それが實生活の指

導原理となつて來るのであります。實生活の指導原理となるばかりではなく、『神の子』の生活を人生に實現することになるのであります。實際宗教の目的は、神の子の完全生活を人生に實現する爲であつて、これこそ『生長の家』が此の世に出現した使命であります。宗教とは死のための用ではないのだ。生のための用であるのだ。此處に(と自分の身體を指差して)神の子が生きてゐることを自覺さすことが『生長の家』の使命であり、本當の宗教の使命であります。」釋迦は斯う云つたが、私などには出來ない』と御經の解釋をしながら弱いことをクド／＼と云つて著書を賣るのが宗教ではない。此處に(と自己の身體を指して)釋迦が生きてゐる、天照大御神が生きてゐる、久遠のキリストが生きてゐることを自覺し、その自覺をそのまゝ生活に生きさすのが本當の宗教なのであります。

『生長の家』の信仰に入れば、この自覺に入り 此の自覺が生活に生きますので色々の事が治るのです。先づ先刻からお話したやうに病氣が治る、その他惡癖が治る、運命が治る、境遇が治る。あまり病氣が治るので『生長の家』を病氣治療の宗教のやうに考へて、脚の神經痛が治らないのでそれを治して貰ひに來た、肺病が治らないから、先生に手を觸れて貰つたら直ぐ治るかと思つて直接治療をお願ひにあがつたなどゝ云つて來られる方がありますが、そんな方は皆な『生

長の家』を誤解して來られるのであります。『生長の家』は氣合術や、催眠術や、按摩や、マッサーヂや『手のひら療治』や、觸手療法をして病氣を治す處ではないのであります。まあ考へて御覽なさい。肉體の病氣なら『手のひら』を患部にあてたら治ることがありますし、私も先刻話したやうに健康な母親に手を觸れて病氣の子供を治してあげたこともあるのでありますが、それが假りに經濟上の問題とか、家庭の中の紛紜であるとしますならば、何處へ手を當てゝ治せば好いのでせうか迷はざるを得ないでありませう。『生長の家』が『手のひら療治』であつたならば患部が何處にあるかハツキリ分つてそれが手の屆くところでないと治らないと云ふことになるから、その救ひの範圍は實に狹いものに限られて了ふのであります。ところが『生長の家』はさう云ふ氣合術や、催眠術や、按摩術や、觸手術ではない——總じて云へば『術』でないから、深呼吸の仕方がどうの斯うのと、さう云ふ點で捉はれて色々と『術』に巧者や工夫を施して見る必要がないのであります。『生長の家』に諸君がおはいりになりますと、大抵皆さんは治す力を體得なさるのでありますが、その治す力はどこから得て來るのかと申しますると、自己の『實相』からであります。『實相』と申しましても初めての方には中々お判りにならないかも知れませんが、段々お話し致してゐますうちにお分りになることだと存じますが、諸君の内には、一寸表面から見ると判

らないのでありますが、無限の力の泉が口を開いてゐるのであります。その『無限の力の泉』が諸君の『實相』なのであります。『實相』と云ふ字は『實の相』と書いてある――此の『無限の力の泉』が吾々の『實の相』なのでありまして『力が無い』と思ふのは『虚假の相』なのであります。よく私が擧げる例でありまするが、誰かゞ無限億萬圓を私の知らぬ間に私の蟇口に入れて置いてくれたとしましても、私はそんなに私の蟇口の中に無限億萬圓が入つてゐると云ふことを知らずにゐて、たゞ十圓札一枚しかないと思つてゐますと、百貨店の中を歩いてゐて欲しいものが見つかりましても、十圓以下のものでないと買ふ氣がしない。蟇口を開いて見ましても、蟇口の中の區劃の奥に無限億萬圓の商品切手がありましても、手近かに見える十圓札しか無いと思つてゐるから、十圓以下の品物なら買へるけれども、それ以上の品物は買へない氣がする――氣がするだけではない本當に買へないでありませう。此處です！蟇口の中の區劃の奥に無限億萬圓の商品切手がある――それは誰か知らして呉れる人があれば、百貨店全體の品物でも自由にする力が出て來るのであります。此の蟇口の中の區劃の奥に實際何があるかと云ふ『實際の相』――これを『實相』と云ふのであります。この『實相』の中には、生きる力にすれば無限生命、治す力にすれば無限の癒力、供給にすれば無限の供給が宿つてゐるのであります。古神道ではこの眞理を

理窟なしに、端的に、自分のことを『彦』『姫』と云つてゐる。『彦』とは日子即ち天照大御神の御子である。『姫』とは日女即ち天照大御神の娘と云ふことである。こゝに天照大御神が生きてゐると云ふことである。佛教徒はこれを一切衆生佛性ありと云つてゐる。基督教徒はキリストを通して神の子と成る――斯う云ふやうに云つてゐるのであります。

人間は始めから神の子でありますけれども、イエスが出て來て、蟇口の中の一枚の中區劃を開いて其處にある神の子の小切手を見ることを教へてくれた。そのために人間は『神の子』であると云ふ無限億萬圓の小切手が見付かつた。イエスが出て來ても來なくとも人間は本來『神の子』なのでありますが、蟇口の中區劃を剝つて見ることを教へてくれたのがイエスでありますから、イエスを通して人間は神の子となると云ふのであります。それと同じやうに釋迦が生れて來ても來なくとも人間は佛子であり、無限の解脫自由を内に包藏してゐるのでありますけれども、釋迦が出て來てそれを教へてくれた、それで人間は釋迦によつて佛となり救はれると云ふのであります。現代では基督教も佛教も一部の間には生命を止めてゐますが、近代の科學に矛盾するやうな不可解なやうな解き方がありますために『人間神の子、無限の力』と申しましても中々信じられない人が多い。現代には現代的なやり方で蟇口の中區劃を剝つてくれる者がなくてはならない。

それが『生長の家』でありまして『生長の家』の說き方では容易に蟇口の中區劃が剝られて何人でも容易に、自己が『人間神の子、無限力』の實相を見出すことが出來るのであります。これをキリストを通して神の子にせられると云ふ言ひ方になぞらへて云ひますと、吾々は現代に於ては『生長の家』を通して神の子にせられるのであります。

問題は蟇口の中區劃一枚を剝つて見るかどうかのことなのであります。無限力、無限億萬圓の『實相』は既に與へられてゐる。『實相』と『心の眼』との間に一枚の中仕切があるだけなのであります。この中仕切を取り去る役目がキリストであり、釋迦であり、現代では生長の家なのであります。

この中仕切を取去るには、キリストの敎へが解り、釋迦の敎へが解り、『生長の家』の敎へがよく解るほどに學問才能がなければならないかと申しますと決してさうではない。問題は頗る簡單でありまして幼兒のやうな純な信仰を以つて古へではキリストに觸れたら、現代では『生長の家』に觸れたら此中區劃は容易に取去られて了ふのであります。マルコ傳第五章には、キリストの裾に觸れたゞけで病ひが癒やされたと云ふ實話が書いてある。其頃十二年間、血漏を患つてゐた女があつた。多くの醫者に診て貰つても快くならず苦しめられるばかりで、その治療代に有てる

物をことごとく費したけれども何の効もなく、却つて益々惡しくなつてゐた。ところが或る日キリストの事をきいて、群衆に立ちまじつてキリストの後にそつと來て、その衣にさはつた。『キリストの衣にだに觸れたら救はれる』と思つたからでした。と、忽ちその女の血のオリ物が止つて病が治つて了つたのであります。

これはイエス時代の出來事であつて、現代にそんな奇蹟があるものかと思つてゐられる人があるかも知れませぬけれども、現在でもイエス時代と同樣のことが出來るのであります。聖書の中の此の婦人はたゞイエスの衣の裾に觸れたゞけで癒された。これは外見から見ると、たゞ衣の裾に觸れたゞけでありますが、イエスはその時その内面の働きを看破して『娘よ、汝の信仰なんぢを健かならしめたり』と云つてゐるのであります。キリストの衣の裾に觸れることによつて、この婦人は蟇口の中の中區劃がパツと開いたのです。そしてその中に埋藏されてゐる無限の治す力が發現したのであります。『生長の家』でもこんな話があります。帝展で度々入選せられた彫刻家服部仁郎氏、この人が昨年肺炎にかゝつて遺言までされた。その人が生長の家のパンフレットを二冊讀むと三日で治つて彫刻を始められた。ところが又此處に東京淺草橋停留所前の金忠商店の御主人の巽忠藏さんは脊髓癆にかゝつて帝大の眞鍋内科、呉内科、同じく帝大の小石川分院の鹽

谷内科と諸方の名醫を渡り歩いたが、歩行も出來ない、坐ることも出來ない、手を握ることも出來ない。生命ももう長くはもつまいと云はれてゐた。この巽忠藏さんが服部仁郎氏にちよいと手を觸れられるとさしもの脊髓癆が治つて了つて、自由自在に歩行が出來、翌日は目黑の雅叙園等を二里位平氣で歩いた。今もこの席に巽忠藏さんも來てゐられ、その御家族も來てゐられる。治す聖靈は生長の家のパンフレツトから服部氏に、服部氏から巽氏に、斯う云ふ具合に傳つて往つたのであります。また先日京都の生長の家誌友會を、相國寺東門前の石川芳次郎氏邸で開いたのでありますが、石川さんに六歳になる坊ちやんがある、生れた時から陰嚢の內部に睪丸でない梅干位の大きさの固りがある。醫者に診せたらどの醫者も『脫腸ではない、瘤の一種であるから、もう少し年齡が進んで來たら切開したらよからう』と云ふのであります。六年間その瘤は放置されてゐましたが段々大きくなるばかりで最近では中位の馬鈴薯位の大きさになつて來たのでありますす。石川さんの奧さんは手を按てゝ祈つてやれば治るやうな氣がするのでありますが、手を按てると云ふことさへも人爲的な信仰の薄い所作のやうな氣がするのでありました。ところが五月廿七日に石川さん宅で『生長の家』誌友會を催すことになりましたので、石川さんの奧さんはその六歳の坊ちやん（芳夫さんと云はれます）に『明後日は誌友會に谷口先生がお越しになるから、

谷口先生にその瘤を治して貰ひませうねえ』と云はれた。芳夫さんは大喜びで『谷口先生に治して貰ふんだ、治して貰ふんだ。』と云つてゐる。そして夕方奥さんは芳夫さんを連れてお風呂にお這入りになつたのでありますが、見ると生れてから昨日まで六年間あつたその馬鈴薯大の瘤がいつのまにか消えて了つてゐるのであります。マルコ傳にあつた十二年間血漏を患つた婦人は、イエスの衣の裾に觸つたゞけで癒やされたのでありますが、この芳夫さんは、私に治して貰ふんだと信じたゞけで、何にも觸らないで六年間の瘤が治つて了つたのであります。斯う云ふやうに、昔はイエスが『實相、無限の治す力』を發顯さすための仲介をしたのでありますが、現代では『生長の家』が『實相、無限の力』を發顯さすための仲介をするのであります。服部氏は『生長の家』の聖典の分冊二冊に觸れて治つた。六歳の芳夫さんはみづから信じて治つたのであります。イエスも汝の信仰汝を健かならしめたりと云つてゐる。昔は純粋な幼な兒のやうな信仰をもつてイエスに觸れることが必要であつた。今は純粋な幼な兒のやうな信仰をもつて『生長の家』に觸れることが必要なのであります。この芳夫さんは迚も信念の強いお子さんである、寒中でもキャラコの肌着一枚のほか何も着ないで風邪一つお引きにならない、私が誌友會にまゐりました時にも、谷口先生の話をきくんだと云つて晩くまで待ち兼ねてゐられる。神想觀の時には眠つてゐても起

してくれと云はれて、起して貰つて神想観をせられた。さう云ふ幼兒の純な信仰をもつて『生長の家』の指し示すところの蟇口の中區劃の彼方にある『實相』（無限の治す力）を信じられたらば、どんな病氣でも不幸でも人生苦でも消えて了ふのであります。

幼兒の信仰は母親の反映でありますから、子供の病氣には母親の信念が強くなければなりません。石川さんの奥さんは『生長の家』にいつか書きました通り、愛兒が肩胛骨を折つて自動車で送られて歸つても、自動車の中に二時間も放置して、外から一切の小細工を施さず放置されて、只管、傷ついてゐない神の子の實相を拜み出された程の方であります。だから此麼にそのお子さんでも、信念がお強いのであります。母の信仰が肝腎です。この六歳の芳夫さんが或る夜、急に齲齒が痛み出して痛い〳〵と云つて泣き出されたのであります。石川さんの奥さんは『本をお讀みなさい、治るから』斯う被仰つて生長の家叢書一冊をおあげになつた。まだ六歳の小學一年生にもならないお子さんで假名だけすら碌々讀めない筈の坊ちやんが、どうしたのか、振假名をたどり〳〵一二頁讀んで行かれたのであります。するとピタリと齲齒の痛みがとれて其儘スヤ〳〵眠つて了つてその齲齒は再發しなかつたのであります。これは寧ろ母親の信仰がお子さんに投影してそのお子さんがその本に觸れますと、キリストの衣の裾に觸れたのと同樣の結果を來し、『實

相』から力流れ出でゝそのお子さんの病氣が治つて了つたのであります。
だから、現代にもキリストは無いことは無い。併しキリストは二千年前肉體としてユダヤに生れ出でた肉體イエスのことではない。久遠實相のキリストのことである。イエスが『アブラハムの生れぬ前より我は在るなり』と云はれた、その永遠のキリストのことである。それは永遠に存在する眞理であり、生命の實相である。だから『キリスト』の衣の裾にさへ觸れゝば、そこに、その觸れた人に『實相』が再臨する。今此處にキリストが實現するのであります。私ひとりがキリストに成るのではない。キリスト卽ち『眞理』の裳に觸れさへすれば、諸君の一人々々が今、直にキリストになることが出來るのであります。今直に釋迦になることが出來るのであります。今直に天照大御神の御光の中に融合する事が出來るのであります。此處に今キリストがあり、此處に今釋迦があり、此處に今天照大御神の御光が輝いてゐると云ふことになるのであります。釋迦に阿難が『三世の諸佛は誰の弟子であるか』とたづねたことがあつた。釋迦が答へて『三世の諸佛は皆此のわしの弟子である』と云はれた。基督は『アブラハムの生れぬ前より吾れはあるなり』と聖書の中で云はれ、また法華經で釋迦は百千萬億阿僧祇劫前から自分は成佛してゐると云はれた。基督の肉體は當時まだ三十歳の若者である。釋迦の肉體は當時年老いてゐたとは云へま

だ八十歳位に過ぎない。その三十歳の若者であるキリストが『吾れはアブラハムの生れぬ前からゐたのだ。』と云つたり、そのまだ八十歳の釋迦が『自分は久遠の往昔から成佛してゐたのだ。三世の諸佛は皆自分の弟子だ』など丶云つたりしたら、肉體だけを見る者にはそれは狂氣の沙汰である、そんな馬鹿なことがあるものかと思へるのでありますけれども、『生長の家』の說くやうに『肉體は本來無い』と云ふ立場から見ますならば、三十歳の基督が『我れはアブラハムの生れぬ前からの久遠の實在である』と云はれた言葉がよく解るのであります。八十歳の釋迦が『我れは百千萬億阿僧祇劫前からもう既に成佛してゐる』と云はれた意味がよく解るのであります。よく解るだけではない。その肉體が本來無いと解りますと、釋迦ならずとも、キリストならずとも、此の自分が既に『久遠の實在である』と云ふことが悟れるのであります。此處に（自分の胸の邊りを指差しながら）久遠の實在が生きてゐると云ふことが判るのであります。此の自分が『久遠の實在』そのものである。此の自覺ほど尊いものはないのであります。先刻からクド／＼と心の作用で病氣の治つた實例などを說いて來ましたのは、要するに此の肉眼で見えるところの病氣をする肉體、また病氣が治つて健康に變化したりする肉體――斯う云ふ變化常なき肉體は、それは無常のものである。實在するものではない。實在するかのやうに見えても、念の具象化力で唯さう云

ふ形に顯はされてゐるのであるから本來無いものであると云ふことを知らせて、今迄アルと思つてゐた此の『無常の我』と云ふものを打消して『常恒の我』――『久遠の實在』たる天照大御神に生される我――永遠不滅のキリストと同體なる我、久遠本佛なる大日如來と同體なる我を自覺せしめんがためなのであります。此の『久遠の實在』たる永遠不滅の我が自覺出來て參りますると、その人の念が『正念』となる。すると現象界は念の投影である世界でありますから、その正念の投影として現象界にも久遠實相世界の完全な相――地上天國が實現して來るのであります。此の『久遠の實在たる我』――釋迦が涅槃經でお說きになつたところの常樂我淨の我こそ本當の我であつて、そのほかに本當の我はない。無明の我とか罪惡深重の我などと云ふものは本來無い――『善を爲さうと思へども惡のみ催す我である』との述懷が出るのは、『本來無い我』で善を爲さうと思ふから駄目なのだ。眞宗や淨土宗などで、『我と云ふものは賴みにならぬものぢや』と云ふことを說くのはその『賴みにならぬ我』の存在を强調するために說くのではない。『賴みにならぬ我であるからそんな賴りないものを捨てゝ了つて阿彌陀佛に依り縋れ』と云ふためであるのだ。それに何ぞや、賴みにならぬ我だとか罪深い我だとか、いつまでも本來無い詰らない我に低徊してグズ〳〵云つてゐるのだ。阿彌陀佛に依り縋れと云ふのは、西方十萬億土の彼方にある阿彌陀佛と云

ふ一個の個人的人格佛に縋ることではない。阿彌陀佛は卽ち盡十方無礙光如來である。天地に滿ち我に滿ち諸君に滿ちてゐる無礙の光明である——それは久遠本佛であり、吾が實相生命である。吾が實相生命が阿彌陀佛であり、盡十方無礙光如來である。今迄の宗教に屬する人や道德家が善くならうと思つても善くなれないのは、『賴みにならぬ我』——本來惡い我——本來無い我——ウソの我で善くならうと思ふからなのだ。何故いつまでもそんな『ニセ物の我』で善くならうと思ひつゝ善くなれないと云つてそんなことに引つかゝつてゐるのだ。今迄他の宗教や修養法や自制法などでいくら禁酒禁煙しようと思つても禁酒禁煙出來なかつた人が『生長の家』に來られて神想觀をやつたり、聖典『生命の實相』を讀んでゐるうちに、自然に巧まず工夫せずに禁酒禁煙されて來る實例が多いのであります。それは前の場合には、酒を飮みたい心——ウソの心で酒を飮むまいと工夫してゐたからそれが止められなかつたのです。『酒を飮みたい心』で酒を飮むまいと工夫したとてそれは無駄な努力に過ぎないのです。そんな惡い心は無いと知つて、實相の心、阿彌陀佛の心、無限に善い心、久遠の基督の心ばかりが實在であり、それが『本物の自分の心』だと知つたとき、ひとりでに內在の善が顯れて來て、善きことばかりが出來るやうになるのです。『生長の家』の說くところは、自分を惡い下らないものであると一旦その惡さを認めてから

捨てると云ふやうな迂回的な捨て方をするのではない。闇を一旦あると認めてその闇を握つて摑んで捨てようと思つても、闇と云ふものは消えるものではない。闇と云ふものを消す方法は、闇がアルとかナイとか云ふことに頓着しないで闇の反對――『光』を出せば、闇は消えて了ふのです。光さへ出せば幾億萬年以來からの濃い闇でも電燈一箇ともせば消えて了ふのです。だから闇のことは頓着する必要はちつともないのです。『惡い自分』のことは頓着する必要がない。たゞ本當の自分の『光』さへ出せば可い、本來『天照大御神』の御光の中にゐる自分のみを認めれば好いのです。本來『盡十方無礙光如來と同體の自分』と云ふもののみを認めれば好いのです。『久遠の基督と同體の自分』のみを認めれば好いのです。さうしたら光が出ればすべての闇が消えて了ふやうに、『惡い自分』と云ふものは本來無いから消えて了ふのです。だから苦勞して止めようとしても止まらなかつた飮酒癖などが自然に何の苦しみもなく止まるのは、自分のうちに宿る佛性が出て來るからです。自分の中に宿る基督が出て來るからです。基督に從ふことは苦しいことであるかのやうに考へて苦難禮讃、受苦禮讃を考へてゐるクリスチャンが往々ありますが、基督に從ふことは實に容易い道なのです。基督は『吾がくびきは易く、吾が荷物は輕し』と云つてゐられるのです。『十字架を負うて我に從ふものならでは我が弟子と成ることを得ず』とか『狹き門より

入れ』とか云ふ言葉が聖書にあるものですから、苦しい狭い道を通つて、十字架と云ふやうな苦しい重荷を背負うて人生を歩くものでなければ基督の御心にかなはないと思つてゐられる方がクリスチャンの中には大分あるやうでありますが、此れは聖書の解き間違ひです。人間が苦しんだり重荷を負つたりするのが好い位ならば、何のために基督は全人類の罪の身代りになつて磔刑になつて苦しまれたのでせう。基督が全人類の苦しみの身代になつて下さつたのに、まだ人類が苦しまねばならぬとしたら基督の十字架が泣きますぞ。基督は『お前達の借金をわしが十字架にかかつて支拂つてやつたのに、まだお前達が苦しい借金を拂はねばならぬなら、わしの十字架は何にもならなかつた』と云つて泣きますぞ。『十字架を負うて我に從へ』と云ふ基督の教へは、『苦しんで我に從へ』と云ふ教へではない。『一切を帳消しにして我即ち實相に乘托せよ。』と云ふ教へなのだ。十字架とは×の字、帳消しの符號なのだ。一切を帳消しにする――今迄の人間智も學問も罪も苦しみも重荷も、一切を帳消しにして實相にのみ從へよと云ふことなのだ。『狭き門より入れ』と云ふことは人間に窮屈になれと云ふことではない。門が廣ければ、大きな荷物を背負つた儘通れるから、それでは今迄の持物――一切の先入觀念や人間智や學問や地位や名望や色々の持物を舁いだまゝ通れるから、そんな荷物を舁いだまゝではどうしても通れないやうな狭い門を一

度通つて、嫌やでも應でもその荷物を卸して了つて、肩の荷を卸して、ラクになつて我に從へと云ふ事なのだ。斯う解釋した時、『我がくびきは易し』と云はれたキリストの言葉と、『狹き門より入れ』と云はれた其の言葉とが始めて調和したものとなつて來るのであります。實にキリストの云はれる通りにしたならば、我々は樂なのです。また基督教信者の中にはキリストでさへ苦しみ給うたのであるから自分も基督のやうに苦しまねばならぬと考へてゐる人がありますが、これは基督の十字架を穿き違へたものであります。生長の家の信仰から見るとキリストはまだ一度も磔刑になつたこともなければ苦しみ給うたこともないのです。キリストは二千年前に生れた肉體人間ではなかつたのです。キリスト自身も云はれた通り彼は『アブラハムの生れぬ前から旣にあつた所の久遠の實在』であります。だから二千年前に生れたこともなければ、復活祭の前の金曜日に磔刑になつたこともなかつたのです。一度も苦しんだことも磔刑になつたこともないのが本當のイエスキリストなのです。彼は神の子であり、金剛不壞なる久遠の實在でありますから苦しみやうがないのです。では何故キリストは磔刑にかゝつて苦しんだやうな有様を現はされたのでありませうか。普通今迄の解釋では、神が人類の墮落に對して非常に怒つてゐられる。當り前では人類に對する神の怒りは解けさうにない、それで神は自己の怒りをなだめるために神の獨り子た

るキリストを遣はし給うて、人間の罪の代贖にキリストを磔につけたと云ふのです。自分の怒りをなだめるために自分の獨り子を磔刑につけるやうな殘忍な神樣がありますか――何故これが愛深き神樣なのです？石川五右衛門でさへも烹刑になる時には、自分が釜の底にゐて、自分の子供は熱くないやうに兩腕で上へ差上げてゐたと云ふではありませんか。それに愛深き神樣が自分の怒りをなだめるために自分の獨り兒を磔刑にして其の鬱憤を晴らす――そんなことはあり得ないことなのです。神樣は決してイエスキリストを磔刑にされはしなかつたのです。またキリスト自身も磔刑に處せられて血を流したこともなかつたのです。では何故キリストは磔刑になつて實際吾々の眼に磔刑になつたかの如く顯れ給うたのでありませうか。それは神の怒りをなだめんが爲ではない。至仁至愛なる神は決して未だ嘗て怒り給うたことはないのです。だから神の怒りをなだめる必要などは露さらないのです。では何のために神はキリストを遣はし給うて磔刑にかゝつて苦しむ有樣を現じ給うたのでありませうか。それは實に人類の罪の意識をなだめんがためなのであります。『罪』と云ふものを神は造り給はないのでありますから、罪は此世に實在しない、實在しない筈の罪がどうして消えないかと云ふと、人類自身の念が、罪がある、罪が重いと思つてそれに執着してゐるからなのです――『罪は無い』と知つて念を罪から解放しましたなら、地球の引力

がなくなつたら一切の雲霧が飛び散つて了ふやうに、『本來無い罪』は自然に消去つて了ふのです。だと云つて『罪は無い』と敎へてやつても『罪はアル』と思つてゐる人々には、中々『オ、さうか』と罪念が消えては了はない。さう云ふ人の罪の觀念を消し去るためには、罪を贖ふためには、罪の値ひを支拂ふためには、自分自身何か罪つぐなひの苦しみをするか、誰かゞ代りに苦しんで『オイお前の罪の代價はワシが代りに拂つてやつたよ』と云つてくれる人がなくてはならない。イエスが神から遣はされて十字架にかゝつて苦しまれたのは人類に對して『オイお前の罪の代價はワシが代りに支拂つてやつたよ』と云つて、吾々の罪の意識をなだめる役目で出現されたのであります。決して神の怒りをなだめる爲ではなかつたのです。神は決して怒り給ふやうな神ではないのです。『オ、君が僕の代りに借金を支拂つてくれたのか難有う』――人類は斯う云つて罪の重荷がおりたと思つてラクになり、ヤレ〱と思ふ。これで、人類から罪の念が解放される。罪本來無く、たゞ罪の念で繫ぎ止めて置いたゝめに今迄消えなかつた罪ですから、もうこれで罪は消えて了つたのです。イエス・キリストは斯う云ふやうに人類の罪の意識をなだめて人類から罪を解放し、人類をラクにしてあげようと思つて、本來苦しまず、本來金剛不壞で傷かない『久遠の實在』であるにも拘らず、磔刑にかゝつて傷付いた姿であらはれられたのであります。

だから、キリストの十字架の目的から云つてもキリストでさへ苦しみ給うたのであるから自分も苦しまねばならないなんて考へてゐるのは間違ひなのであります。キリストの十字架は人間が樂になるやうに出現したのです。法藏菩薩の四十八願は人間が樂になるやうに、極樂になるやうに出現したのです。宗教と云ふものは 斯う云ふやうに人間を樂にするやうに出現したのでありまして、今迄の宗教には難行道と易行道とがあると云はれてゐますが、眞宗などは易行であつて、たゞ南無阿彌陀佛と云ふだけで救はれるのでありますが『生長の家』は易行よりもまだ易しいのです。それは容易しいだけではない。樂な行である。樂行道だと云つてゐるのであります。もう時間も豫定の十時を十分過ぎましたから今日の講演はこれで終ることに致します。

第二章　天國浄土を實現する道

昭和九年十二月十一日東京市有樂町報知講堂にて辻村楠造總監の講演後午後七時四十分より午後十時迄の講演

今日も亦お忙しい中を、多勢お集り下さいまして難有うございました。唯今辻村陸軍主計總監閣下がその御講演の中に『忠ならんと欲すれば孝ならず、孝ならんと欲すれば忠ならず』と云ふ重盛の述懐を御引用になりましたが、重盛の云つた忠が本當の『忠』でありましたならば、中心を得たる心でありますから、必ずや同時に『孝』であり得たに相違ないのであります。それが忠ならんと欲すれば孝ならずと云ふやうに、一方、君に忠を盡せば一方、親に孝を盡せないと云ふ風な結果になるのは、それは舶來の『忠』であり『孝』であつて、日本惟神の『忠』『孝』ではないからであります。元來、日本には『忠』もなければ『孝』もない。こんなことを申しますと變にお考へになるかも知れませんが、日本には元來『忠』と云ふ字もなければ、『孝』と云ふ字もないので、本來『忠』『孝』の區別がなかつたことが明かであります。『忠義』だとか『孝行』だとか

云ふ言葉は、ランプやガスと云ふ言葉と同じく舶來の言葉なのであります。舶來の言葉は舶來の値打しかないので『忠義』と云ふ言葉は、親に對しては當嵌まらないし、『孝行』と云ふ言葉は君に對しては當篏らないのであります。老子は『大道すたれて仁義あり』と云ひましたが、忠義だ孝行だと、その區別を言擧げしなければならないやうになつたら、もう其處に、本當の忠義も孝行もないのであります。日本では、これは『忠義』だ、これは『孝行』だと云つて殊更に言擧げしないで一つの『まこと』を生き通したら、それが、同時に忠となり孝となるのであります。外國は細かく分析的な方面に天分を有つてゐる。それで、吾々の德行に致しましても、君に對する時は『忠』であり、親に對する時は『孝』であり、夫婦に對する時は『和』であり、朋友に對する時には『信』だと云ふ風に分類してゐる。さて斯う云ふやうに分類して了ひますと、重盛のやうに『忠ならんと欲すれば孝ならず』と云ふやうになつたり、朋友に對して信義を立て通さうとしますと夫婦の仲が惡くなると云ふやうにその一々が一致しなくなるのであります。ところが日本の國は幹の國であり、幹は一本であつて、まだ枝葉に分れてゐないのですから、吾々の德行に致しましても、一々忠とか、孝とか、和とか、信とかの區別をする必要がない。だから忠とか孝とか和とか信とか云ふやうな言葉はない。それでは日本ではどう云つたかと云ひますと、すべての諸

德を現すのに唯一つ『まこと』と云つたのであります。『まこと』とは『實の相』――實相――のことなのであります。あそこに『生命の實相』と云ふ本がありますが、あの本の題は此の『まこと』と云ふ言葉から採つたのであります。『まこと』とは圓相卽ち圓相十全のスガタが備つてゐるのを云ふのであつて、すべてのものは此の『まこと』の中にあるのであります。『まこと』は又『眞』と云ふ字を當篏めればよく判る。『眞』卽ち『本當の實在』は皆『まこと』卽ち圓相であつて、すべての善さが備つてゐるのであります。本當の實在は圓相であつて、すべての善さが備つてゐると云ふのが、吾が『生長の家』の信念なのであります。

それで、吾々の『實相』が發現しますれば、八方正面の人間になるのであります。君に對する時にも『まこと』、親に對する時にも『まこと』、朋友に對する時にも『まこと』、良人に對する時にも『まこと』、『實相』の中にすべてが備つてゐるのでありますから、誰に對する時にも唯『實相』だけで好い。だから君に對する時には『忠』でなければならないとか、親に對する時には『孝』でなければならないとか、さう云ふ區別をしなければならないと云ふことはないのであります。『まこと』は圓相で、すべて成就でありますから、『まこと』さへあらはせば、八方に對して諸德が成就するので、親に對して『誠』をあらはせば自然『孝』となり、君に對して『誠』をあらはせば

自然『忠』となるのであります。此の『まこと』と云ふものは一定の形ではない。形でないから時に從ひ相手に從づて自由自在に千變萬化するのであります。一定の形なくして自由自在に千變萬化するからこそ變通自在融通無礙であつて如何なる時にも、如何なる場合にも、善しい行爲となるのであります。『善』と云ふものを『一定の形』のものだときめて了つて、『孝行』とは斯う云ふものだと形の上できめてかゝれば、もうその孝行は、重盛のやうに忠義には當篏まらないものになつて了ふのであります。『博愛衆に及ぼし』と云ふ言葉でも、愛とか慈悲とか云ふことは、『貧しきものに施すことだ』と形の上で極めてかゝれば、もうそれは死んだ善になつて了つて、生きた善にはならないのであります。ところが『生きた善』と云ふものは『實相の善さ』があらはれたものでありますから、時には貧しき者が救恤を乞ひに來た時に施しをしないで却つてコツンと頭を擲つて辱しめて追ひ返すやうな、形の上から見たら、一見ヒドイ事をすると思はれるやうなことでも、相手を生かすためにはするのであります。『類は友を招ぶ。』實相は實相を招ぶのでありまして、こちらが實相を以て相對すれば、形の上で殘酷だと思はれるやうな遣り方をしても却つて相手の實相の善さを招び出すことになるのであります。さう云ふ場合には施しを求めて來て却つてコツンと頭を擲られたがために、其人は依賴心を捨てゝ眞人間になるやうなことになる。

それが實相無礙の働きである。貧しき憐れな者は唯いたはつてやるばかりが善であつて、憐れな者を擲るやうなことは惡であると唯、形の上に捕へられてゐましたら斯う云ふやうな自由自在な神通妙用は出て來ないのであります。貧しき憐れな者には施しをするばかりが善であるなどと杓子定規に思つて施しばかりをするやうなことにしてゐると、貧しい者は施しを受けることが權利かなんぞのやうに思つて、彼等の依頼心は益々增長し、『あそこへ行けば施しがあるぞ』と施しばかりを當てにするやうになつて相手を却つて生かさないことになつて了ふ。だから施すばかりが愛ではない。だからと云つてコツンと擲ることばかりが愛ではない。愛だと云つても相手を迷ひを通して愛するやうなことでは相手を殺すことになるのであつて、實相を通して愛することによつて相手を生かすことになるのであります。

さうしたら、人が物乞ひに來た場合にはコツンと擲る方が好いか、求められる通り施しをしてやるのが好いかはどうしたら區別がつくかと申しますと、それは形の上では區別がつかないのであります。それが判るには自分の心が實相の中心に坐つてゐる事が必要である。自分の心が實相の中心に坐して居れば、中心と云ふものはすべての方向に對して正面を向いてゐるものであるから、八方正面であるから、何でも心に催して來る通りにすればそれが善になつてゐるのでありま

す。此の八方正面の實相に坐してゐる人が心に『施しをしてやりたい』と云ふ思ひが催して來れば、施しをしてやることが善になつてゐる。心に『施しを拒絶したい』と云ふ思ひが催して來れば施しを拒絶するのが善になつてゐる。何でもしたい儘をして、それで善になつてゐる。實相は本來善であるから、八方正面であつて、どちらを向いても善にならずにはゐないのであります。

近頃、毎日『生長の家本部』へ修行に來られる中々眞面目な奥樣があります。その奥樣の家の位置がルンペンの目に付きやすい處にでもある故でゞもありますか、孤兒院や〇〇や苦學生たちが寄附の强制に來たり、不要品を買つて呉れと求めて來たりするのであります。此の奥樣は最初『貧しき者には必ず施すのが善である』と信じてゐられたので、求められる儘に施したり不要な物でも買つてあげたりしてゐられたのであります。ところがさう云ふ人たちの間にはグループがあり、互に芋蔓のやうに連絡でもあるらしく、『あそこへ往つたら必ず買つてくれるからお前も行け』と云ふ調子で毎日、苦學生やルンペンが押し掛けて行くやうになつたのであります。さうなつて來ますと此の奥樣も施しをしてゐることが善い事をしてゐることか惡いことをしてゐることか判らなくなつたのであります。その時、この奥樣は『生命の實相』をお讀みになつて、今迄の『より多く富める者は貧しき者には是非施さねばならない』と云ふ考へが大變に捉はれた善

であつて、本當の善でないとお知りになり、それ以後は心に催す儘に或る時は施し、或る時は斷ると云ふ風にしてゐられたのであります。すると或る日のこと、一人の苦學生が『鉛筆を買つて呉れ』と云つて來たのであります。其の時、奥樣は心に催す儘に『今家に鉛筆はある。安いのを一本でも買つてあげたいけれども私の宅も經濟上今は誠に困つてゐるのですから、斯うやつて來られる皆樣に一々買つてあげる譯には行きませんからどうぞ惡しからず』と云つて斷られた。すると其の苦學生は何と思つたか一本の鉛筆を其の奥樣の前に差出して『奥樣がそんなに困つてゐらつしやるのでしたら、これは私の志ですから、この鉛筆をどうぞ貰つて下さい』と云つて、鉛筆を置いて立去らうとしたのです。奥樣は驚いてその苦學生を呼び戻さうとしました。と、苦學生は振向いて奥樣の顏を見た。その苦學生の眼には僞りのない實に純潔な光が宿つてゐたのです。その眼を見た時にその奥樣はこのやうな純潔な苦學生を斷つた自分の行爲を恥ぢたのです。あの苦學生には僞りはなかつたのである。それを偶々自分の心の催すまゝに斷つたら好いと思つてゐたゝめに、あゝ云ふ可憐な純潔な苦學生に與へないで、まだ一本の鉛筆を奪つたのである…と。

その奥樣はこの話を私になさいまして、心に催すまゝに寄附合力を斷るのは惡いことではないか知らと今では迷つてゐるとお話しになつたのであります。皆さんは果して此の奥樣が苦學生か

らものを買つてやらなかつたのが、悪いことであつたとお考へになりますか、善いことであつたとお考へになりますか……(聽衆無言緊張して聽いてゐる)

私の答は斯うでありました。『奥様、貴女はそれは大變善い施しをなさいました。凡そ施しをするのに物施と法施とがある。物施と云ふのは、物を與へたり金を惠んだり、形ある物を與へることである。法施と云ふのは眞理を施すことである。言ひ換へると相手の實相の善さが出、佛性が出るやうに仕向けてあげることである。お釋迦さんは弟子に饑饉の時ほど托鉢せよ、貧しい村ほど托鉢せよと云はれたさうでありますが、此の托鉢と云ふのは物を乞うて歩くことである。お釋迦さんは悟りを開いて既に無限供給の體現者である。既に無限の富者である。その無限の富者が何故、饑饉で困つてゐる貧乏村へ物乞ひをして歩くことを勸められ、また自身もわざ〳〵物乞ひして歩かれたかと申しますと、これは法を施すためである。物を乞うて歩くかはりに、相手の惻隱の心、憐れみの心、慈悲の心を起さしめて歩くのです。すなはちそれは相手に佛性を施したことになつてゐる。若し貴女が默つてその苦學生から鉛筆を買つてお上げになつたのだつたら貴女はその人に五錢か十錢しか與へなかつたことになるでせう。ところが貴女はもつと偉大なものをその苦學生にお與へになつた。貴女はその苦學生の心の中に惻隱の心、慈悲の心をお與へにな

つた。これ程大きい施しはありません。五錢、十錢を與へたところでこれ程大きな施しを與へることは出來ないのです』斯う申上げましたら、其の奥様も成る程、『たくまずに出來る實相の善』と云ふものが知らず識らずのうちに、どれ程の善をなし得るものだと云ふことを悟られて大變お喜びになつたのであります。

斯う云ふ大きな善は、相手の佛性を開き顯はすと云ふやうな大きな善は、『貧者には施さねばならない。』『病人は勞はらねばならぬ』―と形式上の『ねばならぬ』に縛られてゐるやうなことでは到底出來ないのであります。時に從ひ相手に從ひ自由自在に千變萬化し得る『實相の善』――八方正面の善――に到達しなければ得られないのであります。

病人に對しましても善の八方正面の『實相の善』であつてこそ始めて其の病人を生かすことが出來るのであります。病人は可哀想だから勞はつてやるのが愛の美德である。薬をやつたり、箸を持つて食物を口にいれてやるのが深切の美德であると形の上できめてかゝつてゐますならば、却つてその病人を殺すこともあるのであります。或る場合にはさうせねばならぬかも知れませんが、凡ての場合にさうせねばならぬと決つたものではない、さう云ふ風に善を形の上から固定して了つたら善が死んで了ふのであります。先月の誌友會に來られた方で、小學校の先生をしてを

られる御婦人がありました。その長男さんが肺結核で臥せつてをられたのであります。お父さんはまだ亡くなられた譯ではないが深い事情があつて家にはゐられないらしい。其處の深い事情までも打明けられませんが、母親が學校へ勤めてそれで子供達を養つてゐられる。お父さんの居ない子供であるから餘計不憫がかゝる譯で、終日、その長男さんに附き切りで、夜の眼も寢ずに、看病してをられたのであります。夜は、病人の側に寢床をとつて眠み、息子さんが一つ咳をすると、お母さんがびつくりして飛び上がつて、痰壺を持つて慌てゝ息子の枕元へ飛んでゆく。すると息子はその痰壺の當てがひ方が惡いと云つて興奮して其痰壺を投げつける、盆を投げつける、大騷動を起すのであります。詳しく經過を聞くと、病氣になつて醫者にかゝつたが、どうもはかばかしくない。それでまた醫者を變へて見られたのださうですが、今度の醫者は積極的な治療法をやる醫者で、そのやり方がどこか『生長の家』に似てゐるのであります。醫者のことですから矢張り注射などは遣りますが、『自由に動いてもよい、散歩しても差支へない、却つてじつと寢てゐては惡い』と云はれたのです。輕くあしらはれて動いても好いと云はれるものですから、本人の恐怖心もなくなり、元氣が出まして暫くその通りにしてゐますと大變よくなつた。それで喜んでゐますと、どうした機みか、息子さんは下痢を始めて中々止まらなくなつたのであります。注

射してもどうしても止らない。それで又お母さんが心配して醫者を變へられた。ところが今度の醫者は、こんな重病人を起して置くといふことがあるか、絶對安靜にしてゐなければ大變なことになる、といはれたさうであります。醫者自身さう信じてゐて云ふのですから其の言葉が大變な暗示となつて働いたのであります。今迄下痢が續いてゐても元氣だつた息子さんが其れ以來、目に見えて衰弱して來たのであります。それ以後、息子さんはお母さんの顏を見ると『僕の身體を此麽にしたのはお母さんだ。お母さんが醫者を變へたから此麽目にあふんだ。僕はもう死ぬ、迚も助からぬ、お母さんは僕の生命の敵だ』といつて少し身體が苦しくなると半狂亂になつて手當り次第に物を擲つて暴れるのださうであります。母親にして見れば絶對安靜にしてゐなければ重くなると云ふ瀕死の息子が暴れるのですから氣が氣でない。そんなに暴れて激動して腐つた肺臟が破れて喀血したら大變だと、ハラ〳〵思つて息子をなだめて『靜かにしてゐないと病氣が惡くなる』と諭すと、『こんなにしたのは誰だ。誰のお蔭でこんなに僕はなつたのだ』と母親に餘計ぶつかつて來るのです。深切にいたはつて、息子を癒してやりたいと思つてゐるのに、その深切が事毎に反對にとられて息子は反感を增すばかりだつたのであります。それで其の日、お母さんが誰かに紹介されて『生長の家』の誌友會にやつて來てどうしたらよいかと私に質問されたのであり

ました。その時、私はかう答へたのであります。「貴女はあんまり息子さんを可愛がりすぎて、愛に溺れてゐらつしやる。本當に愛すると云ふのは、今あらはれてゐる不完全な相を在りと見て、それを勞はり育てることではない、それは溺愛と云ふものである。本當の愛と云ふのは、病氣してゐても、病氣してゐない「神の子」なるお子さんの實相を見て、その實相を愛し育てるやうにしなければならない。病氣といふ假想の、假の相にとらはれないで、實在の、金剛不壞の佛身である貴女の子を見なければならないのです。實相はまん丸い月と同じやうに完全な相です。病氣に罹つたやうに見えてゐるのは、丁度お月樣が本來マン丸いのに、波にくだけて、三角や片々の破片のお月樣に見えるやうなものです。その假相の不完全さを本當の相だと思つて執着して、それを通して子を愛してゐるからいけないのです。創造られたるまゝの實相の、病にも何にも犯されたことのない吾が子の姿を見るのが本當の愛です。靜に實相を見て、苦しがつてもその姿を見ないでゐるのです。側にゐて咳に驚くやうでは駄目です。子供が咳を一つするとぽんと一つ飛び上る。二つ咳をすれば二つ飛び上る。こん、こんと咳こむたびにぽんぽんと飛び上るのでは、親も子も共に其心が現象に捉はれて波立ち騷ぎ、マン圓いお月樣を其儘のマン圓い姿にいつまでたつても映すことが出來ないで、いつも缺けた病氣の姿を現象に映し出してゐなければならないの

です。考へても御覧なさい。子供が咳する度毎に風船玉見たいに母親が飛上るやうでは、病氣の子供は「これは好い風船玉が出來た」と思つて、いくらでも劇しく咳をするのです。此れは冗談ではない、本當のことなのです。病人は周圍を病氣と云ふ手段で支配したいと云ふ心理作用から起るのが澤山あるのです。そのやうな病人は、病氣といふものを一つの武器にしてゐるのです。だから、さう云ふ病人を治す法は、病氣なんて武器をいくらお前が振り廻はしたとて誰もそんな武器では風船玉のやうには跳らないぞと云ふことを知らすと、もうそんな武器をいくら有つてゐても何にもならないから病氣と云ふ武器を捨てる。病氣と云ふ武器を捨てるともう其の病氣は治つてゐるのです。だから貴女は子供が可愛ければ、さう云ふ病氣と云ふ武器に捉へられないやうに病人の側にゐないで、子供が咳をしても、呼んでも聞えないところで寢るやうになさい』と申しますと、その御婦人は『家の子供もさう云ふ傾向があるのでございますが、苦しんでゐる病人を抛つて置くと云ふことはとても出來ません』と申されるのであります。そこで私は京都の誌友で大變信仰の深い石川夫人の實話をしたのであります。この方は京都電燈の專務の御夫人で大變信仰の進んだえらい方であります。その御長男が肋膜炎で重態で京都の帝大に入院してをられた其時奥さんは、生命は神より出たものであつて、神のみが生命を癒すと云ふ深い信仰に入られて

すべてを神に委ねようと決心せられたのです。そこで御主人に相談して長男を帝大から退院させて『此の息子を神の手に委ねよう』と云はれたのであります。ところが御主人は頗る常識的な方でありますので『人事を盡して天命を待つと云ふ諺もあるから、盡せるだけの人事を盡したら好いではないか。長男は重態であるにしても醫者がまだ絶望だと宣言した譯ではない。だから醫者にもかけて盡せるだけの人事を盡して神樣の手に委したら好いではないか』と云はれたのです。ところが奥樣は『人事を盡して天命を待つなんて卑怯なことは出來ません。神樣に委せる位なら全部を委せて了はねばなりません。人間がいぢくり廻して、どうにもならないからと云つて神樣に委すなんて卑怯です。お委せするならすつかりお委せしなければなりません。此の子は私の愛する長男ですからどうぞ今度丈は私の思ひ通りに神樣にまかせて下さいませ』と賴んで、重態の息子さんを退院させて家に連れ歸られたのであります。連れて歸つてどうされたかと申しますと、母親と云ふものが、病氣してゐる息子の側にゐてその苦しむのを見てゐますとどうしても心が亂れて、病人に惡い精神波動を與へることになります。心が息子の病氣に捉はれまいと思つても捉はれますから、病人を二階にあげて、自分は階下にゐて靜にお子さんの實相を見られたのであります。するとお子さんは一日一日とめき〳〵とよくなつて、暫くの間に完全な身體になり、高等

學校ではラグビーの選手をして、激烈な運動をしても何の異狀も身體に起らない。それ以后少しも再發すると云ふこともないのであります。神に委せると云ふ委せ方はこのやうに完全でなければならないのです。一寸考へると、病氣の息子の側についてゐないで看護をしてやらないなんて薄情なことをすると思はれますが、看病する程薄情なことはない。看病とは病氣を看ると書く、何でも心で看るものが形の世界にあらはれるのが原則ですから、看病して病氣を看ると病氣が一層ハツキリと形の世界へあらはれて來る。看病するよりも觀實相すれば好い。病氣と云ふ假相を見ずに、既に完全である神の子なる實相を觀て不動の心で見ることによつて此の石川さんの奧さんは長男を治されたのです。先日、この石川さんの奧さんが帝大に入院してゐる知人を見舞ひに行かれた。その時長男の主治醫であつた醫學博士が出て來て、『石川さん、あなたの長男さんの病氣の時には醫者より貴女の方が偉かつたですねえ。』と賞められた。かう云ふ風に貴女もすつかり神さまにお子さんを委しておしまひなさい。息子の側に附き切りで咳する度に飛び上つてゐるやうなことでは癒るものではありません。病人は弱く見えるが弱いものではありません。病人にはこちらがどんな強い人でも腕力に訴へて斯うせよと强制する譯には行かない。病氣と云ふ鎧で武裝する程强いことはないのです。ですから息子さんに病氣の武裝の效果のないことを知らせるの

です。あなたも側につきゝりでゐないで離れて咳の聞えないやうな遠い部屋にゐる方がよいのです。』と話しますと、『私の家は狹くて二階も離れもありません。きくまいと思つても咳がきこえますし顏が見えます。離れてゐることとなんて出來ません。』といはれるのです。『それでは病人の近くにゐてもよろしいが、出來る丈病氣を見ないで、靜に實相を觀ることにし、お子さんにこの本「生命の實相」を讀むやうにすゝめておあげなさい、そしたら病氣は必ず治る』と申しますと、『息子は私を信用してくれません。醫者を變へて病氣を惡くしたのは私だと申して信じてくれないのです。ですから私が讀めといつたのではとても讀みはいたしません。』と申されます。そこで又私が申しました。『さうです。貴女が惡いのです。「安靜々々」といつて生きる力をおさへたのは貴女ですから、貴女が惡いのです。惡い事が分つたら息子さんに歸つて謝罪しなさい。今日「生長の家」といふところにいつたら、息子の生きる力をおさへつけてゐたのは私の心が惡いのだといつて叱られた、といつて、おあやまりなさい。さうしたらお子さんは自分の考へと同じやうに母のことを攻撃してくれる共鳴者がある。その共鳴者の本なら一つ讀んで見ようといふ氣にもおなりになるでせう。』と答へました。その奧樣は私の言葉をきいて、『私がこんなに子供のため、子供のためと思つてゐるのに、病氣を惡くしたのは、私だと云はれる、先生からまで、

そんなことを云はれるのは口惜しい！』とさめ〴〵と皆樣の前でお泣きになりましたが、諄々お說きしてゐるうちに克くお解りになりましたから、多分歸つて私の云つた通りにされたのでありませう。二、三日してそのお子さんと一緒に誌友會に來られましたが、『今迄私の家庭は地獄でしたが、今では極樂になりました。息子もこんなに元氣になりました』と、喜んで居られました。息子さんはまだやせてはゐられましたが、血色がもう病人のやうではなく全快の狀態に達するのも近いうちだと思はれました。（後記、この息子さんは完全に全快されました。）

これなどは病人は是非ともいたはるべきものだと云ふ杓子定規の形にとらはれずに、形からは薄情に見えるかも知れないけれど却つてそれで救はれた實例であります。生命の實相に乘つて――中心に坐して行へば、どちらをむいても此のやうに八方正面の生き方が出來るのであります。『生長の家』の生活にはねばならぬといふことはありません。或る時はコツンとなぐつてもよし、或る時は舐めるやうに可愛がつてもよし、寢かして置いてもよし、起こして置いてもよし、それは時に應じ、人に應じて千手觀世音菩薩のやうに、全て自由自在に出來るやうになるのは、どうしても眞の悟りを得なければならないのであります。卽ち、その眞の悟りを得るには、人間本來神佛である。その本來自由自在な相を自覺すれば好いのです。佛とはほどけといふこと

であつて、自己の本來自由自在な本性を知ることにより、あらゆる束縛からほどけて自由自在になるといふことであります。釋迦も時と場合、相手次第によつて異つたことを說いてゐられる。聲聞緣覺と云はれる小智の人達に對して說くときと菩薩と云はれる大智の人に說くときとは全然別な說き方をしてゐられる。法華經を說くときに四十餘年間本當の眞理を說かなかつたと云はれたが、それまで說いたこともウソではないと云つてゐる。時と場合で方便を使つてゐられるやうだが今說く所が前にいはれたことゝ反對でも、實相に坐して四方正面の中心で云はれるからすべて眞實である。これが佛の境涯であり、實に自由な心境であります。

近頃『生長の家』でよく病氣が治るので、『生長の家』をまるで病氣の治療所のやうに思つてゐる人もあるのでありますが、どうして治るかといふと、話をし、又私の書いた本を讀んで貰ふだけで治るのであります。或る時は、今のやうに母親を叱り飛ばしますと、母親が口惜しいと泣き乍ら息子の病氣がなほることもあるのであります。母を叱つて、息子の病氣が治る。變なやうだが事實であります。人間は『心』であり、『心』そのものであり、肉體は心の影でありますから、家族の心と心とが反映して病氣を顯すことになるのも當然であります。ですから、親の心の反映で病氣になつてゐる子供を、醫者へ連れて往つて、子供を治してくれと云つても、一時醫者

にかゝつたと云ふ安心で快くなつても親の心が治らなければ結局は駄目であります。本當の眞理を云へば、『子供が病氣になりましたから、どうぞ親を治して下さい』斯う云つて醫者へ行く方が合理的なのであります。それで『生長の家』ではすべて『心』を治すことによつて病氣も不幸も治るのであります。まづ家族全體を救ふのには誰か一人でも、其の家族の中心になつて悟ると、その人の佛性が反映してすべての家族がよくなつてくるのであります。子供の病氣といふものは家の中心人物の心が反映して現れて來るものでありますから、先づその家の中心人物たる親が實相を悟つて中心に乘らなければ子供は根本的に治ることは出來ないのであります。先日、報知講堂でお話した時には、或る『生長の家』の熱心な誌友の妹さんが伴れられて來られてゐましたが、その妹さんの幼兒が下痢して困つてゐられたのに、その妹さんが私の話をきくだけで幼兒の下痢が治つて了つたのであります。

『生長の家』は先刻申しましたやうに何物にも片よらぬ中心に坐す生活でありますから、他の宗教に對しても、片よつた見解をもたないのであります。何處にも片よらない中心が『生長の家』でありますから、何宗派の人でも毛嫌ひすると云ふことがない。キリスト教の人はキリスト教そのまゝでよい。然しもつと深く這入れ、そこに本當のキリスト教『生長の家』がある。佛教の人も

佛教そのまゝでよい。然しもつと深く入込め、そこに本當の佛教『生長の家』がある。神道の人も神道そのまゝでよい、然しもつと深く眞理に這入れ、其處に本當の神ながらの道『生長の家』があると云ふのであります。すべての教へ、宗門は皆正しい。宗門は宗門でそのまゝでよいから、何時までも門に止つてゐないでもつと奧まで這入れ、そこに『生長の家』があつて全ての宗教を一堂に和解せしめてゐると云ふのが吾々の主張なのであります。決して『今迄の宗教をやめよ』とはいはない。ズツと奧まで這入つて頂けば好いのであります。實際に『生長の家』の聖典『生命の實相』を讀みますと、『あゝ自分の宗教の教祖はかう云ふ意味を說いてゐられたのか』とはじめて領けて釋然とするのであります。よく宗教同志相爭うてゐるのを見受けますが、元來宗教は和解がその役目でありますのに、その宗教が互に相爭つてゐるのは、『斯うでなければならぬ、あゝでなければならぬ』と捉はれるから、ギゴチなくなり、固苦しくなり、つひには互に相爭うて和解を使命とする宗教本來の使命が滅びてしまふのであります。『生長の家』は凡ての爭つてゐる宗教を一つの眞理の内に融合して仲好しにさせるといふ機能を有つてゐるのでありますから、よく異つた宗教の人達が夫婦になると互ひに調和しないで家庭にいろ／＼な問題が起つてゐるやうた場合に、其處へ一冊の『生命の實相』の聖典が舞込みますと、今迄、反對のやうに見えてゐた

宗教は實は一つの眞理の表門と裏門であつて、本當は矢張り一つであるといふことが分つて夫婦が仲好しになられた例が澤山あるのであります。

聖書に『富と神とに兼ね仕ふること能はず』といふ言葉がありますが、この言葉を、神に仕へるには貧しくなければならぬ、貧しい程神に喜ばれると解する人もありますが、貧しいほど神に喜ばれると云ふのが眞實でありますならば、施しと云ふことは、自分が神に喜ばれるために貧しくなる代りに、他の人を神に喜ばれないやうに富ましてあげることになるから、慈善の道德的意義と云ふものがなくなつて了ふのであります。神と富とに兼ね仕ふること能はずと云ふのは別の意義があるので、それは段々話してゐる内に判つて參りますが、神は無限の寶藏を内に有したまふのでありますから、その神の世嗣たる人間が貧しくあることを喜ばれるなどゝ云ふことはあり得ないのであります。人間が貧しい方が神から喜ばれるのだつたら、差當り泥棒などは人間が神樣から喜ばれる貧乏と云ふ資格を與へてくれる天の使ひと云ふ譯でありますが、そんなことはない。だから『生長の家』では、富と神とに兼ね仕ふること能はずとはいはない。何でも和解させる。『生長の家』では神にも富にも偏寄らない。一方に偏してしまはないで、神と富とを和解せしめて了うたのであります。

神戸の『大丸』百貨店の筋向ひに三澤商店といふ裝身具商があります。その主人は神戸キリスト教界の長老株で、古いクリスチヤンであられました。贅澤品を賣つて金持から金をとつて生活するのでありますからどうも教會へいつて聽く說教と生活とが一致しない。バイブルを讀んで說教を聞いて、自分も感想などを時には教會で喋つて來るのでありますが、自身は貴婦人の贅澤品を賣つて金を儲けてゐる。どうしても宗教と生活がぴつたり現實に一致しないのです。その時或る知人が昨年の『生長の家』の十月號を下さつたのであります。するとそれに『人生の貧困を征服する道』と題して、神の子たる人間は本來富んでゐて貧しくない道理が諄々と說いてあつたのであります。これこそ本當の神の道だとさとつて自由の境地に出られた。これ迄此人は偏寄つてゐたから神と金とは相反してゐるやうに思つて、生活が不安な不便なものであつたのですが、この時はじめて神は無限の供給であり、無限の富を吾々に本來與へ給うてゐて、人間が貧乏にならねば愛しないと云ふやうな變態的心理を有つた小父さんではないと判つたのであります。『生長の家』では少しも片よらぬ。忠は同時に卽ち孝、一切宗教は皆兄弟である。無限の富は同時に卽ち神の喜びである。人は神の子であり、神は無限の供給である。神の子たる人間が無限の供給を與へられるのは當然である。斯うなると、宗教と生活、神と人間の經濟生活とが調和して

大變明朗な人生觀に出られるのであります。三澤さんはその時はじめてキリスト教はそんな窮屈なものではないと悟られたのであります。聖書の中にキリストが富める青年に向つて『すべてのもてる物を捨てゝ十字架を負うて我に從へ、富める者の神の國に入ることの難きこと駱駝の針の孔を通るが如し』と云つてゐるのは、神に喜ばれようとするには貧乏しなければいけないといふのではない。それは、金のことではないのであります。今迄背中にあつた人間の小智才覺を棄てて了つて、すべてを神に委ねよといふことであります。『けれども』とか『だけども』とか誰もがいふ理窟をすつかり捨てゝ十字架を負つて立てといふことであるのであります。先刻お話した石川さんの奥さんのやうに『人事を盡して天命を待つやうな卑怯なことは出來ません。神樣に委すくらゐなら人事をスツカリかなぐり捨てゝ神樣にお委せします』と云はれた。その人事をスツカリかなぐり捨てることが『すべての有てる物を捨てゝ十字架を負うて我に從へ』と云ふことなのであります。『十字架を負ふ』とは苦しみを負ふことゝ思はれてゐましたがさうではないのであります。十字架とは×、即ち帳消しのしるしであります。すべての物を帳消しにしてからしなければならぬとか、あゝしなければならぬとか、いろ〳〵迷ひの智慧で拵へた條件を身體一ぱいに重さうに背負つてゐるが、すべてをすてゝ、帳消しにして我れ即ちキリスト即ち實相に從へば

天國に行けるといはれたのであります。イエスが『我に從へ』と云はれたのは、イエスみづから『吾れはアブラハムの生れぬ前から實在する』と云はれたので判るやうにキリスト卽ち『久遠の實相』に從へよと云はれたのであります。さうしたら天國はお前達のものである。迷ひの小智才覺を捨てゝ『久遠の實相』に委せたとき天國卽ち極樂淨土が現に今こゝにあるのであります。神は人間が苦しむことを決してよろこび給はない。人間が苦しまなくてもよいやうに、その一人子を遣はして十字架にかゝらせて血を流された。人間を苦しみのないやうにする、此の世界を極樂淨土にするのがキリスト出現の意味なのであります。聖書の中に狹き門よりいれといふ言葉がありますが、これも窮屈な苦しい生活をせよといふのではない。『狹き門より入れ』とは重荷を卸して這入れ、といふこと、身輕になれよといふことであります。狹い門を澤山の荷物を背負つて這入ればどうしてもひつかゝつて這入れない。そこで嫌やでも應でも脊負つたものを卸さなければならない。だから狹き門より入れといふのであります。またキリストは『我が軛は易く我が荷物は輕し』といはれた。決して『我が軛は難く、我が荷物は重し』とは云つてゐられない。だから狹き門より入れと云ふことは窮屈になれと云ふことではない。身輕になれ、樂になれ、といふ事であります。吾々はもう旣に神樣の救ひの船に乘つてゐるのに、神樣の船にそんな重荷をかけた

ら濟まないと云つて、船の中で荷物を擔いでをつても、やはり船にかゝる目方は同じなのであります。神の子であり、本來『神の船』に乘つてゐるのなら、何も自分の肩に重荷をかつぐ必要はない。人が苦しむといふのは本當の相ではないのであります。神の子は樂であるのが實相であります。神は全智全能であり自由自在であります。何物にも苦しめられず、縛られない、傷かない無限の自由であります。その本來の相を自覺せしめるのが本當の宗教であります。『生長の家』に來られると生命本然の自由が悟られ非常に樂になつて、苦しみとか惱みとかゞ自然にとれ、貧しさも病も消えて了ふと云ふのは、本來、神佛の子である我々の實相を悟らせるのに『生長の家』は獨特の速力方法を持つてゐるから之によつて悟れて了ふのであります。その獨特の速力方法は如何なるものによつて成立つてゐるかと申しますと、他の宗教では、斯うしたら救はれる、斯う稱へたら救はれると云ふやうに、まだ今は神の子ではない、まだ今は佛子ではない、まだ今は救はれてゐない、これから斯う云ふ修行して、或は死に際にどう云ふ風にとなへて救はれると云ふやうに、『これから』救はれるのでありますから、いくら早い救はれやうでも時間が要るのであります。ところが、生長の家では、人間は既に神の子である、既に佛子である、既に救はれてゐる。既に無限の供給をうけてゐる。既に無限の生命を享けてゐると云ふのですから、『救は

れ』は旣に成就してゐるのですから、救はれるのに端的直截的で時間がかゝらないのでありま す。病が癒るといふのも此の悟りによつてゞあります。貧乏が消えると云ふのも此の悟りによつてゞあります。人間が金剛不壞を得て不死身の體驗を得るのも此の悟りによつてであります。

先刻、辻村閣下が自動車事故に遇つても微傷だも負はなかつた『生長の家』誌友の不死身の體驗をされた話をされましたが、その前後の事情をもう少し詳しくお話しようと思ひます。最近『生長の家』誌友の家族で不思議な奇蹟で命拾ひをした實例が四ケ所あるのです。その一つは小石川の立仙淳三さんに紹介されて誌友になられました東京小石川區小日向臺町に住んでゐられる高間宗三郎氏の今年十歳になる坊ちやんであります。この坊ちやんが夕方電車に乘つて自宅まで歸られましたが、電車の停留場を一つ乘り越したので、次の停留場で慌てゝ下車した。その途端に向ふから自動車がやつて來た。驚いて逃げようとした途端に、どうしたものか尻餅をついて斯う兩脚をエンコするやうな恰好に投げ出して坐つたのであります。そこへ自動車が容赦なくやつて來まして、一方の車輪で兩脛の上を轢いて通つたのであります。自動車運轉手は驚いて自動車を停車し、子供を抱き起して、土を拂つてどこか傷いてはゐないかと思つて見てくれましたが何ともないのです。運轉手も安心して子供にお詫びを云つた儘いづこともなく立去つて了つた

のであります。子供は其儘自動車に轢かれた兩脚で自宅へ歩いて歸つたのであります。そして親に『今、僕は自動車に轢かれました。僕が斯うして尻餅をついたところへ自動車が來て僕の脚の上を通つた』と云ふのです。『痛いか』と問ふと『何ともない』と云ふのです。そんな筈はなからうと云ふのでよく〳〵檢べて見たが何ともない。翌日は當り前に學校へ往つて水曜運動と云つて團體競技のある日でしたが、その競技に參加しても何ともない。此れは生長の家の神樣がお守り下さつたのだと大變難有くお思ひになりまして、高間さんは十一月二十日頃生長の家本部へ來て皆樣の前に此の話を公表されたのであります。すると、その席にゐた一人の誌友が、一體全體そんなことが可能なものかどうかと云ふので、歸り途で拾ひ乘つた自動車の運轉手に其の話をすると、『自動車に轢かれて怪我しないなんてそんな馬鹿な話はありません。』と云つた。どうも、自動車の重量と、幼い子供の柔い肉體組織の關係から考へると、やつぱり吾々も『そんな不合理なことはない』と申したいのでありますが、その常識で考へると不合理なことが實際にあつたのですから『生長の家の神樣』の力――言ひ換へると『眞理』の力は難有いのであります。

斯う云ふ事件がたゞ一件しかないと致しますと、どうもそんな事は偶然だと云つて片附けて了はれるかも知れませんが、同じやうな事件がまだ他にも起つたのであります。それは『生命の藝

術社』の佐藤彬さんの家族に今年十五歳で早稻田の工手學校へ通學してゐる少年がある。この少年が十一月二十五日頃だつたと思ひますが、朝寢をしたので急いで御飯を搔き込んでバスに飛乘り、早稻田の鶴卷町あたりでバスの完全に停車するのを待たずに飛降りたのでありますが、運惡しくハズミを食つて其處に引繰り返つたのであります。其處へ自動車がやつて來て其の少年を轢いた。此席にも其の現場を見てゐた人があるかと思ひますが、その轢かれた少年は其場で人事不省に陷つたのであります。人々が集つて來る。交番の巡査が出て來る、大騷ぎを演じましてその轢かれた少年を附近の病院に舁ぎ込んだのです。所が、少年は病院の手當によつて氣がついて見ると、何處も怪我してゐない。たゞ額にわづか物に摩擦したやうな瘤が出來てゐるだけなのであります。大したこともないので其儘少年は病院から自宅へ送り屆けられたのでありますが、歸ると佐藤彬さんがその少年を寢させて枕元で『生長の家』の聖典『久遠の實在』を讀んであげました、少年はそれをきゝながらグッスリ眠つて了つて少しの苦痛のさまをも現はさないのです。其晩佐藤彬さんが生長の家の道場へ來られまして『今日は大變お蔭を受けました。義弟が自動車で轢かれたのですが、お蔭で車輪に觸れないで、自動車のシャシーの下に縱に轉んでゐて、車輪と平行になつてゐたものと見えまして、少しの怪我もなく唯今平和に安眠してゐます。』と云は

れるのです。佐藤彬さんのお考へでは自動車の下になつても神樣の攝理で車輪には轢かれなかつた。轢かれたら幾ら神樣の力でも、小さな子供のことであるから蛙を踏みつぶしたやうになつて死んで了つたらうと云ふやうな語調が幾分か殘つてゐたやうに思へたのであります。ところが、その翌日、警察からの注意でもありましたものか、その自動車の運轉手が佐藤彬さん宅へやつて來て昨日のお詫びを云つて、『どうかこの問題は示談にして內濟にして欲しい。就ては、示談にすると云ふことを書いた此の紙に判を押して欲しい。』と云つて來たのであります。佐藤彬さんが『オイ、二階へ往つて認印を持つて來てくれ』と其の子供に云ひますと、昨日、明かに自動車に轢かれた其の子が二階へ駈け上つて往つて認印を押してくれた。自動車運轉手は吃驚して慄へ出したのであります。『お蔭で、車輪に轢かれなかつて、車體の下へ這入つてゐたものだから此の樣に怪我もしないで結構ぢやつた』と佐藤彬さんが云はれますと、自動車運轉手は『いゝえさうぢやありません。私は確かに此のお子さんを轢いたのです。このお子さんは自動車と直角に仰向きに倒れてゐられました。車を止めやうとしましたが、もう間に合はないで、頭と足の踝のところを轢いて了つたのです。そのお子さんが今こんなに達者だとは不思議でなりません』と云ふのです。其處で佐藤彬さんは『生長の家の信者にはこんなことは有り勝ちだ』と云ふお話をなさい

ますと、自動車運轉手は益々驚いて『生長の家とは本當に恐ろしい所ですねえ。』と驚嘆した。そこで佐藤彬さんは『何も生長の家は恐ろしい所ぢやない、結構な所ぢやないか。』と色々話をしたら不思議さうに聞いてゐて、そんな有難い所なら私も一度お詣りさせて貰はうと云つてゐたさうであります。

それからまた京都に堀徳藏さんと云はれる『生長の家』誌友があります。中々信仰の深い方でありまして、嘗て『生長の家』誌に書きました通り鼠の暴れるのを『一切の生物その所を得て相侵さゞるは神の道なり』と書いて立札をせられましたら、それ切り鼠が出なくなつたと云ふ程の信仰家であります。この方の二男さんが自動車の運轉をせられる。交通事故があつたら可かんと云ふので、その自動車には護符のやうに聖典『生命の實相』か、『生命の實相』の分册かゞ備へつけてあるのであります。此の堀徳藏さんが或る日、『うちの息子も一度位は朝早く起きて、お父さん、私が案内しますから自動車に乘つて淸水寺の觀音樣へお詣りしませうと云ふ位になつてくれたら好いのになア』と偶然云はれた。すると、言葉の力と云ふものは恐ろしいものであつて、その翌朝、二男さんが『お父さん、今朝は一緒に自動車で淸水寺へお詣りしませう』と云ふのです。それで、息子に運轉させて丸太町の何の邊までかドライヴして行きますると、商業實修

學校の學生の一團が前方の通りを横切るのに出遇つたのです。暫く停車してそれが横切つて了ふのを待つて運轉し始めますと、學生の前方から恐ろしい速力で驀進して來る自動車がありましたので、一旦進んだ學生はそれを避けようと思つて後戻りしたのです。堀さんの自動車は學生が往つて了つたと思つて前進したのに、學生が突然後へ戻つて來ましたので、急に自動車を止める譯には行かないで、到頭惰力で一人の學生を轢き倒して了つたのです。一つの車輪が確かに斜めに其學生の盲腸部から左の脇腹の方へググッと走つて、自動車はゴトンと停止したのです。群集が集つてくる。警官が出て來る。轢かれた學生は一時少々お腹が痛いと云つてゐたさうですが、府立醫大病院へ連れて行かれて、レントゲン檢査やら色々嚴重な檢査をしたけれども何處にも骨折もなければ內臓に異狀もない。警察から三度も電話がかゝつて來まして、『子供が自動車に轢かれて何處にも怪我も故障もないなんて、そんな馬鹿なことはない。充分檢診してくれ』と請求して來たけれども、何ともないものは何ともないと云ふほかはない。今異狀があらはれてゐないからとて後に異狀があらはれるかも知れないと云ふので、念のため三日間病院にその少年を留め置いて、檢診をつゞけたが、故障があらはれないので三日後にその少年は無傷放免になつて歸宅を許されたのです。

これなどは實際に自動車で轢いたり轢かれたりして何ともなかつた實例ですが、松竹に勤めてゐられる誌友谷水さんは、昨年東京の郊外を自動車で二十五哩の速力で疾驅中、突然横合からヨチ／＼と歩み出て來た四歳位の子供をアレツと云ふ間に數間も跳ね飛ばした。驚いて自動車を止めて走り寄つて子供を抱き起したが何處にも異狀がなかつた。また關戸はま子さんと云はれる誌友は、今年の夏自動車に觸れて二間ばかり跳ね飛ばされた。その丁度同時刻に自宅で御裁縫をしてゐられる御孃さんに精神感應があつて、何としても合掌をして神樣に祈らずにはゐられないやうな氣持が起つて、合掌瞑目して招神歌を唱へてゐられましたが、一方その母親の方は腰をしたたか打つて病院で檢診して貰つたが別に醫學的故障もない。たゞ腰をシタタカ打つたので心が痛いと思つてゐるので何となく腰が痛い。所がこの方は前から『手のひら療治』の研究會へ這入つて居られましたので、其處の先生に暫く通つて手を當てゝ貰はれましたが、依然として鈍痛がゐる。それで『手のひら療法』の先生がすゝめて『これを根治するには湯ケ原の溫泉へ暫くお出でなさい』と云はれた。それで此の方が『生長の家本部』へ來られて、私に『溫泉へ行く方が可いでせうか』と問はれた。それで私は『湯ケ原の溫泉に浸るのも好いでせうが、神樣の溫泉に浸つてはどうですか。神樣の溫泉には無限の癒す力がある』と申上げたのです。これで此の方もお悟り

になりまして數回『生長の家』へ來られて神想觀をせられました。此の神想觀と云ふのは靜座して神を觀じて、神の想念の中に、まるで溫泉の中へ浴するかのやうに浴するのでありまして、此のやり方は聖典『生命の實相』の中に詳しく書いてありますが、此の神想觀を數回やつてゐられるうちに其の腰痛も治つて了つたのであります。

『神樣の溫泉には無限の治す力がある』私が斯う申上げまして、此の方はお悟りになつた——これを皆樣は病氣だけのことだとお思ひになつては成りません。此の前、報知講堂で私が話しました時には聖典『生命の實相』を讀んで餘り不思議に病氣の治る實際談をしましたので、『生長の家』は病氣治しの宗教だとお思ひになつた方もあつたとの事でありましたので、今日は病氣の話よりも、自動車に現實に轢かれたり、跳ね飛ばされたりしても身に微傷だも負はない話をしたのであります。斯う云ふ風な不思議な事實がどうして起るか。かう云ふ、一寸見れば不思議に見える事實も、何も不思議なことはない。三界は唯心の所現である、人間は金剛不壞の久遠の佛身であると云ふ釋迦の所說が實證されたにすぎないのであります。釋迦の所說はただ宏遠な哲學だと思はれてゐたのが、さうではなくて、確に實生活に實現することの出來るもの、この人間は本當は金剛不壞なものだと云ふことが實證されたに過ぎないのであります。この實證が生活に本當

に出て來るのが生長の家の實に尊いところなのであります。宗教は單なる理窟ではない。直ちに生活に現はして見せることが出來なければ生きた宗教だと云ふことは出來ないのであります。『生長の家』の誌友は到る處に宗教的眞理を實生活に顯してゐられるのであります。

では『生長の家』の說くところ、つまりその中心思想は何であるかと云ひますと、橫に廣がる眞理は現象界は本來空無であつて唯心の所現であるから心に從つて自由自在に貧でも病でも富でも健康でも不幸でも幸福でも現はすことが出來ると云ふことであります。それから縱を貫く眞理は、人間本來神の子であり、佛子であり、無限の生命、無限の智慧、其他すべての善德に充ち滿たされてゐる。それが吾々の實相であるといふのであります。さて吾々の實相が久遠實成の佛であるにしても、それが現象界、卽ち現實世界にあらはれなければ、今迄の佛敎と同じやうに、佛敎學者の手で高遠な理窟が述べられるだけで、宗教と生活とが一枚になつたと云はれないのであります。では、生活と一枚になる、卽ち、我れは神の子なり、久遠實成の本佛であると云ふ縱の眞理を橫の廣がりの現象世界へ持來すにはどうすれば好いかと云ふと『生長の家』の誌友におなりになれば誰でも體得できるのであります。簡單に申せば、こゝにも現象界は唯心の所現であると云ふ原理を應用するのであります。現象世界は心の所現であります。心に我れ神の子であ

るといふ自覺を持つことによつて、横の世界に現れるものは天國そのまゝの世界、神の子其儘の人間であります。天國そのまゝの世界とはどんなものかといひますと、神の作り給うた其儘の世界、無限の神の叡智によつて支配されてをり、すべてのものが完全に調和する無限の供給の豐な、少しも不調和のない世界であります。それがつまり本當の實在の世界であります。實在の世界は既にこのやうに完全でありますのに、『迷ひ』は之を悟らないのであります。そして諸々の苦痛がこの世界に滿ちてゐるやうに見てゐるのです。釋迦はそれを月に喩へていつてをられるのであります。無常の世界は水に映つて碎けて見える月の影のやうなものである。水がくだけて月の姿がくだけて映つて見えても實相は缺くる處なき圓い月であるといはれてをるのであります。それと同じやうに、病氣、不幸、災難、それはすべて水にくだけた月の姿である。唯さう見えてゐるだけで實相の世界はマン圓く少しのかけもない――不幸もないのであります。その實相の完全な相その儘をこの世に現さうといふのが『生長の家』の地上天國建設運動つまり人類光明化運動なのであります。すでに月はマン圓いのであります。地上にうつる姿はかけてゐても、それが今の狀態であつても、神の子たる人間其物はマン圓いお月樣と同じ樣に完全無缺なのであります。水の波に碎けてゐる月の姿を、實相のマン圓い完全な月の姿にならせるには、これは物質

的方法によつては出來ることではないのであります。唯心を淸める
ことによつてのみ、心の波の立ち騷ぐのを靜かにして了ふことによつてのみ、水に顯れる月の姿
――現象界が完全になるのであります。生長の家で病氣がよくなほるといふが、外からは何の術
も施さないでゐて、唯、心に實相を悟るだけで治るのは肉體は心の影だからなのであります。『生
長の家』で病氣癒しの話しをよくするのもそれは一例であつて、それが總てゞは決してないので
あります。そんな小さな問題ではない。三界は唯こゝろの現れでありますから、この世界を地上
天國とすることも心一つを解決することによつて出來る。これを成就する運動が『生長の家』の
運動であります。キリスト教の祈りに『御心の天になれる如く、地にもならせ給へ』といふ言葉
があります。『御心の天になれる如く、』といふのは、すでに神の御心は天になつてゐるといふ意
味であります。『天』とは此の『空』のことではない、實在の世界――實相の世界のことであり
ます。實在の世界は既に完全に神の無限な智慧に支配されてゐるのであります。既に既に實相の
世界は神の作り給へるまゝに完全なのであります。それが地上にうつれば其處に地上天國が出來
上る。永い間基督教徒が祈りを籠めて期待して來た地上天國が稻妻の東より西に閃くが如く此處
に本當に出來上るのであります。之が空論であれば既成宗教と『生長の家』と變りがないのであ

りますが、それが實際に出來る、環境は心の影だから出來る。それを出來させるのが、生長の家なのであります。

實例を擧げれば先刻話しました材木さんの話しでありますが、材木さんの泊つてをられた小川旅館のおかみさんが耳が惡くて少しも聞えなかつた。始終耳ががん〳〵鳴つてゐて聞えなかつたのであります。客も三四人しか來ないで經營も思はしからず、困つてゐる狀態なので、材木さんが『生長の家』の話をして是非讀んで見るやうにと敎へられたさうであります。それでおかみさんが生長の家の聖典『生命の實相』を貰つて一生懸命に讀んで見られた。一度は、石井照子さんに訪問して貰つたのでありますが、それ以來氣分がすつかりよくなつて今まで夕立のやうにざあ〳〵なつてゐた耳鳴がぴつたり止んで了つたのであります。耳だけではない。主婦さんの心が變つて來ると、それと同時に店が繁昌して來たのです。四、五人しかなかつた客が三四十人もやつて來て、部屋が足りなくなつて一室に二組三組と詰め込まねばならぬやうな始末になつて來たのであります。心が變れば店が繁昌する。貧乏も極樂も皆心の中にある。これは唯の一例ですが『生命の實相』と云ふ本一つで、此の宿屋の主婦さんの環境が地獄から極樂へ一轉して了つたのであります。これを推し進めて行きますと、『生命の實相』の本を讀ましたら、その讀む人の環

境が極樂になる。すべての人間に『生命の實相』の本を讀ましたら、すべての人間の環境が極樂になる。さうすると心一つで地上に天國が成就することになるのであります。そんな譯で材木さんが、その次には小川旅館の女中さんの一人に『生命の實相』の分冊を二冊ばかりお上げになつたのであります。其女中さんが本を貰つて熱心に讀みますと、今度はその女中さんばかりがお客樣に持て出して來て、客があの女中でなくてはならぬといふやうになつて來たのであります。どうしてあの女中さんばかりが、あんなに繁昌るのだらうかと云つて他の女中が不思議がる程になつて來た。すると今度は三助に『生命の實相』をあげたのであります。すると又、その三助が客に喜ばれる、收入が殖える、儲けをためておいて讀めても讀めないでも聖典を一冊買ひたいといつて一生懸命に勵んでゐるさうであります。

この材木さんは、元は河野さんと稱はれた人で、砂糖の研究家で、糖界では河野さんと云はれる方が名が通つてゐる人でありますが、この方は『生長の家』に這入られる迄は不幸つゞきでありました。娘さんを失はれて以來、神經衰弱のやうになつて怏々として樂まれない時に、生長の家の誌友で、臺灣製糖の大阪支店長である杉野さんといふ方から聖典『生命の實相』を見舞ひにといつて貰はれたのであります。それを讀んで心境がとみに啓け、娘は死んでも生き通しである

ことを悟ると同時に、神經衰弱的煩悶もなくなつて了つたのであります。この材木さんには三つの持病があつた。一つは夏になるとお腹にたむしが一面に出來て藥をつけても治らない、寒くなるまではどうしても治らなかつたのださうであります。今一つは鼻が悪くて匂ひといふものを五六年この方嗅いだことがなかつた。その上に左手がリューマチで後へは廻らず、手が肩より上へ持上らなかつたが、材木さんが『生命の實相』を讀み、神想觀を實修されて、その三つの病氣が忽然と消えて了つたのであります。第一、今年は夏になつてもたむしが出なくなつた。第二に或る日娘の命日に携帶用の娘の位牌の前で『生命の實相』の中にある聖經を讀み神想觀を修してから髙島屋のデパートに行かれたのださうであります。すると突然何とも云はれない馥郁たる匂ひが八方から襲うて來た。五、六年間といふもの、匂ひをかいだ事もない材木さんにとつては、此の八方からの馥郁たる匂ひの襲來はまるで環境に天國極樂が出て來たのと同じであつた。今迄材木さんは無芳香地獄にゐられたのに、心が變ると共に芳香極樂へ出られたのであります。何處から此のよい匂ひがして來るのだらうと、よく見廻すと、そこには香水賣場がある。香水の見本瓶があり香水線香に火がついてゐる。あまりの嬉しさに香水の見本瓶を手にとつて嗅いで見ると、それ〴〵の匂ひが嗅ぎ分けられるのです。すると、今度は空中から妙なる天樂の聲が聞えて來た

のであります。どこから天樂の聲が聞えるのであらうと階上にあがつて見ると、其處には天女の舞が始まつてゐる。本當は少女歌劇が始まつてゐるのでありましたが、可愛らしい少女が天女の如く音樂につれて舞うてゐるのであります。材木さんはこれは天國極樂世界だと思はれた。誠に三界はたゞ心の影でありまして心が變れば、心が天國になれば、そこに天國極樂が出て來るのであります。かうしてたむしと、鼻とは覿面になほつたのでありますがリューマチ丈はまだどうしても癒らなかつた。『生命の實相』も神想觀も、リューマチだけは難物と見えると材木さんは冗談を云つてゐられたのであります。ところが材木さんは『生命の實相』を讀んで以來、それに書いてある生長の家の生き方を、その通りに生きて見やうと決心されたのであります。そこで『生命の實相』にかいてある生活法をちゞめて十八箇條の箇條書きにし、奉書の紙に認められた。第一腹を立つまじき事。第二何々、第三何々、第四何々といふ風に書いて、それを佛壇にお供へになつた。そしてその一番あとに『右十八箇條のうち唯一箇條にても違背致候節はいかなる天罰を相受け候とも苦情申すまじく候』と書き、誓ひの宛名は誰にしようかと思はれたのでありますが佛壇のことであるからと思つて『釋迦牟尼如來樣』と書いて置かれたのであります。それ以來と云ふもの、家族中光明化して仲よく、誰一人小言云ふ者も無くなつてゐたのであります。

ところが今年の八月廿五日の朝のこと、どうした機みか長男が母親をつかまへて、ぐづ〳〵いつてをるのです。『もう今止むか、今止むか』と思つてゐてもそれが止まない。折角家族中光明化されて仲よくなつてゐたものを、それを破壞されたやうな氣がして、『むかつ』とした。で、いきなりその子の腕を掴んでひつぱつて來て佛壇の前に引据ゑて呶鳴り付けられたのであります。呶鳴つて不圖佛壇の方を見ると、奉書の紙の第一條に『腹を立つまじきこと』と書いてあるのが眼に付いた。『これは失敗つた、天罰があるかなア』と思つてゐられました。ところがその日の午后、材木さんは神戸の郊外の或る山道を歩いて居られたのであります。すると、突然左足の足蹠に非常な痛みを感じて飛び上つたのです。見ると、どうして下駄と足の裏との間に這入つたのだらう、蜜蜂が二匹足蹠にくらひついてゐるのです。手で拂はうと思ひましたが、手をさゝれるかも知れぬと思つたので、下駄を脱いで足をふりまはしたけれども、いつかな飛び去らうとしない。約一分位螫しつゞけて、やつと用事が終つたと云ふ風に飛び去つたさうであります。しかしそのあとが、ヅキン〳〵痛んでくる。足蹠が踵よりも高く腫れ上つて痛い。あゝ天罰たちどころに現れた。私が人を刺す心を起したからかうして螫されたのだ。三界は唯心の所現とは本當である。惡いことをしたと、神にお詫びの心を起しながらチンバを引き〳〵宅へ歸られました。と、その夕

方、神戸の『生長の家』誌友林博三氏が生長の家本部が近日東京へ移轉するに就て內相談があるから是非共今晩七時半から神戸支部の山下さん宅に來て欲しいとさそひに來られたさうであります。『足は痛いのに弱つたことだが、まあ行かねばなるまい』と、行きしなは、ちんばをひき〳〵行かれまして、さて相談をすませて歸らうとすると、腫れはひいて、足の痛みがすうつととれてゐたのであります。此の話はこれで片がつきましたが、それから三日ばかり經つた廿八日の朝材木さんは何ともいへぬ好い豫感がされるのです。『今日はきつと何か好いことがあるぞ』と家族の者に云つてゐられた。その午過ぎ材木さんが物干台にあがられまして何氣なく物干ざほをなほさうとしてリユーマチの方の左手を上げられますと、今迄手先が肩の高さ迄しか上らなかつた左手がすーつと完全に眞直に上までのびたのです。頭癬と鼻茸は治つたがリユーマチだけは『生長の家』でも神想觀でもなか〳〵なほらぬと思つてゐたがそれも愈々癒つたと、大變よろこばれたのであります。その後、材木さんがある日、電車の中で其頃の最近號の『改造』を見てをられた。その中に山川均氏の書かれた『搾取者となつた話』と云ふ記事があつた。『搾取者となつた』と云ふのは、蜜蜂飼ひになつて、蜜蜂の集めて來た蜜を搾取する仕事を始めたと云ふ意味であつて、そこには蜜蜂の生活が細かく觀察して書いてありました。讀んで行くと色々蜜蜂の叡智的な生活

が書いてあつて蜜蜂は實に靈蟲である、雌蜂がお産をする時には、産婆役の蜂がゐて雌蜂に無痛分娩の注射をする。その注射の針の入れ方が、實に靈妙なものであつて、少し注射の針の入れ方が度が過ぎると注射が効き過ぎて麻醉して了つてお産が出來ないし、注射の針の刺しやうが足りないと産道が開かなくてお産が出來ないといふ。蜜蜂の鍼の仕方は實に靈妙なものであると書いてあつた。それを讀んでゐるうちに材木さんは、自分がリューーマチが治つたと云ふことが判つたのは蜜蜂に螫されてから三日目である。自分のリューーマチが治つたのは神が蜜蜂をつかはし給うて注射をされたからではあるまいかと云ふ氣がして來たのです。尚その記事を讀んでゆくと最後のところに『昔からリューーマチにかゝつたら、蜜蜂に螫させたら治るといふことであるが、自分は蜜蜂飼として始終蜜蜂に螫されつけてゐるし、リューーマチに罹つたことはないから、本當かどうか、知らぬ』と書いてあつた。あゝさうであつたのか、矢つ張りリューーマチを治すために神が蜜蜂を私に遣はされたのであつたのだ、と大變難有くお思ひになつた。そして、自分が蜜蜂に螫されたのは一度は天罰だと思つたが、本當は神樣は罰を當てないものであつたのである。自分が正しい信仰に入つたゝめに、三界は唯こゝろの現れであるから、正しい信仰が展開して病氣が治るに必要なものが自然に集つて來たのだとお悟りになつた。その後、材木さんが此の事件に興味を覺え

て知人の鍼灸醫に『リューマチの人にはどこへ鍼灸を施すか』と云つて訊かれたのであります。するとその人がいふには左の手のリューマチの人には左足の足蹠に灸を据ゑると答へた。材木さんは左手がリューマチであつて、リューマチに罹つたら螫させたら治ると云ふ蜜蜂に左足の足蹠を螫されたのであつた。蜜蜂一匹では注射が足りないから、二匹をつかはし給うてちよつと螫すだけでは足りないから一分間も螫させ給うたのだ。偶然にしてはあまりに連絡がありすぎる、神祕といへば餘りにも神祕である。そして其の事件のあとから其の事件の神祕的因緣を說明するところの本まで與へられてゐる。すべてが餘りに順序よくいつてゐるので、誰が考へてもこれは決して偶然な出來事だと思ふことは出來ない。實相の中には此のやうに善きもの丶全てがあつて、實相を悟るに從ひ、このやうに實相本來の善さが現象界にも展開して來るのであります。材木さん一家一族が此れ迄不幸續きであつたのは、或る靈覺者に視てお貰ひになると、何でも三代前の祖先に子なくして死んだ先妻がありまして、今續いてゐるのは、後妻の血統の子孫ばかりでありますので、先妻の跡の弔ひ手がないのであります。それで其先妻が怨靈となつて祟つてゐるのだ、と云はれたさうであります。或る日、材木さんが生長の家の道場の面會時間も過ぎて皆さんがお歸りになつてから家の系譜を示されまして、『本當にそんなことがあるものでせうか』と私に尋

ねられました。それで私は申しました。『事實さういふことはあることであつて、死んでも悟りを開かぬ靈魂は、まだ自分が現世に生きてゐる積りでゐるのがある。さう云ふ靈魂は肉體が死んでから後も、自分が靈界にゐる事を悟らず自分は肉體がある積りであるからいつ迄も自分の良人を自分の良人だと思つて良人の側について、其處へ後妻でも來ようものなら、見知らぬ女が遣つて來て、私の良人を奪とつた、怪しからぬと、嫉妬心を起していろ〳〵とその後妻の子孫のものにまで祟りをすることもあるものだ』と申しあげたのであります。丁度その時、材木さんは何か大きい問題のために死生の關門を出入すると云ふやうな事をやつてゐられたので、そんな怨靈があるなら一時も早く覆して置きたい。それに『生長の家』に入信して、『肉體は本來無し』と判つたが、それでも今ピストルを眼の前へ突き付けられたら心が動じないと云ふ確固たる自信にない、だから生死の恐怖を覆して置きたい。古き我を覆して本當に新しき靈なる自分に更生して置きたい、かう思はれまして、その歸途增上寺に行かれて今度の管長にお會ひになり『自分は今、生死の間を出入するやうな重大な仕事をやつてゐるのですから、死の恐怖を覆へしたい。そして自分の舊我を覆したい。それから自分の三代前の祖先に怨靈になつてゐるのがあるかも知れぬとのことであるから其の怨靈を覆したい。此の三つの覆しのために修行にまゐつたのですが增上寺で

は何かさう云ふ方法はありませんか』と尋ねられたのであります。すると新管長が答へらるるには『それでは貴方を一つ葬式してあげよう。葬式して死んで了つた者にもう死の恐怖はない。もう一度死んで了つた者には怨靈も祟りやうがない。舊我は肉に屬するものであるから、肉體が死んで葬式が終つた者には、もう舊我はない。それでは一週間後に葬式をしてあげるから一週間のあひだ齋戒して佛の前で念佛を唱へなさい』と申されたのであります。それで、材木さんは増上寺にお籠りして本堂の阿彌陀様の前では念佛をとなへ、退いて部屋に歸ると、生長の家の神様を念じて靜に神想觀をせられた。さうしていよ〳〵一週間目の滿願の日が濟むと坊さまが五十人、壇徒が五百人もやつて來て、嚴かに材木さんの葬式を行つたのであります。此の儀式により、もう肉我は葬られた。肉體無といふ信念が、實際の行事によつて猶一層强められたのであります。これによつて死の恐怖は覆へられた。舊き我は覆へられた。怨靈は覆へられた。増上寺の新管長も確かに此れで三つの障礙は覆へられたと言明された。併し、果して、此の三つの障礙を覆へられたであらうか、その證據は無い、此の證據を得たいと思つて熱心に神想觀をされたのであります。神想觀を終ると、何となく外出したくなつて、洋服に着かへて玄關に出られますと自分の靴がない。誰かゞ穿き違へて往つたと見えまして、その代りに新しい立派な靴がちやんとならんでゐる

のであります。取換へられるにしても可笑しい。と云ふのは材木さんの靴はボックスで古いのに其處にある靴はまだ新しい上に、キッドの新しい上等の靴なのであります。取換へて行つたにしても、これは他人の靴であるから穿く譯にもゆかない。何うしたらよいかと思はれてまづ自分の部屋にひきかへされて、此れは何か神示でゞもあらうと思ひ、何の神示であらうかと、机の前に坐つて神想觀をされたのであります。神想觀をすまして、ふと机の上を見ると、目にうつゝた紙片がある。それは材木さん自身の手で例の三つの問題を列べて書いた紙片であります。その紙片には『死の恐怖は覆へ、ら、れ、し、や。舊我は覆へ、ら、れ、し、や。怨靈は覆へ、ら、れ、し、や』と斯う列べて書いてある。それを見て、讀むともなしに讀んでゐると、死の恐怖はクツガヘラレシヤ、舊我はクツガヘラレシヤ、怨靈はクツカヘラレシヤ。此處迄讀んではつと氣がついたのは確かに『靴替へ、ら、れ、た』と云ふことであリました。これで三つの障礙が完全に覆へされたことが象徵的に證明されたのでありました。神は多くの場合、言葉を出し給はない、神の示しは多く象徵によるのであります。だから『默示錄』などはすべて象徵的な形であらはされてゐるのであります。何故、神の示しが象徵的にあらはれるかと云ふと念と云ふものは具象化するものだからであります。『念が具象化する』と云ふことは、佛敎で云へば、『三界は唯心の所現』と云ふことであります。何の氣なし

に見てゐると何でもない事でも、三界は唯心の所現でありますから、日常生活中に出現する事々物々悉く自分の精神内容を外界に投影してゐるのであります。心が變れば着物も變り、靴も變り、人相も變り、肉體も變る。だから『生命の實相』を讀んで心が變れば肉體が變るのに不思議でないのであります。材木さんはそれから二、三日待つたが靴を取り替へに來ないので、これは神から與へられた靴だと思つて穿いて出られた。靴は、革で出來た足の嚢である。「古き革嚢に新しき信仰は盛ることが出來ない」と云ふやうな諺もある。信仰が變つたと同時に革嚢が自然に變つた。象徴としての客觀世界は氣を付けて見れば、このやうにも完全に精神內容を表してゐるのであります。ところが、その新しい靴の蹠部が當るところに三本ばかり釘が出てゐてそれがチク／＼と刺すのであります。それから靴を穿くときに靴滑りを用ひずに無雜作に穿いたと見えて、靴はまだ新しいのに踵がひしやげてゐるのです。此の二點を直しさへすれば仲々よい靴であります。形の世界を心の象徴として見るとき、斯う云ふ靴を與へられるやうになつたのは、どう云ふ心の象徴でありませうかと、神想觀をして神示を仰がれますと、ふと心に感ずる所がありました。これまで自分の仕事がスラ／＼と運ばないのは自分の中に人を刺す心があつて互ひの接觸が滑かでなかつたからだ。靴の底に釘が出てゐたり、靴の踵の入口が摩擦して變に拉げて

ゐるのはその現はれである。靴の中にすべり革を一枚入れゝば靴の穿き心地はよく、靴スベリを用ふれば穿く時も滑かであつて、何ごともスラ〳〵運ぶ、事を爲すに當つても、調和する心を滑り革とし調和する心を靴滑りとして行へば、物事必ず成就すると悟られたのであります。

それにしても踵のひしやげてゐるのは何の象徴であるかと云ふと强くきちんと立つべき所を立てゝゐないと云ふことで、これは自分の意志の弱いことを示してゐる。意志を强くし、人を刺す心をなくし、和らいだ心で人に接すれば立ち向ふところ一切自分と調和すると云ふ譯で、それから此事を心得てその靴を穿いて人と人との交渉に出掛けると必ず成就する、これは全く神授の靴だと材木さんは云つてゐられたのであります。これは聊か落語めいた話のやうでありますが、形の世界は象徴の世界である、三界は唯心の所現であるといふことが解れば、たゞの落語でないことが判るのであります。皆さんの生活の中にも常にかういふ象徴があらはれてゐるのでありますが、何の氣なしに、注意せずに過されてゐるので氣が付かれないだけであつて、皆さんの生活、皆さんの環境、悉くこれ自心の象徴なのであります。此の生活、環境悉く自分の心の象徴的展開であると云ふことが體驗的に解つて來ませんと、佛典を讀んでも、敎說は敎說、生活は生活と別々になつて、阿彌陀經を讀んでも、その中にある立相の淨土の狀態などゝ云ふものは本當にあ

るのだらうか。たゞ欲しいと思つたら山海の珍味を載せた食膳が其處にあらはれる、食べたと思つたらその食膳が自然に去る、さう云ふやうな生活が本當にあるものだらうかと疑はれるでありませう。ところが『生命の實相』の中には生長の家誌友になられてから何事でも欲しいと思つたものが、自然と與へられるやうになつた日比野さんの御家庭の話がチヤンと書いてあります。原稿用紙を欲しいと思つたらチヤンと誰からか原稿用紙を送つて來てゐる。或る日の事などは中々面白い。或る日、日比野さん宅へ魚屋がやつて來た。其日は魚が食べたくないので要らんと斷るとどうしても買つて欲しいと云ふのであります。斷りきれなくなつたので、不圖『實は今朝鷄を一羽貰つたので、それを料理して食べなくちやならないから魚と重複しても困るから』と云つて斷りますと魚屋も仕方がないので歸つて行きました。すると不思議なことには間もなく知人が鷄の料理したのをちやんと持つて來てくれたのであります。斯う云ふやうに、心に欲ふこと言葉に望む事が必ず成就することになると、阿彌陀經に書いてある極樂淨土の狀態はウソでないことが判るのであります。ウソでないどころか今現實に此の世界にあらはすことが出來るのであります。それを實際に現してゐるのが『生長の家』であります。別に私ひとりが極樂淨土を顯してゐるのではない。宗教の中には教祖だけ偉くて信者は教祖と同じ高さに中々上れないのがありますが、生

長の家』はたゞ聖典『生命の實相』を讀むだけで欲しいと思へば直ぐに其の欲しいものが自然に顯れる底の極樂淨土を此世に示現することが出來るのであります。最近、其の日比野友子さんから參りました手紙にも此の極樂狀態が現世にあらはれてゐることが面白く書かれてゐますので、それを一寸此の席で朗讀致します。

『向寒の砌り愈々御健勝にわたらせられ誠にお喜ばしき御事に存上ます。降りて私宅も誠に朗かに過し居りますれば、憚り乍ら御休心遊ばして下さいませ。神が私共とともに居らせられますことの證として、心に欲りましたこと何時となく實現さして戴きますこと誠に忝く存じて居ります。時々「何かゞ欲しいなあ」などと私が申しますと、良人が「欲しいと云ふことは遠慮をして申せ。生長の家の神樣が餘り覿面に下さるから勿體ない」と。これは、あの鷄以來、私をたしなめる言葉で御座います。

『暫く御無沙汰を致してゐましたので、御禮を申上たきことが色々御座います。先月號の「智慧の言葉」を拜見致しましてから、私はよく〳〵業の深い自分だと思ふやうになりました。この考へは「出生前、生、死、死後の研究」を拜讀すると同時に深まりました。私は業の深い自分と思ふことの重荷に決して打負かされは致しませんけど、今までは自己を改造しようと思ふ心は薄くて

環境がよくなることばかり望みました。けれど只今は、どうかして自分の業が消えるやうにと希ひますと、周圍に對する不平や不滿がまるでなくなりました。兎に角、私の人生觀がすつかり變りました。すると第一に主人の氣持が大へん穩かになつてくれました……』（朗讀を中止して）此の、奧樣自身の不平不滿がなくなりますと、主人の氣持が大變穩かになつたと云ふのは面白いではありませんか。大抵の奧樣の考へるところによると、主人が惡いから私の不平不滿が止まないのだ。主人さへ善くなつてくれたら私の不平不滿が自然になくなるのだと思つてゐられるのでありますけれども、本當は奧樣の心が反映して御主人の機嫌が惡かつたり、行ひが惡くなつたりしてゐる場合が多いのであります。三界は唯こゝろの現れでありますので、周圍が良くないと思つて、いつ迄も自分が不平不滿でゐますれば、その心が周圍に反映していつまでも不平不滿を起す狀態が去らないのであります。卵があるので鷄がある、イヤ鷄があるので卵があるのだと云ふ論爭は昔から絕えないのでありますけれども、論爭を止めて、卵の方でも鷄の方でも好い、どちらでも一方だけを絕滅さして了つたら、もう卵も鷄も兩方とも消えて了ふのであります。鷄が生れて來るだけ、どれだけでも鷄を殺して了ひますと、もう卵の產み手がなくなりますから、卵も消えて了ふ。また鷄を放つておいて、卵だけを絕滅させて了ふことにすれば、もう今後は卵から

雛が孵化して出ませんから、やがて今ゐる鷄が老衰して死んで了ふと、卵を絶滅さすだけで鷄も絶滅して了ふのであります。だから、卵があるから鷄があるのだ、鷄があるから卵があるのだ、良人が惡いから妻がよくなれないのだ、妻が惡いから良人が善くなれないのだなど丶云はないで、氣がついた方から心の不平不滿を無くして行きますと、自然に相手も環境もよくなつて來ますので、此處に氣がおつきになつたゝめに日比野さんの家庭は光明化して來たのであります。さて日比野友子さんの手紙はまだ次のやうに續いてゐます。……(讀む)

「今月の神誌にて救はれましたことを一つ。私の胃下垂はどうも執拗で、よくなると思へばぶり返し、不思議な程全治致しませんでした。よく／＼神樣の御心付けだと反省しつゝ、一年餘りになりました。他の事では結構な御守護が戴けますのに、これだけは思ふやうに參りませんでした。今考へますと、癒りたい／＼と思ふのが却つて胃に引つかゝつてゐたもので御座いませうか。今月の神誌の中に、「三時間もかゝつて食事をなさる方へ、先生が「噛まない方が消化が好いのだ」と被仰つてゐますのを拜見致しますと、さうだ、食物といふ物質は無いのだから、噛んでも噛まなくてもよかつたのだと急に心づきまして、食事の時の氣持が大へん輕くなり、つひ澤山戴けるやうになりました。今迄はもう咽喉まで行きかけたものを、もつと噛まぬと惡いかも知れない何ぞ

と思つてもう一ぺん取戻して嚙み直したいやうに思ふことさへありましたが、其後は、どうでも好いと思つてゐますので、何時か、口から胃へ送られてしまつてゐます。すると澤山戴いても却てお腹の具合がよろしいので御座います。此の頃大變愉快に御飯を戴きまして、笑はれる程肥つて參りました。……』（朗讀を中止して聽集に話しかける）

現今、フレッチヤーリズムと云つて、よく嚙むことを宣傳してゐられる人もあります。中にはドロ〳〵會などと云つて咀嚼を徹底する會などを作つてゐられる方もありますが、よく嚙むことは必ずしも惡くはないがこれも捉はれると不可ない事になるのであります。斯う云ふ場合は『食物は嚙まぬ方がよく消化する』と一喝すると、その言葉の力で不消化や胃下垂が治つてゐる。あゝせねばならぬ。斯うしなければ不可いとなると、道の道たるは道に非ずと云ふ譯で自分自身を束縛して了ふのであります。斯うなると自分自身で自分の現に持つてゐる本當の力まで出なくなつて了ふ。斯う云ふ人にその束縛を一言で破つてさへ上げればひとりでに力が出て來るのです。（又朗讀を續ける）

『最近犬を飼ひましたに就て、一貫して餘り御利やくを戴きましたので、犬のこと何ぞと心に憚りながら、少し申し上げさして戴きます。私は何時も捨て猫を拾つて來て、話相手に致し、綺

靈にたりますと、他處に貰つて戴くので御座いますが、先日、ふと話相手なら犬の方が好いかも知れないと思ひました。あちこち探しましたが、適當の犬が見づかりません。神想觀の終りに「恐れ乍ら、小犬を一匹戴き度う御座います」とお願ひ申しました。翌朝買物の歸りに、バスケットに仔犬を三匹程入れて自轉車を停めてゐる人に逢ひました。「その犬はどうするのですか。」「賣ります。」「いくらです。」「一圓戴きます。」で、神樣の御引合せと存じまして一匹買つて歸りました。夕方、主人がそれを見て、これは嚏したやうな顏してゐるから、もつと朗かなのと替へて貰へと申します。然し私は、犬屋と云ふものが此世にあることさへ今日始めて知つたので厶いますから、此の次は何時逢へるやらわかりません。然しまた其の翌朝、仔犬が外へ飛出して、右往左往仲々つかまらないのを追つかけてゐますと、昨日の犬屋が向ふの道を駈けて行くのが目につきました。私は思はず歡びの聲をあげて呼び止めました。犬屋が私に申しますに、飼ふなら、値の高いのをお求めなさい。子供は賣れるから損にならないし、人樣には肩身が廣くて、お家にも値打がつきます――なんて如才ないことを申します。私は犬屋に說法されたをかしいと思ひましたが、「この犬屋、生長の家と同じことを云つてゐるな。全く犬でも貧乏臭くなるかも知れない」なんて思ひまして、少しいゝ犬が欲しくなりました。二三日して勸められましたのは三拾圓と

云ふテリヤで御座いました。自分で賴みながら、贅物と思ふ犬に其那お金を出していゝものかと迷ひ、またそれだけの價値ある犬か誰かに見て貰ひたいと思ひました、一晩の約束で借りたもの故、その日のうちに犬に目のある人が來て呉れるか覺束ないものでございます。すると暫くして自稱犬通の洗濯屋が註文とりに參りました。「いゝ處に來てお呉れた。三十圓でこの犬はどうだらうねえ」「へえ、これが三十圓、雜つてまんがな。七、八圓の値打だつしやろか」やつぱり神樣は好い時に好い人を遣はして下さるのだと難有く思ひまして「どうか良くも惡くも私の家に最も適當な犬を下さいませ」と私は裁縫をしつゝ念じてゐました。そこへ、前の町會議員のN氏が來られました。使の者で濟む用であり、主人も留守の時間なのに何故かひよつこりと這入つて來られました。犬が目についたことから、犬の話になり、「この犬が可けなければ、私の親戚に良いテリヤがゐるから聞いて見ませう」と申されました。犬のゐる家は幸ひ生徒のうちでムいましたので、一匹進呈しようと云つて下さいました。後で聞きますと、洗濯屋の鑑定違ひで、それも相當たものであつたさうですが、間違へてくれましたお蔭で私の希望通り、私の家に最も適當な犬が戴けることになつたのでございます。その仔犬は可愛くて賑かになりましたのはよろしいものゝ、疊の上に用便を致しますのに全く困りました。また〳〵恐れ乍ら、神想觀の折に「どう

か仔犬がソソウ致しませんやうに、犬は犬の便所にゆくのであつて、決して人間に迷惑をかけることはない」と思念を致しました。やがて犬が庭へ駈け下りて參ります。見てゐますと、庭隅の無花果の蔭の最もいゝ場所に用を達してゐます。その後は、硝子戸が閉つてゐます時など、前足でガシ／＼と搔いて開けて呉れと申しまして必ず外へ下りることになりました。私は生命の本流でもない仔犬のことなんぞを長々と申上げまして、何卒御許し下さいませ。然し犬なんぞの事まで御願ひ申せば、かくもあらたかに御助け下さいますことを思ひますと、尙更に難有くてならないのでございます。主人よりもよろしく申出でました。十一月十二日、日比野友子。」

このやうに欲しいと思ふものがいゝところにちやんと來てくれる、これこそ佛典に顯はされたる極樂淨土の狀態であります。犬でも、猫でも、鼠でも否生物どころか品物でも人間の心が通じて集つて來るのであります。入用なものがちやんと向ふから遣つて來ると云ふことは品物が我々の心を知つてゐるからであります。哲學の方でも『物が何故心によつて認識されるかと云ふと、物も本來、心と同じものであるからだ』といつてゐますが、『三界は唯心の所現である』と云ふ立場から觀ますならば、我々が物質と見てゐるものはすべて心の顯れである。言ひ換へれば『物』とは『心の塊』なのであります。さうすれば心が心を知るのは當然のことであります。だから

『或る物を欲しい』とこちらで思へば「さうか、そんなら行くぞ」と物の方で答へて遣つて來るのは當り前のことゝ云はなければなりません。物質が我々の心を解する、——それは實際のことであります。併し普通人にはそれが出來ない。『物來い!』と思つても、『物』がなか〳〵遣つて來ない、それは何故であるかと云ふと、『物は物だ』と思つてゐて、呼んでも感じないから來ないだらうと信じてゐる。呼んでも感じないと思つてゐるから、三界は唯心の所現であるから、その思つてゐる通りに欲しいと思つても遣つて來ないのであります。佛教など講堂で說いても說く時は三界は唯心の所現だと說いてゐながら、『物は物で死物だ』と實生活では思つてゐる人がある。そんなことでは『物』は吾々の云ふことを聞いてくれないのであります。『物』が吾々の云ふことを聞いてくれる話を致しましたから、序でのことに、虫ケラまで吾々の云ふことを聞いてくれると云ふ實際の話を此處に致しませう。あまり話が奇怪なので、御本人の手紙を讀んで見ます。こゝに郵便局の消印もチャンとついてゐます。差出人は安東篤馬太さんと云つて大分市外稙田村の人であります。稙田村ではなくて、本篇に『直』と云ふ字で稙田村と讀むのださうであります。この人は永い間腰の神經痛で長い道を歩くことは出來なかつた。家は農を業としてゐられたのでありますが、御自分が仕事が出來ないので奥さんが田を耕して良人を養つてゐられたので始終奥さ

んの前には頭が上らなかつた。この方が『生命の實相』をお讀みになると永年の神經痛が治つて了つた。もう神經痛が治つたらどんな働きでも出來る。自轉車に乘つて用達しに隣村まで行くのに坂がある。此の坂は勾配も急だし距離も隨分長いので青年でも自轉車では一氣に其坂を乘り切ることが出來ないで、中途で自轉車から降りて休むか、そろ〳〵自轉車を持つて引き上げねばならない。ところが、此の安東さんは、今迄永年の間、坐骨神經痛で動けないほどであつたのですが、實に素直な單純な心の持主でありまして『生命の實相』をお讀みになると理窟なしに其の中に書いてある眞理を端的に摑まれる。『人間は神の子である』と書いてあると、『さうだ、人間は神の子だ』と正直に承認される。『肉體は心の影だ』と書いてあると、『さうだ肉體は心の影だ』と承認される。『病氣は無い』と書いてあると、『さうだ病氣は無い』と單純に素直に生れ兒のやうな心で承認される。そして、さしもの永年の神經痛も『さうだ、病氣は無い』と單純に素直に承認された刹那に治つて了つたのです。此の安東さんが例の、青年でも自轉車では乘切ることが出來ない例の急坂にさしかゝられますと『物質は心の影だ』と正直に承認された安東さんのことでありますから、『さうだ、坂はわが心の中にある。平地と思へば平地である』と悟られて、平地のつもりで一氣に登りきつて了はれたのであります。その坂を登り切つて了うた所に知人の小學校

の先生の宅がある。その家へ這入つて『唯今この坂を自轉車に乘つて中休みも何もなしに一氣に登つて來ました』と云ふと、小學校の先生が『病氣上りでそんなことをして心臟がどき〱しやしませんか』とたづねられた。『心臟がどき〱しやしませんか』と云ふ言葉を聞くと急に胸がどき〱して來たのです。これが言葉の力であります。言葉の通り心臟が左右される。『ナニ、人間は神の子であるから坂を登つたつて心臟は何ともない』と安東さんは心の中で心臟の動悸を否定されますと其通り心臟に動悸が消えて了つたのであります。此の安東さんは、私がまだ住吉にゐました時、五六里も離れた須磨の息子の家から毎日生長の家本部へ自轉車で通つて來られた。痼疾の神經痛が全治してこんなにも健脚家になつてゐられたのであります。自轉車を走らせる時にこの方は決して物を避けない。一氣にひた走らせてゐられると、自動車も人も犬も誰も彼も皆自然に安東さんの方を避けて通る、どんな群衆の中でも安東さんの自轉車が行くと自然に道が啓けるのだらうであります。悟りと云ふものは不思議な力のあるもので、災難は向ふから避けて通り欲しいものは向ふから自然に集つて來るのです。これが地湧の淨土である譯です。この安東さんが蟻と話しをしたと申上げても、ちつとも不思議ではないでありませう。聖フランシスは小鳥に說教されたと申しますが、『生長の家』は『物』とでも話をする。『物來い！』と云へば『物』

がやつて來る。無生物でさへ心の顯現なのであつて人間の呼びに答へるとしますと蟻が人間の言葉に應へて行動するのも少しも不思議のない筈であります。これも話をするよりも、御本人の手紙を讀む方が現實性があつて好いと思ひますから、ちよつと其れを讀んで見ます。これは九月廿六日附の手紙であります。(手紙を朗讀する)

始めに時候の挨拶がありまして、次に斯う書いてあります。

『……次に私事も歸國後も日々壯健で家業に怠り無く働いて居ります。人樣にも喜ばれるだけ働いて居ります。私方は、七島と言ひて疊の表を製造します。晴天を當てにする仕事です。二十日間計りでした。私は正午に神想觀をしまして日を見ます。天候はよくわかりまして其内二日ちがひました。あとは能く當りまして立派なる收穫を得ました。それに不思議な事には、私が雨降に出ましても、道の三四丁計り行きますと、雨があがりまして困る事なく、不思議に私の通る上は雲が切れて行きます。私は不思議に思うて居ます。未だ貴方樣には申上げて居ないと思うて居りますが、私の家の六疊の間を學校(大分師範學校でございます)の女の敎生に貸してあります。其の疊に蟻が巣を造つて居ります。困つて私に其の話を致しました。私は何氣なく、「それでは、私が一つ無條件にて移轉を申込みませう」と申しますと「それではお願ひ致しま

す。」それから、蟻に「此の疊は敎生に貸してあつて君たちが居られては困ります（聽衆一同笑ふ）から、唯今より無條件で立退いて貰はねばならぬ」と言うて神想觀しますと、其中一匹の蟻が出て、外の蟻の二三に何か話した模様、それからぞろ〳〵出ますが、一疋も歸らずに皆々出て行きました。其後又一里程東に利賃と言ふ所の金光敎様の内へ少し計り病人が有りまして、來てくれと言ふので參りました。參つた所、金光様の御祭前とて中々御そなへ物、枇杷、バナナ、梨、種々の甘けの物が澤山上げて有ります。又蟻が澤山來て居ります。金光信者の婆様、朝から三時迄（蟻）を追ひづめで殆ど困り切つて居りました。それも私、以前話した事が有りますので病人が「先生は蟻に斷りをするさうだ、一つ先生に賴んで見なさい」と云ふのです。「それでは私一つ言つて見ませう。」それから「貴様たちは之は金光様に差上げて有るのだから、食が欲しければ、何處かわきへ行つて食を求めなさい。それでないと實に困る」さう言うて神想觀をしましたら、それから蟻はぽち〳〵逃げ出しました。皆々逃げてしまひました。金光信者のお婆様も不思議に思うて居りました』（下略）

此の手紙にありますやうに、『生長の家』にお這入りになりますと、實に世界が廣くなるのであります。犬でも蟻でもチヤンと自分の命令通に動き出して來る、生物だけではなくほしい物に來

いと命令するとちやんとその物が出て來る。すべてのもの、森羅萬象悉くが吾々の兄弟であつて吾々を生かすために働いてゐると云ふことがハッキリ判つて、自分の棲んでゐる世界が實に廣くなるのであります。

此の安東さんの話や、日比野さんの話を、神戸の誌友會で致しますと、山下汽船の重役の河野さんの奥さんが南洋土産に貰つたまめざるを飼つてをられましたが、部屋の中で小便をする、それで、奥樣が同じやうに神想觀をされて、動物は人間の室で用便をするものではない、外で用を果すものだと念じられますると、それ以後ちやんと自分から外に出て用をたすやうになつた。戸が閉つてゐると、こつ〳〵とたゝいてあけて貰つて外にゆくやうにさへなつた。先生の唯今被仰つたことは皆本當のことでありますと裏書きせられたのであります。

もう一つ、濱松の『生長の家』誌友で杉浦慶一さんといつて賀川豐彥氏と親交あるクリスチャンの若い牧師の方が『家ダニ』とお話しをした實話を申しまして此の講話を終ることに致しませう。杉浦さんは自分の家で日曜學校をするために一層大きい家を借りられた。そして其家に住んで見ると、何の蟲かしら家族皆の者の身體中を螫して痒くつて仕方がないのであります。何の蟲であらうかと思つて、縣の衛生課へその得體の知れぬ小蟲を持つて調べて貰ひに行かれたのであ

ります。縣の衞生課でよく調べて見ると『家ダニ』だつたのであります。杉浦さんは早速神想觀をして家ダニに立去るやうに命ぜられましたが去らないのです。家ダニが去らないのは三界は唯心の所現であるから、これはきつと自分の心に間違つたところがあるからであらうと反省して見られました。そしてお考へになるに、『さうだ、家ダニだつて住む所は入用なのだ。それだのにただ逐ひ出さう逐ひ出さう、とばかりかゝつてゐたのは間違ひだつた。若し家ダニに立退いて貰ひたいのなら立退いて行くべき所を作つてやらなければならない』斯うお考へになりまして、家ダニの附いた疊と、六疊敷の部屋一室を家ダニに獻げようとお考へになりました。

そこで家中のダニのついてゐる疊をはがして、六疊の一室につみかさね、ダニに向つて、『これからこの六疊の部屋をあなた方のすみ家に提供します。ですから、これ以後はどうぞこの部屋から出ないで下さい。あなた方に出られると私の方でも大變迷惑しますから』といつて靜に神想觀をされたのであります。そして疊を剝がした跡の床板にはうすゝべりをしいて夫婦が生活し、また日曜學校に充てられましたが、それ以來、ちつとも家ダニが人間を螫さなかつた。そしてその六疊の間の疊の緣には幾萬と云ふ家ダニが灰を撒いたやうに列を作つて生活してゐるのに、虫の來さうな床板にウスベリを敷いた所には一匹も出て來ないのであります。此事實を見せて日曜學

校の生徒に話して蟲でも人間と同じく話が出來ることを說明してやると日曜學校の生徒たちはダニさんといつてお伽話しが實現したかのやうに喜こんで話題にしてゐるさうであります。家ダニばかりでなく何でもきいてほしいと思ふことはすぐ出來るのであります。それは一切の事物はすべて心的實在であつて、人間はありとしあらゆる心的實在の中での靈長であるからであります。すべての物は神の子でありますが、人間は神の子の中での長兄である。佛なる心、神なる心が缺くる處なく、十全の力を以て顯現してゐるのが本當の人間でありますから、その人間がすべての物の心に話しかけるのでありますからすべての物が欲する如くに動き出すのであります。欲して能はず、望んで成らぬと云ふのは、佛なる心、神なる心がまだ完全に現れてゐないからであります。それが『生長の家』に入信せられ、聖典『生命の實相』をお讀みになると、斯う云ふやうに自由自在に動物と話したり、欲する事物を自由に引寄せることが出來るのは自己の內在の佛なる心、神なる心が完全に現れて來るからであります。神の子の長子として如何なる物をも支配し得る何物にも縛られないのが我々の本當の相なのであります。されば、坂があつても吾々は苦しむには及ばない。安東さんのやうに『坂はわが心の中にある』と知れば、心の力で坂を自由に乘切ることが出來るのであります。此處に云ふ坂といふのは土で出來た坂のことではない。人生問題の

一切の困難を象徴したものが坂であります。人生の山坂――困難はすべて吾が心の中にあるのですから、『我が行くところ必ず平地である』と信じて進めば、一切の困難、山坂は安東さんのやうに樂々と乘切つて了ふことが出來るのであります。『生長の家』は如何なる險しき山坂をも平かにし如何なる地獄をもたゞ心の力にて極樂淨土化し得ると主張しつゝ現に、それを幾多の人々の實生活の上に實現させつゝあるのであります。丁度午後十時になりましたから、此の講演はこれで終ることに致します。

第三章　『無』もない世界に入る話

内容――『無』と云へば『無』に捉へられるのが人情である。『無』もない世界に入つたとき始めて吾らは『無』にも捉へられなくなるのである。これ即ち色即是空の世界である。そして『無』もない世界に入つたとき其處から無盡藏を汲み出して來ることが出來る。これ即ち空即是色の世界である。人間の捉はれは限りがない、『阿彌陀佛を念ぜよ、救はれる』と敎へられゝば、阿彌陀佛をさへ自身の迷つた考へで狹い狹い世界に押し込めてゐた人間である。この座談は其の押込められてゐた阿彌陀佛を廣い世界に解放した話で、昭和九年六月十日京都市相國寺東門前、石川芳次郎氏邸に於ける座談である。

谷口――昨晚瀧本さんがお越しになられまして興味深い話をして下さいました。神戶に××醬油店と云ふ醬油店がある。その店の主人は一代に數十萬圓の資產をお造りになつた偉い人ださうですが、その人の奥さんが最近胃潰瘍に罹られたのださうです。切開手術をしなければ治らないと云ふ診斷で、親族會議の結果、已むを得ないと云ふことになり京都の大學病院に入院施術せられたのです。某内臟外科の博士が執刀開腹して見ると、患部があまりに廣汎にわたつてゐ

るので、もう既に悪いところだけを切除するに耐へない――もう手のつけやうがないと云ふので悪いところを切りとらずにその儘そつと縫ひ合はせて、本人にはもう悪い患部を切りとつたから治ると云ふことを言ひきかせて置いたのですが、醫者としての責任上、その親族の人には、實は切開して見ると、あまりに患部がひろがつてゐて、もう手がつけられないやうな狀態であつたから、開腹したゞけで切除はしないでその儘で縫合した。事情斯くの如くであるから宜しく御諒承願ひたいと云ふ發表があつた。ところが開腹二日目から患者は患部の悪いところは切りとられて了つたと信じたので元氣がついて食慾がつきお粥を食べ出したが何ともない。そのうちに固い普通食を食べても何ともなくなつた。結局患部は切除しないで切除して貰つたと云ふ觀念だけで治つて了つたのです。すると患者の親族から小言が出た。最高學府の病院ともあるものが患部を切除しないでもかくの如く治るものを、患部を切除しなければ治らないと稱して開腹施術を行つたと云ふのは無責任である。これは切開しなければならぬか、切開しなくてもよいかは開腹前から何らかの方法で判るべきではないか、と云ふ批難が出たのです。この實例などはなか／＼面白いと思ふ。本人は患部を切除してもらつて、もう病氣は無いと思つたその觀念で治つて了つたのですが、その病人が切開して貰はないで、もう『病氣は無い』と

云ふ觀念を果して得たかどうかは疑問なのです。だから實際は肉體を切開して貰ふ貰はぬはどちらでも好い。もうこれで『病氣は無い』と云ふ觀念を得さへすればそれで病人は治るのであるから、その觀念に到達せしめる手段として醫者は物質的方法を用ひる。『生長の家』では眞理を説いて人間本來『病氣は無い』の實相に到達せしめる。醫者は醫者として物質的方法に賴らねば『病氣は無い』と云ふ觀念に到達し得ない人に對機的な應病與藥の方法を用ひたのですから、『患部を切開しなくとも斯く治るものを』と云ふ患者の親族側の批難は當らない事になるのであります。

小木博士——私も四五年前に胃潰瘍をやりましたが自分で治しました。或る日妙な吐き氣がするので、吐いて見ますと、鷄卵大の血液の凝塊のやうなものが一つ出て來ました。暫くすると、もう一つ同じ位の血の凝塊のやうなものを吐き出しました。翌朝變に腹が脹つて灌腸をして見たいと云ふ氣がしますので灌腸をして貰ひますと、眞黑なタール樣の血液便が出たのでありました。『ハア、、これは血液だな、惡血はこれで下りたのだ。すつかりこれで惡いものは出た。もう病氣は無い』と思ひましたね。大自然が治す、自然の治す力と云ふことをその頃から知つてゐましたから、別に藥を飲む譯ではなく、食べ物もどんな食べ物でも與へられる物を難有く

思つてたべれば好いと思つて固い御飯でも牛肉でも魚肉でも、食べ過ぎは致しませんでしたが、平氣で食べました所、それ切り私の胃潰瘍は醫者にも罹らず治つて了つたのです。今から考へますと、その時旣に『生長の家』で說かれる所を知つてゐた譯ですねえ。

谷口――熊本支部の澤田正人さんが見眞道場へ來られた際に此麼話をせられました。澤田さんの親類に當る今はもう七十歲以上になるお婆さんがある。此のお婆さんが今から二十年程前に胃癌だと云ふので切開手術を受けた。ところがこれも開腹して見ると、胃癌が諸々方々に飛火をしてゐて、患部が廣汎にわたつてゐるために手術の手の下しやうがなく、そのまゝ患部を切除しないでソツと縫合して置いたのです。本人は患部を切除して貰つてもう病氣は無いと信じた。そのためずん〳〵病氣がよくなつて、それ以來二十年間も達者で生きてゐると云ふ話をせられました。病氣と云ふものは本當に無いと解ればどんな病氣でも治るのですなア。或る日一誌友が來られた時の話にその人の知人に花柳病の醫者がある、その醫者の診療室には一臺の大型のニツケル鍍金のピカピカの醫療機械が置いてある。その醫者は一年に一遍もその機械を使つたことがない。『これは君、一體何をする機械だ』とその友人が醫者に訊くと『これは置いとくだけで病氣が治る機械だ。此の機械を置いとくと妙に患者が威壓されてそれで病氣が治るのだ。

この機械を置いとかんと、どうも病氣の治りが惡い』と云つてゐたさうです。

小木博士――自然の治す力は實に不思議なもので、私の知人に膽石症を患つた人がありましたが施術も何もしないでこれ位の膽石が（と直徑一吋餘の圓を指で示さる。）自然に排泄された人があります。小指の先程の膽石が出るだけでも隨分痛むものださうですから、これ位の膽石が排泄されるのは隨分痛かつたどらうと思ひます。東郷元帥も昨年から膀胱結石でなやまされたさうですが、あの人だからあの痛みに耐へ得たのでありませうな。併し、もう少し自然の治す力を知つてゐられたらもつと長生せられたかも知れない。喉頭癌の治療にも三十五萬圓のラヂウムを使つたと云ひますが、三十五萬圓のラヂウムの代りに『生長の家』のパンフレットでも持つて往つてあげたら却つてもつと長生されたかも知れません。東郷さんに會つて『生長の家』の話をしてあげようかと云ふ思ひが空想のやうに心を掠めたこともありましたが惜しいことをしましたわい。

森田――三十五萬圓のラヂウムよりも五錢の生長の家叢書で救はれると云ふことが往々にしてあるんですからなア。

岡善吉――昨晩、私のところへ京都の在郷軍人會長をしてゐられる方が來られまして十二時過ぎ

まで自分が癒つた事についてまるで私が治したかのやうに感極まつた喜びの詞を述べて行かれましたが、明日は是非とも誌友會に伺ひたいが、まだ誌友になつてゐないから、今日は先づ誌友に申込まして頂くと云つてゐられました。

谷口――誌友でなくとも御出席になれば好いのに。

岡――さう申しましたけれども、本日は生憎、どこかで實彈射撃があるので、その席へ公務として出席しなければならぬので失禮させて頂くが、先づ誌友にならせて頂いて、それから次回にはと云ふ話でありました。近頃、あそこへ行けば何か病氣を治す好い方法があるとか申しまして私の宅へチョイ／＼訪ねて來られる方があるのです。この在郷軍人會長の方も、本來軍人である位ですから頑丈な身體をもつてゐられたがフトした心の悩みから數ケ月前から不眠症に罹られた、夜は少しも眠れない。晝は頭が朦朧として了つて思考がまとまらないで事務をとることが出來ない。ところが何處からか、岡さんところへ行けば何か好い方法を教へて貰へると云ふことをお聞きになつて私のところへ尋ねて來られたのです。それで、私は『生命の實相』の分冊のパンフレットを一冊おあげして『これをお讀みなさい。治りますから』と云つて置いたのです。昨晩この方がお出でになつて云はれるには『あのパンフレットを讀むと、ひし／＼私

の胸にこたへるものがある。まるで私のことを書いて下さつてゐるやうである。私の心の持方が間違つてゐた。これは病氣になる筈であると判りました。讀んでゐるうちに元氣が出て、夜もよく眠れるやうになり、この通り元氣になつて明日は實彈射擊にも出席出來る。これ全く貴方のおかげである』と云つてまるで私が治してあげたやうにお禮を云はれるのです。歡談盡きず、十二時頃迄も話して歸られました。もう神經衰弱は影も止めずと云ふ御樣子です。

小木博士――神經衰弱と云ふ病氣は、實體の無い病氣ぢやから、醫者の方では摑へどころがなくてなか〳〵治りにくいが、生長の家では最も治り易い病氣ですねえ。

谷口――貴方のお腹の持病は完全に治りましたか。

横田――まだ完全に治つたと云ふ譯に行きませんが、斯う云ふ座談會に寄せて頂けるだけは快くなつたのでございます。實は先般來少しも痛まなかつたので、もう根治したかと思つてをりましたら、根治したのではなくて、數日前にまたヒドイ奴に見舞はれまして、到頭醫者の厄介になつて注射を受けました。

谷口――その時水を注射されてゐても治つてゐたのですよ。

横田――さうでせうかねえ。

森田――古い習慣の心がまだ抜けないので、注射をして貰つたら治ると云ふ注射に賴る心がまだあるから、それで注射をして貰つたら治つたのですよ。

横田――あのやうに治り切つてゐたものがどうしてまた突然起つて來たのでございませう。

谷口――それは地震なら『搖り直し』と云ふやうなものですよ。『迷ひ』は陷沒地震のやうに『搖り直し』毎にその不安定な狀態が自壞して心に本當の安定が加はつてくるのです。そして本當の安定が心に出來た時に、もう『搖り直し』も不必要になるのです。ところで、まだ『搖り直し』が起るやうな狀態では、家庭に何か爭ひと云ふものがあるのでせう。

横田――あることはあるのです。父は園藝が好きでして菊の栽培をやつてゐるのですが、妹にそれを手傳へと云ふのです。菊の栽培を妹が手傳ひ始めると、父はその方の仕事をどこまでも殖やして行くのです。そんなに園藝の方ばかりの手傳ひをしてゐると、ほかの仕事がおくれるので妹はなるべく園藝の方の手傳ひをしたがらないのです。すると父は妹が仕事を手傳はぬと云つて小言を云ふのです。

谷口――ほかの方の仕事が遲れるなどゝ云ふことを云はないでお父さんの言ひなり放題に菊の栽培の仕事をなすつたらどうですか。

横田――さうすると妹の家事の仕事が出來ないのです。炊事やら裁縫やらが遅れてくるのです。そのために炊事が遅れてくると父はまた御飯の時間が遅れたと云つて小言を言ふのです。

谷口――さう云ふ小言が出るのは、妹さんが頭から『お父さんの云ふことは無理だ』ときめてかかつてゐるから、その心が反映してお父さんが無理を云はれるやうな顯れ方をなさるのですよ。こゝは自分の尺度を捨てゝ了つて『これは無理だ』と自分ぎめの寸法で測らぬことですよ。その反對に『お父さんの云ふ事に無理はない』と頭からきめてかゝつて、何でも素直にハイ〳〵と云ふやうにしてお父さんに從うて行くやうにして御覧なさい。お父さんは屹度無理を云はれなくなります。だいたい人間はこれをしたら無理だとか、あれをしたら無理だとか云ふやうに、自分で自分の力を限らぬことです。自分で力を限るから、自分の力が出なくなつて『これは無理だ』と云ふことになるのです。ナポレオンの辭書には『不可能』と云ふ文字がなかつたやうに、『生長の家』には『無理』と云ふ字はないのです。無理だと思ふから、その思ふ通りに心の力でその無理が具象化して顯れて來るのですが、何でも與へられるものを無理だと思はずに受け從うて行くやうにすれば、相手が無理を云はなくなるか、自分自身がそれを無理と感ぜずに受ける力が湧いて來るかします。自分の力でどうしてもそれが出來ない場合には、他の

ものが出て來てそれを遣りとげる力を添へてくれるやうになるものです。
宮信子さんと云へば『生長の家』の座談會記事によく出て來られてそれを讀む人々に澤山感謝されてゐられる方ですが、その方の世話されたかたに佐藤順吉さんと云ふ二十歳になる青年がある。最初は『生長の家』に幾分反對してゐられたが、宮さんの感化を受けて近頃では大變好い方になつてゐられる。來年徴兵檢査であるから、それまで何處へでも働きたいと云つてゐられたので、『生長の家』へ來られるお孃さんが、或る人の養鷄場へ世話してあげたのであります。最初巣籠りしてゐる親鷄のところへ卵をとりに行くとその親鷄が怒つて差出した手をコツンと喙くのであります。佐藤青年が考へるには『こんなに鷄が私を喙くのは鷄と私との間に和解が出來てゐないからである。それでは鷄と和解しよう』と思ひまして、今度卵を貰ひに行つた時には先づ鷄を愛撫するやうにその背を撫でまして、人間に云ふやうに『お前の卵を一つ呉れよ』と言ひ聞かせてから卵を貰ふと云ふことにせられたら、不思議にその鷄が佐藤青年の手を喙かなくなりました。互ひの間に和解が出來てさへゐましたら、人間でも鷄でも喙きに來るものではないのです。お父さんが無理を云ひ言葉で小突かうとせられるのは、こちらの心に小突く心があるからなのです。その養鷄場に大きな犬が一匹飼うてある。暫くのうちに佐藤青年に

なついて來て佐藤青年が餘所から歸つて來ると喜んで跳びかゝつて來る。跳びかゝつて來るのは好いけれども、動物のことですから泥だらけの四つ足で容赦もなしに跳びかゝつて來て着物を汚すのは勿論、手の皮膚などに爪を立てるのです。これは互ひに憎みでもなければ爭ひでもない、愛の表現であるけれども、愛の表現でもそれが過度になつて相手を傷けるやうになるのは互ひの間が調和を得てゐないからである。本當に調和を得てゐたらこんなに引つ掻かれはしないであらうと佐藤青年は思ひましたので、今度、犬が跳びかゝつて來ました時には、犬の眼をジッと見詰めて『犬と自分とは神に於て一體であるから、互ひに一體に調和して引つ掻くこともなければ引つ掻かれる事も無い』と斯う暫く念じてゐますと、犬の方も暫くは佐藤青年の眼をジッと見詰めてゐましたが、次第に眼をそらして俯向いて來ます。やがてもう跳びかゝらないであちらへ往つて了つたさうです。此の青年が或る日もう一人の雇人と一緒に西宮市の某製材所へ風呂焚き用の木材の切れ端を買ひに往つて荷車に木片を滿載して×××の養鷄場まで曳いて歸られたのです。途中に坂道がある、中々重いので二人の力では曳き上げ切らない。併し別にこんな重い物を引つ張らされて無理なことを命ぜられてゐると云ふやうな不平はない。佐藤青年のことであるから總ては調和してゐるから必ず何處からか力が出て來てこの荷車は無

事その坂道を越すことが出來ると信じて渾身の力を揮つて荷車を坂の上へ引上げてゐたのであります。もう自分の力が盡きてしまつたかと思ふ頃になると、不思議に誰かゞ荷車を後から押してくれてまた上れる。こんなことが數回ありましたが、最後に荷車の轍が砂利をしいた泥濘の中へ食ひ入つて、いくら引張つても、誰かゞ後から押してくれるやうでも、いつかな動かなくなつて了つたのです。かうなつた荷車を引つ張れと云はれたら無理だと普通思はれますけれども、無理だと思はないでその荷車を引張つてゐる人には、これでさへも尚無理ではないのです。『無理』だと自分の尺度で寸法をつけるから無理になるが、『無理』だと自分の心で寸法つけぬ人には無理にならぬ。その荷車をなほも佐藤青年が引張つてゐますと、どこからともなく馬方があらはれて、馬を連れて來てその荷車を引つぱつてくれて難なくその坂道を上がり切ることが出來たのであります。その馬方が云ふのには馬の力でこれ位力が要るのではこの荷は百貫位あると云ふのです。百貫の荷を曳けと云ふのは無理だとか、何だとか、私の尺度で判斷しないで、出て來る其のすべてを神に委かせて全力を盡してゐると、神は全ての力であるから、人間だけではなく馬でさへも神は遣はし給うて力を添へ、一見無理と見えるやうなものでも無理でなくやりとげることが出來るやうになるのです。だから貴方の妹さんでも、お父さんの被仰る

ことを自分の尺度で『これは無理である』とか『これは無理でない』とか、あらかじめ自分の成心で寸法をつけぬやうになさつたら、貴方の家庭の中でも『無理』も『爭ひ』もおのづから解消して了ふのではありませんか。

横田――成る程、さう云ふやうに承れば成る程と云ふ氣が致します。妹にも云つて實行させるやうに致しませう。もう一つお父さんと吾々の間に意見が一致しないのは、家が複雜になつてゐまして佛壇が二つある、ある靈覺者に伺ひますと、父の方の因緣があるから父自身がこちらの佛壇で禮拜せぬとこの家の病人は治らぬ、と云ふのです。そして父自身も病身なのです。それで吾々が父にその方の佛壇も丁寧に禮拜して下さいと申しますと、父はそんな佛壇を拜む必要はないと云ふのです。それでも吾々が拜んで欲しいと云ふ、父は拜む必要はないと云ふ。互ひに爭ひが出來ると云ふやうになるのです。

谷口――何でも『是非斯うして欲しい』『斯うでなければならぬ』と此の『是非ほしい、ねばならぬ』に捉はれますと心が互ひに引つかゝつて爭はなくてはならなくなるのです。この『欲しい、ねばならぬ』を捨てたときに家庭の平和は來るのです。自分で『斯うでなければならぬ』と云ふ寸法を持つてゐると、さうでないものは皆な間違つてゐるやうに見える。さうすると

心の中でどうしても非難する。心の中で非難すると、言葉に出して非難しなくとも必ずそれが感應して互ひ互ひに意地惡をやるやうになつてくるのです。だから、お父さんが佛壇をお拜みにならなかつたとて、『お父さんが拜まぬから惡い』とお考へにならないで好いでせう。『一人出家すれば九族天に生る』と云ふ言葉がある。一人でも本當に悟れば一家全體は救はれるのです。お父さんが佛壇を禮拜なさらなければ、この分はお父さんの分だと思つて貴方が代りに禮拜してあげるとよろしい。お父さんを咎める心になるより餘程自分も氣持がよい。

森田――心と云ふものは默つてゐても感應するものですねえ。私は病人の治療に時として、斯う患部や脊髓を指壓してあげることがあるのですが、私の場合には、その病人の家に念佛の足らぬ場合には自然に口にお念佛が出て來る。その病人の家に祝詞の足らぬ場合には、私の口から祝詞が自然に出て來るのです。あの上野さんですねぇ　あそこで治療してあげてゐますと、私の口のうちにおのづから祝詞がのぼつて來るのです。それで『上野さん、お宅は佛壇はよくお祭りになりますが、神棚の方はほつたらかしでせう』と申しますると、矢張りさうでございました。心と云ふものは斯う云ふやうに默つてゐても感應するものでございますねえ。

谷口――遠く離れてゐても精神は互ひに感應するものですよ。小豆島に川潮さんと云つて醬油の

釀造業をしてゐられる奥さんがある。その御主人がもう二年も前から精神病で大阪精神科の石橋分院に入院してゐられる。今迄少しも快くならなくつて、訪ねて往つてこちらから話しかけても話の意味がよく通じない位で續いてゐたのでした。ところが二、三ケ月前にこの奥樣が或る人の紹介で生長の家誌友におなりになつた。そして此良人の病氣をどうしたら好いでせうかと尋ねられた。それで四國に精神異狀の息子があつたのを、母親が生長の家家族になられて神想觀をして一生懸命お祈りになつた結果、治つた實例があるから貴方も小豆島から神想觀して大阪郊外の石橋にゐる良人のためにお祈りなさいと申して置いたのであります。ところが、それから二ケ月程してその奥さんがお出でになつてお喜びになるには『唯今病院にゐる良人に會つて來ましたが、この一ケ月半ばかりの間に、九分通り病氣が治つて、今迄こちらが何を話しても少しも意味が分らない樣子で受付けなかつたが、今度は、何を云つても意味が分つて、それに對して温和しく應答します』と喜んでゐられました。之は明らかに遠く離れてゐる夫婦間の精神感應でありますねえ。その時に此の奥さんが被仰つたところによりますと、主人がさう云ふ病氣であるから自分が中心人物になつて醤油の釀造にあたつてゐる。ところが伯父さんがあつてその人が營業上の相談役と云ふ風になつてゐる。この奥さんは出來るだけ此の伯父さんの氣

に入るやうに氣に入るやうにと心掛けてゐるのだけれども、どう云ふものか其の伯父さんの氣に入らない。事毎に出來るだけ相談して指揮を仰いでゐる積りだけれども始終『相談せぬ、相談せぬ』と云つて小言を云はれる。何事でも其伯父樣の氣に入るやうに心掛けてした事が却つて意地惡く叱られる原因になる。それで此の奥樣は『どうして伯父さんはこんなに意地惡るなんだらう？』と前から考へてゐられたのでありますが、或る日、『生長の家』を讀んでゐられるとフト氣が付いたと云ふのは『私がこんなに伯父さんに氣に入らないのは、私の方に伯父さんを嫌ふ氣持があるからではないか？』と反省されたのです。『さうだ、私が内心で伯父さんを嫌つてゐるから、こんなに私が伯父さんの氣に入らないのだ。では今から伯父さんを嫌ふ氣持を捨てまして、好きな好きな伯父さんにしませう』と心の中に固くちかはれたのです。するとその翌日伯父さんに會ひますと、大變伯父さんの人格が變つてゐる、それは少しも意地惡のところはない、深切な深切な伯父さんになつてゐる。それ以來、その伯父さんに叱られたと云ふことは一遍もなく、相談しないやうなことがあつても一寸も小言も云はないで、向ふの方からサッサと出て來て世話をして下さる。昨日までの意地惡の伯父さんは本當に存在したのではなく、自分の心の影であつた。實相の伯父さんは唯深切な善いばかりの伯父さんであると解つ

た。其時この奥さんは二人の病氣を治した話をせられました。此の奥さんの遠縁の親類になる方が、風邪をひいたのが因で輕い神經痛に罹つた、それで、或る温泉へ入湯に行かれましたら、却つて神經痛が重くなつて腰が痛み脚が痛んでもう動けなくなつて了つた。便も便器でとつて貰ふと云ふ始末である。そこへ川瀨さんの奥さんが聖典『生命の實相』をもつてお出でになつて生長の家の話をし『神想觀をしてお祈りなさい。直ぐに病氣は治るから』とお話しになつた。ところが、この病人さんはカチ〳〵の眞宗なのです。『阿彌陀佛を念ずると云ふことはしたことはあるが、神樣に祈ると云ふやうなことはしたことがないから、どうも祈るのは變な氣がするから、貴方、代りに祈つて下さい』と云はれるのです。『そんなら祈つてあげます。今晩何時に祈つてあげますから、そのつもりになつてゐて下さい』と斯う云つてお歸りになつて、その時間にお祈りになつた。すると翌朝その人の宅から川瀨さん宅へ電話が掛つて來たのであります。『昨晩は祈つて下さいましたでせうねえ』と云ふのです。『えゝお祈りして差上げました』『それは昨夜から迚も變なことがあるんです』『どんなことがあるんです』『迚も變なんですよ、昨夜まで痛んで動けなかつた病人が急に痛みがとれて今日は自分で厠へも行き、起きて坐つて御飯をたべたのです』と云ふやうな譯です。その變りかたが激しいので、治つた方も驚いてゐ

るし、祈つた方の川潮さんも『私のやうなまだこんなに信仰の未熟なものが祈つてもあんなに効くものでせうか』と云はれて吃驚してゐられるのです。實際眞理を知つて祈れば効くのだから仕方がありません。もう一人はやはり川潮さんの知人の幼兒で腎盂炎だとか云ふのでもう小豆島の御醫者さんが『もう駄目だ』と云つて匙を投げて了つた。それで高松から醫學博士を招び迎へて診斷して貰つたがこれも駄目だと云ふのです。たゞ一縷の望みは二十四時間以内に少しでも食慾を催して來たら取止めるかも知れないが多分だめだらうと云ふ診斷です。そこへ川潮さんの奥さんがお出でになつた。見ると幼兒が死んだやうになつてゐる、どう云つて祈つてあげたら好いか判らない。醫者が二十四時間以内に食慾を催して來たら治るかも知れないと云つたと聞いて『どうぞ食慾を催して參りますやうに』と祈られたさうであります。すると醫者の匙を投げたこの幼兒が急に食慾を催して來て回復したのであります。斯う云ふやうに、心の力は感能するものなのです。吾々の心と心とは互ひに感應して病氣を造つたり、病氣を治したりしてゐるのです。

昨夜瀧本さんが來られて、胃潰瘍の患部を切除しないでその儘治つて了つた話をされました次にお話しになつたことですが、七尾から尼崎へ移轉して來られた杉江さんですねえ。この人

は、東京支部の服部さんと相並んで病氣を話でお治しになるのにすぐれてゐる方ですが、何人に對しても隔てのない實に柔かい感じの親しみのある方です。瀧本さんが阪神電車にお乘りになると、向ふの方から、こんな恰好をして手を振りながら『瀧本さん、瀧本さん』と云つて呼んでゐる人がある。それが杉江さんなのです。瀧本さんが杉江さんに近付いて行かれると、杉江さんは『最近病人を二人たすけたよ』と云つて吾が事のやうに雀躍りして喜んでゐられるのです。それはどちらも大阪天滿の人で、一人が治つたのでまた一人を連れて來たのださうです。神戸の山田薫さんが丁度その病人が眼のあたり治つた席にゐられたので今朝は山田さんが私宅へその實況報告に見えた譯です。山田さんが云はれるには『杉江さんの話し振りは實に旨いもんですねえ、あの話し振りではどんな病人でも癒る筈です。『自動車で運び込まれて來た病人に、頭から『もう歸りには走つて歸れますよ』と云はれる。『今日は手を當てないでも治りますよ』などゝ山田さんも口を添へる。そして杉江さんは一時間ほど病氣が本來ない眞理を話してから、『起つて御覽』と云はれる。起つと『起てたら歩けるでせう』と云はれる。部屋を病人に一廻り歩かせて『身體をかゞめて其處にある蒲團を拾つて御覽』と云はれる。病人は兩脚をそろへて身體を眞直に屈めようとするから身體が充分かゞまないので蒲團に手が屆かない。

『そんなに無理な姿勢をせいでも、片足を前へ出して』と、まるで兵隊に號令をかけてゐるやうな鹽梅で、その言葉の通りに病人が動いてゐる。言葉の力ですねえ。それで病氣が治つて了つた。今迄の病人は健康體になつて歸りにはもう自動車にのらないで山田さんと一緒に電車の停留場まで歩いて來て、山田さんは神戸行の電車へ、病氣の治つた人は大阪行の電車へと別れて歸られたさうです。

森田――本當に杉江さんは六月の神誌を見ましても、言葉の注射が旨いですねえ。注射の原液の處方は聖典『生命の實相』の中に書いてありますが、注射を上手にすると下手にするとで、大變その効果が異ひませうねえ。私は病人に對する此の記事を參考にしてゐるのです。

谷口――斯う云ふ眞理の言葉の注射の上手な人が阪神間に移轉して來られたと云ふことも、神樣の攝理なのですねえ。神樣は吾々が肉體意識では氣付かない間に、チヤンとあらゆるものを用意して置いて下さるのです。もう京阪神間にも人物が揃ひました。神戸の山田さん、宮さん、御影の杉野さん、尼崎の杉江さん、大阪の塚田さん、京都の岡さん、石川さんなどいづれも人格者ぞろひで生長の家の錚々たる人物です。斯う云ふ人物を神樣は揃へて置かれて、私の方からは別に薦めもしないのに誌友會と云ふものを神戸にも大阪にも京都にも、自發的に作らしめ

られた。神戸市は住吉の西四五丁のところでありまして、十分間も電車に乘れば直ぐ本部へ來られますから、別に神戸支部を作る必要はない。それに神戸にも別に支部を作つて集まらうと云ふ人が出來て來た。妙なことが始まるものだと思つてゐたのですが、すると六月七日東京支部の服部さんが、本部の假屋敷地を提供したいと云はれる宮崎政吉さんの御令息と一緒に見えられまして、本部を東京へ移轉して欲しいと申出られました。東京は日本の中心地であり本部が東京へ移轉するとなると、見眞道場も東京支部道場と云ふことでなしに本部の道場として大規模に出來る譯であり、全國の誌友も喜んでその建設費を分擔して下さるであらうから、名實共に全誌友のための本部道場が出來上る譯であるから是非とも本部を東京へ移轉して欲しいと云ふ話だつたのです。平地六百坪のほかに小高い丘數百坪、合計千數百坪程の土地が提供せられました譯です。場所は澁谷穩田で、明治神宮へ四五丁、銀座から東京市を一周する環狀線に面した便利な場所です。宮崎氏としては、其上に見眞道場を建設して提供したい御志も有つてゐられるやうですがこの上、見眞道場も宮崎さん一人で御建築になるとなつては、親戚から苦情が出ては申譯がないから、この方は暫く御遠慮申上げて、本部をその土地に移轉した上、本部見眞道場をその附近に建設するとして、其建築費を全國誌友から公募する事にしたいと云ふ申出だ

つたのです。これがその敷地の寫眞です。これが東京支部委員たちの敷地視察の記念寫眞です。假道場は、この附近に百二十疊敷位のものが建つことになるらしいのです。（寫眞が順次回覽される）

齋藤――わたくし先生が東京へ御移轉になつたらどうしませう。

石川夫人――私としましては先生が東京へお移りになりますことは誠に淋しうございますが本部が東京へ移轉になりますことは『生長の家』のために嬉しうございます。どうしても『生長の家』が大きく伸びるためには東京でなければならないと私も思つてゐました。併し東京へお出でになつても年に幾回かはこちらへ來て頂けませうねえ。

谷口――年に幾回位ではない、毎月來たいと思つてゐるのです。さう云ふ御用で服部さんはお見えになつたのですが、その時服部さんは斯う云ふ興味ある土產話を有つて來られました。服部さんとこへ來られる長谷川と云ふ人の知人の吉田靜子さんに、或る日服部さんが『生長の家』の話をせられて聖典『生命の實相』を貸しておあげになつた。『生長の家』の話をきゝ『生命の實相』を讀むと、吉田靜子さんは昂奮して充分眠れなかつた。うと〳〵してゐると同じ彫刻家仲間で足立君に似た男が夢うつゝの間にあらはれて、吉田靜子さんの身體を好い氣持に夜通し撫

で擦つてくれたのです。その擦つてくれた男は足立君とは異ふ別の人だがどうも足立君によく似てゐる人であつたと云ふのです。服部さんは『足立君に似た男』と云はれて氣がついて（私がその彫刻家の足立君に似てゐるのださうです）それはこの人と異ふかねと云つて、私が先般服部氏のアトリエで、背景に色々の塑像をおいて彫刻家然として寫した洋服姿の私の寫眞を見せたのです。すると『さうです此人に違ひない』と云ふのです。『これが生長の家の谷口先生だよ』『谷口先生も彫刻家なんですかねえ』『いやこれは僕のアトリエで寫したんだ』と云ふ譯です。妙なことがあるものですが、『生命の實相』をお讀みになる人の所へは私の靈魂の感應があるものらしいのですねえ。

それからこれも服部さんから聞いた話ですが、新渡戸博士の孫のKさんが胸の病氣を患つて、醫療と云ふ醫療、あらゆる醫療を盡したけれども快くならないで、もう絶望だと思つてゐる時に某氏からの紹介を受けて服部さんとこへ來られたのです。一時間ばかり服部さんが『生長の家』の話をされると、それ以來元氣になつてすつかり病氣が治つて了つたのです。この人の伯父さんが湘南にある××病院と云ふ結核療養所の院長さんです。或る日此のKさんが××病院を訪れて、自分の病氣が治つた話をせられると、その院長さんは手を拍つて感嘆して『さうだ

！　そのほかに此の病氣の治る道はない！　お前がその方法で治つたと云ふなら、一つわしの病氣を治してくれないか』と云はれた。それを聞くとKさんは『ヤツと私は私自身の肉體を自分で運轉し得るやうになつたばかりですから、まだ人の病氣を治すやうなことは出來ません、そのうちに服部さんに御紹介申しませう』とお答へになつたさうですが、何でもその院長は御自分は脊髓カリエスにかゝつてゐたのださうですが、まだ服部さんにはお會ひにならないが、時々入院患者中の醫療では治る見込みのない重患者に『生命の實相』をお勸めになつてゐるさうであります。先日、名は申しませぬが、一燈園關係の人から斯う云ふ手紙を頂きましたから讀んでみます。（讀む）『未だ一度も御尊顏を拜しませんが、毎號誌を通してお導き下さいます事は此の上もない有難い事で御座います。全く感謝に堪へません。あの力強き信念をお與へ下さいまして私ほんとに救はれました。過去の罪深い私の前半生の生活を赤裸々に申述べまして、今後の御指導を願ひ度いと存じます。御貴重なる時間を頂きます事を心苦しく存じます。惡しからずお許し下さいませ　私は本年二十八歳になる青年で御座います。小學校卒業後、鐵道の電信に入りまして大正十一年十二月に關西線湊町驛電信掛として勤務する事になりました。二ケ年間勤めましたが、ふとした風邪がもとで肺を病み、大正十四年八月退職して今日に及んでゐ

ます。その間に私はほんとに罪多い生活をしてきました。病苦、家庭苦等々の煩悶に苦しみました。此煩悶を如何したら脫れる事が出來るだらうかと日夜苦しみ續けたあげく、「自殺」だと決心したのが、昭和四年の四月頃です。丁度その時友人から借りて讀んだのが西田天香さんの「懺悔の生活」と賀川さんの「死線を越えて」でした。そして私は救はれました。「私の走るべき道は一燈園だ、今までの罪亡しに。そして心の慰安所を求めて。」此の兩書が何んなに力強さを與へて吳れた事でせう。殊に「死線を越えて」は涙なしには讀まれませんでした。三晩殆ど徹夜で讀みました。「もう自分は死なない。肺病がなんだ。信じて働けばよいのだ、貧民窟のあの生活が證明してゐるではないか、おゝ働かう。捨身になつて唯神を信じて働くのだ」と決心して天香さんに入園希望の手紙を差上げまして七月廿八日に廣島で一回會見しようと云ふ御返事に接しまして、廣島で面會し色々とお敎を願ひました。今迄働いた事のない私です。殊に肺を病んでゐます。托鉢が出來ますかと尋ねられて確な返事も出來ません。兎も角、やれる所までやる。三日續くか一週間續くかと云ふ希望で入園さして頂き、八月十五日に京都へ參りました。一ケ月托鉢いたしましたが體が變でならない。氣にかゝつてなりません。ほんとに捨身になつてゐなかつたのです。帝大病院で診察を願ひました所、養生する必要があると云ふのです。當

番さんに相談いたしますと、歸んなさいとも居なさいとも、私としては云へませんと云はれるのです。そこで私は、こんな弱い者が居てほんとの托鉢が出來なかつたら一燈園を傷つける。祈りに祈つてゐられる同志に申譯ない、もう少し强くなつて來ようと思つて國へ歸つたのであります。その後「光」誌を通じて「生長の家」ある事を知り早速御送附願つて讀みました。所が何だか大舟に乘つた樣な氣になつて何とも云へない力强さを與へられました。それからの私は强い信念に生きる事が出來て病氣なんか問題にしなくなりまして農業を手傳つて働いてゐます。當時肺の方は餘り大した程ではありませんでしたが、胃腸の方が餘程惡かつたので、少し無理な働きをすると生臭いオクビが出て時としては血樣なものが上つてゐました。每號御指導を受けるに從つて十二貫位の體重が追々と肥つてきまして唯今では十五貫位になつてゐます。働きの方も思切つて出來るやうになつて嬉しくてなりません。先生ほんとにありがたう御座いました。全く御禮の申樣も御座いません。先生私には一つの大きな煩悶が御座います。それは家の者と相一致せられない惱みです。これには十ケ年間惱み通してきました。誠にお恥しい次第で先生にこんな御相談は申上げられないので御座いますけれども何卒お許し下さい。このためにはほんとに苦しんでゐるのです。近い内に一度お邪魔いたしまして色々と御相談いたし御

指導願ひ度いと存じてゐます。先生の御都合如何でせうかお伺ひ申上ます。私は、在園最初の念願として、今後許されて生きる事が出來るのなら弱き人々のために働かせて頂き度いと云ふ念願で御座います。私は十年前に肺で死んでゐるのです。一度死んだ私、今許されて生きてゐる事は「丸儲けの私の身」。世の多くの病める人々のために何かのお役にたつやうな事があれば此の上もない喜ばしい事で御座います。私は今の所、最初の小さい念願に向つて走らなければ私の人生は餘りにも淋しすぎます。先生何卒此の貧弱なる私のためによろしく御指導下さいます樣呉々もお願ひする次第で御座います。ほんとにつまらぬ事を申してすみませんでした。合掌』

此の青年は一昨日私の所へ訪ねてお見えになりましたが、家庭の中に惱みがあると云ふのはどんなことかと思つて聞いて見ますと、此青年は一燈園に勘違ひのかぶれやうをして、貧乏になりたい貧乏にならねば惡を犯してゐるやうな氣がする。貧しいと云ふことが善事であると思つてゐるのです。ところが例外は別として、何處の親でも子供が貧しくなると云ふことを喜ぶものではない。だから息子の云ふ處と親の云ふ處とが一致する譯はない、之が爭ひの元となり家庭の惱みになつてゐるのです。それで私は『一燈園』と『生長の家』との異ふところは『一燈園』では物質や眼に見える財を有るものと認めるから根こそぎ捨てさせるのです。『生長の家』

では『物質は本來無い』とするのですから無いものは無いのであるから、特に『捨てよう』と力まないのです。『どうでも斯うでも捨てなければならぬ』と力むからこそ周圍と衝突するのです。力んで周圍と衝突するのは何かを握つてゐるからです。まだ本當の『空』になつてゐない『空』ならエーテルのやうで何物とも衝突しない。それで持ち物の一切を捨てようと思つて衝突する人は何を握つてゐるかと云ふと、『無』を握つてゐるからなのです。『無』なら握らなくてもよささうなものでありますけれども、『わしは無だぞ』と『無』を握つて鯱鉾張つて固くなつて了つてゐるから、周圍と不調和になつて家庭の中が面白く行かないことになるのです。本當に『無』だとわかつたら『無』にも執着しないからそんなに鯱鉾張らない、自由自在になつて何物にも捉へられなくなるのです。節約しなければならない、紺の筒袖をきなくてはならない、財産を捨てなくてはならないと、物を減らして行かなければ『無』に達しないやうなことではまだ『物質』を『ある』として心の中で握つてゐるのです。

小木博士 ―― 趙州和尚が僧堂にゐると弟子が道を聽きに入つて來た。趙州和尚は『何を擔いで來たか。その擔いでゐるものを放して來い』と叱り付けたと云ふ話がある。『無だ、無だ』と云つて『無』を擔いでゐる人がある。『無と云ふもの』だと思ふから『無』を擔ぎたくなる。『無』

とは『何にも無いことぢや』とわかつたらもう擔がなくなる。『裸かになつてすべてを捨てゝこい』と云つたら、着物を脱いで來ることだと思つて身體を眞裸にして出て來るやうなことでは『まだ何か股間に提げて來てゐるぞ、』と云はれて間誤つくやうなことになる。（一同失笑）

谷口――そして其の股間の一物を切つて捨てゝもまだ物質は有ると思つてゐたら『まだそこに擔いでゐるものがあるぞ』と云はれたら、了ひには自分の首も斬つてほかさねばならなくなるでせう。だから『無』と云ふものは『形』を減らして『零』に近づけて行くことだと思つてゐると間違ふのです。『無』と云ふものも擔がなくなる、これが『生長の家』なのです。さうなると常道これ道、あたり前の生活が何も擔いでゐない生活になるのです。一燈園でも、本當の一燈園――眞髄の一燈園に來たら『生長の家』と同じになるのだと思ひますが、現在の一部のあらはれ方では、形の上で『無』と云ふものを擔いでゐるやうなところがある。それで私はこの私を訪ねて來た青年に云つたことですが、人と變つた生活をしたり、聖貧らしい生活をしたりせねば生き甲斐が感じられないと云ふやうでは、自分の『生命の實相』が、外からどんな裝飾を加へなくともそのまゝで尊い神の子であり佛子であると云ふ自覺が伴はないから、外面の何か變つた特色で裝飾を加へて滿足しようと云ふことになつてゐる。殊更に外的に美しく着飾ら

ないと生き甲斐が感じられないのも、わが『生命の實相』の内的莊嚴がどんなに輝しいものであるかゞ悟れない結果でありますが、それと反對に『貧しさ』と云ふ上包みで包裝しなければ何となく淋しく感ずると云ふのも、やはり特別の上包みを必要としてゐる譯であつて、本當に『生命の實相』の尊さが判つてゐないのです。だから吾々が本當にわが『生命の實相』の尊さが悟れて來ましたら、もう『富』と云ふ上包みも要らなければ『貧しさ』と云ふ上包みも要らないのです。さう云ふ特殊な上包みを必要としないでゐて、當り前の生活が難有く出來るやうになる。さうすると實生活も整うて來て、自然に適當に富も備はつてくるのです。さう云ふやうにしてやつて來る富は心の影としてやつて來るのであるから捨てる必要も何もない。それは影であるから捨てることが要らないのです。キリストが先づ『神の國とその實相をもとめよ、その餘のすべてのものは汝等に加へらるべし』と云つたやうに、實相の把握からやつて來る外的世界の調和と豐富とは別に捨てる必要はない、それは實相の顯現であるからです。

此れに反して形の方から富を求めたら、それは實相の顯現でなくなつて來る、其處に無理があり衝突が起つて來る。また形の上から貧しさに執して、貧しさを求めてもまた無理があり衝突が起つて來るのです。五月に上京致しました時の事ですが、最後の誌友會の日に一燈園信者の熱

心な方が一人來られまして私に問答を始められました。その方が云はれるには『生長の家』では神想觀と云つて三十分間も合掌瞑目して何もしないでジッとしてゐる。一燈園では托鉢と云うて働くことが神想觀である。下座におりて一番下の仕事を、庭掃除をするとか、草をひくとか、奉仕させて頂いてゐると一番心が落付いてそれが神想觀になると云はれるのです。『貴方の一燈園はさうですか、それが一燈園なら、一燈園はまだ物に捉へられてゐますねえ。』と私は云つたのでした。斯う私が云ひますと其方は兩手を揮つて周圍に振向き『私は一燈園の純粹な信者である、その一燈園の純粹な信者と、生長の家の谷口先生とが今「無」の問答をするところですから、皆さん今は一大事の問題ですから、こゝへ集つて來てお聞きなさい』と大聲に叫ばれるのです。私は『一燈園では藥がまだ要りますねえ』と云ひました。それから先日一燈園の機關雜誌「光」を見ますと、天香さん自身が「自分は預つてゐる同人が病氣になるとゾッとする」と云ふやうなことを書いてゐられたのを讀んだことがあります。これでは物質の存在もみとめ病氣の存在も認めてゐられるから、まだ〳〵「無」になり切つてゐないでせう』と申しました。丁度そこへ午後二時から川崎市の三井物産株式會社川崎埠頭事務所で講演する約束になつてゐて出迎への自動車が來たので、あとの問答を佐藤彬さんにお願ひして川崎市で講演を

すまして歸つてまゐりますと、まだその一燈園の方は私を待つてゐらつしやいました。それで私は申しました。『先刻、貴方は神想觀をするよりも托鉢が好い、じつと坐つてゐるよりも其の時間に庭掃除をした方が好いと云はれましたけれども、私に斯う云ふ體驗がある。私が一燈園の天香さんに親しくして頂いてゐました頃、或る日天香さんに私の宅へ來て頂いた。無論掃除に來て頂いたのではない、話しに來て頂いたのです。丁度眞夏の頃で一緒に氷水を飲みながら話しました。すると天香さんに隨行してゐる一燈園同人の人たちが庭掃除をする、草むしりをする、漆喰場洗ひをする、最後に各自の足を洗つて皆さんに氷水を飲んで頂いたのであります。同人の方はさう云ふ風に草をむしつたり、掃除をしたりしたことを「自分は托鉢をした」とサモ善事をしたやうに好い氣になつてゐられたのです。ところが、その善い事をしたと思つてゐる間に實際何が出來てゐたとお思ひになりますか。妻が此雜草は在る方が風情を添へるから拔かずに置いて下さいと態々斷つた雜草が拔いて了つてあるのです。丁度その頃は井戸の水がカレ〳〵になつてゐまして、下手に水を汲めば釣瓶が井戸の底を突いて水垢がモヤ〳〵と上つて來て半日位は飲料に使はれないやうになるのでした。其頃の一燈園の同人たちはそんな事には頓着なしに何でも彼でも「托鉢」と云ふ形を眞似して草を拔いたり、掃除さへしたら心が落付

く、人々の救ひとなると思つてゐるものですから、釣瓶で井戸の底をガリ〳〵掻き廻して水を汲んだものですから、翌日まで水が澄まないで困つたことがあつたのです。無論、私はその時小言を申しませんでした。結果はどうあらうとも、世の中を浄める聖業に參加するつもりでやつてゐられるのだと思ひますから、丁寧に言葉の上では「難有うございます」と云つてゐたのです。同人達は、だから、矢張り善い事をしたと思つてゐるのです。私は心の中で「下手な托鉢をしなさるわい」と思つて見てゐたゞけです。善いと思つてやつた托鉢が何故こんな結果になつたか貴方にわかりますか』と私は其處にゐられる一燈園の信者さんに申しました。一燈園の信者さんは默然と聞いてゐられました。私は語をつぎました『一燈園は「無の生活」なんでせう。無の生活ならば何故「形」に捉はれるのです。何故「托鉢」と稱する草むしりとか不浄掃除とかに捉はれ、それをしなければ何故心が落付けないと思ふのですか。形が草むしりであつたら入用の草を挘りとつても心が落付いたと思つたり、形が便所掃除であれば飲料水を掻き擾しても善いことをしたと心が落付いたりするのは、「無の生活」と云ふものが形に捉はれて了つてゐて、何でも偉さうでない端たない掃除仕事をすれば「無」の生活だと思つてゐるからなのです。「無」と云ふものは「形が無い」のであるから、どの「形」からでも這入れるのが、

「無」なのです。また形は何もしないで坐つてゐても這入れるのです。神想観をするよりも、草むしりの方が好いなどゝ云ふことはない。草むしりと云ふ「形」にばかり執するから、むしらぬでも好い草まで捩つてほかして了つて、そして大した手柄をした様に思上るやうな間違が出て來るのです。「形」に斯うした間違ひがあらはれて來るのは、形を治さうとしても駄目です。一燈園に法爾自然と云ふ言葉がある。自然に中から顯はれて來る形が道に乗る狀態ですねえ。心の内部が自然を得ることが先であつて、形がそれに伴うて無理なしに從つて來るのです。それを亂れた心其の儘で、何でも「形」の上で働いて心をあとに整へようと思ふと、心の整ふ迄の間のその心の顯れとして捩らぬで好い草を捩りとり、濁さいで好い水を濁すやうなことになるのです。「生長の家」では斯う云ふ時に先づ神想観をして心の方を整へて、それから法爾自然に動き出せば、形の方にも無駄がなくなると云ふのです。物でも紛失した時に、遮二無二「形」の身體を動かして探すよりも靜かに坐して神想観して心を整へてから動きたい方向に動き出せば、最初に閃いて見た所にスグ求むるものが見つかるやうな實例が澤山あります。形の世界は、「心」の影でありますから、「心」が先づ整うてから動き出せば、形の世界は自然に調和した相を顯ずるのです』と申しましたら、流石に一燈園の方です。「無」の準備修行が積ん

でゐるから、直ぐに解つて下さいました。人間と云ふものは『有』を捨てよと云ふと、直ぐ『無』を擔ぐ、その『無』も捨てゝ『無』さへ擔がなくなつたら本當の『生長の家』になれた譯です。

下山――私は以前一種の精神統一による靈的治療を習ひまして、唯今では電氣治療にその靈的治療を加へて人樣の病氣を治させて頂いてゐる者ですが、その治療の時に充分精神が統一しないのです。今も皆さんと一緒に神想觀を實修させて頂きましたが、どうも色々雜念妄想が浮ぶので、こんなことで好いのだらうかと思ふのでございますが……

谷口――雜念妄想は念佛を妨げずです。雜念妄想は虚の念、あるやうに見えても無い念ですから實相の念を妨げはしないのです。雜念妄想に力がある樣に思ふのが間違ひなのです。それからまた、神想觀を一つの精神統一術――氣合術とか念力術とか云ふものと同じやうにお思ひになるのも間違ひなのです。『術』なら上手下手がある、呼吸の仕方とか、丹田に力の入れ方とか聲のかけ方とかにコツと云ふものがあつて、そのコツを外すと効き目がない。それは何故かと云ふと『術』と云ふものは我の力だからです。我の力で一念突き通して往かうと云ふのですから、一寸その我の統一が破れて了ふと力が無くなるのです。ところが神想觀は我の力ではな

い、神の力、佛の力なのです。念佛と同じものです。信さへあれば、子供でも力を顯はすのです。イエスの衣に觸れたゞけで十年血漏を患つてゐた婦人が癒やされた。此の時イエスは『汝の信仰、汝をいやせり』と云つてゐる。イエスは精神統一をして治した譯でもなければ、その婦人も我の力をこめて精神を統一した譯ではない。たゞ『信』と云ふものによつて、そこにイエスに宿つてゐる癒す力とその婦人が一體となつたのです。先日の座談會で石川さんの奥さんが話された石川芳夫さんの六年間の瘤が私に治して欲しいと思つたゞけでその日のうちに消えて了つた。それは私が精神統一した譯でもなければ、芳夫さんが精神統一した譯でもない。生れ子の心で『治して貰へる』と信じたその『信』が私に宿る治す力と一體になつたのでせう。それと同じことで神想觀は精神統一でもなければ術でもない。寧ろ『南無阿彌陀佛』と云ふ念佛と同じことである。『南無阿彌陀佛』は『私は阿彌陀佛と一體でございます』と云ふ事實の證認に過ぎないのです。これから斯う力んで祈つて阿彌陀樣に救うて貰はうと云ふのでもなければ、南無阿彌陀佛のとなへやうが惡ければ救はれないと云ふのでもないのです。法藏菩薩はその四十八願に於て五逆と謗法以外のすべての人間を救はなければ成佛しないと云ふ願を立て、そしてもう既に成佛して了つてゐるのですから、既にもう吾々も救はれて了つてゐるのです。

だから、吾々が『南無阿彌陀佛』ととなへるのは、既に救はれてゐる事實の承認に過ぎないのです。それと同じく神想觀も同じことであつて、『我れ神の子である、神の力に生かされてゐる』その事實を其儘心の中でとなへるだけで既に救はれてゐる實があらはれて來るのです。別にその稱へ方に上手下手があつて、それによつて效目が變つてくると云ふことはないのです。

下山夫人 ―― 私は町川さんにお薦めして頂いてすぐ『生長の家』家族に入らせて頂いたのでございますが、私は先祖からの眞宗でございまして、眞宗の敎へでは現世利益を願つたら未來は救はれない。たゞ一心に念佛して未來の救ひをこそたのむべきであつて現世を願ふなどは間違つたことであると聽かされてをりますので、人の御病氣を治してあげたいと思ふ時、どうぞ神樣この病人の病氣をお治し下さいと祈ると、現世を願ふといふ間違つたことをするやうな不安な氣持になるのでございます。この話を町川さんに致しますると『現世を祈つても、阿彌陀佛の救ひの邪魔にはならない』とハツキリ被仰るのですが、どうも此の點私にまだハツキリしないのでございます。

町川夫人 ―― 先月、京都府に療術行爲取締規則と云ふのが出來まして、人の病氣を治してあげるには警察へ屆出て許可を受けなければならないことになつたのでございます。『生長の家』は病

氣治しではない、本を讀んで本に書いてある通りに心が改まれば病氣が自然に治るのでございますから、療術として警察の認可を受けるやうなことをしては可けないかも知れないから、一度先生にお伺ひした上にしたいと思つてをりますると、周圍の人たちが『貴女に治療しても好いと云ふ認可を受けて置いて頂かなければ、吾々が困るから、療術者として認可を受けて置いて欲しい』と勸められまして、屆出書式までわざ〳〵書いて下さると云ふ譯なのです。それで先日、警察へ認可願にまゐりませうと存じまして、電車の停留場で待つてゐますと、下山さんの奥さんがお出でになつて警察の方へ行く電車をお訊きになるのでございます。その時、この方も同じ目的でお出でになるのだとハツと直覺致しましたので『生長の家』のお話をし、一度で誌友におなり下さいましたのでございます。警察へまゐりますと、先きに來てゐる人が偉さうに云はれて叱られてゐなさるものでございますから、私もあんなに叱られるのかも知れないと思つて待つてをりますと、私の番になりますと、『どうぞまア、お掛けなさい』と打つて變つて大變御深切に云つて下さいますのです。それで私は『實は私は人さんの病氣を治さして頂いてをるのですが、別に營業にやつてゐる譯ではございませんのですが、病人を見ると可哀相で可哀相で、どうぞして治してあげたいの心で一パイになるのでございます。それで私が手を

觸れて念じて差上げますと不思議に病人が治るのです。……』と說明いたしますると『奥さんそんなこと云ふと認可されない。私はこれを營業として、以前からこれによつて生活を營んでゐますと云つてお届けなさい。さうしたら既得權として直ぐ認可されるのだから』と係りの方が何でも好いやうに敎へて取扱つて下さいました。向ふ樣の方から何でも好いやうに好いやうにと仕向けて下さるやうな譯なのです。先生、私難有うございます。

下山――私は小さい時から眞宗で敎へられて來たものですから、『生長の家』の神樣も阿彌陀佛も名前はちがつても同じ久遠本佛のあらはれである。同じものを別の名で呼んでゐるのだと、自分で自分に云つてきかせて見ましても、心から『さうだ！』とピツタリ感じられて來ないのでございます。それで矢張り神の名を呼んで『どうぞ此の人の病氣を治してあげたい』と祈ることは現世をねがふやうで恐ろしい氣がする、それでゐて人樣の病氣は治してあげたい氣がするのでございます。そこに矛盾を感じて苦しい思ひをするのでございます。

谷口――現世を願へば未來は極樂往生させてやらないと云ふのが彌陀の四十八願の中にありましたかね？

下山――それはございませんけれど。

谷口――彌陀の四十八願の中になければ、誰が現世を願へば未來は極樂往生出來ないと云ふことを掟てに定めたのですか。

下山――それは存じませんけれども、眞宗の信者は昔からさう云ふやうに敎へられてゐるのでございます。

谷口――あなたは阿彌陀佛を信じてゐるのですか。それともさう云ふ掟てを造つた人間を信じてゐられるのですか。

下山――それは阿彌陀佛を信じてゐるのでございます。

谷口――それなら、人間が途中から造つたそんな規則などはどうでも好いではありませんか。人間が現世にあらはれて現世をよかれかしと思ふのは當り前のことである。阿彌陀佛はどんな惡人でも救ふと云ふ無限の救ふ力を有つた佛樣である。その無限の救ふ力を有つた佛樣が現世の幸福を願ふと云ふ唯當り前のことを吾々がしたゞけで、もうその人間を救はぬやうになると考へるのは阿彌陀佛の御慈悲、阿彌陀佛の救ひの力がどれだけ大きいものであるかと云ふことを知らぬものである。それこそ正法を誹謗することになるでせう。それに眞宗の開山親鸞聖人のお作りになつた『現世利益和讃』には、阿彌陀佛を念じたら諸天善神がおのづから守護して現

世の利益が備はると書いてある。諸天善神に祈らなくとも、阿彌陀佛と同體の自分であると云ふ信が心の中に出來て來ましたら、その心の反影として諸天善神がおのづから守護して下さつて現世の利益がおのづから備はると云ふことになるのです。阿彌陀佛のお力が現世までも及ばないと思つてゐるのは阿彌陀佛のお力をあまり小さく見過ぎてゐるのです。阿彌陀佛のお力を小さく見過ぎると、その力は小さくしかあらはれて來ない。見たゞけにあらはれて來る。阿彌陀佛は來世だけ救ふ力しかないと思つてゐると來世だけしか救ふ力がないやうにあらはれて來る。現世も救ふ力があると信ずると現世も救ふ力が現れて來る。神戸のある眞宗信者の奥さんに春先になると眼瞼の縁がたゞれて赤くなり睫毛などがぬけて來て見苦しく氣持が惡くなる方がありました。色々と醫者にかゝつて醫療を受けて見られたが治らない。醫者は『奥さん、これは體質だから何とも仕方がない』と云つて塗藥をくれる、そして『これも藥ではない。紫外線を避けるための色素だから、まアこんなものでも塗つて置くほかはない』と云ふのださうです。數年間毎年つゞいてこの病氣が起つて治らなかつた。ところが一昨年『生長の家』に教へられて、阿彌陀佛は來世だけしかよう救はぬやうな力の無い佛樣ではないと云ふことが判つた。南無阿彌陀佛と念じて阿彌陀佛に歸一することによつて、既に救はれてゐる實相がこの世にも

あらはれると云ふことが判つた。すると、今年は、もう春先も過ぎましたが、先日、話してをられるうちに氣がついたのですが、長年の間の持病であつた眼瞼のたゞれる病氣が今年は完全に起らなくなつてゐるのです。これも別に『佛さま、此眼瞼の持病を治して下さい』と祈つた譯ではない。今迄阿彌陀佛を、來世しか救ふ力のない佛樣であると思つて十萬億土の彼方に押込めて置いたのを、來世も現世も一切を光被して遍く救ひ給ふ佛樣であると知つたとき自然に阿彌陀佛の救ひが現世までも及んだのです。大體、現世を祈つたら救はれないとか、かうしたら救はれないか、色々の條件を自分で勝手につけて阿彌陀佛の大きな救ひを小さく狹く圍み込んでゐたのでは阿彌陀佛に對して申譯がないぢやありませんか。

下山夫人――私は始めて眼がひらかれました。私たちは阿彌陀佛を勝手に小さく見てゐました。阿彌陀佛はどんな條件もなしに無限大に吾々を救つて下さる大きな佛樣であると解りました。あゝ私は本當に救はれた! わたくし終りまで歸らずにゐてよかつた。難有うございます。

谷口――もう既に救つてゐて下さるのです。既にです。未來も現世もない、既に救はれてゐるのです。吾々はこの事實を認めさへすれば好いのです。

太田――先生、私は質問があります。私は信仰は教育を否定しない、信仰と教育とは平行して行

くべきものだと思ふのです。神樣を本當に信ずると云ふことゝ、神樣にまかせたと云ふのを口實に何の努力もせずに懶けてゐることゝは異ふと思ひます。

谷口――それは異ひますねえ。

太田――ところが私の家内の場合では、神樣を本當に信ずると云ふことは、何もかも神樣に打ち委せて、子供の敎育はほつたらかして、自分は何もせずに懶けてゐると云ふことなのです。

谷口――そんなことはありますまい。本當に神樣を信じたら、懶けるなどゝ云ふ狀態は自然になくなるのが本當の信仰です。懶けると云ふことは『行爲』でない譯ではない、形にあらはれた一種の『何もせぬと云ふ行爲』である。そして形にあらはれた行爲は心の影ですから、心に本當の信仰が握れたら、その心の投影として行爲が自由自在になる、自由自在融通無礙になるのが本當の正しい信仰の投影としての行爲です。何もしないで懶けてゐると云ふ行爲は決して正しい信仰の投影ではありませんねえ。信仰と云ふものは、例へば此處にある茶碗でも此處から彼處へ動かさうとする時に祈つて手を動かさないでゐるのが信仰ではない。あの茶碗は屹度動かせると信じて自分が起ち上つて持つてくることです。

太田――ところが家内の場合では、私が色々と子供に注意してやることを、子供を信じないから

だと云ふのです。子供を信じ神樣を信じたら、そんなに子供の行爲に干渉しなくとも、大空に凧の絲目を切つて離したやうに、本當に無干渉になつて了はねばならないと云ふのです。併し私は、私が子供に注意を與へることが干渉だと思つてゐない、教育だと思つてゐるのです。教育と云ふことは導くと云ふことです。

谷口――さうです、教育と云ふことは引出すと云ふ事です、本來有つてゐるものが出やすいやうに窓口を開いてやると云ふことです。

太田――だから私が子供に注意を與へるのは子供に干渉するのではない。出來るだけ雜草を刈取つて本來のその子自身の善い所を引出して、花壇の花が雜草がないために美しく咲くやうに美しく咲かせてやりたいと思ふ愛です。それを家内は私に對して信仰が足りない、あまり人間智慧が多すぎる、もつと神を信じ、子供を信じてあるが儘に放下しておいたら子供は子供の自然が伸びて善くなると云ふのです。その癖子供は今年の××學校の入學試驗に辷つたのです。だから私は家内に子供のことを我が事のやうに思つて心配してやれと云ふのです。

太田夫人――私は子供が××學校へ入つてくれなくとも好い。神を知る人間になつてくれたら好い、本當の人間になつてくれたら好いと思つてゐるのです。神樣の思召しが子供を學校へ入れ

て下さるのだつたら入れて下さつたら宜しいし、子供を學校へ入れて下さらないのが神樣の思召しならそれでも好いと思つてゐるのです。それで私は遮二無二子供に入學準備の勉強をせよとは注意出來ないのです。すると主人は子供のことに私が心を配つてくれぬと云ふのですが、私は子供のことを常に心配してゐるのです。

谷口――心配は要らないのです、信じて引出してやれば好いのです。

太田夫人――私、別に心配はしないです。心にかけて祈つてゐるのです。私は子供が神の子であり、善い人間になることは信じてゐるのです。併し神樣が子供を何にならせようとしてゐられるかは知らないのです。だから、どの方向に引出してやれば好いかゞ判らないのです。果して高等學校へ行くやうに引出してやれば好いのか、ほかの方向へ行くやうに引出してやれば好いかゞ判らないのです。私にはわかりませんから神樣に祈るのです。主人は私が子供のことを心配してやらないと申しますが、私ぐらゐ子供のことを心に掛けてゐる者はございません。神想觀をしまして子供の實相を祈りますとき、私はいつもハラ〳〵と泪がこぼれて來るのです。

太田――家内が子供のことを心に掛けてゐるのは私も知つてゐます。それを認めないのではありません。たゞ實行が伴はないのです。氣のついたことも注意してやらない。それだから私の方

が常に子供のことに心を掛けて注意してやらなければならないのです。自家では父親が八分、子供の世話を見てやり、母親が二分しか子供の世話を見てやらないと云ふ調子です。だから私は子供の世話をもつと見てやれと申すのです。さうすると、二三日前も家内は私に斯う云ふ風な手紙を私に東京からブツ付けて來ました(ポケットから一通の封書を出して)これが家内から來た手紙ですが、(奥さんを顧みて)先生の前で讀んで批判して貰つても好いだらう。それともお前自身讀むかね?

太田夫人――谷口先生に讀んで頂くと一等好いと思ひます。

谷口――(手紙を受取つて披いて見て)あまりに達筆でスラ〳〵と讀めませんから、太田さん、やはり貴方讀んで下さい。

太田――(讀みかけて)私も考へ考へ讀まなければスラ〳〵讀めませんねえ。それぢやあ、お前が讀むのが一等好いよ。讀むか、讀みなさい。

太田夫人――(手紙を受取つて)自分で自分の書いた手紙を讀むのは一寸耻かしい氣が致しますねえ……思切つて讀みますわねえ。(讀む)……『私はこんなにしてゐても貞三をどんなに心から愛してゐるかと云ふことが貴方には判つて頂けないのです。以前の私は貴方と同じやうな態度で

子供を愛して來ました。自分の考へで子供を自分の思ふやうな形に盆栽のやうに手入をして育てゝ行く事が子供を愛することだと思つてゐました。母親として自分の子供を自分の思ふやうに自分に引付け、自分の思ふやうな形に生長させて行きたいのは母性の自然的煩惱です。併し私はこの「母性の自然的煩惱」と半年の間血の涙の流れる思ひで戰つて來ました。半年の間此の血の涙の出る戰ひを戰つた結果、つひに私は此の「母性の自然的煩惱」に打勝つたのです。子供を愛すると云ふことは子供を自分に引付け自分の趣味に合ふやうな型にはめて育てると云ふことではない、あの風を孕んで大空に昇り行く凧の絲を少しも手繰らないでスル／＼と行くところまで昇らせて行くやうに何處までも自由に、子供をして子供それ自身の生命でそれ自身の形で伸びて行かしめること、これこそ本當に子供を愛することであると知つたとき、母親として子供を自分の側に引付け自分の型にはめて置きたい私の舊い本能は悲しみました。私は死ぬ思ひでございました。併し、今私は神のものを神に返し、子供の生命を子供自身に返したのでございます。もう私のものと云ふものは無いのです。神のものを神に返し、子供を神の子なる子供自身の生命に返したとき、もう悪い事は起りやうは無いと私は信ずるのでございます。貴方はもつと神を信じ、父を信じ、母を信じ、子供を信じ、妻を信じ、その各々の生活をば、

神の子なるその各々の生命にまかせ切るやうになさらなければなりません。信仰はすべての力でございます。「若し芥種の如き信仰だにあらば、この山に彼處に往きて海に入れよと云ふとも能はずと云ふことなけん」とイエスは被仰いました。人間の蛇の智慧で色々工夫し私のはからひをして遮二無二子供の運命を積み上げて往つてもそれが最後にくづれるのはナポレオンの最後と同じでございますまいか。人は工夫巧者の足らないのを耻づるより先に、まづ信なきを耻ぢねばならないと思ふのでございます。どうぞ道三を信じて下さい、道三の實相を信じて下さい。信じて放てば善きところへ落付くほかはないのです。……』

太田――あれが家内の心境でございます。斯う云ふ風に信仰が篤いのですから、私のやうな信仰の薄い心から見ると危かしい氣がするのです。

谷口――善い心境にゐられると思ひますねえ。併し聞いてゐますうちに一つ足りない所があるのに氣がつきました。その手紙の中に『神を信じ、父を信じ、母を信じ、子を信じ、妻を信じ』と書いてありますけれども『良人を信じ』と云ふことが書いてありませんねえ。こいつは大切なことです。皆なを信ずるけれども『良人だけは間違つてゐるかも知れん、良人の遣り方は違つてゐるかも知れん』と云ふ疑ひが世間の奥様には誰にでも起り易いのです。御主人が子供

の世話を燒いてくれられるのを奥樣は何故有難いと受取れないでせうか。何もそれを御主人の信仰が足りないからだと、御自分の尺度で寸法をつけて見る必要はありますまい。謀らふ生活を皆な不信仰だと見るのは『謀らはない』と云ふ其の『ない』に捉はれてゐるのです。謀らふ生活にも神から謀らはさせられる謀らひもある、謀らふまいと謀らふ心も捨てなければなりません。自分の尺度を持つてゐて、この人の信仰は何寸ある、この人は何尺あると指してゐては可けません。奥樣が御主人を『信仰が薄い』と云ふ寸法をおつけになるから、御主人の方でも『お前の信仰は信仰が深いと云ふ美名にかくれて、子供の世話を懶ける』と云ふ寸法をおつけになるのでせう。生長の家の生活は自分の尺度をスッカリ捨てゝ了ふ生活なんです。尺度があるから人の寸法を何寸と指したり、家族と突き當つたり、衝突したり、爭つたり、折角世話を燒いて貰ひながらその燒いて下さる人を信仰が薄いと思つたりすることになるのです。夫婦と云ふものは一體ですから、一方が信仰で暢氣になれば、他方が躍起になつて世話をすると云ふやうになり、一方が子供の世話に躍起になれば他方は割合暢氣になる、金でも夫婦のうち一方が金使ひがあらければ他方がしまるやうになる。それでどこの夫婦でも夫婦揃うて調和してゐるのです。自分と同じやうにならなければ一方が間違つてゐると云ふは見當違ひです。互ひに異

つてゐて相補つて完成してゐるのが夫婦なのです。

太田――だから私が子供を世話燒くのは、家内に云はせれば人間智慧だと云ふのですが、神が私を使つてさうさせてゐると思へないかと云ふのです。

太田夫人――ですから、私こんなことを申しましても本當は私たち夫婦は大變よくこれで調和してゐるといつも思ふのでございます。

谷口――調和してゐますとも。

太田――その調和の仕方だが、もつと別の配合割合で相補うて調和して欲しいと思ふのです。父親は子供の世話を二分燒けば好い。八分の世話は家庭にゐる母親がすると云ふ風にですねえ。

太田夫人――心で私がどんなに子供のことを氣にかけて無形の世話をしてゐるかと云ふことが貴郎にはお解りにならないのです。

太田――その有形の方の世話を奧樣に八分やつて頂きたいんですねえ。

岡――私の宅では、丁度太田さんとこと逆ですねえ。來年女學校へ入學せねばならぬ子供があるのですが、私の考へでは何も府立へ入らねばならぬことはない。五十番位の席順ならば無試驗で入學できる學校もあるから、何ならその學校へ入れても好いから、そんなに一分間も餘裕の

ないやうにケチ〳〵云つて勉强させんならんことはない。成るやうに成らせて置けば神樣がよいやうにして下さる――と私が云ふものですから、家内の方が『そんな暢氣なことは出來ん』と云つて始終子供を喧ましく鞭韃して勉强させてゐるのです。

島崎夫人――每號『生長の家』で心の持方をかへたら姑と嫁との仲がよくなつたと云ふ實話を敎へられ、それを參考にさせて頂いてをりますが、私は舅姑に愛を以て事へ出來るだけ舅姑に深切を盡すやうにし、自から顧みて舅姑を嫌ふとか厭ふとか云ふやうな感情は少しもないと思ふのでございますが、舅姑との中が充分うまく行かないのでございます。深切のつもりで盡したことを惡くとられて小言を云はれるやうなことが往々ございますのです。それはどうしてこんな結果になるのでございませうか。先生に敎へて頂きまして惡い所を直したいと思ふのでございます。

谷口――愛をもつて事へ、深切を以て對するのに、それに舅姑から反對にとられると被仰るのですねえ。……（一寸考へて）それでは貴方は舅姑に氣兼をなさるでせう。

島崎夫人――えゝ、氣兼は致しますでございます。

谷口――氣兼をする心は、互ひに離れた感じの心、本當に自他一體になつてゐない心なのですか

ら、深切のつもりでも、氣兼ねをしながら何事でもやると、すぐそれが相手に感じられて、何んであんなに離れた感じのやり方をするのだと云ふことになり、それで、深切にしたつもりの事が惡くとられるのです。

松本夫人――先生、私娘を病院へ入れて手術させた結果、手術の成績はよかつたですのに、五六時間のうちに脚氣衝心で心臟痲痺を起して死んで了ひました。あの時周圍の人がどう云つても私が娘の手術を拒んで、ひたすら神樣におすがりしたら娘が助かつてゐたかも知れないと思ひますと、私の責任のやうに感じられまして、あれから二十日間少しも眠らないのでございます。

谷口――二十日間も眠らないでゐて、しかも隨分の御心勞で、よくそんなに御元氣でゐられますことですねえ。

松本夫人――私は娘が亡くなりましてから一層この悲しみを超脫したいと思ひまして一層眞劍に『生命の實相』を讀ませて頂きました。皆さんがどなたも私がこんなに苦しんで眠らないのに少しも衰へないのを不思議がつてゐらつしやるのでございます。

谷口――人間は眠らないでも生きられると云ふことを、今度は御自分で御體驗になつた譯ですね

え。

松本夫人――そのかはりまた手術しないでも生きられるものを手術したばかりに娘を死なしたと思ふと、私の信仰の足りなかつたのをくやしく思ふのでございます。

谷口――死期と云ふものは貴女だけの責任ではありません。本人の責任であり皆の責任なのです。其人が何時靈界へ行くかは、最後の二三日間の信仰の變化で左右されるものではありません。その人の今迄の思想、生活が累積してジリ〳〵最後の轉任命令の辭令の出るところまで行つて了ふのです。辭令が出たら時刻の修正のない限り辭令は引込まないのです。さうです、お孃さんは死んではゐられないんですよ。靈界と云ふ所へ轉任せられた。そこは現實界よりも魂のもつと高い勉强がよく出來る所なのです。靈界の事情は、今度出た『生命の行方』の本(全集第五卷『靈界と死後の救ひ』)に詳しく書いて置きました。

松本夫人――私は、この悲しみを忘れたい忘れたいと思ふのですけれど忘れたいと思へば思ふほど却つて思ひ出すのです。

谷口――御尤もです。それが人情です。そしてその悲しみが導いて貴方を一層眞實なものへと導いてくれるのです。あなたはそれによつて肉體が本來無いもの、如何に執着するも無常なもの

であることを知るのです。併し『我』と云ふ本體は死なゝい。時來れば、現實界の肉體にその心の影を映し、又時來れば靈界にその心の影をうつすのです。

松本夫人――先生、この悲しみをどうしたら忘れることが出來るでせうか。

石川――私が忘れる好い方法を敎へてあげませう。それは私が米國へ電氣工業の視察に往つたときに諸方の工場を視察してデーターを集めたのですが、向ふの云ふことを、こちらが鉛筆をもつてゐて手帳にひかへると、向ふでも警戒して詳しいことを話してくれない。それで何にも控へないで耳で聞いて頭に覺えて置くのです。さうすると不思議にどんな數字でも覺えてゐて、いつも頭についてゐるのです。併しホテルへ歸つてそれを一旦紙に書くと忘れて了ふ。此の體驗によつて私は『心にあることを書くこと』は心に持つてゐることを忘れる方法、心の重荷を卸す方法だと云ふことを知りました。奥さんもやつて御覽なさい。悲しい時には思ふまい思ふまいとしないで、その悲しみを紙の上に文字にして出すのです。さうするとその悲しみを心から忘れられて了ふのです。

谷口――森田正馬博士の神經衰弱の治療法にも、患者に日記をつけさせる方法と云ふのがあります。心の苦しみを何によらず紙の上に流し出すと、次第々々にその苦しみが解消して了ふので

す。要するに、此の『念』と云ふものは具象化と云ふ本性をもつてゐて、無形のまゝで埋めて置くといつまでもその具象化せんとする潜在的力をもつてゐて人間を苦しめるのですが、何らかの形に具象化させてやると、その潜在的な力で內部から人間を苦しめることがなくなるのです。紙の上に文字に書いて悲しみを具象化したときに、その悲しみがうすらぐのは事實です。精神分析療法で潜在意識下に抑壓されてゐる觀念を表面に浮び上らせ、それを何らかの形に表出せしめたとき、神經症が治る實例があるのもこの理由に依るのでせう。以前、生命の藝術社の佐藤彬さんの奧さんが、姙娠中に激しい齒痛を起してどうしても止らないことがありました。最後の手段に齲齒を抜いたら治るかも知れないと思つたのですけれども姙娠中に齒を抜くと結果がよくないことがあると聞いたことがあつたのでそれも出來ない。佐藤彬さんが手を按てゝ思念してあげたけれどもそれでも治らない。最後に彬さんは氣がついて『そんなに痛ければ思ひ切り泣いて見るがよい。泣いて泣いて泣いてその痛さを表出して了つたら治るかも知れない』と云つたのです。それで彬さんの奧さんは本當に涙を流し聲を立てゝ泣いてゐた。さう云ふ時には泣かうと思へば泣けるものらしいですねえ。三十分間位涙を流してゐたかと思ふと奧さんは突然笑ひ出したのです。もう痛くなくなつて、泣いてゐることが可笑しくなつたと云ふので

す。姙娠中は兎もすれば心が過敏になつてゐて、一寸したことにも悲しみを覺えるもので、それが抑壓され潜在意識下に蓄積されてゐて何等かの形で具象化しようとして惡阻を起したり齒痛を起したりするものです。佐藤彬さんの奥さんの場合では、それが齒痛として具象化しつゝあつたので、その悲しみを涙に代へて具象化したらもう齒痛として具象化する必要がなくなつて痛みが止まつたのです。松田さんも一室に籠つて一生懸命泣いてご覽になると好い。泣いたあとは悲しみを忘れてスガ〳〵しい氣持になれるでせう。

小木老夫人――私は老母が死にました時にも、姉が死にました時にも大聲を上げて發作のやうに泣きました。どうしても激しく形にあらはして泣かずにはゐられなかつたのです。その代り泣いた後には何の執着もなくカラツと忘れたやうに晴れやかな氣持になれました。これなどは確かに形にあらはして泣けた効果でせう。

石川夫人――阿母さん、貴女は執着のない、生れつき惠まれてゐなさる方ですよ。

小木老夫人――さうです、私は働いてさへゐれば何も考へません。一日クル〳〵クル〳〵と働いてゐるのです。私は同時に二つのことを考へることが出來ない性分でして、一つのことを働いてゐると悲しみなど考へることが出來ないのです。仕事をしてゐても何かクヨ〳〵考へると云

ふ人がありますが、私にはさう云ふ一度に仕事と心配事と二つを一緒にすることが出來ない性質なんです。

石川夫人――皆さん、先生をお迎への自動車が參りました。今日はこれで散會と致します。それでは松本さん、貴方がた御家族三人、先生と御同乘して停車場までお見送り下さい。また車の中で先生に色々とお聞き遊ばすと宜しいと存じます。（一同散會）

第四章　眞理に救はれ行く人々

内容——昭和九年七月第三日曜日、京都市東大路松原西入上野高敬氏邸にて催されたる生長の家京都誌友會に於て話されたる座談中より『生長の家』の聖典及び小冊子等を讀みて救はれたる實話を收錄せるもの。

谷口——皆さんに今日は面白い機械を持つて來てあげました。(袂から、懷中時計のやうな機械を出す)これは人間の『迷ひ』を測定する機械でありまして、この機械に照らして見れば、人間の『迷ひ』が如何に根強いものであるかゞ機械の上にチヤンと形を持つてあらはれて來るのですよ。

(皆々、興味深さうな顏をして谷口先生の周圍に集つて來る)

谷口——(説明を續けながら)これは人間の首です。金剛不壞實相の首の譬へであります。種も仕掛もない、鐵で出來てゐます。それ。(と、鐵で出來てゐる人間の首を示す。首の下が棒のやうに長くなつてゐる。懷中時計のやうな其の迷ひ測定機の盤面には、首なしの印度の瑜伽の行者が裸身で坐つてゐる繪が描かれて居り、その行者の首のところには孔が明いてゐて、此の鐵の首を嵌め込むと、丁度、斬首刑を待つて俯垂れてゐる行者の姿になつてゐる。「迷ひ測定器」の中央には軸心があつて、その軸心からは時計の長針のやうな恰好の所刑刀が突出てゐて、スキツチを押すと、その刄がその軸心を中心に行者の首を

打おろして斬つて了ふやうに見える、しかし、首を取外して調べて見ると、少しも斬れてゐない。谷口先生はスヰッチを押して所刑刀を上下して見せながら）そら、皆さん此の行者の首がたしかに斬れるやうに見えるでせう。種も仕掛もない。種は貴方がたの心の中にある。斬れてゐない首を斬れてゐるやうに見る。病氣でないのに病氣してゐるやうに見る、不幸も災難もないのに不幸災難があるやうに見る。常樂の淨土は壞せざるに劫盡き、憂苦煩惱の世界が今あるやうに見る。そしてそんな病氣や災難や首斬りや不幸は、實相にはないのにあるやうに『迷ひ』で思つてゐると敎へてあげても矢張り『此處に感覺に見えるやうに此の通り病氣があるではないか』と抗辯して承知しない。併し感覺世界は自分の心の影を見るだけに過ぎない。（また測定器のスヰッチをガチヤガチヤやる。所刑刀が鐵製の行者の首を確かに上から下へ打下ろし、刃がその首を通過して、下へ來て止つたやうに見える。）皆さん、御自分でやつて御覽なさい。種は御自分の心にある。

甲――（自分で試みて）どうも不思議だ！

乙――ほんとに不思議ですねえ。（首を取外して、首そのものに手品の種があるのではないかと調べてゐる）

谷口――首に疑ひがあるなら、首の代りに紙縒を通して見たら宜しい。（と、谷口先生はその場で紙縒を作り、その紙縒を「迷ひ測定器」の首孔に差し込んで、所刑刀を上下させて見る。所刑刀は紙縒を斬り

つゝ上下するかのやうに見えるが、紙縒を拔いて見ると、切り痕一つ紙縒に附いてゐない。)

上野――その刄が反對側に廻るのぢやありませんか。

谷口――さうです。刄は反對側を廻つて首の下に出るのです。此の首を差込む孔の所は刄が通過しないのですから、斬れる筈もなければ、刄の鐵と、首の鐵とが衝突して行止りになることもないのです。

上野――(器を手にとつて)それにしても反對側を刄が廻るやうにはどうしても見えませんね。

甲――餘程の快速力で、眼にも止らぬ速さで廻るんですね。あまり早いので見えないのでせう。

谷口――あまり速く通過するので見えないと云ふことはよく解ります。それで通過する方が見えない方の説明はつきますが、實際は通過しない所を――この首の所を刄が切つて通過したやうに見えるのはどう云ふ譯でせう。見て御覽なさい、通過しない筈の首の處を、通過しつゝある中間過程の刄があるやうにあり〳〵見えるのはどう云ふ譯でせう。

一同――サア、それは。

谷口――實際通過しつゝある所は快速力のために見えないと云ふことにしますと、吾々の實際に見えるのは、最初此の首の上方に刄がある事と、その次の瞬間に其の刄が首の下に來てゐると

云ふことだけです。どう云ふ徑路をとつて刄の位置がさう變つたかは見えない。この徑路は見えないなら、見えないと正直に承認して置けば好いのです。ところが人間には何事にでも因果關係をつけたがる心の習慣性がある。一つの物が最初の位置から消えて、次の位置に類似の形のものが現れると、すぐ原因結果の法則をその二つのものに出鱈目に當てはめて、この刄は此處を通過して、行者の首の下へ出たと結論を下す。すると、その心の反影として實際は刄の通過し無い所に、ヽヽヽアルかのやうにアリアリと通過しつゝあるやうに見えるのです。

甲――たしかに首の方を刄が通つてゐるやうに見えますねえ。

谷口――その通過の中間狀態にある刄の姿までもたしかに見えるでせう。

一同――フーム。たしかに首を切つて通つてゐる道まで見える。

谷口――潛在意識が、こゝを通る筈だ、因果關係は斯うだと習慣性にきめてゐると、現在意識にサウではないと敎へてあげても、矢張り首を切つて刄は下へ出たと見えるでせう。心が思ふ通りに形の世界へあらはすのです。

上野――反對側を通つてゐて、こちらを通つてゐないと云ふことをハツキリ見せることは出來ませんか。

谷口――この首は鐵ですから、この所刑刀ぢや本當は切れないのです。だから、この首を實際に刄が通過してゐる方に置いて見ると、所刑刀が首の鐵に衝突して動かなくなるのです。（首を反對側に立てゝ見て、スキッチを廻す。すると、今迄、通過してゐないと見えてゐた側に所刑刀が來てゐて、首に衝突して動かなくなつてゐる事が明かになる）これでこの所刑刀が反對側を廻つてゐたことが明かになるでせう。こちら側に實際にアル實相は見えないで、一度もその所刑刀が廻つてゐない側に刀があつて廻つてゐるやうに見るのが吾々の迷ひなのです。アルものが却つて見えないでナイものをアルと見てゐる。だから貴方の肉體でもアルと見てゐるけれども心の影なのですよ。この機械によると、如何に人間の迷ひが深いものであるかゞ判る。それで私はこの機械を『迷ひ測定器』と名づけたのです。

甲――先生、この機械はどこに賣つてゐます？

谷口――これは昨晩、神戸の大丸前の三澤さんが持つて來て下さつた獨逸製の玩具の見本です。面白いから子供にやらうと思つて持つて來られたのですが、やつて見ると生長の家所說の『心の法則』の說明がこれでよく出來る。それで今日の集りに皆さんに見せてあげれば大變參考になると思つて持つて來た譯です。この機械によると、第一、斬れてゐない首が斬れたと見える、

金剛不壞實相の身であるのに、傷き病むやうに見える原理がわかるでせう。第二には、我々は因果の徑路を自分の潜在意識で勝手にきめて、そのきめた通りに客觀界へ投影するものであることが判る。遠廻りの方に原因があるのに、近い方に原因があるやうに思つてゐる。冷たい風に當つたと云ふ事實があり、その翌日風邪を引いてゐると、吾々は冷たい風に當つたから風邪を引いたと直ぐ結論する。斯う云ふ因果關係は本來無いのに有りとして自分の心で作るから、その有りと云ふ念の投影として、今度冷たい風に當つたら風邪を引くなどゝ云ふやうな現象が起る。刄は上から下へ打おろしてゐないのに、心で刄が上から下へ打おろされるやうに見えるのと同じことです。目に見える物質的原因で病氣が起つてゐたやうに見えても、眼に見えない遠廻りの心の原因で起るのが多いのです。第三に實際に通過する方は見えないで、却つて通過しない處を通過したやうに見えると云ふ事實によつて、人間は神から生れて神の胞を通過するのであつて、母親の子宮を通過して生れるのではないと云ふ『生長の家』の所説も分りやすくなつてくる。第四に、吾々の五官はアルものを無いと見、無いものをアルと見る迷ひにとらはれたものだと知ることが出來る。第五に、種明しされてもこの所刑刀が反對側を廻つてゐるとは、どうしても見えないで、矢張り首を切つてゐると見る自分の心の迷ひの執拗さに、『生命

の實相』を讀んで、病ひは無いときかされながらも、病ひを顯はしてゐる原理が判る。……それで私は此の機械を、生長の家の徽章にして斯うして誌友は一個づゝ勳章のやうにしてブラ下げて歩くことにしたら好いと思ふのです。(一同、笑ふ)『君、それ何だ』と聞く人があると、これは『生長の家』の『迷ひの測定器』だと云つて『どうだ君、この首は斬れるやうに見えるか』と尋ねてから、色々と說明してあげると、大變早分りがして好いと思ふのです。

一同――それを大量に輸入して誌友に配布すると好いと思ひますねえ。

谷口――早速三澤さんに交渉することに致しませう。

秋月――私は秋月と申しまして『生長の家』によつて救はれたものであります。數年前に胸を患ひまして色々の療法と云ふ療法を漁つて見ましたが、色々療法と云ふものに捕はれて動きがとれなくなり『生命』の自然の生かす力が妨げられまして、療治するほど惡くなり、元氣はなくなる、恐怖心は起る、身體は瘦せ細ると云ふ時に、ある療病舍で森川君と云ふ青年――この青年も、胸の病氣で動けなかつた人ですが『生長の家』の眞理によつて忽ちよくなつた人でありまます。この森川君に導かれて、忽ち元氣になりましたのです。そして今ではこのやうに立派な體格になりまして、もうどんな仕事でも出來ると云ふ自信が持てるやうになつたのでありま

す。それで何を仕様かと仕事を探してをりましたが、數年間社會を遠ざかつてゐましたので、なか〳〵よい仕事が見付からないのであります。それで折角、病氣は治つたがどうしようかと心が又しても暗くなるのでありました。それで谷口先生に御手紙を差上げたのでありますが、御手紙を差上げた後、たゞちに氣付きましたことは、『求むるもの――それは既に與へられてゐるではないか、何を苦んでより以上のものを求めようとするのか。』と云ふことでありました。自分は取越苦勞が過ぎてゐた、囚はれてゐた、生活といふことに囚はれてゐた。平凡になれ、當り前の人間にならう。そして現在を喜び得る心境にならう。斯う思つて笑つてみれば笑へるのです。喜んでみれば喜ばれるのです。

さうしてゐるうちに、私がかねてお導きしつゝあつた檜山と云ふ貧しい苦學生が、結核のために宿を追はれてゐることを聞いて、安い療養所をさがしたのですが、病者の數に比してあまりに病床が尠いのでどうすることもできませんでした。最後に京都市立宇多野療養所をたづねて入所させてあげて下さいとお願ひ致しましたが、現在の病床二百に對し超滿員で申込が三百もつかえてゐて、半年や一年ではなか〳〵順番が來ないのです。そして宇多野の係員がふと『實際皆樣にお氣の毒ですがどうにもならぬ狀態です。せめて此附近に間貸でもする家があれば繁

昌をするでせうが』と言ふのを聞きながら、さうだ、さうした家があれば私がやつてみたいと思ひました。生長の家で救はれた自分です。『生長の家主義で自然療養をする療養所が欲しいなあ』と思ひました。さう思ひつゝ療養所の門前に出ますと、ふと附近、音戸山の人家が眼につきました。『あんな家がいゝなあ』と思ひつゝ其家の前までくると、三戸の家が三戸とも空いてゐるのです。中を見せて貰ふと旅館でもするつもりの家ですか小間が七八室あります。『ああ、この家は個人療養所には絶好だなあ』と思ひました。この家なら七八名は收容できるのです。私は其足で家主をたづねました、病人を收容するために借りたいと申しますと最初はそんなことには貸せぬと申しました。家賃も相當廣い家ですから初めは高いことを云つてゐましたが、生長の家のお話を大體して説明しますと『さう云ふ目的なら、結構だ。家賃はいくらでも好いからお貸ししませう』と言はれました。私は喜びました。かねて私が希望してゐた仕事でもあります。私は谷口先生に許可を得まして『生長の家京都支部見眞寮』と看板を掲げることに致しました。宇多野療養所の直ぐ近くですから、入院患者や、見舞の人がその見眞寮の前を通る時に看板が目について、それが機縁に救はれる人が多ければ好いと思つてゐます。入寮費は實費計算主義で一日一圓位になると思ひます。此の仕事がかくもすらすらと順調に運ぶのは、

あめつちを貫きて生くる大神の御加護であると勇躍して居ります。

谷口――その看板のところに生長の家のパンフレツトに紐をつけてブラ下げて置いて、『どなたでもお讀みなさい。お讀みになつて御興味のある方は、隨意にお這入り下さい。詳しく說明申上げます』とでもお書きになつて置けば大變結構だと存じます。

澤田――私は其の『生長の家』のパンフレツト一冊を讀んで救はれたものであります。私は本業のほかに在鄕軍人會長をしてゐる、同業組合長をしてゐる、町內の世話役をしてゐる、仲々忙しい生活を送つてゐたのであります。御覽の通り頑丈な骨組の男でありますし、自分でも本來達者な人間で病氣になどなるものでないと思つてゐたのですが、最近つひにひどい病氣に罹つて殆ど人間を廢業せねばならぬと云ふ程の所まで往つたのであります。斯う云ふ頑丈な男でもさう云ふ病氣に罹るやうになつた理由を『生長の家』へ這入らせて頂いてから考へて見ますと、成る程私自身の心の持方が惡かつたのに原因すると云ふことがハツキリ判ります。今申しました通り私は大變忙がしい生活を送つてゐました。その忙がしい生活を樂しいと思つてやつてゐました間は健康だつたのですけれども、つい〱心に我儘が出て來たのです。あまり忙がしいので、その忙がしさに不平を云ふやうになつたのです。人が呼びに來ると『あア又來たか、五

くるのにまた仕事が忙がしいのにまた仕事か』と五月蠅がる。外出して歸つて來ると、まるで燕の親が歸つてくると燕の雛共が燕の親をつかまへて八方からチュウ〳〵囀るやうに、店の者があちらからも此方からも話しかける町内の用事が出て來る、軍人會の用事が出て來る。『達者でこんなに仕事をさせて頂いて難有い』と難有く受けたら病氣にならなかつたに違ひないですのに、その難有がるべき仕事を難有がらないやうに必が荒んでまゐりまして、『あゝ、五月蠅い、あゝ又か！あゝ遣り切れない！あゝ逃げ出したい』と思ふ思ひが度重つて來ますにつれて、到頭、ひどい神經衰弱になりまして夜も眠れぬ有樣になりました。夜眠れないだけではない、仕事の判斷がつかなくなりました。代金を受取りましてお札を數へてゐましても、それが幾枚あるか判らない。それで何遍でも數へてゐますと、相手樣から『あるぢやらう』と云はれて、ハツとして『ハイ、ございます』と好い加減な返事をして實際はお金をいくら貰つたか判らないで歸つて來ると云ふやうなことが常にある。電車の停留場に待つてゐても、何處行の電車がどこから發車するか判らない。其處に電柱にチヤンと書いてあつても意味が判らない。側らの車掌にきくと『君、あの字が讀めませんか。此處に書いてあるぢやありませんか』と云はれる。『へえ、どう書いてありますか』

『ソラ××行と書いてある』『近頃滅多に此邊に來たことがありませんので勝手が違ひまして』などと出鱈目に胡麗化しを云つてお茶を濁すと云ふやうな有樣でした。ある時などは隣家の醫者まで行かうと思つて行けども行けども醫者の家へ行くことが出來ない。と、知合ひの人が出て來て『君、これからどこへ行くんだい』と云はれて、『醫者へ行くところだ』と云ひかけて氣がつくといつのまにか山道をズン〳〵登つて行く自分を發見した位でした。醫者に云はせると早發性痴呆と云ふ恐ろしい病氣だからその儘ほつといたら永久に痴呆になつて了ふから、二年位すつかり仕事を止めて何もせずに安靜療法をつゞけるほか治療の道がないと云ふのです。悲觀しました。悲觀すればするほど夜は眠れなくなる、頭は益々惡くなると云ふ始末でした。そしたら、岡善吉さんと云ふ人が大變良い本を有つてゐて、その本を讀んで私のやうな神經衰弱が治り白毛までも黑くなつた人があると云ふことを聞き、岡さん宅へその本を貸して貰ひに往つて貰ひました。聖典『生命の實相』の分册の小册子を一册貰つて來まして讀みますと、ヒシ〳〵と心に思ひ當ることばかりです。『あゝ、これで自分は病氣を起して居たんだなア。病氣は肉體になくて心にあるんだ』と氣がつくと共に一遍に病氣が治つて了ひました。それで是非先生にお眼にかゝつて親しく御禮申したいと思つてゐました望みが、今日は叶ひましてあり

がたうございます。

それから私は病氣のほかにも色々のことでお蔭を頂いてをります。實は私は××に〇〇坪程の地所を有つてゐて、その地所のことで境界爭ひをしてゐたのでございます。最初からのことを申上げませんとハツキリ判りませんが掻いつまんで申上げますと、その私の土地の周圍はすべて家が建ちましたが、私の方では家を建てずに置いてあつたのです。ほかの土地は少し地盛りをして家を建てたので、その私の有つてゐる土地は少し低くなつてゐる。その少し低くなつてゐることゝ空地とを好いことにして周圍の土地の人たちが、硝子の破片やら、塵芥やら、何でも惡いものばかりを持つて來て捨てるのです。それで、その頃は私は爭ふ心を持つてゐましたから、『ヨシ、手前たちの方でさうするなら、わしの方にも考へがある。ウント自家の地所を高くしてその上へ附近の家が影になつて困るやうな大きな家を建てゝやらう』と云ふ氣になりまして、二尺程も高くコンクリートでフアウンデーションを造つて、其上へ私の地面一杯に、出來るだけ大きく建物を建てることに致しました。その氣持がわかりますと、相手の方では建築中、金槌一つこちらの地面へ落ちても拾はせてやらないと云つて柵をめぐらすと云ふやうな有様になりました。そうしてゐる中に、執達吏が來て『この地面こゝから二尺は係爭中である

から、この中に建物の工事を進めることはならぬ』と云つて執達吏が管理すると云ふことになつたのです。係爭中であると云ふのは、役所にある地所の臺帳にある坪數では、私の地面が此處までハミ出る筈がない。今の持主が土地を盜んだかどうか不明であるが、兎も角も登記簿にある坪數よりも廣い地面はいつの時代からか地面をズルイことをしたに違ひないから、その坪數だけ二尺引込めと云つて告訴した者があるのです。私の方を困らせてやれと云ふ仕組なのです。斯う云ふ爭ひも、一つは私の神經衰弱の原因になつたことだと思ひます。生長の家のパンフレツトを讀んで私の神經衰弱が一遍に治つて、御禮のために岡さんとこへ參りまして夜の十二時頃まで話して歸つたことがあります。その序でに岡さんにこの土地の境界爭ひの話をしましたのです。すると岡さんが云はれるのに、物質は天の惠みが影をうつしてそれが形にあらはれてゐるものであるから、爭ふやうな心になつて取合ひをすると、爭ふ程度に從つて消えてなくなつて了ふ。例へばですねえ。こゝに一杯のコツプの水があつて、二人とも渇いてゐて、わしの方が飲みたい、わしの方が飲みたいで互ひにそのコツプを引つたくり合ひしてゐたら、一方がそのコツプを占領して飲まうとする時分には、そのコツプの水は空になつてゐる。それよりもサア君飲みなさいと云つてコツプを渡すと、その人間も半分飲んで『君も飲み給へ』と云

つて飮ませてくれると、一杯の水で二人とも咽喉が霑ふことになると云はれました。この岡さんの言葉を聞いてハツときづかせて頂きました。これは私が惡かつた。もと〳〵あの家を建てたのが爭ふ心で建てたのである。わしの地面に塵埃を捨てやがるから、今度こそ出來るだけ幅廣く、出來るだけ丈高い建物を建てゝ周圍の人を困らしてやれと云ふやうな爭ふ氣持で建て始めた。すると先方もこちらを困らしてやれと云ふので、役場の臺帳を楯にとつて、七八分通り竣工してゐる建物が建つてゐるその地面を二尺ほど、これは君の地面でないから建物を二尺引つ込めよと告訴した。そして到頭執達吏がその二尺の間を管理して、この地面は係爭中であるから、係爭が解決する間は、此の地面の上の建物に工事を加へることはならぬと差押へて了つたのです。爭へばこちらにも申分がある、土地の臺帳はどうあらうとも二十年間以上、自分も認め他も認めて、これは自分の土地だと占有したものには、占有權がある。それにこの土地は四十年も前から自分のものとしてあるのだから負ける筈がない。けれども、こちらが爭はうとする意志がある以上、向ふも極力爭つて來るに違ひない。そして爭ひは何日解決するか判らぬ。五年先か十年先かそれも分らぬ、その間は此地面の上の建物に手をつけられぬと云ふことになると、この建物は使はないうちに、古びて腐つて了ふかも知れぬ。丁度岡さんの云はれた

コップの水と同じやうである。さて一方が奪つて飲んで見ると空になつてゐるかも知れぬ。物質は天の惠みの影であるから爭ひがあつたら消えて了ふ。本當にさうぢや。もと〳〵私の爭ふ心で始めた建物、こゝまで引つかゝつて來るのは私が惡いのだ。もう決して爭ひません。もう爭ふ心は捨てまして神樣貴方のお計ひにお委せ致しますから、どうなりと早く解決して下さいと云ふ氣持になりました。そして私の方の辯護士に『もう私は爭ふ氣がなくなつたから、どうでも好いから早く解決するやうにやつてくれ』と云ひますと、辯護士があきれて、『何故そんな氣になりなすつた？』と云ふのです。私は『生長の家と云ふ宗教に這入つたので爭ふ心がなくなつた』と申しますと、辯護士は愈々あきれて『斯う云ふ裁判に、さう云ふ信仰は禁物だ』と云ふのです。『禁物でも何でも私としては爭ふ心が無くなつたのだからそのつもりで居つてくれ。君が爭鬪心があつて爭ひたいのならそれは君の勝手だから、勝手に爭ふが好い』と私は申しました。私の父は病氣で寢てゐますので母に私の氣持を打明けますと、母も信心深い心の人でありまして、『その生長の家の敎と云ふのはよく判る、お前もようそんな穩かな氣持になつて呉れた。わしは大變それが嬉しい。此の問題は爭ふ心で始めたコチラが惡いのだからどうなつても神樣の御心にまかせますから出來るだけ早く解決しますやうにと、私も共々神樣に祈

りませう』と云つてくれました。すると意外に事が早く解決することになりまして、先日早くも裁判所から何月何日裁判長が現地検證する事になつたから證據人などつれて出て來いと云ふ命令が來たのです。するとその裁判長が大岡越前守を現代に出したやうな名裁判官であつた。双方の言ひ分を聞いてゐましたが、やがて『綱をもつて來い』と命じまして、私の方の主張する境界から四寸下がつた處に綱をズツと引きました。そして『こゝを掘れ』と人夫に命じました。其處を掘りますと、その綱の下が、そこが畑地であつた時に埋け込んだらしい境目石が點々とあらはれました。『これが古い時代の境目石だ。こゝから、こゝ迄は君の地面だ、異議はないか』と裁判長は私の方へ向いて云ひました。私は『ヘエ、異議はありません。私はもう爭ふ氣持がなくなつてゐるのですから』と申しますと、今度は原告の方を向いて『原告の方も異議はないか』と申しました。すると先方は『異議がある』と申すのです。二尺も私の方の地面を削つてやらうと思つてゐたのが、四寸しか削れないのですから異議があると云ふのです。『いくら境目石があつても、登記原簿にない坪數を占有するのはその境目石を埋める時分にズルい事をしたのである』と云ふのです。裁判長は『異議があつても、なくとも、これは文書上の爭ひではない現地裁判であるからわしの裁判はこれを境界にすることに裁決を下すからどうぢや』

と云ふのです。先方の辯護士は『他の事件に行かねばならぬ時間が來た』とか何とか云つてコソ〳〵と逃げて往つて了ひました。斯う云ふやうにして、私の方が爭ふ心を捨てゝ生長の家の神樣にすべてをお委せすると云ふ氣持になりましたとき、意外に早くこの事件が私の方へ有利に解決して了つたのであります。先生に御禮申上げます。

甲――その裁判官は名判官ですねえ、どうしてさう、ハツキリ此の綱の下に境目石があるなどゝ云ふ見當がついたのでせう。

谷口――それは神樣の導きですなア。もう爭ふ心は捨てた、神樣にお委せすると云ふ氣になつた時に神の智慧が流れ込んだのでせう。

澤田――もう一つ別の事件でございますがお蔭を頂きましたことを御報告申上げます。私は石屋でありまして十數名の者を家に使つてをります。先日一人の男の所持金が紛失しまして、それを盜んだと云ふ嫌疑が一人の少年店員にかゝつたのであります。皆の者が『どうもあれらしい』と申しますので、私も主人としての立場上ほつて置く譯にも行かないので、その少年店員を呼んで白狀させようと思ひまして、色々誘導訊問しました。白狀しさへすればお前でなかつたと云ふ事にして許して貰へるのだから、などゝ云ひますと、到頭『わたしが盜みました』と白狀

しました。『それではその金は何に使つたのか』と尋ねますと、『知らぬ』と云ふのです。『もう盗んだこと迄白状したのだから、その使ひ先だけ隠してをつても仕方がないぢやないか』と追求しますと、『財布諸共火をつけて川へほかした』と云ふのです。その川をほかの者に探しにやりましたが見付かりません。どうもその少年店員の云ふところに辻褄の合はぬ處がある。警察などで誘導訊問されると、しないことでもしたやうに白状する。これもどうもさうらしいのです。これは神の子を人間心で審判かうとして悪いことをした。本當に誰が悪いかは神様でないとわからない。人間で裁ばかないでも神様は心の法則によつて、自然にその人の心を形に顯はし給ふのであるから、ほつて置いても、罪を犯したものは、そのやうに形にあらはれる——斯う生長の家の教に照して悟りましたから、もうその少年店員を調べる事を中止し、店員一同を集めまして斯う申渡しました。『もうあの問題に就ては誰も何も云ふことはならん。心は形にあらはれると云ふことを私は教へによつて悟つた。だから心に暗いところのある者は、誰が何とも云はいでも、自分で自分の心を責めてそれが形にあらはれる。楽しければ顔が明るくなるし、楽しくなければ顔が浮かぬやうな表情になつて了ふ。これは神様が自然に自分の心を形に顯はさしめられるのであるから決して今後心に暗い影を持たないやうにせねばならぬ』と云

つて聞かせたのであります。するとその翌日、早速誰が盗んだかと云ふことが判明したのであります。さきの少年店員が盗んだに違ひないと一番最初に云ひ出した其の本人が翌日の朝飯の時から、多勢の店員のうちで、たゞ一人憂鬱な顔をして、他の人の顔を眞正面によう見ないで俯向いて了つてゐるのです。皆ながあの少年店員だと騷ぎ立てゝゐる間は、その騷ぎに心が紛れてゐたらしいのですが、『誰も何も云ふな、神樣が知つてゐられる。心の咎めは形にあらはれて、自然にわかつて來るものである』と昨夜私から申渡されて、誰もその事では何とも云はなくなつたときに、心が靜かになつて自分の罪で少年店員などをこれまで苦しめたと云ふやうなことが顧みられて苦しくなつて來たのでせう。女中などにも『もう私は長いこと此の店にはゐられぬ。昨日八卦見に見て貰うたら長くこゝにつとめてゐたら不時の災難を受けると其八卦見が云つた』と云つたりなどして悄氣てゐたさうです。今後私はこの店員が、今迄の惡い心を捨てゝ明るい生活に代つてくれるやう願つてゐる次第であります。

甲——話は前の境界爭ひに歸りますが、その裁判長が綱を引いてこゝを掘れと云つたのは神樣の導きであるには違ひない。併しどうしてそんな見當がついたのでせうか。何の理由もないのにそこへ綱を引いて掘れと申しましたか。

澤田――現場檢證ですから雙方から、何年前まではこゝにこんな小屋があり、こゝにこんな樹木が生えてゐて、それが境界になつてゐたとか色々雙方の主張が述べられた時に、『ヨシ、それで判つた。こゝへ綱を引け』と云はれたのであります。裁判官としては境界に樹木があつたと云ふなら、切株などが殘つてゐるかも知れぬと思つたのかも知れません。

岡――それにしても神樣の導きがなくては、境目石が丁度あるその位置を一度に掘り當てることは出來なかつたに違ひありませんね。

谷口――それは、さうですとも。爭ふ心がなくなつたときに、我執がなくなつたときに、實相の救ひがあらはれて來たのであります。荒川さん、貴方は先日の本部の座談會に御出席になつてゐましたから、あの席で鍼灸醫の石橋さんがお話しになつた懺悔をお聞きになりましたねえ。

荒川――えゝ承りました。先生にあの話を、皆樣にお取次ぎ願へれば大變難有いと思ひます。

谷口――あの時、石橋さんが此處に私の懺悔を書いて來ましたから先生、貴方から皆樣に話して下さいと云はれた。併し本人がお話しになる方が眞情が身に迫つてあらはれて好いから話して下さいと云つて石橋さん自身に話して頂いたのであります。あの時石橋さんが私に書いて下さつた懺悔文を昨日始めて讀んで見ましたのですが、それによると一つの因果と云ふことが顯は

れてゐる。あの日石橋さんがお談しになつた所によれば、鍼灸も患者があまり來ないので、家賃の支拂ひにも窮したと云ふ話でしたが、先日神戸支部の小集會水曜會で石橋さんがお話しになつた處によりますと、生長の家誌友になられまして此頃では、患者が多くて毎夜十二時頃までつめかけて來て、却つて困ると云ふ程の繁昌振りになつてゐるやうであります。

以前にも此の石橋さんは鍼灸醫として隨分盛大に繁昌つたことがあるのであります。それが夫婦喧嘩をして、心が亂れて來ると、一時に火が消えたやうに患者が來なくなつたのです。商賣の繁昌するのも衰微するのも皆自分の心からであると云ふことが石橋さんの履歴を讀んで見るとハツキリ判つたのであります。それを玆で皆さんにお話し致しませう。

此の石橋さんと云はれる方は本年五十三歳で三十三歳の時鍼灸に志し、醫學が好きで醫學のたしなみがありました結果、開業以來も好成績で、和歌山縣鍼灸試驗委員も囑託されたことがあり、一時飛ぶ鳥も落す盛大さで、醫師三名、齒科醫一名、藥劑師一名を招聘し、中學校の先生を修身科に囑托したりなどして和歌山市本町四丁目に鍼灸學院を開いてその院長として暢氣な贅澤な生活を送つて居られました所、大正五年四月六日第一日曜日午前九時頃、四十歳餘りと十八九歳の二人の婦人が石橋さんの宅を訪づれて參つたのです。石橋さんがその兩婦人の顏を能

く見ますと、此の年取つた方の婦人は見覺えがあるのです。見覺えがあるも其の筈、その婦人は十九ケ年以前合議の上離縁した內緣の妻であつたのです。そして若い方の婦人は其の娘であると云ふのです。加之、其れが石橋さん貴方の子だと云ふのです。話をきいて見ると、當時姙娠して居る事に双方共心付かずに別れたもので、別れた年の十二月に出產して其時は十九歲になつてゐる。良人と別れてから、其夫人は子供の養育の傍ら良人の行衛を探し求めましたが、當時石橋さんは放浪生活を送つてゐたので、行衛不明だつたと云ふ譯で、漸く十九年振りに尋ね當て今日再會する事が出來たとの事であります。然し其の婦人は石橋さんに對して別段永らくの間苦勞した事に就いては苦情は云はず、又何等の要求もせず唯々貴方にこんな娘があると云ふ事と、わたしが今迄苦心した點を認めて頂けば自分は死ぬ共滿足だと云ふのであつたさうです。ですから其の時は別に問題も起らないから、石橋さんは現在の妻には何等耳に入れる必要も無いと考へて、妻の手前は此の婦人は、昔の單なる知人であると云ふ位の事で片附けて置いたのです。その夜其の婦人は一泊もせずに、機嫌よく別れて鄉里、高松へ歸つたのださうです。石橋さんも現家庭の事も考へますから、自然双方に音信も絕えました。所が翌昭和六年九月十七日附で其の時先妻が連れて見せに來た娘から手紙が來たのです。讀んで見ると、『母

は二ケ月程の患ひで去る八月一日死亡して、今日其の四十九日の法事を濟ませて此手紙を書きました。母は臨終に及び、母亡き後は自分の考へ及ざる事ある場合は、和歌山市の父に相談して其の指揮を仰げとの遺言でありました。只今私は非常に困つて居りますから、何卒お父樣のお考の上、宜敷くお指圖に預り度い』と云ふ意味がその手紙には認めてありました。丁度其の時、石橋さんの今度の奧さんは三男を産んでまだ間もない頃で産褥に居たのです。石橋さんが考へるには、こんな産後の血の上せやすい時にこんな感傷的な問題を聞かせてはどんなことになるかも知れないと思ひまして大阪にゐる實姉夫婦に相談し、姉夫婦の勸めに依り、兎に角一度高松市へ行き、事情に依つては其の娘を連れ歸り、娘は當分姉夫婦の家に預つて置いて良い機會を見計らつて、後妻に事情を打明け善處すれば良いとの事に決りまして、石橋さんは妻の手前は讃岐の金比羅樣へ參詣すると云ふ口實で高松市へ出發致したのでありました。石橋さんとしましては母の亡い後は實父としての責任もあり、又娘としましても、母亡き淋しさから父なる石橋さんを慕ふのも亦人情の然らしむる所と思つたのでありました。亡母の親族中には多少の反對者もありましたが、結局其れを說き伏せまして娘靜子を連れて歸り、豫定通り大阪の姉に托して置いたのでした。

所が話が變つて後妻には弟がありましたが兩親が早く亡くなつて居たので少年時代から石橋さんが引取り我が子の如く養育致しまして二十七才になつてゐました。之れが又非常に能く出來まして兵役も無事に勤め、至つて温厚で實に前途有望な青年でありました。そして其頃では鍼灸院の副院長として、片腕否兩腕として石橋さんを援けて呉れて居りました。妻の弟、即ち義弟でありますが、双方の心持は實の父子のやうに感じて居られました。もう年頃であると云ふので、此の弟の結婚問題が持ち上つたのです。誰の見る眼も同じで、此の前途有望なる青年には求婚者が降るが如く、其の選定に苦しむと云ふ位ゐでした。所が姉夫婦の提案があり、他の親族も大賛成で、此の先妻の一人娘と義弟とを結婚させたら石橋家將來の爲にも大層良い結果になるだらうとの内談があつたのです。石橋さんが思ふには、さうなれば此の上も無く結構な事だが是ればかりは強制的には行かぬから一應義弟自身に聽いて見ようと云ふことになりました。勿論娘靜子は石橋さんの實子である事だけは祕密でした。それは、義弟は石橋さんに對しては恩義があると感じて居るし温厚で從順な青年の事ですから、石橋さんの實子だから連添うてやれと云ふ事になりますと、萬一其の娘が氣に入らぬ場合でも義理を重んじ、結婚を承諾するかも知れませんから、結婚だけは本人の自由にさせ度いと云ふ石橋さんの考へからであります。

ところが義弟の云ふには『私の一身上は萬事兄さんにお任せしてある筈ですから、兄さんが良縁だと思はれるなら、自分には決して異存は無い』と云ふのです。で石橋さんは、それは好都合で有難い事だと思ひ早速結婚式を擧げる事に決定し、斯う話が纏つた上は其の娘は自分の實子であると打明けても差支はない却つて良い都合に行くと思つて其娘が實子である事を義弟にも又妻にも打明けたのです。娘さんも義弟もみんな非常に喜んでくれました。然るに石橋さんの後妻だけは一向喜ばないのです。結婚式が近づくに隨て益々露骨に不贊成の意を表して來たのです。其の理由を段々取調べて見ますと、近來良人は色々の口實を稱へて旅行したり、從來外泊しない良人が足繁く大阪へ行くものですから、年若い妾を大阪に圍つて置いて、其の妾が姙娠したので其の處置に困り、その妾を温順しい義弟の妻に押附け、愛妾を實子の如く裝ひ大阪の親族と共謀して家族を僞り愛妾を自宅に引入れ樣として居るのだと、飛んでも無い誤解を云ひ出したのです。そこで石橋さんは凡ゆる證據を擧げてサウではないと云ふ實證をあげるに努められた所が後妻も漸く承認して愈々其の實子と義弟とを結婚させる事に決定したのであります。所が石橋さんが用事の爲め大阪へ往つてゐるうちに産れて間も無い乳呑子を始め三人の子供を家に殘して自分の持物丈け持出して、其の後妻は家出して了つたのです。其れから間もな

く義弟も家出します。其の後の家庭はメチャ〳〵になつて了ひました。殘された、三人の子供は、母を慕つて毎日泣き暮しです。取り分け生れて間も無い赤ん坊は突然母の乳房から離れたのでありますから此の赤ん坊の世話丈けでも石橋さんは隨分困り拔きました。夜通し無理を云つて寢かせて呉れない乳呑子を抱へて、石橋さんは娘と二人で泣き暮しました。斯う心が亂れて來ますと、營業狀態も其の經營者の心の影ですから、さすが今迄繁昌を極めてゐた、鍼灸學院も、生徒は減る患者は來なくなる、次第に衰微して學院の經營は維持困難となりました。種々考へ拔いた揚げ句、石橋さんは八年の五月十七日ですか、遂に死を決して遺書を認めそして熟睡して居る子供等の寢顏に今世の別れを告げ、そして將に自殺を決行しようとした時『今死んではならぬ。子供の爲に死を賭して更生の道を計れ』と腦髓の何れにか聞え來るものがあるのです。其の時三歳になつた男の兒が目を覺まして火の附く如く泣き出しました。このため自殺が出來ないで、石橋さんは在來の鍼灸院を義弟にまかせて、諸方に出張診療をしつゝ神戸へ出て來られたのでした。斯うして石橋さんが神戸の夢野橋の袂の新築の家を借りて鍼灸醫術を捲土重來の意氣を持つて再び開業されたのは昨年の八月でした。併し心が整理されてゐないから商賣が繁昌する筈がない。一ケ月もすると家賃が拂へない。すると管理人から『出て行け〳〵』

と云つて家明渡を强請される、此の家を明けたら行く處がないと云ふので、石橋さんはその家にシガミついてゐる。毎日のやうに管理人と大聲で喧嘩をしてゐる。そんな譯で益々商賣が繁昌しない。その時、石橋さんは誰からか生長の家のパンフレツト八冊を貸して貰つたのであります。それを讀んだ時に石橋さんの心に、爭つてまで、その家に執着して商賣を續けて行く心がなくなつたのであります。爭はなければ其の家に住む事が出來ない位ならば、もう其の家に住まなくとも好い。管理人と爭つてまで鍼灸醫を續けて行かうとはもう思はない。玆に石橋さんの心が豁然とひらいたのでした。それで管理人が來たときには一月十九日に家賃が出來なければこの家を明け渡して潔く家を出ると云ふ約束をしたのです。ところが家賃は出來ない、その日は大雪が降つてゐる。併し石橋さんの心はもう落付いて了つてゐる。『今迄色々お世話をかけました』と落付いてその大雪の日に出て行かうとしますと、管理人は『引越して行く家はあるのか』と尋ねる。『引越して行くにも先立つものは金ですから、その金がある位なら貴方に家賃は拂ひます』と云ひますと、『この大雪に本當に出て行くのか』と名殘惜しさうに云ふのです。『大雪でも何でも、家賃が拂へない以上、これは私の家ではありませんから』と云ふと、今度は管理人の方から『もう少し辛棒して此の家に居つたらどうぢや』と云ふのです。今

迄、この家に居りたい居りたいとシガミ附いてゐた間は『出て行け、出て行け』と云つてゐた管理人だのに、石橋さんの心が變つて爭ふ心がなくなつて來ると、今度はアベコベに『もう少し辛棒して此の家にをつたらどうぢや、わしも管理人と云ふことが職業だから家の借主があるのに家賃が集まらんとわしの成績にかゝはるから、一二ケ月分はわしが家賃を立替へてお前が拂うたと云ふことにして置くから、家賃は何日でも出來た時拂へば好い。患者も出來るだけ、わしが宣傳して世話してやらう』と云ふのです。供給は無盡藏にあるのに、今迄『我執』でその無盡藏の供給に栓をしてゐた。ところが、生長の家の小冊子を讀んで爭ふ心がなくなつたとき實相無限無盡の供給が石橋さんに流れ込んで來ると云ふことになつたのです。今では此の石橋さん、患者が夜の十二時頃迄も絶え間なくやつて來て困ると云ふやうになつてゐられると云ふことです。生長の家では醫者がなくても病氣が治るから、醫者殺しである、生長の家を信じたら醫者のミイラが出來て了ふと考へる人がありますが、さうではない。醫者がこの生長の家の眞理を知ると、患者の取扱ひ方や、接する心の態度がちがふから、此の石橋さんのやうに却つて繁昌つてくるのであります。

昨日、山下市助さんと云はれる誌友が來られました。この人は一年半ほど前から生長の家誌友

になつてゐられるが、偉い方である。大戰當時何百萬圓と云ふお金を儲けた——儲けたから偉いと云ふのではありません。それが大正九年の恐慌でウンと損をした。損をしたから偉いと云ふのでもありません。兎も角、ウンと損をして三百萬圓とか二百八十萬圓とかの大損ですが、資産が百四五十萬圓しかない。差引き百五十萬圓を支拂ふ道がない。途方に暮れ、土佐堀の金光教會の先生にどうしたら好いかたづねに行かれたのであります。すると其先生が『借金なら拂うたら好い』と云はれた。『それが私に拂へないので、お伺ひに上つたのであります』と申上げると『君には拂へないが、神なら拂へる。今日から、自分で商賣すると思ふな。神が商賣すると思へ。お前の商賣ではない、神樣のやる商賣で、お前は神樣の番頭だと思へ』と云はれた。說く先生もよかつたし、聞き手もよかつたのでせう。生長の家の招神歌にある『わが業はわがなすに非ず、天地を貫きて生くる祖神の力』であると云ふことがピタリと判つたのです。此の人は、神樣がわが事業を經營して下さるのであつて、肉體の自分はその番頭——その影に過ぎないと云ふことを念々刻々印象するために　事務所へ出掛る際にも『神樣唯今往つてまゐりますから、宜しく事業を經營して下さい』と挨拶して出る。そしてその挨拶と同時に自分の力で自分が事業を經營してゐるのではない、自分は神樣の容器で、神樣の無限力が自分に宿つて經營

して下さるのだと云ふ信念を以て事に當る、家へ歸つてくると、神樣に『唯今歸つて參りました。今日一日難有うございました』とお禮を申上げる。金が要る時には『神樣六十萬圓要りますから、どうぞ御調達して下さい』とお願ひする。そして『神に能はざる事はない』と信じ、委せて、爭はず、無理な巧みをせず、取越苦勞せずに待つてゐると、必ずその金が集つて來るのです。さしも百五十萬圓のマイナスも昨年邊りチャンと整理されて手持證券や地價の値上りで、却つて差引き三十萬圓殘ると云ふやうなことになつた。三宮の元居留地に持つてゐた地所でも十六萬圓からの地價があるのを皆が寄つて競賣すると云ふのでも、皆樣の迷惑のならぬやうに、どうなとして下さいと無抵抗に打まかせておいたら却つて好い具合に解決したやうな例もありました。今はこの人は滿洲に鉛鑛を持つてゐる、最初三十五萬圓投資されたが、また六十萬圓ほど要るので『神樣六十萬圓要りますからどうぞ宜しくお願ひ致します』とお願ひして置くと、どこからともなく出資してくれる人が出來て、六十萬圓の經營費が先日も整うた處ださうです。鉛は潜航艇などに要る軍需品で、國産は軍需の五分の一位で他は現在は輸入に仰いでゐる、それで鉛を生産することは國家的事業として今では國家がみとめてくれるやうになつたとのことであります。此の人は嘗て肺壞疽にかゝつて左の片肺が全部腐つて了つて息するの

も苦しくなり、醫者が手をはなして了つた時に、金光教の先生にお伺ひすると、『肺など腐つてゐても好いから、自分で息をしようと思ふな。神様が息をさせて下さると思へ。自分の力で生きてゐると思はず、神様の生命で生きさせて頂いてゐると思へ』とその先生が云はれた。その先生の言葉で忽然悟りが開けて、無限の癒す力が渾々と湧いて來て一年後には完全に癒つて了つたのださうです。この人は一昨年重症の痔を患つて、それ以來頭髪が眞白になつてゐた。ところが『生命の實相』を讀んでゐるうちに後頭部からと前頭部からと兩方から髪が段々黒くなつて來たのださうです。この人が『生長の家』誌友になられたのは山本海軍大將の薦めで『この本は好い本だから是非讀んで見よ。君は金があるから、買つて讀め』と云はれてから讀むやうになられたのださうですが、近頃では山本大將が山下さんに逢ふ毎に、君の頭は大變黒くなつたと云はれるさうです。金光教の素養がある上に『生長の家』と來てゐるから鬼に金棒だと云つてをられました。この人は、初めの頃は老眼鏡をかけなければ『生命の實相』を讀むことが出來なかつた。ところが『生命の實相』を繰返し讀んでゐるうちに、晝は勿論、夜でも電燈の下では眼鏡がなくとも『生命の實相』の振り假名まで讀めるやうになつたさうです。

谷口(隆)――私は、御存知かも知れませんが、丸太町に杉本製練所と云ふのがある。あの杉本さん

が私の親友であり、道の友達でありますので、杉本さん宅へ往つてゐますと、此の岡善吉さんが來られまして『生長の家』のパンフレット『こゝろ我を生かす』を一冊下さつた。打明けて申しますと、私は今迄觸指療法と云ふので多數の病人を助けて來たのであります。ひどい神經痛でも五日や一週間位でピタツと治る、醫者で治らないやうな、色々の難病が不思議に早く治る。實は早く治ると思つてゐたのでございますが、此頃私が直腸癌らしいものに罹りました。どうも直腸の內部に何ものか出來て變である。併し自分の指頭の觸れるところどんな難病でも治ると思ふ自信があるものですから別に醫者にかゝりもしないでチョイ〳〵自己治療を試みてゐたのです。併しはか〴〵しく治らない。それが岡さんに『生長の家』のパンフレットを貰ふ前日位ゐは肛門が脫肛のやうになつて中から疣のやうなものが吹き出て痛んでゐたのです。ところが、岡さんに『生長の家』のパンフレットを頂いてその一冊を一日かゝつて熱心に讀み耽りましたが、それを讀み終つてから氣がつくと、不思議や其の直腸の異狀がスツカリ治つて了つてゐたのです。これには私は驚きました。私の指頭療法では重病でも普通五日や一週間で治るのですが、『生長の家』のパンフレットでは一冊讀めばたゞそれだけで治る、これでは、今迄私の指頭療法では早く治ると思つてゐたけれども本當はもつと早く治るべきものを、やり方

が惡いために却つて長びかしてゐたのではないかと誠に慚愧に堪へぬ次第であります。

谷口――東京でも『手のひら療治』の幹部の方が續々『生長の家』へお這入りになるやうであります。病人に同じ手を觸れるにしても、病氣の本來無い『生命の實相』を知つて觸れると、普通の二倍三倍の速力で治るのであります。江口鎭白さんの『手のひら療治』の道場には正面の机の上に聖典『生命の實相』が置いてあるさうで、江口さんみづから『生命の實相』の治し方は大乘の教へであつて、自分の治し方は小乘の治し方であつて方便の教へである。今の世に大乘の教へを受け得る人が少いので已むを得ずに方便として小乘の治し方を採用してゐると云はれてゐるさうです。斯う云ひ得る江口さんは心の廣い方であります。

尾本――私は元來眞宗でありまして、阿彌陀佛の救ひを信じてをりましたが、それが今既に救うて了つてあると云ふやうに現世の一切のものにまで救ひの手がのびてゐるやうに悟らせて頂きましたのは『生長の家』の教へによつてゞあります。先日西宮にゐる私の知人の息子が神經衰弱に罹つて、夜眠らないで夜半に起きて暴れる。箒で天井を突き破つたりなんかして亂暴して困ると云ふことを聞きましたので、この人に『生長の家』を知らしてやりたいと思ひまして、態々西宮までその知人のところへ出かけて行きまして、その病人の親に會ひ、親としてさう云

ふ精神狀態の病人に對する心の持方を教へ、決して息子を劣等扱ひ――病人扱ひせぬことなど懇々と話して來まして、數冊の生長の家のパンフレツトを差上げて來まして、その夜、神想觀によつて自宅からその息子さん宛に光明思念を致しました。するとそれ以來息子が夜よく眠るやうになり、夜半に起きて亂暴せぬやうになつたさうです。數日後その家へ見舞ひに出かけて行きますと、其の息子が魚釣りに出掛けて行つたと云ふのです。今迄憂鬱性でそんなに外出などする男でなかつたのが近頃氣が輕くなつて外出するやうになつた。脚に水氣が來て腫れてゐたから、歩いたりしてどうも無いかと思つて心配してゐると云はれますから、心配しなさんな却つて歩いたら脚の腫れが引いて脚が細くなつて歸りますよと云つてゐますと、其處へ丁度その息子さんが歸つて來ましたので、見ると、果してその脚の腫れが引いて前より細くなつてゐました。

近視者――度の強い近眼の治つた例はありますか。

尾本――私は十一度の近眼でありましたが、段々眼鏡の度を緩くして行き、近頃では眼鏡を外しても、新聞を手に持つて、斯う遠視眼の人のやうに出來るだけ身體から遠ざけて見ても、新聞の振假名までも讀めるやうになりました。

近視者――いつから、さう云ふやうにお成りでしたか。

尾本――二ケ月程前です。

近視者――『生長の家』をお讀みになつたのは何ケ月程前ですか。

尾本――四ケ月程前です。

近視者――それぢやあ『生長の家』をお讀みになつてから治つて來たのに違ひないやうですが、年齢の加減で近視と老眼とが交替される時に近視が調節されて一時治ることがあるやうですがその種類ぢやありませんか。

尾本――さうでもないやうですねえ。何しろ私はまだ三十二歳ですから老眼の初まる頃ではありません。私は聖典を讀んだお蔭だと信じてゐます。

少女――私も女學校時代から近視でございまして、段々治つて來るやうに思ひますけれども、まだ今でも此處からは先生のお顏がハツキリ見えません。先生のお顏をハツキリ一度拜みたいと思つてをりましたら、此の前の前の座談會の神想觀の時に、先生が掛け聲をかけて下さつた。その瞬間、眼をつぶつてゐる私の眼の前に先生のお顏があらはれてハツキリ細かいところまでも拜しましたのです。アレ嬉しい、これが先生のお顏に相違ないと思つてゐましたけれども、

眼をつぶつてゐて拜しましたお顏ですから、これが本當に先生のお顏かどうか判らない。それで、私の拜しましたのが果して本當のお顏かどうか知りたいと願つてをりましたら、この前の座談會の席上で先生のお寫眞を見せて頂きましたら、ヤツパリ神想觀中拜ませて頂いたお顏でございました。

岡本――私は『生長の家』に入ります前は乘物に醉ふ性分でありまして、船は勿論、汽車旅行も出來なかつたのでございます。ところが今年の一月、是非伊勢參宮をしなければならないことになりまして、こいつは汽車に醉うて困るナと思ひましたけれども、なに『生長の家』があるから大丈夫だと『生長の家』を數冊懷中しまして汽車に乘りました。瀨多の鐵橋邊りから『生長の家』を讀み始めましたが、興味が乘つて、殆ど一冊を讀み終つた頃には、汽車に醉うと云ふことも忘れて了つてゐまして、到頭汽車に醉ひませんでした。歸途は名古屋へ廻つて歸りましたが、それでも少しも汽車に醉はない、これは難有いことだと思ひました。それから後、船で漁に出かけましたが、それでさへ少しも醉ひませんでした。これで私の古くからの乘物恐怖が一掃されました。岡林君が『岡本、今度の座談會にはその話をせんと可かんぞ』と云はれましたので唯今申上げて感謝致す次第であります。

谷口――齋藤さん、先日、貴女が私にお話し下さいました石川さんの奥さんの話を皆さまにしてあげて下さいませんか。(齋藤さん躊躇してゐる)では、私が齋藤さんから承りましたお話をお取次ぎ致しませう。又聞きですから少し位ゐ間違ふかも知れませんが、先月の中頃、石川さんの六歳になる坊ちやん――例の寒中にキヤラコの肌衣一枚で裸體生活を自然にやつてゐられる芳夫さんですが――此の芳夫さんが痲疹に罹つたのです。石川さんの奥様は例によつて子供の實相を見るのが治療法であつて別に人間的な手當をしないで、神樣の自然の處置にまかせて置かれたのであります。すると芳夫さんは自然の催しで『洋服が着たい』と云ひ出されたのであります。『どの洋服が着たい?』と奥さんがおたづねになりますと『冬の洋服が着たい』と芳夫さんは云ふ。それで冬の洋服を出して着せると、『寢たいから寢床を敷いて欲しい』と云ふのです。そして寢床の中に寢轉んで、手先までスツポリ蒲團の中へ隱して『手にブツ〳〵が出來て人に見られるのが耻かしいから手を出さんから、御飯も阿母さん食べさせて頂戴』と云はれるのです。普通痲疹の治療法としては或る時期は風に當らないことが必要なのでありますが、若し必要ならば衞生とか養生とか云はなくとも此の坊ちやんのやうに、內からの自然の催しによつてさうなつて來るのであります。芳夫さんは正味一日半斯うしてスツポリ蒲團を被つて寢て

ゐたが、一日半の後もう寝る必要がなくなると、寝床からムク〳〵と起上つて其邊を走り廻つて歩き出した。自然に委したとき自然は治療法を最もよく知つてゐるのです。もう風に當つても大丈夫になつたと云ふことが判りましたから、まだ發疹は殘つてゐましたが、其の翌日、石川さんの奥さんは其の坊ちやんを連れて、所用あつて終日京都の街をお歩きになつたのであります。無論風に當りましたが内攻すると云ふことはなしに治つて了つたと云ふことです。既に實相は救はれてゐるのだ。既に實相は病氣ではないのだ。この實相を見るやうにすればどんな病氣でも治ると云ふことが此の體驗でも判ると、この『既に』に力點を置いて石川さんの奥樣は齋藤さんにお話しになつたと云ふことであります。

荒川――もう一つ石川さんの奥さんが唯『愛の念波』だけで病氣をお治しになつた實話を皆樣の御參考に話させて頂きませう。先達て石川さん宅へ二男さんの友人學生が來られて一緒に上の學校の受驗勉强をせられると云ふことになつたのです。この友人學生は、ひどい腋臭だと見えて、傍らにゐると酷く匂ふのです。食卓に一緒についてゞもゐると、食慾もなくなる程に不快な匂ひがするのです。『そんなことを思ふのはこちらが惡いのだ』と思つても惡臭がするのです。その時石川さんの奥さんは『この學生は可哀相に、こんな腋臭を有つてゐては、人からも嫌は

れ、立身出世の邪魔になるかも知れぬ。どうぞして治してやりたい。暇があれば神想觀をして手を按てゝ祈つてあげよう』斯う考へて居られましたが、その機會がなくて、五日間ばかり過ぎたのであります。ところが五日ほどして氣がついて見ると、もう腋臭が全然消えてゐる。他の人に訊いて見ましても、誰も皆『もう匂はない』と云ふのであります。これは常に實相を觀るやうに努めてゐられる石川さんの奥さんの『治してやりたい』と云ふ愛の念波が感應して治つたのだと思はれます。

谷口――さうです。常に實相を觀るやうに心掛けてゐる人の愛の念波は光明念波になつてゐますから、さう云ふ人が『治してあげたい』と唯念するだけで奇蹟をあらはすのは不思議ではないのであります。『生長の家』では、不思議視されてゐたキリストの奇蹟以上の奇蹟が尋常茶飯事として實演せられてゐるのであります。

第五章　肉體と境遇を良くする道

内容――昭和八年九月中、生長の家の假見眞道場へ日々お見えになつた方の折りに觸れての座談の中より、肉體も環境も吾が心の影であると云ふ事實を如實に語り出されたものを系統的に蒐めさせて頂きました。

山田――私の御紹介申上げました高血壓腎臟病の方が全快になりまして昨日××の別莊で全快祝をなさいましたに就てはお祝をことづかつて呉れとの事でありますので、今日はその用事で一寸お立寄り致しました譯でございます。此方のお名前は唯今一寸申上げません。無論、誌友にはなつてゐられる方でございますが、今暫く本名を公けにしたくないから店のお方の名前で誌友にして頂いてゐると被仰つてをられました。無論、血壓病のことでありますので、血壓を計つて見たらどの位あるか判りませぬが、血壓などゝ云ふやうなことを超越せられましてお元氣になられたのでありります。この頃は少しも取越苦勞もせず、腹もあまり立たなくなり、物の考へ方が非常に調和した考へ方になつて來たと云つて大變喜んでお出でましたのでございます。例へば、今迄、汽車に乘り遲れでもせられますと、次の汽車まで待ち遠しくてヂレ〳〵せら

れたものださうですが、此頃では、乘り遲れたら『ア、乘り遲れてよかつた。何か私にとつてあの汽車に乘つては都合の惡いことがあつたので乘り遲れさせて頂いたのである。難有いことである。今度來る汽車が自分にとつて最も都合の好い汽車である。』と云ふやうに腹の立つ代りに難有い氣持になられるのださうでございます。先日もまだ醫者に通つてをられました時分、醫院まで行くと既に多勢の人が待つてゐる、今迄ならば診察の順番を待たずに、腹を立てゝ歸つて來られたこともあつたさうですが、その日は決してそんなことがなかつた。『今、醫院まで歩いて來たので脈搏もハヅんでゐて、慌てゝ先に診察して貰つても本當の血壓が分るものではない、本當の血壓が分らないで、また血壓が高いなどゝ云はれると却つて自分が心配するから、これは待合室で暫く休んでそれから血壓を計れと云ふ神樣のお示しである。』斯う思つて待合室で待つてゐることも却つて難有くなられて來たさうであります。兎も角も大變難有いことでございます。

谷口―――高血壓症の人の症候の一つは『腹が立ち易くなる』と云ふことですが、そんなに腹が立たなくなると、もう高血壓も治つたのと同じでございませう。腹が立つので高血壓になる、高血壓になるから腹が立つ、兩方から病氣を昂進させてゐられたのが、その反對になると、兩方

から病氣を治してゐると云ふことになるのであります。

山田――私も此頃はスツカリ取越し苦勞をしなくなりました。大抵この頃の洋服屋と云ふものは（私は洋服屋なのでございます。）羅紗屋へ勘定を拂はずに置いて丁度手一杯と云はれてゐる位で、勘定は五割位しか集らないのが普通なのでございます。ところが私は昔からその方針でございますが、お客樣から勘定を頂いたら、直ぐその歸り途で羅紗屋へ支拂ひを濟ましてウチへ歸ると云ふ風にしてゐますセイですか、（無論、私の出入りするお客樣は好いお得意が多いのでございますが）勘定の九割はその月末に綺麗に拂つて頂いて掛け倒れになるなどと云ふことがないのでございます。此の分は此の月は貰へないと私の方でも覺悟してゐますと、他のお得意樣が『一寸、此の月は先錢を拂つて置かうか』などゝ云はれまして、さう云ふ方の勘定などを合すと全部その月の勘定をその月に頂いてゐると同じことになつてゐまして、洋服屋の集金としてはレコード破りをしてゐる譯でございます。何でも溜めて置かない、溜めて置くことは積み（罪）である、循環を惡くすることであると思ひまして、出すべきものは出し、拂ふべきものはすべて拂ふと云ふことに致してをりますものですから、その代り、入るべきものは入る、持つて來て下さるものは持つて來て下さると云ふことになつてゐるのだと難有く思つてゐるので

ございます。

谷口――結局、生長の家の經濟理論を實證してゐらつしやる譯ですなあ。

山田――先日も誌友會の時に參りまして皆樣に結構なお話を聞かして頂いた。その時私も自分のお神德を頂いてゐる話をしたいしたいと思ひながら、どう云ふものか私は話し出す機會を逸して了つたのであります。すると歸宅致しますと、急に便意を催しまして、卑陋な話でございますが、多量に下痢をしたのでございます。その時に氣付きまして、私は今日人樣から結構な話ばかりを聞きまして慾張つて神德の取り得をしてゐる。人から體驗談を話されて自分も難有いと思つたら、自分の體驗談を話してお互ひに魂を高め合ふのが、人をも生かし、自分をも生かす道である。それに私は人樣から結構な話を聞かせて頂いて魂を高めて貰つてゐながら、自分の方からは自分の持つてゐる體驗談を腹に溜めて出さなかつた。だから其の腹に溜つてゐるのが象徵を代へて今下痢として流れ出たのである。これで私の腹は淨まつたのである。これからは善い體驗は腹に溜めてゐないで皆樣の前に出して出來るだけ聞いて貰ふことにしたいと思ひますと、その時は大變な下痢でございましたが、一回で治つて了つてあとに少しも不快な氣持が起らないのでございます。

塚田――金光教の高津さんに、先生と高津さんとの對話の載つてゐる號の『生長の家』を差上げましたら、高津さんは大變お喜びになりました。高津さんは今迄速記者を置いて自分の座談を速記せしめ、それにわざ〳〵自分が加筆したのを雜誌に色々出したこともあるが、それでも『自分』の云ひたいことが、充分あらはれてゐなかつたが、あの『生長の家』に載つた對話ばかりは、すつかり『自分』が現はれてゐる、口調までそつくりでスツカリ自分の言つたことが行屆いて書いてある。『生長の家』ではどこかに速記者を隱して置いて速記させるのぢやないかとまで云つてゐられました。

谷口――皆さんは、さう被仰つて感心なさるのですが、別に御覧の通り速記者も何もゐないし、ノートも何もとらないのです。東京へ私が往つて話した時の記事も、自分が話して自分自身すら忘れて了つてゐることがちやんと載つてゐると云つて感心された人もありました。先日も佐藤彬さんが『生命の藝術』誌に東京支部の座談記事を載せるに就て、その記憶術の祕訣と云ふやうなものを教へて頂きたいと云はれたのでありますが、別に祕訣もないのです。その人の心の中へ這入つてその人の話を聞き、その人の心を摑んでおいて、今度書くときには自分がその人の心に成つてその人の言葉を書くのです。速記者などゝ云ふものは、言葉の末節の咳や欠伸

までも筆記して行きますけれども、外から外から殘りなく細かく筆寫して行けばその人の全部が出るかと云ふと決してそんなものではない。吾々の姿や風丰でも一々、爪の形はどうである、細胞はどうである、胃袋はどうである、一筋々々の皺はどうであると速記者めかしく細かく書いて行けば行くほど、その『人』全體の風丰とか人格とか云ふものとは遠ざかつて行くのです。つまりこれは『影』ばかりを追うて行くから『心』が摑めず、その人の全體が摑めないのです。ところが、その人の『心』を摑んで置いて話を聞いて置き、サテその人の話を雜誌に書くと云ふ時に、その人の『心』になつて書きますと、形や言行の末節は悉く『心』の影でありますから、その自分が理解し摑んでゐる其人の『心』の展開として、その人自身の個性を有つた考へ方や語調までも髣髴として筆先に出て來ることになるのです。速記術にしましても『生長の家』の行き方は、外形から寫して行かないで心から寫して行く、すると外形は『心の影』ですから外形も自然に整ふのです。

誰とでも話してゐますと、その人の心がわかるのは、自と他とは本來一體だからです。形や言葉の末節を追うてゐれば、形と云ふものは形で、互ひに離ればなれのものである。だから形の上で一言一句を寫してゐる速記者は却つて談話者の眞意を摑み得ないで、形の上ではノートも

何もとらないで、談話者の『心』だけを摑んでゐる私の書いたもの丶方が談話者の人格のひゞきまでも傳へてゐると云ふことになつてゐるのです。シエンキーウイツチの『二人畫工』と云ふ小說に、眞に一流の新聞記者と云ふものは、其人に實際會つて話しもしないでゐて、その人の話すことをちやんとその日の新聞に載せてゐるものだと書いてありましたが、面白いと思ひます。つまり其人に成り切つて書くことが必要なのですねえ。その人に成り切れるのは本來吾々は自他一體だからです。

杉野——自他一體、人を生かせば自分も生きる——自他は一體だと云ふことが此頃は漸く私の魂に滲み込んでまゐりましたと見えまして、何でもない日常茶飯のことにそれが自分の生活の上に何心なくあらはれてゐまして、フト氣が付いて自分は『生長の家』の信仰に這入つてから隨分變つたなアと思つて自分で自分が難有くなることがあるのでございます。私は砂糖會社のものでございますが、先日も私の會社の販賣の方の社員が十月物は十月になれば値が下がることは明かであるから、今のうちから賣つて置いたら儲けになると申すのであります。私の會社が儲かるのは吾々にとつて結構なやうなもの丶、お得意先である砂糖問屋が損をして潰れねばならぬやうなことになつて、苦しんだ揚句の果てになつて泣付いて來たりしましたら、先方が倒

れたら此方も共倒れになる譯ですから、やはり値段を折合つて助けてやらねばならぬ。同じ助ける位なら、そんなに虐めてから助けなくとも、始めから、どちらも其麼無理なことをしないで、苦しい目をさせないで助け合ふやうにしたら好いではないか。斯う申しまして、十月物の砂糖は賣らせないことにしたのであります。そして、後で、それが自分の言つた言葉であるかと氣が付いて、昔の自分であればそんなことは云ふまい、自分も『自他一體で、他を生かすのは自分を生かすのだ』と云ふ眞理が判つて來たのだと顧みて難有く思つたのであります。

それから、これも先日、一つ橋の同窓關係のものから、或る展覽會の招待券を送つて來まして、若し不參であれば、不參と書いて送れと返信用のハガキを入れて來たのでありますが、私は無論、東京に催されるその展覽會へは出席出來ないので、これ迄は、たゞ不愛想に事務的に『不參』と書いて葉書をポストに放り込んだものでありますが、その時には妙に、その招待券を生かしたい氣がしまして、東京にゐる親戚に、その招待券を送つてやりまして、若し興味があれば展覽會を此の招待券をもつて見に行きなさい。興味がなければ、この葉書に『不參』と書いて私の名で投り込んで下さいと申してやつたのであります。前にはこんな事をする筈の私ではなかつたのが、こんな些細な事が深切丁寧に無理なしに出來るやうになりましたのは、『生長の

家』を信じて以來、何となしに心が穩かになつて心に餘裕が出來たからで、これも『自他一體』の眞理が判つたからだと喜んでゐるのでございます。

谷口―― 杉野さんは何でも實行なさる、實際近頃羨ましい程の心境に達してゐられますなア。何でも、眞理は手近かなものから一歩一歩實行するのが好いのです。先日、暑中休暇中に昭德女學校の女の先生が二人道場修行に來られましてその節『私の方の校長は不言不實行、有言不實行、不言實行、有言實行と人間の言行を四つの段階に分けて、その中の有言實行が最も尊いと云はれましたが、私はその理由が判らない、私には矢張り不言實行の方が尊いやうに思ふ』と云はれましたが、私は、矢張り『有言實行』が最も好い、善き事を語れば人々がその言葉の力に感化せられて善きことを行ふやうになる、善きことは天眞爛漫にドシ〳〵語るべし、惡しきことは少しも語らぬが好いと申しましたが、杉野さんのお話を聞いてゐますと、こちらの心も淸まるやうな氣がするのであります。これは言葉の力で、話されたからこそ感化が及ぶのであります。で、吾々は常住座臥、何でも小さなことにまで杉野さんのやうに深切丁寧に行屆いて實行出來るのが上々でありまして、其處に神が生きてゐる、生命の實相が流露してゐる。小さな事が却つて尊いのです。重大な非常な刺戟のあるやうな事なら誰でもするのであります。

山田――私は色々の家庭へ出入りするものですから、どの家庭にも悩みがある、それを救ひたいと思ひまして此方へ來る前から色々の教會へ往つたり、曉烏敏さんの講話を聞きに往つたりしてゐましたが、いづれのお話も聽いてゐます間は大變結構でありますが、今一つ紙一重と云ふところが私の心にピツタリしないのでございました。ところが私は大阪へ通ふ汽車の中で『生長の家叢書』を一冊知人から頂いたらその一冊を讀んだゞけで『コレだ！』と云ふ氣が致しまして、直ぐその日に聖典『生命の實相』を分けて頂きにあがつたやうな譯であります。それから常に二三冊はポケツトに入れてゐて、お得意先へ行つて何かの機會があれば『生長の家』のお話をしてパンフレツトをあげて來ると云ふやうに致してをります。先日も愛兒を亡くされまして悲しんでおいでになる家庭へお上げしましたら大變お喜びになりました。中には『君は其麼話ばかりしてゐてどちらが本業か判らないなア』などゝ云はれるのでございます。『人樣の爲になりたいのが私の本業でございますが、まア肉體の方は生活上、止むを得ず副業に洋服屋をやつてゐます』と云つて笑つたやうなことでございました。

私は此方樣へ伺ひますやうになりますまでは、『洋服屋でございます』と云ふと、職業に貴賤はないと知りながらも、何となしに氣が引けるやうな氣持がいたしてをりましたが『生長の家』

へ伺ふやうになりましてから少しも自分が洋服屋だと云ふことに氣が引けなくなりました。その代り私は裁縫職人に常に云ふのですが『人間は誰にでも世話をしてあげてゐると思へば樂しい嬉しい好い氣持になれるものだが、君たちは金持ではないから金で人の世話をしてあげようと思つてもそれは出來ない。さうすると金持でないと人を世話することは出來ないもので一人の世話をしてあげる心の樂しみ」を味ふことが出來ないかと思ふとさうではない。君たちが縫ひ針を運ぶ毎に心の中で「この洋服を着る人が常に幸福でありますやうに、怪我をしませぬやうに、いつも達者でゐますやうに」と念じながら、針を運ぶやうにしたら、それが非常な功德になる。心の力と云ふものは消えるものでない。君たちのその深切の思ひと云ふものが、その洋服を着る人を必ず幸福にし、その幸福になつた人の善き念ひが必ず君たちにめぐり運つて君たち自身も幸福になり達者になり繁昌して來るのだ』と敎へてゐるのです。すると段々裁縫の職人たちも善くなつて來るやうでありまして、私が夜分、晩く一人で神想觀をしてをりますと、濟んで眼をあけて見ますと、二人位ゐ裁縫職人が私の前へ坐つて一緒に神想觀をしてゐることもあります。

おかげ様で、宅の職人は皆な好い職人ばかりで喜んでゐるのでありますが、一人だけ、利かん

氣の天邪鬼と申しますか、こちらから云ふことには何でも反對しないと氣が濟まない男がをるのですが、無理に導いて往かうとしても却つて惡いから自然に氣がつくのを待つて祈つてをるのであります。その男が昨日からお腹を惡くして、今日は醫者へ行きたいと云つてゐますから、そんなら醫者へ行きなさいと逆らはずに其儘やつてあるのであります。斯う云ふ男はどうしたら好いでせうか。

谷口――人間を天國へ導くのをキリストは『人間を漁りせん』と云つてゐますが、それは丁度、魚釣りをするやうなものでありませう。魚釣りをするのに、魚が逆らつてゐる時に無理に釣り上げたら却つて絲が切れて了ふ。魚が逆らふ時には魚に逆らはないで絲を延ばす。そして魚が疲れて來たときに魚を釣り上げるのであります。大分以前、大阪の高橋剛さんと云ふ誌友が來て話されましたが、詳しいことは忘れましたが、さう云ふ常に逆ふ子供があつたのを普段は默つてゐられましたが、その子供が或る日病氣に罹つて醫者にかゝつても却々熱がさがらない。その時に高橋さんは『お前は平常御飯やお菜の小言ばかり云ふから病氣が治らないのだ』と強く一喝された。するとその時その子供が始めて、御飯やお菜の小言を云つて惡かつたと悟つて謝罪つた。と妙にその夜のうちに熱が引いて病氣が治つたのであります。するとその子供がそ

の體驗を友達のところへ往つて話しましたら、その友達の子供も感心して、それ以來御飯やお菜の小言を云はなくなつた、詰り、高橋剛さんの時機を得た一喝で二人の子供が一時に救はれたと云ふ話であります。さう云ふやうに反對する者は、反對してゐて景氣が好い時に導かうと思つても駄目であつて、行詰つて弱つてゐる時に天國へ釣り上げるのが好いのであります。

杉野――先日、御紹介して誌友にならせて頂きました××さん宅へ昨日ちよつとお伺ひ申しましたら大變朗かな心境になつてゐられて私自身も共々嬉しく感じたのであります。在學中のお子さんの部屋に『吾れは常に成績優良なり』と『吾れは常に健康なり』とを大書して掲げてゐられます。そしてそれを常に見て、常に成績優良にして健康の感じを深くするやうにしてゐられるのです。

谷口――それは『我れは我が家の繁昌のみを此處で語る』と大書して掲示する話が聖典に書いてありましたのと好一對でありますなア。先日或る誌友から何か揮毫して呉れと云はれますので『いつもにこ〳〵』と書いて二三日間、部屋へピンで止めて置いたのですが、その日は殊に子供の機嫌がよくて何か氣に入らないことがあつて思はず膨面れようとする時にも、自分で『いつもにこ〳〵』と唱へて氣分の轉換をして終日一層機嫌よくしてゐたやうでした。

山田――私は唯今一人、出來の惡い子供を預つてゐるのでございますが、どうも普通以下の働きしか出來ないので何處へ往つても勤まらない、親も其事は認めてゐるのでございまして、どうしても役に立つやうにならなければ仕方がないから親許へ歸して下さいと云はれてゐるのでございます。併し何處へ往つても役に立たないやうな者ならば親許へ返しても困るであらうから、五分の働きしか出來ないものならば、せめて七分の働きだけでも出來るやうにならせたいと、その子供のために毎日神想觀をして祈つてゐるのでございます。まだ結果はハツキリ判りませんが、何時かはその祈りの結果が現はれて來るに違ひないと信じてゐます。

谷口――そのお心持は非常に難有いことであります。その子供に顯はれる結果如何よりも、利害を絕してさう云ふお心持になれる處が尊いのであります。普通ならば『役に立たぬものなら返してしまへ』と云ふところを、『役に立たぬものであるから、追ひ返しても困るであらう。何とかしてよくしてやりたい』と云ふ心は神の心であります。實生活に實相が流露してゐるのです。結果はどう云ふやうになりませうとも、さう云ふ『神の心』が貴方のお心に宿つた――言ひ換へると人間が本來の神に成つたと云ふことが尊いのであります。

宮――神の子の自覺――私は、本當の感謝と平和と光明と供給と健康との泉は一つに此の自覺か

ら生れると信じさせて頂いてゐるのでございます。
私は、女子大學在學中、二年生の初めの頃でございましたか、成瀨校長から『貴女達は何によつて安心立命を得るか』と云ふ問題を出されましたので、私は『キリスト教によつて安心立命を得る』と云つてお答へしたのでございました。さうすると、成瀨先生は『貴女はそれでよろしい』と被仰つた。何故成瀨先生は單に『それでよろしい』とお答へにならないで、『貴女はそれで宜しい』と『貴女』附けにして被仰つたのであらうと、ひとりで思ひ惱んだものでございました。考へて見ますに、成瀨先生はその頃から『救ひは一つ、神佛は一つ』と云ふことをお考へになつてゐられたのだらうと存じますが、その後、臺灣在住の頃、成瀨先生が『歸一協會』と云ふのを起されたと云ふことを承りまして『成る程、神と云ふも佛と云ふも其の實相は一つである。先生が大我又は宇宙の大靈と云はれたのはこの佛であり神である、何れの宗教でも其の眞髓を摑めば同じである』と思ふやうになり、私の祈りの形式も變つて來たのでございます。信仰問題の話になりますと、私がよく『宇宙の大靈』と申すものでございますから、『大靈先生』と綽名をつけられたことがある位でございます。爾來私は信仰が徹底して安心立命を得たつもりでゐました。今から考へて見ますと自己陶醉をしてゐたのでありますが、逆境にあつてよく

堪へ忍び、逆境に於ても堪へ忍ぶことの出來る自分を何となく誇りとし、つまり逆境陶醉に陥つてゐまして、『逆境は心の影』であつて、逆境が來るのは自分の心が惡いためにそれが現象世界に映つてゐるのだと云ふ事には氣が付かないで、逆境の來る源たる『わが心』を直さうとしませず、たゞ『逆境、難有い！』で通して來ましたゝめ、信仰生活を續けながら、逆境は依然として續き、不調和はます〳〵重なつて來まして、つひに昨年七月には最愛の男の子を二十歳で亡くしたのでありました。併しその時ですら私は、これは神樣の御心であると、感謝の心を失はなかつたのでございます。今年三月機縁が熟しまして、神樣のみ惠みで『生長の家』を知らせて頂いたのであります。それも實に奇緣で、關西婦人聯合會の席上で田村ふく子さんから、他の人にことづけて呉れと賴まれて托された『生長の家叢書』を何心なく披いて讀んで見ましたところが、言々句々私の心に思ひあたるところがありますので、直ぐに『生長の家』の會員にして頂きまして『生命の實相』を讀ませて頂きますと共に、私の信仰に革命が起りまして、肉體上にも環境の上にも光明が輝くやうになつたのでございます。

三月ごろに『生命の實相』を讀ませて頂きます迄は、私は近來視力が衰へてゐる、考へて見れば、もう自分も五十歳であるから老眼鏡を必要とする年齡である、近來視力の衰へたのも無理

はない、その内に眼鏡を求めたいなど丶思つてゐたのでございます。夜分なども、娘が女學校の教科書を持つて來まして、字劃の複雜な文字の讀み方など尋ねましても、どうもその字劃がハツキリ見えないので『お父さんの古い眼鏡を持つて來て御覽』と云つて、度の合はないその眼鏡を掛けて字劃を大きく映し出してそれを讀んだものでございました。ところが『生命の實相』を三月から讀ませて頂いて一ヶ月間經ち、四月になりますと、あの『生命の實相』の小さい六號活字が、眼鏡なしに、その振り假名までハツキリと見えるやうになつたのでございます。先き頃も女子大學の同窓會『櫻楓會』の近畿大會がありました席上で、會の機關新聞の編輯者の仁科さんから『家庭週報』の記事を増すことになつたが、紙數を殖やすことが出來ないので、活字を小さくしましたら、讀みづらいとて諸方からお小言を頂戴したと云つて御辯解がありましたので、私は即座に『その心配は御無用でございます。視力と云ふものは心の持ち方で變るものであつて、私は現に、以前の大きな活字の時の「家庭週報」でも讀みにくかつたのですけれども、心をかへ信仰をかへて以後の私は、今度小さな活字になつた「家庭週報」でも以前の大きな活字の「家庭週報」よりもハツキリと見えます。この分なら、私の眼はもう二十年位は大丈夫だと思ひます』と申しますと、出席の皆さんは大變お笑ひになつたのでございますけれど

も、笑ひ事ではない。本當に私の此の眼が三月以前と比べると、雲泥の相違位に視力を增したと云ふ事實は誰も否定することが出來ないのでございます。

それから、『生命の實相』を讀ませて頂きまして、『生長の家』の神想觀を始めるやうになりましてからは、以前にあつた少し讀書しても頭痛がする肩が凝ると云ふ持病がなくなり、自然に過食もしなくなりまして胃腸病もなくなりました。少し位腐つてるるかも知れぬと思ふ物を食べましても『此れは神樣から頂いた食物であるから、神樣から頂いた食物は人間を生かすばかりで、害するものではない』と信じて感謝して頂くやうに致しますから、他の人にアタルやうなことはあつても私には決して食當りをすると云ふことがなくなつたのでございます。主人などは『お前の胃袋は掃き溜だ』と云つて笑ふのでございますけれども、實際『これは神樣からの頂き物であるから、養ひになるばかりで害になる筈はない』と信じて頂きますと、どんな物でも食當りしないのでございます。

私はこのやうに御神德を頂きましたが、家族はどうであるかと申しますと、娘の食事の好き嫌ひがなくなつたのでございます。以前にはあれは生臭い、これは氣持が惡いと云つて始終お菜の小言ばかり云つてるましたが、『生命の實相』には『子供は親の心の影』だと云ふことが書い

てあるから、娘があゝ云ふ風に食べ物の小言を云ふのは、私にどんな『心』があるからであらうと云ふことを神想觀を濟ました後に一心に反省するやうにしたのであります。すると、お菜の好き嫌ひを云ふと云ふことは要するに『我儘』と云ふことに歸着する。子供が我儘を云ふのは私に我儘をする心持があるからではないかとフト氣が付いたのであります。と、そんな事はない、私は常に逆境にも感謝して忍苦の生活を送つて來たのであつて少しも『我儘』をしたことなどはないと思へて來たのでありましたが、更に深く反省して見ましたところが、矢張り私に『我儘』があると云ふことが判つたのでございます。

谷口――どう云ふ『我儘』があるとお氣付きになつたのでございますか。

宮――私は形の上、行ひの上では『我儘』は決して致しません。從來から『忍苦だ、忍從だ』と思ひまして、自分の慾望を押へてゐまして、外から見ますと如何にも從順に見えてゐるのでございますが、心の中には『我儘』があつたのでございます。例へて申しますると、そんなに是非行かねばならぬと云ふやうな用事もないのに、私は外出好きで、ヨソを訪問したがるのでございます。ところが宅の主人は、私がそんなに外出することを好かないのでございます。『今日は何處そこへ往きたい』と私が申しますと、『そんな所へ行かなくとも好い』と主人は申すので

ございます。そんな時に私は決して逆らひません。『ハイ』と答へて從順に主人の意見に從ふのでございますが、心のうちでは『これ位のことはしても好いのに』と思ふ『我儘』が心の中に潜んでゐると云ふことを發見したのであります。形では我儘をしませんが、心で我儘を犯してゐたのであります。『あゝこれが私の我儘である、これから此の我儘を止しませう。』と私が決心いたしまして約半月を經ました或る日のことでございます。娘と一緒に食事をしてゐましたら『この固くてゴムのやうに何時まで噛んでも噛み切れないものは何でせう。出しては勿體ないと思つて噛んでゐるのですが噛み切れないのでございます』と一生懸命に噛んでゐるのでございます。口から出させて見るとそれはカシワの皮の處なのでございます。その時私はフト氣がついたのでございます。今迄娘は、カシワは大嫌ひ、魚は大嫌ひ、カシワの皮の處でも這入つてゐませうものなら『ア、穢ない！』と云つて折角盛つたのに其のお汁までも吸はないのでございました。その娘が、今少しも不平を云はないで、噛み切れない皮の所のカシワを一生懸命に噛んでゐたのでございます。私が『心の中で犯してゐた我儘を直しませう』と決心しました時、娘の我儘が直つてゐて最も嫌ひだと云つてゐたお菜でも不平を云はずに默つて食べてゐたのでございます。それから數日しました時、私は皆の食膳に鰺を附けたのでございます。氣が

附きますと『お母さん、このお魚おいしいのね、何と云ふお魚なの？』と云つてゐるのでございませう。今までは中々さう云ふお魚など『生臭い』と云つて少しも箸をつけようとしなかつた娘なのでございます。私はその變り方に驚きましたが、何事もないやうに『これは鯵と云ふお魚よ、美味しいでせう。』と申しますと『えゝ、これ鯵と云ふお魚？ 美味しいわねえ。ちつとも生臭くないわ。』かう云つてそのお魚を裏返しにして兩方とも食べてしまひました。それからと云ふもの、子供に食事の好き嫌ひがすつかり無くなつたのでございます。本當に今迄子供が食事に我儘を云ふとばかり思つてゐましたが、それが實は、私の『心の中で犯してゐた我儘』だつたと判つたのでございます。それから又斯う云ふ話がございます、私の宅の前後は塵芥捨場になつてゐまして澤山の蠅が家の中へ侵入して來るのでございます。主人が在宅してゐます時など、大變五月蠅がりまして、蠅叩きで取れと申すのでございます。それで或る日蠅叩きで二十疋位殺して捨てましたが、それで蠅の數が減つたかと申しますと、その次の日には一層澤山這入つて來てゐるのでございます。又それも取らねばならぬと申しまして、又蠅叩きで叩きますと、以前よりも十疋殖えて三十疋取れたのでございます。それで蠅が減つたかと申しますと、中々蠅が減らない。却つて益々殖えて行くばかりなのでございます。私はそれで娘を呼んで斯

う申しました。『貴女は蠅がこんなに澤山來ると、どんな氣がしますか？』『五月蠅くて仕樣がないわよ。』『さうでせう、五月蠅いでせう。五月蠅いものが斯んなに澤山集つて來るのは、吾々の心のうちに、人を五月蠅がらせたり、五月蠅い五月蠅いと思ふ心があるからですよ。類は類を呼ぶと云ふことが「生長の家」に書いてあるでせう。だから蠅がウルサかつたら、これからウルサイ〳〵と思つて殺さないで、誰にでも深切にし五月蠅がつたり自分もウルサイと思はれないやうにしませうね。お父さんがお歸りになつて蠅を叩けと被仰つたらお父さんに逆つては可けませんから「蠅さん〳〵、こゝに居つて怪我をしては可けませんから外へ逃げなさい」と心の中で云ひながら蠅叩きで出來るだけ蠅に當らないやうに叩きませう。お父さんがゐらつしやらない時に蠅が澤山來ましたら「蠅さん、蠅さん、この家は神の子たちの住家であつて、お前の棲む所は別にあるんだから、外へ往つて棲みなさいよ」と蠅に云つて聞かせながら、團扇で斯うして輕くソヨ風を送つてやりませう。』斯う私が教へますと、娘は面白がりまして、團扇でソヨ〳〵風を送りながら『蠅さん〳〵、此處は神の子の住居ですから、貴方の棲家は別にある……』とやり始めるのでございます。すると、どうです、蠅はそのソヨ風に誘はれてズン〳〵外へ出て行くのでございます。その時、私は二三年前に餘り澤山蠅が家の中の空中を舞ひある

くので、部屋中を一生懸命に叩きますと、蠅は決して外へなど出ないで天井にクツ附いて了つたことを思出しました。その時は、蠅は蠅であつて、それが自分の心の影だとは知りませんので、今度は天井にクツ附いた蠅を落さうと思つて座敷箒を持つて來て天井を拂つたものでございます。すると蠅は天井から去つて、今度は壁にジツと止まつてゐる――さう云ふ風にして『五月蠅い、うるさい』と思ひながら汗みどろになつて二三十分間も蠅と追ひ驅けごつこを致しましたが、その時は到頭一疋の蠅も室の外へ逃げて行かないのでございました。その時の體驗を思出しまして、今度の體驗と比べますと、心が變つてゐますので、やすらかに蠅が從順に團扇のソヨ風に誘はれて戸外へ逃げて行くのでございます。さう云ふやうな蠅の驅除法を致しますやうになりましてから、家の中にゐる蠅は實に僅かになりまして、二三疋しかゐなくなりました。これは時節で蠅がゐなくなつたものだらうかと思ひまして、家の外を見ますと、外には蠅は減るどころかウジヤ〳〵するほどゐるのです。この體驗を得ましてから、愈々益々『我が環境は我が心の影』と云ふ『生長の家』の教への眞實さを解らせて頂いたのでございます。

それから、宅の主人は極好い人でございますが、物を言ひ付けます際、激したやうな咎めるやうな口調で申す癖がございました。その激したやうな怒鳴るやうな言葉使ひを聞きますと私は

前から悲しくなるのでございました。『何故もつと優しく云つて下さらないのであらう』と思ふのでございます。そして、私はもう十數年來、『主人の言葉使ひが物柔かになりますやうに』と神樣に祈りつゞけて來たのでございます。それでもその祈りは聞かれないで最近まで來たのでございます。ところが數年前、『アウガスチンの懺悔錄』とか申す本を讀ませて頂いて、聖アウガスチンが更生するのにも、その裏に純情の聖女モニカの祈りが十年間も働いてゐる。純情のモニカの祈りが聞かれるのさへ十年間はかゝるものなら、私如き者の祈りが聞かれるのは數十年かゝつても不思議はない、祈りは聞かれないのではない、これから次第に聞かれてくるのである、その聞かれてくる時期が私が死んで了つたあと十年十數年かゝらうとも待遠しう思ひますまい――斯う思つて最近まで祈りつゞけて來たのでございます。しかし最近私は『生長の家』を知らして頂きまして以來、その祈りに間違ひがあつたと云ふことに氣付いたのでございます。今迄私は良人の言葉使ひが惡い、良人の言葉使ひを直して頂きたいと、良人を直すことばかり祈つてゐまして、その良人の言葉使ひの元である私の心を直して下さいとは祈つてゐなかつたのでございます。これでは梢のことばかり祈つて幹のことを祈つてゐなかつたので、その祈りが聞かれなかつたのも無理はないのでございます。さう氣付かして頂いてからは、我身を顧ず

に『良人の言葉使ひが優しくなるやうに』などと身勝手なことを祈りませず、良人が咎めるやうな激しい語調で私に物を被仰る時は、さう云ふ人を咎めるやうな心持が自分の心の何處かに潜んでゐるからだ、それを主人が知らして下さるので難有いと反省させて頂くやうになりましてから、主人の語調もいつの間にか以前と變つて優しくなつて來られまして家の中が明るくなり大變喜んでゐるのでございます。ところが先日、また主人に『これを斯うして置くやうに云つてあるのに、マダしてゐない！』と云つて、又ひどく激しい語調で咎められましたので、ハツと氣がつきまして、私の心のうちに、もう人を咎める心はなくなつてゐると慢心してゐましたが、まだ人を咎める心が殘つてゐたのだ、それを知らして頂いて難有いと思ひまして考へますと、その前日の朝、宅を掃除しまして、縁側などを綺麗に拭きました後へ、近所の三歳位になる子供が埃だらけの穢い足をしてヨチ〳〵やつて來てその縁側へのぼらうとしたのでございます。『ア、其處へ來ては可けない、折角今綺麗に拭いた縁側が穢くなる』と私は思はず咎めさうになりまして、その瞬間氣がつきまして、咎めはしませんで『サアお上んなさいよ』と云つて其の子供を縁側へ抱いて上げて差上げまして、『縁側が汚れたら、また拭けば好いので、心を汚して咎める必要はない』とすぐ氣がついたのでございましたが、さう云ふやうに、瞬間的にでも

私はまだ人を咎める心持を持つてゐる――自分のその心持が映つて主人から激しい語調で叱られたのだと氣付かせて頂いた譯でありました。斯う云ふやうにして、私は近頃は何につけても難有いばかりでございます。

その難有い氣持で反省してまゐりますと、指先などに時々傷を致しましても藥一つ附けないで其の傷が治つて行くのでございます。先日も風呂を沸かし附ける支度を致さうと存じまして、石炭の灰の落ちる簀の子の下へ手を入れて灰を落すつもりでガタ〳〵と搖りました瞬間、チカツと私の掌を強く螫した者が御座います。その瞬間、私は『難有う御座います』と覺えず聲を立てたので御座います。瞬間的に神樣から私の心の缺點を知らして頂いて難有いと云ふ氣が致したので御座います。螫された掌を、もう一方の手の指先で暫く押へてゐましたが、間もなく手の甲まで膨れ上つて來たので御座います。裏庭つゞきになつてゐる近所の奥樣が出て來られまして、『奥樣、まあどうかなさいましたか。』と被仰います。見ると大きな蜂が死にさうになつて藻掻きながら其處に倒れてゐるので御座います『あら、奥樣此の蜂が螫したので自分も弱つて苦しんでゐるので御座いませう。この蜂は足高蜂と云つて、迚も此の蜂に螫されたら大變です、二三日は大の熱が出て苦しまねばならぬさうですから、早くお藥屋からお藥を買つて來て

お附けなさい。』と近所の奥様は深切に被仰るので御座います。私は心の中で、『私の心の缺點を、折角知らして頂いたのに此の蜂を殺して了つたのでは誠に氣の毒だから何とかして此の蜂が元氣を回復しますやうに。』と一心凝めて念じてゐたので御座います。暫くすると蜂は元氣を回復したと見えまして、ブーンと翔び立つて、竿竹に一回止まると、何處ともなく立去つて了ひましたので『ヤレ〳〵善かつた』と思つたことでした。それから私は、『蜂に螫されるのは、私に人を刺す心があるからだ、これから一層氣をつけて、人を刺さない心を持ちませう』と決心しまして、近頃人を刺すやうな考へ行ひをしたことがあるか、どうかと思出さうとしましたが、どうも思出せないのです。その時『生命の實相』に『知つて犯した罪よりも、知らずに犯した罪の方が重い、まだどれだけでも犯すかも知れないから』と書いてあつたのを思出して『これだ、私が惡かつたのだ』と深く深く反省しますと、手は膨れてゐましたが、痛みは三十分位でなくなり、夕方お風呂が沸いた頃には、膨れもスツカリ引いて了つて、もう御風呂へ入つて傷口を湯へつけても平氣で御座いました。『懺悔』すなはち心の中に犯された罪を思ひ出して捨てて了へばすべての病ひは治るものであると、『生長の家』で教へられてゐるのは眞理であることを、斯うして私は毎回體驗させられて感謝致してゐるのであります。

谷口――大變結構なお話を承らして頂きまして難有う御座いました。さう云ふ風に、外界に映し出された『自分の心の影』と云ふものに照して、自分と云ふものを省み『ニセ物の自分』を捨てゝ『本物の自分』の生き方をするのが『生長の家』の生き方なのであります。併し、此の蟲に螫されるとか病氣になるとか云ふのは吾々を反省せしめる爲に神が與へた神罰であるかと云ひますと、『類が類を招ぶ』心の法則で、さうなるのであつて、神が人間を罰するのではないのであります。念と云ふものは象徴的に展開して、その念に類似する形を現象界に具象化するのでありますから、惡念は神から直接に罰しも罰されもしないのですけれども、その惡念を出した人の肉體と環境とにその惡念の内容相應のものが形に化して實際現象としてあらはれて來るのであります。『生長の家』で『神罰は無い』と斷言しますと、自分の病氣さへ治れば、あとは好い氣になつて利己的な忘恩的な行ひを平氣でやる人が出來て來るかも知れませんが、さう云ふ人の周圍には同類の忘恩的な利己的な人達が集つて來るのであります。忘恩的な人のところへは忘恩的な人間ばかりではなく『忘恩的な事件』までも集つて來るのであります。『忘恩的な事件』と云つたらどんな事件であるかと申しますと、善い結果を得るだらうと思つて一生懸命に其の事件に誠を盡してゐますと、善い結果はその事件から生れて來ないで、自己の努力に對し

ては忘恩的結果即ち自己を裏切るやうな結果を招くやうなことになるのであります。よくこんな人は申します――『必ず成ると云ふ自信を以て、誠を盡せばどんな事でも成就すると云ふことが「生長の家」に說いてあるが、今度の事件には自分は自信を以て誠を盡したのに不成功に終つた』と云はれるのであります。自信と一事貫行の誠とは各々事を成す要素ではありますが、たゞそれだけでは必ずしも事は成就しないのであります。自信に對して自信を裏切らず、努力に對して努力を裏切らない結果を得るには、自分自身が裏切つた心持と行爲とをしない卽ち忘恩的な心持と行爲とをしないことが必要なのであります。

忘恩的な心持は何處から生れて來るかと申しますと、大抵物質慾に捉はれるからであります。『恩は知つてゐる』と自分でも思ひ、感謝もしてゐるつもりであつても、『物を出すのは惜しい。心で感謝して置かう』などと思つてゐますと、その『惜しい』と云ふ心が、恩者に遠ざかる働きとなつてあらはれ、次第にその人間を忘恩的にし、ひとりでに偉くなつたやうに慢心が出て來て、恩者を忘れてしまふやうになつてくる場合があるのであります。さうなつて來ますと、自分は眞理を充分悟つたつもりであり、神想觀も一生懸命にやつてゐるし、自信と熱誠とをもつて事業をやつてゐるのにどうも事毎に自分を裏切る結果を招くやうになります。これは、『類

は類を招ぶ心の法則』によりまして『裏切る心』が『裏切られる結果』を招くことになるのであります。

斯う云ふやうに『心の法則』と云ふものは、嚴重に働くものでありまして、『物質無、我れ神の子なり』の絶對境に達しない限り、『刺す心』は『刺される結果』を招く、『裏切る心』は『裏切られる結果』を招くのであります。又、眞に悟りの絶對境に達しますれば刺す心も裏切る心も無くなるのであります。現象世界は本來無いのであつて、念の象徴化でありますからその象徴を追うて遡つて行けば、その病源なる病念に到達するのです。神のお罰であるなら、もつとハツキリした形をとるが、象徵であるが故に明瞭にそれと氣付かぬことが多いのであります。先般××の誌友で時々鼻血が出るので『ひとの道』の教祖に神宣を乞うた人がありましたが、『色々と物事思ひ詰める性分があるからそれを直せ』と云ふ神宣でありました。此の人は此の神宣を有難がり、その通り實行しようと決心しましたが、それ以來鼻血が出なくなりました。その人はまた或る日膝坊主に擦り傷を受け、また一疋の蜂が舞ひ下つて其人の腕を螫したのでありますで其人は試みに『ひとの道教團』に再び神宣を乞ひましたら『自分ばかり偉いと思つて人を色々批評する性分があるから神がこれにお氣付けしたのである』と云ふお示しでありまし

た。その人、これは大變自分の性分に合つてゐる御神宣を受けたと思つて『人の道教團』を崇敬して直にその信徒になつたと云ふことであります。鼻血が出るのは、物を鼻にかけ、また高ぶり、上に血が昇り、自分考へを標準にして物事クヨ〳〵思ひつめる念が象徴化したのであります。蜂に螫されるのは、自分にある人を刺す心――色々人を批評し傷ける心が象徴化したのであります。膝坊主は曲げて突き出す所であります。この人は曲げて突き出して他と衝突摩擦して血を出したのであります。色々と人を批評し、自分の方が曲つてゐてもそれを悟らず、自分を偉いやうに思ひ、他と衝突する性分が此の人にはある故に、その念の象徴化としてこの人はさう云ふ傷を受けたのであります。病ひは神のお示しと云ふことも、天理教のやうに『理は神ぢや』と云ふ『理』――即ち『生長の家』で云ふ『心の法則』を知るならば、人の道教祖ならずとも何人にも斯う云ふ判斷は自分につくのであります。判らない場合には神想觀をして、精神を統一し、神にお願ひして自分を空しうしてをれば、心に必ず神宣が浮んで來るのであります。神示を受ける方法は『生命の實相』全集の觀行篇に私の書いた『神示を受くる道』を御參考になさると好い。『人の道教』では『念の具象化の法則』を教へないで教祖に頼つて自分の心得違ひを教へて貰ふ、『生長の家』では各誌友が心の法則を知るから、誌友各々みんな『人

の道教祖』と同じになつて了つて、自分の環境を見、自分の病氣を見て、自分の心の間違ひを悟ることが出來る。悟れるだけではなく直さうと云ふ誠さへあれば聖典を繰返し讀み神想觀を勵めば自然に直つてくるのであります。

大野――さう云ふやうに自分で反省して、例へば宮さんのやうに、この現象は斯う云ふ心の影だと云ふことが判る人は結構でありますが、自分が何か不幸になるとか病氣にかゝるとかしながらも、それがどんな自分の念の影であるかゞ反省しても一向判らないやうな時には、ひとの道教團にでも這入つて、教祖の神宣を他力的に仰いで自分にある惡念をハツキリさせて、その心の間違ひを努力して直すやうにすると好いと思ひます。又『生長の家』のやうに『病氣は無い』と云ふよりも、天理教や人の道教團のやうに『病氣は神のお氣付』だと云ふ方が私のやうな下根の者には判りやすいので御座いますが。

谷口――先日、天理教の教會を開いてゐる方で子宮肉腫で腹が一杯に膨れ上つた病氣になつた人の話をきゝましたが、家庭の中に嫉妬や詛ひの渦卷があるのです。で、その上級教會の教師が云ふには『それは貴女の心を直さねば治らぬ』と云ふのです。しかし、家には嫉妬すべき事實が持上つてをり、單に嫉妬するなと云はれたとて、その心の持方が止まるものではないのです。

貴方が假りに病氣になつて『君の病氣は腹を立てるのが悪いから、それを治せ』と云はれたら、スグその日から腹の立つのを止めに出來ますか。

大野――それは無論止めようと思つても止まらない場合が多いのです。

谷口――止めようと思つても止まらないのが煩惱であると、ボーロも法然上人も歎いてゐるのでありますす。だから心の間違ひを神宣で指摘されても、自力で努力して治さうとした位でその心の間違ひが治るものではないのです。

大野――では、どうしたら直るのでございますか。

谷口――自分の心の缺點を知りたい、知つてそれを直したい。併し、缺點を知つても治らないのは『缺點』と『自分』とが對立的になつて『缺點』と『自分』と云ふものが、角力をとるやうに四つになつて取組んでゐるからなのです。さうなると『缺點』と自分とは對等な力になるから、ともすれば自分の方が負けさうになるのです。『缺點』に勝つには『缺點』を神想觀をして神に預けるのが好いのです。さうすると光の中へ暗を預けたやうなもので暗は自然に消えて了ふのです。澤田さんが神想觀の修業をしられると自然に心が穩かになり、酒や煙草の味が變つて不要になつたと同じやうに、心の缺點が自然に變つて來るのが本當の宗教の功德なのです。

努力して直す間は道德行で對立的になつてゐるのです。實相の中に溶け入れば、もう缺點も惡い性格もないのです。大體、自分の缺點を他から教へられなければ判らないと云ふのは實に弱い考へであります。それから『生長の家』で云ふ『病氣は本來無い』と云ふことゝ、『病氣は神のお示し』と云ふこととの間には何らの矛盾もないのであります。併し『病氣は神のお氣付け』と云ふのはどうでありませうか。『お氣附け』と云ふ言葉の奥には『あいつはこんな惡いことを考へ又は行つてゐるから病氣にしてやらう』と云ふやうな病氣作成の神の意志が働いてゐるやうに受取れるのです。併し、神はさう云ふ病氣作成の意志はないのであります。心を變へると病氣が治る事實は、『病氣は象徵として存在するのであつて、實在として存在するのではない』と云ふ根本原理によつてさうなるのであります。病氣は象徵であるからこそ、象徵の原因たる『念』を變へれば、象徵たる病氣が消えるのです。それは象徵であるから一つの『示し』である。その『示し』の奥には『念の具象化の法則』がある、天理教の所謂る『理』がある。この『理が神ぢや』と云ふことになるので、象徵は神示とも云へるのです。併し各人にはすべて此の『理』即ち神性が宿つてゐる、その神性に照し、『理』に照らして自分の缺點が判らないと云ふ筈はないのであります。自分の缺點は『人の道教祖』よりも自分自身が一番よく知つてゐる

のであります。だから人の道教祖などから神宣と云ふ嚴めしいものを貰つて『これは誰にも見せてはならぬ、見せては効果が失せる、人に見せずに自分だけが默々として實行すれば汝の病氣とか不幸とかは治る』と云はれてから、その神宣と云ふものを見ると感心する。『成る程自分の心の缺點によく合つてゐる』と感心するのでありますが、その人が『成る程、自分の缺點によく合つてゐる』と判るのは、自分が前から自分の缺點を知つてゐたからであります。自分の缺點と云ふものを自分が全然知らなければ『人の道教祖』の御神宣が自分の缺點に的中してゐるかどうかも判らない筈です。學校の先生でも、自分の知らぬ學科の答案を學生から出されても、その答案が合つてるか間違つてゐるか判らない、學生の答案が正しいと判るのは先生の方がその學科をよく知つてゐるからであります。それと同じく『人の道教祖』の神宣が正しい、よく自分の缺點に合つてゐると感心するのは、先づその人自身の方が自分の缺點をよく知つてゐるからです。自身の缺點に就ては自分自身の方が先生であつて、神宣は答案であります。『生長の家』では自分自身を尊べと云ふのでありますが、大抵の人は自分自身を尊ばないから失敗する。たとへば自分の缺點は自分で知つてゐながら、さう云ふ缺點を知つてゐる『尊い自分』即ち神性が自分自身に宿つてゐると云ふことには少しも尊敬しないで、たま〳〵『人の道教祖』

と云ふやうな他の人が自分の缺點を知つてゐたら、その人を尊敬するのであります。だから本末を顚倒してゐるのであります。八卦見とか豫言者とか云ふものが來て『貴方の過去は斯うであります』と云はれると『よく當つた』と感心するが、『自分は自分の過去を知つてゐる』と云ふことには少しも感心しない——人間は妙なものでありますなア。それで自分の缺點は自分の神性で知つてゐながら、その『自分の神性』と云ふものを輕蔑してゐるから、大抵の人は自分で氣付いた缺點を直さうとしないのであります。自分の内に神がある、自分が神性である、自分が教祖である。これが分らないから、神がほかにあるやうに思ひ、神性がほかにあるやうに思ひ、教祖がほかにあるやうに思ひ、自分の既に知つてゐることを、他の教祖から知らされて感心するのであります。

では、此の『人の道教團』のやうな教へは不必要かと申しますと決してさうではない。やはり斯う云ふ教へも要るのであります。『生長の家』は究竟眞實大乘の教へである、釋迦の教へにすれば法華經以後の教へであつて、『全ての人間が神の子であり、全ての人間が教祖である』教へでありますが、その教への眞髓に達する以前の人——自分を神の子だと尊敬できない人——には、依頼心を出して他に頼る、他に頼ることによつて、他から導かれて自分の心の缺點を直す

やうにするのも好いのであります。それは丁度小學、中學などの學習は教師の指導による分量が多いのですが、大學以上になると自己自身の發見、啓發が、その主なる學課になるやうなものであります。だから、私は『人の道』を悪い教へだと云はない、小學校は悪い學校だと云へないやうなものであります。それは善い教へであるが、いつまでも、そんなに他の人から出て來る神宣と云ふやうなものばかりに頼つてゐては、何時までも小學生であるのと同じだ。早く小學校は卒業して、中學、大學へと進級して自己自身の發見啓發それ自身を御神宣とし、その神宣を尊んで實行するやうにならなければ本當に救はれたと云へないと云ふのであります。

『人の道教團』から出來る『神宣』と云ふものは、原則上『他の人に見せてはならぬ』と云ふことになつてゐるのでありますが、此れは微妙な信者心理を掴んでゐるのであります。それは他の人に嚴秘にすると云ふことによつて、一般に見せたら、何んぢやこんなものかと云ふやうなものに『神秘感』と嚴かさとを添へる。あの人は『神宣』で病が治つたと云ふが、どんな神宣だらうと云ふことによつて、他の人に入教を誘惑する。神宣の內容が他の人には不明であるから、默々とその人が實行するに當つて、他の人から冷やかしやら、邪魔が這入つて來ない——そこに神宣と云ふものゝ魅力やら効果やらがあるのであります。で、その神宣の內容とはどんなも

のであるかと云ひますと、『生長の家』へも數名の『人の道教徒』がお見えになりまして打明けて話されたところによりますと、こちらから、病氣の容態とか家庭の災厄の狀況などを詳しく書いて、支部から本部へ通じますと、それに對して神宣と稱して本部から來るのですが、ある胃病患者には『お前は我が強いから我をなくせよ。不平を有たぬやうにせよ。食物をよく嚙んで食へ。』と云ふやうなことが書いてあつたさうです。この人は、その神宣が馬鹿らしくて常識で判ることを何を神宣だと云つてゐる、と思つて實行せられなかつたさうであります。また或る子供の病氣には『夫婦仲よくせよ、妻は良人に絕對に服從せよ。』と云ふやうなことが書いてあつたさうです。また或る事業に失敗した人には『今を大切にせよ。汝は尻が重い。自分はじつとしてゐて、どうにかなるなどゝ考へてゐるが、もつと尻輕に働かねばならぬ』などゝ書いてあつたさうであります。まことにこれらは善い神宣でありますが、『生長の家』へ來て聖典『生命の實相』を讀み、生長の家の生き方に照らして見ますと、すべて自分自身でわかることでありまして、何も他に賴る必要はないのであります。唯、自分でわかつたことは神示と思はず、輕蔑して實行せず、某々教祖から示された神宣だと云ふと有難がつて實行するのであります。是が愚かな人間の弱點でありますから『生長の家』でも對機說法で神宣を送つて病氣を治した例も

あります。だが是は無制限にはしない。假りに某教團に十萬の信徒があつて其一割が、教祖に神宣を乞ふとしますと一萬でありますが、一萬通の質問狀を讀むだけでも一人の教祖ともう一人の教祖輔佐だけ位では足りない。今はそれ程多勢の信徒も質問狀もないかも知れませぬが、やがて信徒が殖えて、さう云ふ多くの數になつたとしますと、決して教祖が一々神宣を下してゐる暇がない。で、さう云ふ場合どうするかと云ふと『おみくぢ』のやうに、胃病にはこれ、肺病にはこれと念の象徴化の法則に合ふことを豫め書いて置いてそれを係の人が神宣と稱して信徒に下げる事にするのです。で、大抵さう云ふ場合の神宣の内容は一般に誰にでも通用することで、それで治るのであります。『お前は我が強い』と云はれても『我』の強くない人間は殆どないから、『よく當る!』と感心する。どんな仲の善い夫婦でも、時には夫婦喧嘩をする、さう云ふ場合に子供が病氣になる、夫婦和合して子供が治るのは『生長の家』に說く所です。『生長の家』では、今を生かせ!成功の道だ、と切實に常に書いてある、皆神宣です。先日も東京から來られた松本さんが『今』と云ふ一字を大きく揮毫してくれとお頼みになつて、書いて差上げた。之も神宣であります。『生長の家』では聖典『生命の實相』や毎月の『生長の家』が悉く神宣ですから夫をお讀みになり、夫に照して自分の言行を反省して御覽になれば、自分の缺點や心

得達ひと云ふものは自分でわかり、自分自身が教祖となり、自分の缺點に對して自分が神宣を下し得るやうになつてゐるのであります。併し、兎も角、近頃『人の道教團』と云ふやうな新しい宗教團體が頭角をあげて『病氣も環境もわが心の影』と云ふ生長の家所說の眞理を、神宣と云ふ嚴かな名によつて信者に單純な方法で實證させてゐるのは大變結構な神の攝理だと思ひます。たゞ、さう云ふ教へに賴る信者の常として、一にも神宣、二にも神宣、三にも神宣と、他からの神宣ばかりを賴ることになり、やれ蜂が螫したから神宣を貰はう、蚊が螫したから神宣を貰はう、膝に傷が出來たから神宣を貰はう、腹が痛いから神宣を貰はうと云ふやうに、年から年中、何でも彼でも神宣に賴つて自主獨立の生き方を失ふやうになる危險がありますので、さう云ふ教團に入り、環境も病氣も吾が心の影だと云ふことがわかつたら、もう何時までも一人立ちの出來ぬ子供のやうに御神宣ばかりに賴つてゐてはならぬ。本當の救ひにあづかると云ふことは何時までも一人立ちの出來ぬ人間になることではありませぬ。更に一歩を進めて、『生長の家』的に自主獨立の精神に立ちかへり、ひとり立ちして、自分自身が神であり教祖であり、他からの御神宣よりも自分の御神宣が自分を一番よく知つてゐると云ふやうになつて頂きたいのであります。だから『人の道教團』の教へが生長して來れば當然『生長の家』になつて來な

ければならないのであります。

大野――『人の道教團』の特長とするところは、その御神宣のほかに『お振替へ』と云ふことがあつて急病とか急に怪我をした場合、御神宣を仰いで心の間違ひを知らして頂いてゐる暇のない時、たとへば汽車の中でお腹が痛くなるとか云ふやうな場合ですなあ、そんなとき教祖を念じて、『どうぞ此の病氣をお振替へ下さい』と念ずると、その病氣が教祖の身體に振替へられて一時助かると云ふやうなことになるのでございます。

谷口――數萬の信徒から一時に『私の急病をお振替へ下さい』と念じられたら、教祖は一日に數萬の病氣にかゝつて、教祖の身體が幾つあつても足りないでせう。

大野――ところが、教祖は神樣から不死身を與へられてゐるから、數萬人の身代りになつても何ともならないと云ふのでございます。

谷口――それではチツとも身代りになつてゐない、身代りと云ふのは自分が代りに苦しむから身代りなのです。生きる力の法則、念の具象化の法則と云ふことを知らない善男善女は『お振替』と云つて教祖に『病氣を振替へて下さい』と念じて、必ず振替へて下さるものだと信じて思念してをれば必ずその病氣が治ると云ふのは『汝の信仰汝を癒やせり』で、信じなければ癒らな

いのであります。我々が藥と思はせられたものをメリケン粉でも飲んで『これで病氣が治る』とその瞬間念ずると、それで治るのも、云はゞ藥に自分の病氣を振替へて貰つたのと同じであります。この場合はメリケン粉が病を振替へて下さる教祖なのです。メリケン粉は實際病氣の身代りをしてゐないから、メリケン粉が病氣にならないのは、人の道教祖が病氣をしないのと同じです。自分の內部の神なる癒やす力を信じないものは外部の何かに賴つて『その物が治して吳れる』と信ずることによつて『治る』と云ふ念の具象化の力によつて一時その症候が消失又は緩和するのであります。病氣が果して神が人を導くためのお氣付けに造つたものであるならば、藥を飲んだり注射したりした位で其の病氣が治るものではない、若し一ぺんでも治れば、神の力は人間の注射よりも弱いと云ふことになる。そんな考へ方は神を微力と見る大不敬瀆神的な考へ方であります。念の具象化の『理』が、病氣を表はしたのであればこそ『治る』と云ふ念もまた具象化の『理』に支へられて、前にあらはれてゐた念の具象化たる病氣を治すことが出來るのであります。併し、それは『治る』と云ふ念の具象化力によつて『他のもつと根本的な迷ひの念』の具象化力で起つてくる病ひを一時的に相殺するのでありまして、その眞病源なる『他のもつと根本的な迷ひの念』を剿滅してゐなければ、またその迷ひの念の具象化力で、

同じ病氣が再發するか、同一系列の象徴に屬する他の病ひまたは不幸となつて、同一人または、同一家族中の誰かにそれが現れて來るのであります。併し、注射などによつて一時的にでも病氣が轉位したり、緩和したりされるのは、病氣が神のお氣付けとして、神の力によつて作られたものでない證據です。

それならば、神を念じて治ると云ふ場合、或は、高德の教祖を念じて治ると云ふ場合は、メリケン粉を藥だと念じて、その信念で治るのと同一作用であつて、そのほかに何もないかと云ひますと、必ずしもさうでもないのです。それは教祖から出てゐる『治す念波』――光明念波に觸れることになるのです。小さな傷とか、チョツトした腹痛位ならば、放つて置いても治るし、何かを信じて『これで治る』と一層強く信念を有つてゐれば一層速く治るのですが、醫學的診斷では、もうダメだと云ふやうな場合にはメリケン粉を高貴藥だと信ぜしめてその信念ぐらゐで治すことは出來ないのです。それは神とか高德の教祖とかの『治す念波』に觸れねばならぬ。『生長の家』でも、もう重態で醫者が手を離した病人でも、父とか母とか近親者が聖典『生命の實相』を讀んで眞實の心を喚起し、心の波長を『生長の家』の波長に合はせて置いて、『生長の家の神樣』と一心に祈つた結果回復した例も澤山あります。『生長の家』だけではなく、『人の

道教團』だけではなく、他の宗教でも、さう云ふことはある筈です。それを自分の信ずる宗教だけにあるやうに思ふのは見聞が狭いからです。これなどは本人が、病氣の根源になる『心』をなほしたのではなく、一時神樣の光明念波で、悪い念波を緩和して貰ふ即ち『振替へ』て貰つたので、例へて云つて見れば、重い荷物を擔いでヘト〳〵に疲れてゐる人の重荷を一時神樣がスーツと上にあげて下さる、併しその重荷は本來自分の荷物即ち自分の業なので、悟りの絶對境に入らない限りは結局は自分が擔はせられ、自分でその重荷を解消するまではそれを背負はねばならぬのですが、一時神樣からその重荷を上げて貰つたゝめに、その間に自分の元氣も回復し、重荷に耐へられ、それが動機で、本當にまた智慧の眼がひらいて、心が神に向ひ、その重荷（即ち過去からの業因）を解消することが出來るやうになるのです。神樣に祈つて不治の重患を治して貰へる場合はさう云ふ種類の人の場合であつて、重荷を負うて肉體がヘタバツて了つた方が、結局その人の悟りの目を早く開かせ、その人の靈魂の進化を速めるやうになる場合には、いくら神樣に祈つても治るものではない。神樣から見れば永生にかゝはる靈魂の進歩と云ふことが肝要事でありまして、生者必滅の肉體の見えたり消えたりすることはそれほどの問題ではない。無論遺族が悲しむとか、經濟上困るとか色々複雑な關係問題がありますから、

さう云ふ影響を受ける人達の靈魂の向上と云ふことをも神様は考慮して、物質上の不幸にせよ幸福にせよ、皆の靈魂の向上に最も好いと見定めがついた上で、『死ぬ』とか『治る』とか云ふ修正が現象世界に追加されるやうになつてゐるのでありまして、多くの人間は肉體の治ることばかりを願つてゐますけれども、神様にとつては皆の靈魂の治るために最も好い運命に導き給ふのです。だから、心に從つて運命は變る、病氣や家族の死がなくとも靈魂が進歩し得るやうな心に成れば病氣や家族の死が無くなる、貧乏や不幸がなくとも靈魂が進化し得るやうな狀態になれば貧乏や不幸がなくなる――つまり吾々の環境には、靈魂が『外界の鏡』に映して見て、それによつて靈魂自身が自己改造を遂げるやうに、心相應の形の世界が映つてゐるのでありますから、病氣が嫌ひな人は、病氣や不幸を外界に投影ない心の持方になる必要があるのであります。

先日、九月廿四日の誌友會が將に終らうとしてゐる頃、ヒョツクリその席へ這入つて來られた一人の紳士があつたことを皆さんは覺えてゐられるでせう。この紳士は皆樣がお歸りになつてから私に始めてお詫びになりましたが、この人こそはいつかの座談會に、一旦醫者が見放した脊髓が腐る病氣、流注と云つて何時までも膿が出てゐる重症脊髓カリエスの奧さんが九分通り

治つて、排膿も止まり、人から見ては病人と思へぬ程になつたが、あと一分は、その方の悟りにあると云ふ記事が出てゐた其の奥様の良人だつた人ですが、この方はあと一分でつひに失敗なさつたのであります。そのかたはあと一分が自分自身の心にあると悟られずに『生長の家』では力が足らぬ、もう世話にならぬから後はどうでも好いとでも思はれたのか『生命の實相』の代價も毎月の誌代もお支拂ひにならず、その後の述懷によれば、黒住教で御祈禱をして貰つたり、平田式心療法とか云ふ熱い鍼でチク／＼燒けどをさせて貰つたりした揚句、その奥さんは却つて病氣が重くなつて死んで了はれたのであります。その後その御主人は鄕里の學校も退職せねばならぬやうになり、近頃京都へ來て色々やつてゐるが、すること爲すこと、例の忘恩的結果になつて面白く行かないで困つてゐるから何とか好い方法を先生に敎へて頂きたいとお頼みに來られたのです。色々やつて見ることが面白く行かないから、この人はひとたび『生長の家』を振り捨て、聖典代まで素知らぬ顏してほつて置かれたのですが、再び神のことを考へ、自分の行ひを考へて『生長の家』へ歸つて來られたのでありませう。『生長の家』を振り捨て借金を踏み倒して放つておいても思ふやうに何事もトン／＼拍子に行つてゐたならば、其の人の肉體の運命は大變結構でありますけれども、靈魂の方では、忘恩的氣持は益々募り、因果を無

みし、正義を輕んじ、神を無視し、自分の神性を愈々無視して、自己の靈魂を層一層破壞の方向へ導いて往つてゐたでせう。だから此の人にとつては色々やつて見ることがトン〳〵拍子に行かないのが神樣の愛深き攝理でありまして『お前の心は此の通りである』と外界に投影させられ、成る程と氣がつく。それで其の人が善くなるのであります。つまりどんな事でも吾々の外界に現はれて來るものは、善きことにせよ、惡しきことにせよ、それはその人の靈魂の向上のために善きことばかりなのであります。靈魂の向上にとつて惡しきものは一つも起らない。何故此の世に『類は類を招ぶ』心の法則があり、天理があり『心通りのものが肉體や境遇に投影する』念の具象化の『理』が儼然として存するかと申しますと、それはやはり神の愛の理であります。

第六章　南泉猫を斬る生活

内容――昭和八年八月廿七日、生長の家出版部に於ける誌友座談會に於ける生長の家家族の座談を中心に大乘第一義の道の生活を如何に生活に現はすべきかを説けるもの。

談話者――松野亦藏氏、杉野朝次郎氏、細川澄子氏、佐瀬君子氏、瀧本金太郎氏、中畑倚二氏、谷口雅春氏、その他。

松野――私は歐洲大戰後の思想界の動搖當時、マルクスの資本論を始め、左翼思想その他の經濟學説を讀みました結果、所有權と云ふものは實に不確かなものであつて、所有權を剝奪すると云ふ法律でも一つ發布されたら、今迄金を貯めて有つてゐて安全だと思つてゐても少しも安全なものではないと云ふことを知りまして、何か確かなものを掴みたいと求めてゐましたところ、一燈園の西田天香さんの『懺悔の生活』と云ふ本が百版を突破して賣れたと申しますので、その百版と云ふ好評に釣られて『懺悔の生活』を讀んだのであります。さうして、一燈園の生き方になつて『金の要らない生活』『無所有の生活』『零の生活』になつて了へば、もう所有權をみとめぬと云ふ法律が出ても大丈夫であると云ふことに氣付きまして、これは唯一の安全確實

な生活であると感じ、早速京都の一燈園へ飛んで行き二ケ月間一燈園生活を體驗し、それから自分の理想を實現しようと思ひまして、臺北の北投と云ふ所に温泉地がある、そこに二萬圓程投じまして家を建てました。併し理想は現實生活には却々實現しにくいものでありまして、今はまた別の仕事を始めて見ようと云ふことを考へついて天香さんに相談に上つた序でに、序でと云つては甚だ失禮でございますが、こちらへ伺はして頂いた次第であります。

谷口――貴方の實現しようと試みられた理想と云ふのを話して頂けませんか。

松野――土地が自分のものでありますので地代は要らないのですから、温泉へ來られる人たちを奉仕的に出來るだけ安い宿料で泊らせて上げたいと思ひまして、可成り廣い家を建てました。最初は湯治客に三食一泊で一圓と云ふことにして泊らせてあげることに致したのであります。うちで働いて貰ふ人には一燈園の同人を奉仕に來て頂くことにし、一燈園の西田保太郎さんや鈴木五郎さんなど云ふ人に來て貰つたこともありましたが、かう云ふ一燈園の幹部の方々は一時は來てゐられても永遠に來て頂いてる譯には行きませんし、長くても半年位で引上げて了はれる、さうすると遠い臺灣へ來て頂いたことでありますから、歸りには旅費と云ふことで六十圓位は差上げなければならない、一燈園の方々に來て頂いてもかう云ふ風に經費がたゞと云

ふ譯には行きませんので、宿泊料を安く奉仕的にしてゐると收支がどうしても償へないと云ふことになるのであります。そして西田保太郎さんや鈴木五郎さんが去られたのちは、あとに人が續かないのであります。いつまでも温泉場で同じ奉仕をしてゐてもつまらないと思ふ人もあり、行く末これで、どうなることぢやと不安になる方もあり、それは月々一人に二十圓宛位を月給に差上げることにすると働く人も續くのでありますが、それでは當り前の營業になつて了ふ。そのほか、地代が要らないから別に經費は要るまいと思つてゐましたのが、家が廣いだけに色々の諸經費が嵩みますので、働く人に當り前の月給を差上げて經營してゐるのでは奉仕的に温泉へ安く來て頂きたいと云ふ私の最初の念願が成就しないことになるのであります。どうしても理想と實行とが伴はない。色々やり方を考へまして、一方に十字架を按置し、一方に阿彌陀佛の像を按置し、その前に奉賽函を置いて、一燈園は別に何宗と偏寄りのあるものではないから、基督教を信ずる人は十字架を拜んで、任意の額を奉賽函へ入れる、佛教を信ずる人は佛像を拜んでその前の奉賽函に任意の額を入れると云ふことにしたこともありました。一時は湯治客が七十人もあると云ふこともありましたが、客が多ければ多いほど經費がもてない。働く人が續かないと云ふことになるのであります。同じ温泉地に隨分高價な宿泊費をとつて經營

してゐる旅館もあるのですが、裏面はともかく表面はみんな相當の經營をして赤字を出してゐないらしいのですが、これに反して私の旅館は奉仕生活をもつて終始しようとしてゐるのに理想通りには行かないで行詰つて來るのであります。

谷口――何故理想通りに行かなかつたのかそれが判りますか。

松野――それは私の不德の致すところでありまして、西田天香さんの光泉林は二百人からの人が無代で働いてゝ不平を云ふものもなくチヤンとやつて往つてゐられるのですから、その點、まことに私の不德が恥かしい次第であります。それで溫泉の方はたうとう行詰りまして息子に讓つたのでありますが息子の主張は私と反對でありまして、これから反對の經營をやつて行かうとしてゐるのですが、それはそれとしまして、今後私は臺北に土地を千五百坪位買ひまして、そこに八十坪程の家を建て、臺灣へ稼ぎに來て成功しないで落ちぶれて年が寄り、內地へ送還するほか致し方がないと云ふやうな身寄りのない老人を引取つて一緒に住むことにしたいと思つてゐます。斯う云ふ老人には、これまで十六人ばかり出會つてゐます。內地も失業洪水の際であるから、さう云ふ老人を內地へ送還しても困るばかりであるから、さう云ふ老人を引取つて、世話したいと思ふのであります。併し、たゞ惠むと云ふことにしますと、惠まれるのを權

利のやうに思ひ、却つてその人が依頼心を増長さし墮落さすことになりますので、私もその家に一緒に住込み、一燈園式に一緒に空地で畠をしたり、手に合ふやうな仕事をしたりして、それらの老人の慰めともなり、伴侶ともなつてそれを私の終生の仕事として行きたいと思つてゐるので、その經營法のことに就ても天香さんに相談にあがつたのでありました。

谷口――ところで、貴方の理想が實現しないのは貴方自身の不德だと申されましたが、その不德と云ふのはどう云ふ點であるかお判りになりますか。

松野――理想では一燈園の生活をしたいと思つてゐながら、現實生活では、社會全般の空氣に押し流されて自分がその反對の生活の方へ進んで行くから失敗したのだと思ひます。どうしても一燈園の『無所有の生活』と云ふのは眞理だと思ふのですが、私の力では現實生活ではそれを完全に實現することが出來ないのであります。私は東京にも宅があり、そこに子供が住んでゐるものですから今度も內地へ來た序でに東京へ行きましたが、どうも都會へ出ますと、誰が政務次官になつたとか、誰が何十萬圓儲けたとか、金を儲けたり、位階が上つたりすることを大變偉いやうに思つて羨ましさうに話をしてゐる。さう云ふ話を聞くと私はどうも心が浮はついて落付けないのです。ところが今度一燈園へ來ると、感心して話してゐる標準がちがふ。何某

は北海道から京都の一燈園まで三ケ月かゝつて歩いて來たとか、何某は東海道を十日間で歩いて來たとか云ふ質實な話を聞く——そこに金や地位に動かされない本當の人間の話をきくやうで心が落付くのであります。私が東京に邸を有つてゐながら臺灣の山間で生活してゐる一つの理由は、都會へ出るとさう云ふ浮薄な話をきいて心が落付けないからなのです。

谷口——お話を聞いてゐますと貴方は清い生活、無所有の生活と目指してゐられますけれども、まだ本當に『零の生活』に成り切つてゐられないから、温泉の經營も思ふやうに行かなかつたのではありませんか。貴方は數的に數の少い程『零の生活』に近いものだとお考へになつてゐるやうですけれども本當の零の生活は、數を超越した生活でなければならないのです。一遍に『零の生活』にはなれないから段々數を減らして數的に零に近い生活を送ることにしたい。百圓の生活より十圓の生活の方が『零の生活』に近い。十圓の生活よりも一圓の生活の方が『零の生活』に近い——かう思つて何でも値段を切下げて行く方がよい生活だと思つてゐられる。それだから、温泉で働いて呉れる人にも出來るだけ少く支拂つて、温泉へ湯治に來る客にも出來るだけ少く支拂はせる。その少く支拂はせることを奉仕のやうに思つてゐられるから貴方の温泉が立ち行かなくなつて來るのです。本當の『零の生活』と云ふものは、數を超越した生活

であつて無限小であつて同時に無限大でなければならないと私は思つてゐるのです。貴方には『物質の無』と云ふことが本當に分らないから温泉で働く人も無給料で働いて貰ひ、温泉へ湯治に來る人にも出來るだけ安くすることが『零の生活』に近いことで、人間を助けることだと思つてゐられる。ところが、その結果はどうなるかと云ひますと、温泉場へ來るやうな人はどちらかと云ふと裕福な人である、温泉場で雇はれて働かうと云ふやうな人は、(勝手に道樂で無料で働きたいと云ふ人は別として)貴方の被仰るやうに月給二十圓位をやれば續くと云ふほどの人は大抵は貧乏な人である、その貧乏な人に少く支給して、裕福な金のいくらでも出せるやうな湯治客から取る金を成るべくとらないやうにしようと云ふのですから、貴方の事業は貧乏人を餘計貧乏にして、金持を餘計金持にしようと云ふやうな仕事になる。だから一燈園と云ふものは左翼の方面からは敵として認められてゐるのです。滿洲で一燈園の三上和志君が左翼の人から毒饅頭を盛られたと云ふ話が『光』誌にのつてゐましたが、それはさうあるべき筈で、『無の生活』を穿き違へて成るべく少い物質生活で滿足する生活を『無の生活』だと思ひ、そしてその實例を示して行かれると、富者を益々富まし、貧者を益々貧しくする資本主義機構を助けることになる。さうしてゐて、それが人生を益する理想生活だと思つてゐられるから、理想

が實現する過程が好い具合に行かずに變なことになるのです。變なことにならなければ却て貧富の懸隔を增して人生に害を齎すので、變なことになるので好いのです。『生長の家』で云ふところの『物質の本來無』と云ふことが解つて始めて、本當の『無所有の生活』、『有つてゐても有つてゐない生活』、『無限大にして無限小の生活』が判るのです。それが判らずに『無所有の生活』に近付いて行かうとすれば、持ち物をだんだん數的に減らすことが『無所有の生活』に近いと云ふ事になつて躓くのです。本當の『無所有の生活』『零の生活』と云ふものはそんなものではないのです。月に二十圓拂はなければ働く人が續かなければ、二十圓でも三十圓でもまだ／＼多くでも支拂つてあげれば好いぢやありませんか。『物質本來無し』無いものを拂つても減る譯ぢやなし、減ると思つてゐるから少く支拂つてさへも入る金がなく立行かなくなるのです。

[illegible]野――それは、私は『生長の家』を創刊號から讀まして頂いて、『物質本來無し』と云ふことは知つてゐるのですが、理想と現實とはなか／＼一致するものではないのでして、そこに私の溫泉が行き詰つた原因があるのでございます。

谷口――私に云はせれば『物質本來無し』と云ふことが貴方には本當に解つてゐないのだと思ひ

ます。大體一燈園には天香さんのほかに物質無の眞理を知つてゐる人が何人ありませう。『物質本來無し』と云ふことが解つてゐるのなら、何故貴方は汽車を利用して東海道を早く來た人には感心しないで、テク〳〵歩いて來たと云ふ人にだけ感心するのでせうか。感心するのなら、どちらも感心すべきであるし、どちらも偉くないと云へば、どちらも偉くないのです。テク〳〵歩いた人の方にだけ感心せられる貴方の潜在意識には、何でも豐富に利用するよりも、少く利用する方が德が高いとか、樂な道を歩くよりは峻しい道を歩く方が偉いとか、金持よりは貧乏が好いとか、何でも數的に小さい方を偉いと思ふ傾向が働いてゐるのです。一燈園の天香さんの說かれる『無の生活』はそんな『貧に執した生活』ではない筈です。貧富を超越したところに本當の『無の生活』があるのです。どうも世の中には普通と變つた生活をしてゐるからとてその人に感心する傾向があるのです。足で歩ける人よりは、手で逆立ちして歩く人に感心して見たり、蒲團が折角あるのに鉋屑の中で寢て見る奇行者に感心したりするのです。だけど本當は普通の生活をしてゐる人に感心出來なければ健全ではないのです。逆立ちして歩く人よりも、足で當り前に歩ける人の方に感心し、鉋屑の中で犬のやうに寢るのを修行だと思ふ人よりも普通に蒲團の中で眠る人の方を感心するやうになれないと本當ではないのです。つまり外面の顯

はれに奇行があるのに感心してゐるのでは、形の生活に捉はれてゐるので『生命の實相』を摑んでゐないことになるのです。

松野――私も一燈園の『無の生活』と云ふものと、生長の家の『物質本來無し』の生活とは、根本に於て同一のものだとは思つてゐるのでありますが、それを現實生活にあらはさうと致しますと『生長の家』の行き方で行けば、非常に自由自在で『生長の家』を讀むたびに、人間本來罪がないと云ふことになつて常に明るい氣持を與へられ、その點は大變感謝してゐるのでありますが、その代り我儘が出て普通世間の生活に引ずられて行きさうな氣がして不安なのです。それで私は矢張り一燈園の懺悔の生活式に一歩々々攀ぢ登つて本當の生活に入りたいと思ふのであります。

谷口――一燈園の機關雜誌の八月號に天香さんが『南泉猫を斬る』を書いてゐられる。南泉和尚のこの猫を斬る話は御承知の通り禪宗でもなか〳〵通過するに困難な公案であります。南泉和尚は馬祖大師の弟子で有名な悟りを開いた和尚である。その南泉和尚の許で修行してゐる東西兩堂の坊さんたちが、或る日一疋の猫を捉へて、此猫に佛性が有るか無いかといふ爭ひをやつてゐたのであります。涅槃經には『一切衆生悉く佛性あり』と書いてあるから、猫にも佛性

が有るに違ひないと云ふものやら、イヤ猫には佛性が無いと云ふものやら、甲論乙駁、喧々囂々としてゐるのであります。南泉和尚ふとその議論の場へ出くはしたので何とか解決をつけなければならぬ、それでその猫をつかまへて、『この公案を解くものがあれば猫を生かして置くが、解けなければ猫を斬つてしまふがどうぢや』と云つたが、その公案を解く人がない、そこで南泉和尚は猫を一刀の下に斬つて捨てたと云ふのであります。それを西田天香さんは『棄恩入無爲』の生活になる即ち恩愛の絆を斷つて無所有の生活に入るには、坊主が猫を斬つて殺生すると云ふほどにも思ひ切つたこともしなければならぬ。一度スッパリ恩愛の絆が斷ち切られてないと本當の無所有の生活には入れない。この思ひ切つてスッパリ恩愛の絆を斷ち切ると云ふことに喩へて南泉和尚の猫を斬つた話を說明してゐられます。思ひ切つて猫を斬つて本當にその坊さん達の悟りが開けるものならば、猫も却つて成佛するので、一燈園でも娘が父母の恩を捨てゝ一燈園生活へ逃げ込んで來るやうなことがあると、一時は殺生否、親に不孝をするやうであるが、それが却つて全てを生かすやうになると、斯うその猫を斬ると云ふことを『一度すべてを捨てれば、却つて全てが生きる』ことに聯關させて西田天香さんは說明してゐられるのであります。此の『生長の家』でも思ひ切つて藥を全部捨てれば却つて生命が、生き〳〵と

して病氣が治ることもあるのであります。それで私が解釋しますと、修行中の雲水たちが『猫に佛性ありや』と論爭してゐる最中に、南泉和尙が猫を斬つたのは『形に捉はれるな、佛性と云ふものは、形の猫にあるのではない。形の猫を斬つて了つたら、其處に佛性があらはれるのだ』と云ふことを猫を斬る行爲で示されたのであります。何でも本當に生かし切るには、此の『形を斬つて捨てる』と云ふことが大切でありまして、『形の中に佛性がある』と思つてゐると間違ふのであります。形の中に佛性があると思つてゐると汽車があるのに東海道をテク〳〵歩いた人に感心したりするやうになる。そんなことでは本當の『零の生活』になり切つてゐないのであります。『形を全部切り捨てゝ了つたら』東西南北上下四維どちらへ向いても、もう形がないから自由自在になるのであります。形に捉はれて『零の生活』『無所有の生活』に志さうとすると、なるべく少くて生活しようと云ふ生活――月給は出來るだけ出さず、その代り宿泊料も出來るだけとらず、汽車にも出來るだけ乘らず、テク〳〵歩く方が、善い生活だと感心したりするやうになるのです。

松野――お話は良くわかるのでありますが、實際生活にあらはす上になると、どうしてもそれが旨く生きて來ないのであります。

谷口――わかつたと云はれるが、實際生活に顯れないのは本當には、わかつてゐないのです。本當に解つたら東西南北上下左右自由自在になる。わかつてゐないから形に引つかゝる、數にひつかゝる、そして澤山宿泊料をとるのは、少く宿泊料をとるよりも惡いと思つたりする。本當の『物質の無』と云ふことがわかり、『形の猫』を完全にスツパリ斬つて了つてゐたら、そんな數の大小に捉はれなくなるのです。『無の生活』とか、『零の生活』とか云ふのは數的に零に近いと云ふことではないのです。無限大にして無限小、伸縮自在であるから、臨機應變、若し要るならとるべき所からは百萬圓でも千萬圓でもとつて來て、出すべき所へはまた豐富にどれだけでも出すことが出來る。それでゐて物質本來無であるから、未だ曾てとつて來たことも出したこともない。

松野――さう云ふ大自在境になれば好いと思ふのですけれども現實の人間生活では、さうなか／＼話のやうに大自在境があらはれないのでございます。それで私は一歩々々修行の道を歩いて行かうとしてゐるのでございます。

谷口――數を超越した生活には無限大の生活と無限小の生活とがあつて、そしてその兩方を包容出來なければ本當に『無の生活』になつてゐないのです。ところが貴方の生活は先づ『無限小』

の方へのみ歩んで行かうとしてゐられる、それも數を超越した無限小なら無限大を内に含んでゐるのですけれどさうでないから出來るだけ、少く少くとキリツメて行く、生活が窮屈になつて行く。そして窮屈な道、峻しい道からのみ進んで行かうとしてゐられる。しかし窮屈なのは片寄りがあるからなのです。中心にのつてゐないからなのです。圓の中心に乘る生活になれば、もう、どの方面へ向いて行つても、その中心の延長線上にある。中心に乘らないで、圓周の方を廻つて一歩々々中心に近付いて行かうとすると、いくら圓周上をぐる〳〵廻つても中心に近づくことは出來ないのです。

松野――なか〳〵その中心に乘ると云ふことが難かしいのでして。

杉野――私など自分の生活を不斷省みてゐまして、これは中心に乘つてゐる、これは中心からハヅレたなと思つてやり方を直すことがよくあります。

中畑――先生の『中心に乘る』と被仰る意味はどう云ふ意味ですか。

谷口――悟ると云ふことです、自己が神の子である實相を悟ると云ふことです。善と云ふものが外界にあるのではなく、外界は影であつて、自分が神であることがわかれば自己の向ふところすべて神の向ふ所でありますから、すべてが神の姿を映して善になることになるのです。形の

上から善々と追ひ廻してゐては惡を捉へるほかはない。

中嶋――さうすると、中心に乘ると云ふことは難かしいことではない。皆な本來神の子であるから、もう既に中心に乘つてゐる、誰も皆本來中心に乘つてゐるのです。誰も中心に乘つてゐない者はないのです。たゞそれに氣付けば好いのです。氣付くだけのことです。吾れ神の子だつたと氣付くと云ふことが悟ると云ふことです。

松野――誰も皆、本來中心に乘つてゐる。成る程、皆な神の子だつたのでしたなあ。

杉野――私が自分の生活を省みて、これは中心に乘つてゐる、これは中心に乘つてゐないと申しましたのは、現實生活が、神の子なる實相から現れてゐるか、迷ひから現れてゐるかと云ふ意味で云つたのであります。

谷口――吾々の實相は常に中心に乘つてゐるけれども、形の方から中心に乘せようとすると、迷ひの方から悟りに近づかうとするので、現れが中心に乘らなくなるのです。形に捉はれて了ふからです。南泉和尚が猫を斬つたやうに、すべての形を斬つて了つたときに始めて、形もおのづから中心線上に乘るやうになるのです。だからすべての形を切つて了はないで、修行の雲水が『猫に佛性ありや否や』と爭つたやうに、この行爲に佛性ありや、あの行爲は善なりやな

ど〻云つてゐると善と思つたことが惡になつたり、金持が節約して三等車に乘つて一かど善事をしたつもりでゐて、貧乏人の三等座席を奪つてゐたり、お客樣にひとかど奉仕するつもりでゐて雇人から勞力を搾取してゐたりすることになるのです。人間は本來神の子であり、本來中心に乘つてゐる、併し形をすべて切つて了はなければ、視點が中心に來てゐないで、中心を外れてゐるから、圓の中心を離れてドウ〳〵廻りをしなければならないのです。本來神の子であり、本來中心に乘つてゐる點から云へば悟つた人も悟らぬ人も同じことでありますけれども形を一刀兩斷斬つて捨て〻ゐないものは、形に捉はれ、心の視點が外の形を追うてゐて、中心なる生命の實相に來ない。外の形を斬り捨て〻了つたものは、もう外界に捉はれることはない。外界に捉はれずに却つて外界を中心から投影し出してゐると云ふことになり、外界が自然に整うて來るのです。『道の道たるは道にあらず』此の道、此の道と、一つの形式を始めから造つて置いて其處を歩まねば道でないと思つてゐると窮屈に凝り固つて行詰つて來るのです。一燈園も『形の生活』を斬つて捨てるために、一旦普通人の生活を捨て〻了ふ、それは大變好い方便ですけれども、形の方から普通人の生活を棄てなければならぬ、棄てなければならぬと、其處に一つの出家的な一つの型に嵌つた生活が出來上ると、それはもう中心に乘つた生活ではない、

形を追ひ廻してゐる生活になつてゐる。本來中心に坐しながら、中心を失つてゐるのです。これを悟らぬ生活と云ふのでありまして、悟つた生活と云ふのは、形の方は變幻出沒自由自在で、心の視點が形に捉はれず中心を離れないのです。杉野さんなど近頃非常に自由自在になつてゐられる。

杉野――先刻も述懷しましたが近頃人にあひますと、『杉野君、君は此頃元氣さうぢやが、どうしてゐる。』『信心してゐるよ。』『信心なんてすると、心が窮屈になつて、悲觀的になつて來やしないか。』『どうして、どうして、僕の信心してるのは「生長の家」と云つてトチも氣持が好い信心だよ。信心と云ふものほどこんな氣持が好いことはない。』と云ふのです。商用で宴會に出ねばならぬ時には、やはり酒も飲みますけれども、以前には杉野の醉ふのを見たことがないと云はれたことがあつた位豪酒だつた私ですが、此頃はチビリ〳〵と殆ど舐める位にしか飲まないので二時間位の宴會に合計すると猪口に五杯とは飲まないでせう。それも無理に節制してゐるのではない、それで不味いかと云ふと不味くはない、チビリ〳〵と舐めてゐるだけで非常に美味しいのです。澤山飲む必要がなくなつたのです。無理と云ふものが少しもなく自然で、非常に氣持が好いのです。外から型に嵌めないで內から無理と云ふものをせなくとも濟むやうにな

つてゐるので非常に難有いのです。御茶屋へでも商用で行かねばならぬ時は行きますが、人の道を外すと云ふやうなことは自然にない。非常に自由で樂なのです。此頃、部下の青年にも時々云ふことですが、『信仰と云ふことは非常に自由になることだ、信仰のない者は自由自在な自分の本體が判らないから、窮屈に片寄つて萎縮して何も出來ない、諸君は自分を神の子だと信じて諸君の辭書の中から不可能と云ふ字を抹殺し給へ。無限大の力を神から汲み出して何をしても自由に出來るのが信仰生活だよ』と云ふのです。この頃は家内でもスツカリ私を信頼してゐて疑ふと云ふことがない。家内が娘に先日手紙を書いたのを見ましたが『お父さんは非常にお變りになりました』と云つて非常に喜んで書いてゐました。斯うなつて來ると、不思議に近頃私を思出したやうに問題をもつて尋ねて來る人が非常に多くなつて來ました。皆な私に相談したいと云ふのですなア。昨日も三人ばかり訪ねて來ました。もう會社の退出時間近くでしたが、以前なら面倒くさくて好い加減に話をして退出して來るのですが、一々叮嚀に話をして、まだこの人のために話してあげることはないかなアと靜かに思ひ返して、それから次の人に移ると云ふ風でした。さうしてゐながら、『どうして、斯うも落付いて相手のことを考へて話してあげられるのかなア。自分も變つたなア』と我れながら不思議に思ふことがある位です。

谷口――杉野さんは近頃随分『親切叮嚀』の生活を送つてゐられるので、大抵、毎晩來られて、色々その日の實際生活上の體驗談をして呉れられるのですが、それを聞く度に私の方が啓發され淨められ高められる思ひがするのです。

中畑――杉野君は以前から深切な方でしたよ。色々生活上の體驗が深いから、それに信仰が出來たら大したものです。

谷口――生活上の體驗と云ふものは材料のやうなものです。一つ火がつけばその全體が燃え上つて世の中を照らす光となる。心の世界では『皆な一體』であるから何處かに一つ光がともれば、光を求める人たちが自然に集つて來る。近頃杉野さんところへ問題をもつて相談に出かける人が多くなつたのは其のためでせう。ところで『生長の家』では、このやうに深切叮嚀な人ばかりが續出すると云ふことは實に有りがたいことであります。

瀧本――先日、先生に一寸御話しましたが、女子大學を出た知人の細君で、胸が惡くて微熱がある。醫者の勸めを守つて絕對安靜だといつて少しも動かない婦人があります。その人に私が『生命の實相』を讀んで聞かせて、病氣に捉はれるから熱が下らないのだと云ふことを敎へてあげましたが、鼻の先で嘲笑してしまつていつかな受付けない、テンデ『生命の實相』を迷信だと

笑つて讀まうとしないのです。ところが私も私です、一旦この人を救はうと計畫したら、讀まないからと云つて、退くやうなことぢやならないと思ひまして、別に『生命の實相』を一冊買ひまして、それに赤い線を引くやら、丸をつけるやら、赤い貼紙をするやら、色々注意を引くやうにして送りましたら、讀んだと見えまして、第六章四百廿六頁の所唯一ページで病床を撤して起上つたと云ふ手紙が來ました。それからまた山野千枝子さん。この人は御存知の通り、米國へ渡航したこともあり、東京、沼津、神戸、下關などに出張所をもつてゐて、迚も忙がしい婦人で、日本美容術界の先覺者ですが、この人はとても忙がしい身體だのに最近色々の問題が家庭にも外部にも頻繁に起つて弱つてをられた。私とは子供の間からの知合なので或る日立寄られたのを幸ひ『生命の實相』を差上げたのであります。ところが一讀たちまち『生命の實相』に引きつけられて深い信仰を得、今では、毎日『生命の實相』を日常生活の指針にしてゐられるさうで、毎日『生命の實相』をひらいて見ると、その最初の頁が、その日の問題を解決する神示になつてゐると云つて大變喜んで來てをられます。この方などは、別に色々廻り道をしないで『生命の實相』を差上げると、すぐ信仰をお掴みになつたので大變運の好い方だと思ひます。

佐瀨夫人――その方も大變運の好い方ではありますが、諸方の廻り道をして、たうとう『生命の實相』に到着した私も、一番運の好い者だと思つてゐます。私が諸方を廻り道しないで最初から『生命の實相』に到着したら、あまり深い眞理でわからないから、捨てゝ了つたゞらうと思ふのであります。それで色々と廻り道をして、最後に丁度適當な時に『生命の實相』を與へられたから、始めて捨てることなしに眞理を素直に受け入れることが出來たのであります。

細川夫人――私は一燈園の雜誌『光』に載つてゐました先生の『無一物の醫學を語る』と云ふ御文章を讀ませて頂きましてから誌友にならせて頂いたのでありますが、それまでは、あそこが惡い、此處が惡いと惱み通しで、お腹の藥、胸の藥、頭の藥と云ふ風に三種類も四種類も藥を飮んでゐましたのを次第に止しまして、もう最近では頭の藥だけになり、その藥も數日前には無くなつたのでございますが、どうもまだ身體が疲勞する癖がありまして、汽車にでも乘つて外出しますと、すぐ草臥れ、疲勞すると眼がくぼんで、自分ながら情けなくなるのでございます。『生命の實相』も讀ませて頂いたのでありますが、此の身體の疲れると云ふことがまだ治り切らないのと、時々頭痛が致しますので、その時には、他の身體の部分の痛みなら藥を我慢いたしますのですが、頭の痛みには耐へ切れないので××××と云ふ麻醉劑を用量一回二錠の

ものを、もう二錠、もう二錠と六錠も飲んだりすることがあるのでございます。他の方の體談によりますと、大抵『生命の實相』をお讀みになると早速病氣が治つたと云ふやうなことを承りますのでございますが、何故私の病氣はよくならないのでございませうか。

谷口――『生命の實相』を讀んだと被仰いますが、何回お讀みになられましたか。

細川夫人――一回半ばかり讀みまして、知人に病氣の人がありましたので、その人を救つてあげたいと思つて貸してあげました。

谷口――よくお貸しになりましたなア。横濱の誌友城野さんは『生命の實相』を貸してくれと云はれて『君はよく生命を人に貸すなア、これはわしの生命ぢやから貸すことは出來ん。借りて讀むやうなことでは性念がいらん。』と云はれたさうであります。

瀧本――私も山野千枝子さんに『生命の實相』を見せて話をすると、そんな良い本なら貸して呉れと云はれましたが、この本は私が讀んで、シルシを付けてある本だから大切の本である。人にあげるのには別に貯藏してありますからと云つて贈呈のために買ひ貯めてある新しい本の方を差上げたのでありました。『生命の實相』は一回二回と讀めば讀む程自分の生命が殖るやうで人に差上げられなくなります。

細川夫人――先日私は頭が痛みます時『生命の實相』を一生懸命讀みましたが痛みが止まらないので、また負けて藥を飲みましたが、先刻から皆様のお話をきいて悟らして頂いたのでありまず。痛みを治さう治さうと思つて讀むから、痛みに捉はれて治らなかつた、たゞもう讀むと云ふだけになり切つたら治つてゐたのであらうと氣付かせて頂いたのでございます。

谷口――兎も角、奥さんはまだ一回半しかお讀みにならないやうでは、本當に潜在意識の中に埋藏されてゐる病的観念が『生命の實相』を讀む時の光明念波によつて中和されたと云ふ譯に行つてゐません。もつと充分繰返し繰返しお讀みになるやうお勸めします。繰返し讀んでゐられると、一度讀んだ時に氣がつかないで素通りせられたところに、意外に深い眞理が宿つてゐて啓發させられることがあるものです。健康もズン〱増進して參ります。中畑さんなどは、まだ『生命の實相』がまとまつて出ない時代に、毎月の『生長の家』を二年分位風呂敷に包んでどこへ行くのでも持つて歩かれて、電車の中でも汽車の中でも暇があると讀むやうにせられた。そして讀む毎に欄外に感想や註釋を書いて、必要な所に傍線を引いて行かれる。誰でも最初見のがして重要でないと思つて傍線を引かなかつたところが次に讀むと重要で線を引く、線で全文が埋まつて了ふ。欄外に書いた感想や批評もだんだん進歩して往つて、前には此處は反

對だと云つて駁論めいた批評を書いた處が、次には贊成論に變つてゐて、自分の進境が自分にわかつてそれは樂しみなものです。塚田さんなど、毎月の『生長の家』を合本製本する際、その欄外に書いた御自分の感想文を截斷して了つては困ると云つて特に注意された程であります。それで塚田さんなどはもう『生命の實相』を三十回以上は讀んでゐられるでありませう。杉野さんも、外出の時は必ず『生命の實相』を革袋の中へ入れて携帶して電車の中でお讀みになると却つてクタ〳〵に疲れてゐた疲れが治ると云ふことです。物理的生理的に考へると疲れた目で乘物に搖られながら細字を讀むのですから一層疲れるのが當り前ですのにその反對の結果を來すのですから、これは眞理の力が普通の因果を超越さすと云へるでせう。

佐瀨夫人――全く『祈りはきかれる』と申しますか『生命の實相』を拜讀しまして、是非、住吉の方へ移轉して『生長の家』へ寄せて頂くやうになりたいと思ひまして一心に祈りましたら一週間目に早速主人の轉任の辭令が出まして、こちらへ寄せて頂けるやうになつた位ですから、神樣にお願ひしてきかれぬと云ふことはない。必ずきかれる。そのきかれやうは私の思つた順序で來るかどうかは判りませんが、神樣の思召しになつた順序で、必ずお祈りした目的と同じ効果をもつた結果を與へて下さるものだと信じてゐるのでございます。もう此頃では、私は神

樣に對しまして、人樣に對するやうに聲に出してお願ひするのであります。すると必ずその願ひがきかれます。無論『我』を出して無理をすれば、無理をしたゞけの反動が覿面にあり、悪い結果を齎します。神樣にお願ひしますと、私の胸のうちに『斯うせよ』と云ふ閃きがあり、その閃きの通りに行ひますと必ず結果が好いのでありますが、その閃きを無視しまして、斯うする方が利益であるとか、そんな無理なことは出來ないとか思つて、自分考へを通すと必ず反動があるので厶います。お金でも此處へあげねばならぬと云ふ囁きが胸の中に聞えて來ますのを、出さずに置きますと別の方でそれ以上の金をとられる出費が出來て來て相殺されるのであります。子供が病氣になりましてももう醫者は不要ですから醫藥代は要らないのですからと思つてその醫藥代を自分の利益に保存しようとすると却つて他に大きな出費が出て來る。だから此頃私は此の位の病氣なら此の位拂はねばならぬと云ふ額を、醫藥が要らぬやうになつたのは『生長の家』のお蔭でありますから『生長の家』の宣傳に使ふやうにしてゐるのでございます。神樣の囁き通りに從つてをれば一つも悪いことは起らない、近眼は近眼のまゝでも、見るべき必要のある時には暗がりでもよく見える。忘れつぽい性分は忘れつぽい性分のまゝでも必要な時に必要な物が出て來て、忘れつぽくない人よりも却つて物忘れをしない結果になる。神樣と

云ふもの程、有り難いものはないと思つてゐるのでございます。不平が起り難有くない氣分が起るのは我を通さうとするからだと思ひます。

中畑――その難有い心持ほど大切なものはありません。どんな惡い集積が過去にあつても因果の因を其處で斷ち切る働きをしてくれるのでありますから。因と云ふものは幾らあつても緣を與へなければ果が生じない、有難い念と云ふものは、惡い因が果を結ぶために必要なる緣を與へなくするのです。

佐瀨夫人――併し、その因果の因を斷つのにも色々の難有さがあり、そしてその難有さの種類に從つて、またその因が潜在してゐて今は緣がないから發現しないが、後になつて重複して一層大きい形となつて顯はれて來るやうなことはございますまいか。私は一寸、それを思ふと、今惠まれ過ぎてゐると云ふことが、不安なやうな氣もするのでございます。

中畑――難有いと云ふ善念は過去一切の惡い『集積』と逆の波動の念波でありますから、その『集積』を中和して解消して了ふことになります。そして此の難有いの善念によつて中和してしまつたら再びその集積が潜在して、後になつて果を結ぶと云ふやうなことにはなりません。金光教祖は百節の御理解の中で『痛みが治つたのが難有いのではない、何時も壯健なのが難有いの

だ』と教へられてゐます。金光教祖は事件が起つた時だけ難有いと思ふだけでは可けない、この平常を難有いと思へと、常に難有いと云ふ生活を強調してゐられるので、これは常に難有いと云ふ念波によつて、過去の惡因を中和し、因果の因を共處で斷ち切る方法を理窟なしに教へてゐられるのでありまして、この『難有い生活』が何故尊いかと云ふ理由は『生長の家』で說く心の法則によつて、それが因果の因を中和解消して『本來の無』に歸せしめる働きがあると云ふことを知らせて頂いたのであります。

佐瀨夫人――私は神樣を人間に譬へすぎるやうな傾きがありますが、神樣はどんな少い惠みにも難有うございますと感謝してゐる人に尙一層惠んで下さるものだと思つてゐるのでございます。これを雇はれてゐる召使と主人に譬へて申しますと主人が召使ひに木棉のお仕着せでも盆暮に與へますと『こんな結構なものを下さいまして難有うございます』と實際喜んで感謝してゐますと、あんなものを與へたのにあんなに難有がるのだから今度は銘仙の着物をやらうと云ふことになり、銘仙の着物を貰ふと今度は『自分の働きが足らないのにこんなに結構なものを與へられた難有い』と感謝して一層勵みますと、今度はもつと立派なものを與へて下さると云ふ風に、感謝生活と云ふものは、だん〳〵一層好いものを神樣から與へられるための條件だと

思はせて頂いてゐるのであります。これに反して、平常頂いてゐるものを難有くないと不平を言つてゐますと、今迄もつてゐたものを一寸奪つて、健康なら健康を奪つて、それからまた健康を回復して下さつて、どうぢや健康は難有からうと氣付かせて下さることになると思ひます。私は以前、日蓮宗を信じたことがありまして、本門佛立講へ這入つたのでございますが、たゞ一つ今でも佛立講のやり方で感心してゐますのは、互ひに講中の人が會ふと『今日は』とも『好いお天氣でございます』とも云はないで『難有うございます』と挨拶することで御座います。

谷口――難有いにも色々の段階がありまして、物質が都合よく行くから難有いと云ふやうに、心の影である物質の移り變りに難有がつてゐるのではまだ本當ではないのであります。無論こう云ふ難有さも、不平不滿足に思つてゐるよりは、心が淨まつてゐるので結構は結構に違ひないのですけれども、物質が運よく整ふから難有いとか、平常達者であるから難有いとかさう云ふやうに思つてゐると物質が運よく運んで來なければ難有くなくなり、平常達者でない人は難有くないと云ふことになるのであります。それでは本當の難有さと云ふことにはならないのであります。私の考へではどんな難有さでも因果の因を斷ち切る力があるのではないと思ひます。

物質に執着した難有さ――儲けて佳い着物が出來て難有いとか、達者で難有いとか云ふやうな難有さは、却つて執着を增し、因果の因を造つて行くことになるのであります。本當の難有さと云ふものは肉體の健康のことでも物質の調ふことでもないでせう。肉體の達者なことその事が難有いのではない、達者を現はすやうな實相を自分が有つてゐる事が難有いのです。物質の豐富なことそのことが難有いのではない、物質の無限を現はすやうな實相を有つてゐるのが難有いのであります。わが實相が神の子であることが本當に有り難いとわかれば、ほかの難有さはすべて自分に附き纒ふやうになるのです。自分自身の實相が難有いから、その影を映して、親でも子でも妻でも召使でもどんな事件でも皆な自分の向ふ所すべてが難有くなるのです。矢張りこれは、中心に乘つた難有さとか、南泉和尚が猫を斬つたやうにすべての形を斬り捨てゝ了つた難有さとか云ふべきもので、形にとらはれてゐる難有さ、物質が調うたり肉體の達者な難有さはまだ〱途中の難有さであつて、また究竟地に達してゐないのであります。

中𢌞――金光教祖も必ずしも肉體の達者と云ふやうなことだけを難有いと思へと云つてはゐられないのでありまして『疑ひを去りて信心して見よ、おかげは我心にあり』と云つて、究竟のオカゲは形の世界よりも心の悟りにあると喝破してをられるのであります。また『疑を離れて廣

き眞の大道を開き見よ、我身は神德の中に生かされてあり』と云ふ敎への中には我身と神とが不可分の一體である難有さを說いてゐられるやうに思ふのであります。この難有さにならないと本當ではないのであります。この難有さになりますと、難有うと云ふ言葉は、アーメンとかハレルヤとか、南無妙法蓮華經とか南無阿彌陀佛とか實相の讃嘆の言葉になる譯であります。それからこれは近頃『生長の家』の敎へに照らされて始めて解つた事でありますが、金光敎祖の遺敎の中の最大なるものは『天地金の神は昔からある神ぞ……、信心せぬでもおかげはやつてある』と云ふ百節の御理解中の第七節であります。これは金剛實相の神は久遠劫來の存在である、神を信じたからとて始めて神の子になるのではない、皆本來神の子である——この皆本來神の子であると云ふのが『信心はせぬでもおかげはやつてある』と云ふ意味で、皆神の子であるけれども、それに氣附かないものがあるから、それに氣附かせてやるのがわしの使命だと云ふ意味が敎祖のこの御理解の中に窺はれるのであります。

谷口——斯うして本當の難有さは、凡ての難有さを斬り捨てゝ悟りの中心に乘つた時に始めて得られる。また吾々の生活が正しき道に乘ると云ふことも、凡ての形の道を切り捨てゝ悟りの中心に乘つて其處から動き出す時始めて眞の行詰らない正しい道の生活が出來ると云ふことが解

るのであります。

眞の『有りがたさ』に就ては全集第四卷觀行篇の第四章に『神想觀の助業としての感謝行』と題して詳しく書いて置きましたから御併讀下さい。）

荒木夫人――『祈りはきかれる』と申しますか、『念は具象化』すると申しますか、それともまた祈りたくなることは、既に與へられてゐることであるから、自然、人の心に祈りが湧いて來ると申す譯でございますか、誠に羞かしい話でありますが、今日は皆樣に、私の祈りがあの關東大震火災を起したと云ふ懺悔話を聞いて頂きませう。私は幼い時から、念ずることは必ず實現すると云ふ體驗を得て來てゐるのでございます。と申しますのは、抑々私が××家へ養女に來ることになつたのが、私の亡くなつた實母の念願だつたのでございまして『此の子をあそこの家で貰つてくれゝば好いのに』と思つてゐますと、果して其の家から私を貰ひに來てくれまして、私が××家へ養女に來ることになつたのでございます。念が具象化したのでございますねえ。ところが養母は大變强い性格でございまして、幼い頃の私には自分の云ひたいと思ふことでも養母から『お前、斯うだらうね』と押し强く出られますと、自分の云ひたいことが云へないで了ふのでございます。言葉の力でございますわねえ。私の此の近眼は幼い時からでございます

が、養母は醫者が嫌ひでございまして、眼が視え難いなどゝ申しますと叱られますものでござ
いますから、眼が惡いと云ふことは大變罪惡であるやうな氣が致しまして、隱してゐたのでご
ざいます。ところが學校で先生が黒板にお書きになる文字がハツキリ見えないのでございま
す。『勘』でそれを讀むことを覺えましたが、文句のところは前後の連絡で朧ろに見えるのを辿
つて行きますと、どうやら見當がつくのでございましたが、數字になると文句の連絡や想像で
讀むことが出來ないので、『或る數を三倍せよ』と云ふのを五倍して見たり、六倍して見たり
とても見當違ひをするのでムいます。或る日、學校の先生が、私の答案を御覽になりまして、
眼が視えてゐたら、こんな間違ひを演ずる筈がないと云つて『貴女は眼が惡いのだらう。見え
難いのだらう』と先生が被仰つて下さいましたが、眼が惡いと云ふことは大變な惡いことに違
ひないと思つてゐたものですから、『いゝえ眼は惡くございません。見え難いことは決してござ
いません』と言ひ張つてゐたのでございます。其の頃から私は『祈る』と申しますか『念ずる』
と申しますか、神の存在と云ふことをハツキリ知りませんでしたから、『神さま!』と名指して
は祈りませんでしたが、黒板に先生が問題を出されますと見え難いものですから『どうぞ先生
が黒板に問題を出さないやうにして下さい』と、誰にともなく念じたものでございます。する

と、さう念じた時は先生が決して黒板に問題を出さないで口頭で試問して下さる。『ヤレ〳〵』と思ふのでございますわね。念じない時には黒板に問題が出る。念ずれば必ず肯かれると云ふことを其頃から體驗で知り始めた譯でございますわねえ。それでも黒板に數字の問題が出たりすると見えない。先生がどうも答案の具合が變だと云ふので養母を呼んで、眼科醫へ私を連れて往つて視力を検査して貰ふやうに勸めて下さいましたので、養母も不承々々眼科醫へ私を連れて往つてくれましたが、あの小さい四角や、大きい四角が竝んでゐる視力検査表の前に立たされた時には、一番上にある一番大きい四角が見えないのでございました。全くその時には困つて了ひました。お醫者さんがこれは見えるか、これは見えるかと、その四角を順々に指差してお出でになる、視えないものだからジツと見詰めて考へてゐますと、養母が側についてゐまして『お前視えるだらう。それ』と押付けるやうな語調で『視える、視える』と暗示されますと、眼には視えないのですが、養母の言葉の語尾のアクセントで直感されて『右』とか『左』とか、その四角の明いてゐる方向を云ひますと、それが奇妙に當るのでございます。養母が視てゐて、四角のどちらが明いてゐると思つて、その念を私に傳達するのですね――今から考へますと念の感應と云ふものでございましたらう。かうして眼科の先生も『これ位なら大して視

えない程でもない』と檢定を下して了ひましたので、小學校はその視力の薄い眼で眼鏡をかけずに通して來ました。成績は、眼の方の邪魔がございますので、中等位のところでしたが、兎も角小學校を卒業しまして上の女學校へ入學試驗を受けることになりました。私の宅は葭町にございまして下町なのでございますが、此の下町の風俗が私嫌ひでございました。是非とも山の手の良い女學校へ往きたいと思ひまして、三輪田女學校と跡見女學校とに入學願書を差出しました。眼が惡いものでございますから學科の方よりも體格檢査がどうかと思ひまして一生懸命、試驗に通るやうに專心に祈りました。すると、三輪田高女へも跡見高女へも私の小學校から六人の入學志願者がありましたが、その人達は皆私よりも小學卒業の成績が宜しかつたのでございますが、六人のうち眼の惡くて成績の惡かつた私一人だけが兩校の試驗にもパスしたのでございます。視力の檢査も無事に通つて了つたのでございます。念することは、皆かなふと云ふ譯でございますね。兩校の試驗にパス致しますると、三輪田の方へ前から一層行きたいと思つてゐましたので、その方へ行くことに致しましたのでございますが、三輪田高女へ參りますと、皆さんいづれも山の手の『お邸』のお孃さん達ばかりでありまして、下町の店屋から往つてゐる者は私一人位なものでございました。私の宅は養父は銀行の方へ出てをりました

が、養母が『遊んでゐるのも勿體ない』と申しまして、家に小さな煙草店を開いてをりました。お友達には一人も商店の娘などはございませんでしたので、娘心に私は自分の家が煙草屋であることが羞かしくて致し方がなかつたのでございます。それで私は自分の家が煙草屋であることをヒタ隱しに隱してゐまして、お友達が『貴女の家へ遊びに行きたい』と申しましても口實を設けて逃げるやうに逃げるやうにしてゐました。ところがお友達のうちに私の家が煙草屋であると云ふことを知つてゐる者が二人だけございました。その二人は時々私の家が煙草屋であると云ふことを輕蔑し、時々私に對して意地惡く其れを皆に吹聽しさうに思はれるのでございます。私はそれが迚もたまらない。魂の最も痛い部分に觸れられるやうな氣がして『此二人が世界中に無ければ好いが』と時々思ひました。それがために『此の二人が不幸になりますやうに』と、自然に魂の深いところで祈るやうになつて來ました。ところが其の祈り通りに、間もなく、その二人共不幸に陷つて了ひました。そのうちの一人が病氣になつて死んで了ひ、あとの一人は卒業すると嫁がれましたが、緣付き先で旨く往かず離緣になつて現在非常に悲慘な境涯にゐられると云ふことであります。私は自分の體驗から逆念と云ふものが如何に恐ろしいものであるかと云ふことを體驗致しました。今の私なら自分がどんなに虐められても決して『人

が不幸になるやうに』とは祈らないのでございますが、其時は娘心に一途にさう心の内で念じたものでございます。私は全く悪いことを念じたと今は後悔致してゐまして、現今不幸に陥つてゐる友達のために現在の不幸が本當にその人の魂の救ひに導かれる道程になりますやうにと祈つてゐる次第でございます。此の祈りもやがて肯かれるに相違ないと信じてゐます。さて私の話に復りますが、煙草店をしてゐますと、電話があると便利なものでございますから、急設電話に申込みましたら好い具合にそれを架設してくれることになりました。すると間もなく新版の職業別電話帳が出ることになりましたが、もうそれが發行される間ぎはになつて、『これは大變電話帳に職業が出ると一遍に私の家が煙草屋だと判つて了ふ』と思つたのでございます。私が大人だつたらもう煙草屋と云ふ事を取消しても間に合ふまいと思つて斷念めたでございましたでせうが、そこがまだ小娘の一途に思ひ詰めた譯でございますわねえ。またその一途に思ひ詰めた念であつたればこそ叶つたのでございませう。私は一生懸命の思ひで電話帳の編纂係のところへ電話をかけて『私のところの職業を無職にして置いて下さい』と申したのでございます。そして電話帳が出來て來たのを見ますと、願つた通りに『無職』になつてをりました。『ヤレ〳〵助つた!』と喜んでをりますと、今度はお友達が多勢でまたしても私の家へ遊びに往く

と云ふのでございます。今迄色々口實を設けて避けてゐたのでございましたが、到頭のつぴきならぬ事になつて斷り切れなくなつたのでございます。その時私は『どうぞ、此の私の家が燒けて了ひますやうに』と、實に詰らない事でございますが乙女心の一念に祈つたのでございます。それからフト氣が付きましたことには、私の家一軒だけが燒けたら、必ず新聞に出て、何町何番地煙草商何某より出火と載る、それでは困ると判つたのでございます。すると新聞に私の家の名が載らないやうな燒け方はないものかと眞面目に考へられました。それには一軒だけ燒けないで、どこからともなく火が出て町內が燒けて了ふと好い。さうしたら新聞に何番地の何商何某の家が燒けたと云ふことが載らない――さうだ、これなら好い、どうぞさうなつて呉れますやうにと一心に祈つたのでございます。それから數日しますと大正十二年九月一日午前十一時五十八分、あの關東大震災が起つて、祈つた通りにどこからともなく火が出て、そこら一圓は火の海になつて了つたのでございます。私の宅も燒けまして、私達は火の中を濱町の方へ逃れて一晩中、河の中で火焔を避け九死に一生を得ました。それから後、私の宅は山の手へ移轉しまして、私の念願通り、友達にも平氣で來て頂けて對等に交りをし、暫く乙女時代の浮薄な誇りを滿足させてから女學校を卒業しました。私にとつては念ずることは皆出て來るので

す。關東大震火災は、他の人々から云へば他の人々それ〴〵の念の反影である運命だつたでせうけれども、私にとつては、さう云ふやうに私の祈りが實現したと云ふことになつてゐるのでございます。

谷口——（冗談に）貴女は全く地震鯰のやうな方ですなア。貴女に『不幸になれ』と念じられると死んで了ふし、火事になれと念じられると火事になつて了ふ。私もその關東大震火災の被害者なのですから『生長の家』が今住吉にあるのは全く荒木さんのお手柄だと云ふことになりますなア。併し、荒木さんの奥さんのやうに覿面に念願が實現する程、念力の強烈な人は少いにしても吾々の起す念は大なり小なり具象化の力を有つてゐまして、此の世界を動かしてゐると云ふことになつてゐます。だから吾々が光明思念聯盟を作り念を淨めると云ふことは非常に大切なことであります。

大野——關東大震災のやうな大震動を荒木さんだけの念力で起したと云ふことは全く受取れませんな。

谷口——それは荒木さんから見れば、荒木さんの『念』の具象化になつてゐるのですけれども、他の人から見たらまた別の『念』、怒りとか憎みとか審判とかの念の具象化になつてゐる譯で

す。それは多勢の人の綜合的な念の具象化になつてゐるのです。一家のうちで色々不幸な事件が起るのも、良人から見れば良人自身の『念』の具象化にもなつてゐるし、妻から見れば妻自身の『念』の具象化になつてゐるのです。だから兩方から互ひに、これは自分の『念』の具象化だと悟つて、自分の『念』を變へるやうにすれば相手の念にもそれが影響を與へ、互ひの念が變り、その事件が變つてくるのですが、それを自分の方の『念』が惡いと云ふことに氣がつかず、『お前の念が惡いのだ、お前の念が惡いのだ、お前の念を直せ』とばかり互ひに云ひ合つてゐたならば、『念』が互ひに變らないから不幸な事件も變らないと云ふことになるのです。

大野――關東大震災を一年前に豫言したと云ふ人もあるのですから、關東大震災は既に一年も前から念の世界で造られてゐるので、荒木さんの祈りは唯それを豫知して、その將に起らうとすることゝ同方向に祈つたと云ふことになりますねえ。さうぢやないでせうか。

谷口――さうです。あゝ云ふ廣い範圍に起る事件と云ふ者は廣い範圍の人々の念の具象化であつて荒木さんの念だけの具象化では無論ありません。荒木さんの念を加へなくとも、あの關東大震災は起つたに違ひありません。併し荒木さんの念がなくともあの關東大震災は起る、何某さんの念がなくともそれは起る、更に何某さんの念がなくともそれは起ると、次第に人々の念を

引去つて遂に全人類の念を差引きして了つても關東震災は起つたであらうかと云ふと、決して起らなかつたに違ひありません。それは例へば、吾々肉體が生きて此處にあるのと同じことです。吾々の肉體から一個の細胞を取去つても此の肉體は生きてゐる、二個の細胞を取去つても生きてゐる。これは荒木さんの『念』を去つても關東震災はあり得たと同樣です。併し、細胞を一個取去つても、二個取去つても此の肉體が生きて存在し得ると云つても、それなら人體四百兆の細胞を、一個の細胞位人體構成に何の影響もないと思つて、一つづつそのすべてを取去つたら此の肉體は存在し得ないでせう。それと同じやうに、荒木さんの『念』と云ふものも、大震災を構成する無數の『念』の中の一つとして働いてゐたことは事實なのです。だから昔から大聖者は『此の世の不幸は皆自分一個の罪である』と云つてゐるのです。各自、自分一個の罪が無くなれば、世界に罪がなくなるのです。各自、自分一個の『念』が光明化すれば、此の世界が光明化するのです。だから『生長の家』誌友は『光明思念聯盟』と云ふものを造つて、全誌友一定時間に靜座『神想觀』して光明思念を念ずると云ふことにしてゐるのです。これは小にしては自分自身が光明化する、病人に對して光明思念を送ればその病人が治る。國土に光明思念を充たせばその國土が光明化すると云ふことになる譯です。天行居では『アマテラスオ

ホミカミ』と云ふ十言の神咒を信者が一定時間に念じて國土を光明化することにしてゐる。本田仙太郎氏の大日本救世團では『南無妙法蓮華經』と題目をとなへて、その念を天地に滿ちみなぎらして國土を光明化することにしてゐる。形の國防も大切ではあるが、光明思念の國防はもつと大切なのであります。荒木さんの唯一人の祈りさへもあれだけの具象化力を有つてゐるとすれば吾々多勢が聯合して光明思念を祈れば必ずその祈りが實現するに違ひないのでありま す。どうぞ皆さんの知人にも、此の『生長の家』の誌友になつて吾らの光明思念にお加り下さいますやうにお勸めをお願ひします。

第七章　神の無限供給を語る

場所――生長の家本部樓上。（當時、兵庫縣武庫郡住吉村八甲田六九五番地に在り）

内容――昭和九年六月二十四日は近く本部が東京へ移轉すると云ふ噂が弘がつたので、參會者會場に充滿す。折から始めて座談會へ來られた石橋氏、木野内氏、首藤氏等の熱烈飾りなき信仰體驗談があつた。本稿は當時の座談の筆記の一部である。

谷口――杉江さん。先日山田薫さんから承りますと、山田薫さんの見てゐられる前で、話だけで神經痛の病人を卽座にお治しになつたと云ふことですが、その當時の御樣子を皆樣の御參考のため御話し下さいませんか。

杉江――どうも私はちかごろ神經痛係りのやうになりまして、來られる病人が神經痛の方が多いかです。……（と二人の神經痛患者を實相の話によつて、卽座にお治しになつた實驗談をお話しになる。この實驗談の一部は本卷第三章『「無」もない世界に入る話』中に谷口先生が取次いで話してゐられるので、本誌讀者にとつては重複になりますから省略させて頂きます）

谷口――石橋さん今度は貴方の體驗談を皆樣にお話し申上げて下さい。

石橋——私は鍼灸を業としてをります。昔から色々の宗教に首を突込んで見ましたが、話を聞いてゐますときは成る程善い事を談してくれると感心するのですが、どうも實際生活にぴつたりと來ないのであります。實は私は昨年の八月、色々入込んだ悲慘な事情がありまして神戸へ來たのでありますが、八月に神戸へ來ますと、もう十月には家賃の支拂ひに窮すると云ふやうな有様でありました。すると管理人氏が隔日位にやつて來まして『何ぢや一年位の食溜めは持つて來てゐるのかと思つたら、たつた二ヶ月で家賃が拂へんのか。この家は新築だからお前のやうな文無しに貸さないでも誰でも借手があるのだから、直ぐに家を明けて出て往つてくれ』と云ふのです。こちらでは折角この家を借りて落付きかけた所であるから、轉々として引越してゐたら鍼灸のシニセがつく暇がない、せめて五六ヶ月位は落付いてやつて見ないと繁昌るかどうか判らないから、もう少し待つてくれと云ふ。管理人氏の方では大變で呶鳴り出す。それが狹い家ですから近處へ聞えるかと思つてハラ〳〵するのですが管理人氏の方では容赦はない。容赦がないどころか嫌やがらせを云つて逐ひ出さうと云ふ魂膽なのです。見つともなく隔日位に呶鳴られてゐるやうな有様ですから、信用がなくて患者が來ない。仕方がないので、叶はぬ時の神だのみで、何か好い救はれる道があると思ひまして、先日も或る教團の支部へ話しを聞

きに參りましたら『紹介者は誰ですか』と尋ねますから『紹介者はありません』と答へますと『紹介者がないとあかん』と申すのです。それで私は申しました。『私は救はれたうて來たのですし、宗教と云ふものは人を救ふためのものであるから、紹介者があつたら救ふが、紹介者がなくては救はぬと云ふことはありますまい。』斯う理窟を申しましたが、『理窟はさうでも、紹介者がなくてはあかんと云ふ規則になつてゐるから仕方がない』と云ふのです。私の父は××教の支教會長もしてをりましたし、姉達は現に××教を信仰してをりますから無論××教もきゝにまゐりました。××教にもまゐりましたし、佛教の說教も聽きにまゐりました。本來どうぞして救はれたい救はれたいと思ひながら說教を聽きに參ります私であり、教會の先生は、どうぞして救つてやらう救つてやらうと思つて教へて下さる方でありますのにどう云ふものか今一つ紙一枚と云ふ所に私の信仰心が起らず、どうもピッタリ來ない。卽ち救はれ無いのであります。愈々神佛に見離された私だと思つてをりますと、或る教會の奧さんが他から勸められて買つたのだが良い事が書いてあるから讀みなさいと貸して頂いたのが、『生長の家の叢書』八冊でありました。然し、正直なことを申しますと何だこんな薄つぺらな本と先生の前で失禮ですが、其時は思ひました。（一同笑ふ）然るに讀んで見て驚きました。私の求める道は之れだ。之れなら必

す救はれると、もう片時もヂッとして居られません。叢書は十一冊ある筈だから後の三冊も讀み度い。神誌『生長の家』も讀み度い。その上、是非先生にも直接お目にかゝつて御教を請ひ度いと存じまして、忘れもしません、十二月二十日の午後七時頃娘と同道にて生長の家本部を訪れましたが、御指定の面會時間外でありました爲め先生に御拜顔を得ませんでしたが殘念では御座いましたがいつもなら癇癪持の私が不思議に腹が立たないで、叢書三組、神誌『生長の家』七、八、九、十月の四冊を購入致しましてニコ〳〵しながら歸宅致しました。そして叢書一組は大阪の姉へ送り一組は和歌山の義弟に送る筈でしたが同業者に求められて貸しました。又忌部さんにもお貸し致しました所、忌部さんは私よりも先に誌友になられました。他の同業者中にも早速本部に參り、『生命の實相』や叢書を求めた方もあります。それは偖て置きまして、叢書や神誌を繰り返し〳〵拜讀致しまして稍々眞理が、おぼろ氣ながらも悟れる樣になりますと、先刻申しました借家の管理人にも相濟まない樣に感じますし、今迄『此の家にをらんならん、此の家にをらなければ生活に困る』と思つてその家に執着してゐましたが、すべての『ねばならん』を捨てゝ神樣の大きな御手にまかせる氣になりまして、いよ〳〵家を明け渡す約束を致しました。そして期日は一月十九日と定めました。所が其の當日は御承知の通り神

戸市としては稀れなと申す程の大雪で御座います。約束通り管理人氏は參りまして、『今日は約束の明け渡しの期日だが、本當に明け渡すか』と恐ろしい權幕で云ふのです。元より、一切を捨てゝ神樣のみ心におまかせ致しました自分ですからビクとも致しません。『えゝ、約束通り家は明け渡します』と答へますと、管理人は『引越して行く家が見付かつたかね』と云ふのです。『引越して行く家を借りるのにも金が要ります。そんな金がある位なら貴方に家賃としてお支拂ひ申しましたでせうが、その金が出來ないからこそ、今日は斯うして家を明け渡して出て行くことにきめたのです。今迄色々お世話をかけて申譯がありませんでしたが、實際金が出來なかつたのですから、惡く思はないで下さい。溜つてゐる家賃も拂ひたいとは思ひますが、それが出來ないのでこの始末なのですから、少しは私もこの家の雜作に金をかけてあります。家財もスツカリ置いて參ります。少し位は御損になるかも知れないけれどもそれを家賃のカタに取つて頂きたい』と申しますと、管理人は外に烈しく降つてゐる雪を見ながら『こんな大雪でも出て行くのか』と云ふのです。『出て行きます。』『引越す家がないと云ふなら何處へ出て行く。』『娘は大阪の姉の處へあづけまして、私はお四國遍路へでもどこへでも出かけます』と申しますと、管理人は暫く無言で考へて居られましたが、急に態度が一變しまして『よし君の氣

持ちは良く分つた。俺も男だ。家主の方へは俺から一ケ月や二ケ月分の家賃は立替へてやるから、もう暫く辛抱して見よ。又忠孝の方も俺も交際は廣いから宣傳してやらう。其の内に少しでも出來たら出來たときに入金すれば良い。くよ〳〵せずと確りやれ」と云つて私を慰めて呉れたりしました。生長の家の神様は私の様な我儘者でも斯くしてお救ひ下さいましたのでした。先づ私の心を救ひ、平然として家を明け渡す決心にならせて下さり、その上現實の經濟問題までお救ひ下さつたのであります。何共難有い事で御座います。それから一月の末に一ケ月分の家賃を納めました。其の後は一日と十五日に出來た丈け少しでも納める事と致しました。然し矢張り順に家賃の滯納が重りますが、それでも管理人さんはいつもニコ〳〵して下さり、私もニコ〳〵、昔のいがみ合ひが今では全く親友になりました。何と愉快な事で御座いませう。家賃は出來た時で好いと云うて貰へる。四錢あれば風呂へ這入れる。なければ無いで風呂へ這入らないでも困ることは無い。私はそれ以來困ることが無くなつたのです。迚も自由な心境になられましてこんな嬉しいことはない。一度御禮を申し度く參上しまして誌友に加へて頂き度いと存じ乍ら失禮して居りました。所が、去る六月十七日生長の家神戸支部設立の發會式が元町の元榮海組合事務所でありました。それで私は當日、忌部さんに伴はれ出席させて頂き、

谷口先生にお眼にかゝることも出來、御講話も拜聽致し、皆樣の貴重なる御體驗談も拜聽致し實に感泣致しました。私も一言でも先生に御禮を申上度いと存じて居り乍ら其機會を失しまして、後で殘念に堪へなかつたので御座います。あの日私は係りの方に誌代六ケ月分一圓八十錢と紀念寫眞代二十錢合計貳圓を納めさせて頂きましたが、其の金は實は家賃の內入れにする心算で、私が貯めて持つてゐた全部の虎の子でありました。それで、私は神樣へ斯う申してお願ひ致しました。『神樣、この二圓は私の財產の全部で私の虎の子です。その虎の子を全部投げ出して今日から私は生長の家の家族にならせて頂きますのですから、後の無限供給を貴方におまかせ致します。』私は全部を抛げ出して全部を神樣にゆだねたのです。私は小冊子を八冊讀んだゞけでもあれだけの更生を得たのであるから生長の家誌友にして頂いたら、どれだけ救はれるかも分らんと思つたのです。ところが豈計らんや、歸宅致して見ましたら、郵便局から簡易保險の掛金が、來る二十日にて期限が切れるから、それ迄に支拂はぬと十ケ年も掛けた保險が無効になると云ふ通知書が來て居ります。これには一寸困りましたが萬事神樣のお指圖がありませうと待つて居りました所、翌日例の管理人氏が見えました。家賃の內拂ひにしようと思つて持つてゐた二圓の金は生長の家の家族になるために拂つて了つた後ですから管

理人氏の顏を見ると、家賃の請求ではないかと思つて胸がどきつとしましたね。ところがさうでないのです。管理人氏が云ふには『わしの恩人が今、坐骨神經痛で痛んで腰が立てなくて困つてゐるから一遍往診してやつてんか』と云ふのです。愈々神樣からの御指圖があつたと思ひましたね。『どこへでも往診に往くぜ。わしは君がさう云うてくるやろと思つて待つてたのや』『わしの恩人だから、成るだけ安くしてやつてお呉れ』『いゝとも、好いとも。何處へでも行く』渡りに舟と早速その病人のところへ出かけて行きますと、腰が痛むと云つてウン〳〵云つて寢てゐるのです。『神樣宜しう賴みます』と念じながら鍼を打つて『どうぢや、痛みは止つたら う』と云ひますと『止つた』と云ひます。『もう起てるから起つて御覽』と云ひますと起ちます。それから部屋の中を歩かせる。生長の家では言葉だけでも歩かせるのですから、鍼を打つて、それで度膽を拔いといて言葉の力で歩かせるのですから暗示の力が一層よくきいて見る見るうちに治つて了つたのです。その時は、一回でそれ程よく効いた。管理人氏も感心して『君の鍼がそんなによくきくと云ふことは、今始めて目擊して感心した、そんなによく効く鍼ならもつと患者を世話してやらう』云ふのです。それで『今の治療費は幾らだ』と申しますから、『普通、出張治療は一回二圓の定めであるが、君には安くすると云ふ約束だから半額の一圓に

して還から』と私は答へたのです。すると向ふ様で『こんなによく効く鍼をそんなに負けて貰ふのは氣の毒だからその中とつて一圓五十錢と云ふことにして頂から』と云つて一圓五十錢貰ひました。それを貰つて歸つて來ますと、すぐに簡易保險の集金人が來て金高も丁度一圓五十錢を持つて歸つて行きました。それ以來、よく會計を見てをりますと、誰かゞ金をとりに來る前には、豫めとりに來るだけの金が手許へ這入つてゐる――生長の家の供給無限の眞理とはこれだなアと氣がつきました。私は救はれたのです。もう經濟的に恐ろしいものは何もないと分りました。家賃は出來た時拂ひで好い、患者は世話して貰ふ。四錢あれば風呂へ行くし、なければ風呂へ行かなくとも困らない。昨日までは始終困つてゐた人間が、今日は『生長の家』のお蔭で、もうどんなことがあつても困らない人間になつて了つたのです。

それから二十一日の朝、何氣なく大阪毎日新聞を見てゐますと、自分の名と云ふものは眼につき易いものでありますが、『石橋』と書いてあるのが眼についたのです。私は『石橋貫一』と云ふ名前ですが、それには『石橋靜人』と書いてある――イシバシセイジン――變だな、と思つて住所を見ると神戸市湊區湊川町五丁目二三ノ二とあるのです。何ぢやこれは俺の住所ぢやないか。あゝ『石橋靜人』と云ふのは俺の假りの雅號であつた。三月に大學目薬の標語の懸賞募集があつ

たときに、その頃は金も欲しかつたですし、當れば好いがなアと思ひながら應募して置いたのです。その時は金が欲しかつたが、今では要るだけは金は這入ると思ふものですからもう忘れて了つてゐたのです。所が私が此の月の十七日に、虎の子の全財産二圓を全部出して生長の家の家族の仲間入をさせて頂いて、あとは神様宜しうお願ひしますと、神様に頼んで置いた。この標語の應募數は五十七萬四千百八十一枚だつたのですから十五人の當選次點を最後に選び出す迄には幾度も豫選を加へて最後に十五人を殘したに違ひありません。そして私が生長の家誌友にして頂いた十七日は日曜ですから最後の決選はこの日にはせられないで翌日の月曜あたりに決つたのではないかと思ふのです。五人までは當選で賞金は同じ金額の五拾圓ですが、六人目からは三拾圓の次點に下がつてゐる。私は五人目で一つ下れば六人目です。五番目と六番目との優劣はどこにあるか物尺で差して測る譯に行かない。それは審査員のホンの氣持です。そのホンの氣持のところを審査員の心を動かして、私を當選にし、ほかの人を次點にして下さつた。斯う云ふところにも神樣の救ひの御手が働いてゐることがわかるやうな氣がするのです。そして私の作になる『朝々點眼、日に日に健眼』と云ふ標語が最高の賞金五拾圓に當選したのでございます。あゝ何と云ふ難有い事で御座いませう。現在の私には五拾圓の金は難有いには相違あ

りませんが、より以上に難有いのは私如き罪の深い者でも一切を投げ出して神樣にお委せしてお願ひすれば覿面にその祈りを聞き届けて下さいますことです。即ち、私は生長の家の神樣が私と云ふ者を認識して下さつたことが何よりも難有いのであります。神樣が御認識下さつた以上、是れから先きは無限の愛を垂れ給ふ事は一點の疑ふ餘地もありません。其れが何よりも有難いのであります。生長の家家族にお加へ頂きまして一週間目の今日、斯のやうな結構な體驗をば御報告出來ます事は無上の光榮と存じます。

谷口――唯今は誠に眞劍な懺悔と體驗談を承りまして難有うございました。神樣の無限供給の話では斯う云ふ話がございます。此の席に出席してゐられる瀧本さんの親友に××と云ふ方があります。瀧本さんとは兄弟も及ばないくらゐに親しい、傍から見てゐても羨ましい程の間柄であります。此××さんは大變人情深い恩義のためには自分自身を捨てゝどんな苦しい目でも身代りすると云ふ人でありましたから無一物から運輸業をお始めになつたのださうですが、友達がみんな資本を出し合つて『××君しつかり遣れ、君の成功するのを見るのが俺の樂しみだ』と云ふやうな具合で今の商賣をお始めになつたんださうであります。さう云ふ譯でお始めになつたのでありますから、友達から『成功させてやりたい、成功させてやりたい』と云ふ念

波が常に送られてゐるから商賣が益々繁昌する。今では三井、三菱などの大資本系の運輸會社を向ふへ廻しても遜色のない營業振りになつてゐる。最近では滿洲貿易が益々旺んになるにつれて益々その經營が膨脹して來た。千人からの人がその經營で衣食してゐる。それだけまた運轉資金が餘計に要る。運賃收入もそれだけ殖えて營業資金は多くなる譯ですが、政府から委托された貨物の運輸などは官廳のことでありますから色々と複雜な手數を要して一二ケ月後でないと金にならない、それだのに從業員への支拂勘定は早くしなければならないので、營業が膨脹するに從つて此頃××さんは、いま五千圓ほどの金が資金運轉を圓滑にする油として是非欲しいと云ふことになつて來たのであります。それで××さんは毎日神想觀を勵まれたのですがどこからも其の五千圓が天から降つて來る譯ではない。瀧本さんは親友の窮狀を見ると自分の持つてゐる外國證券をポンと投げ出して、これを金にかへて自由に使へと云つて渡されたのですが、金輸禁止以來、外國證券の融通性が乏しくなつてゐるので、中々オイソレとは金にならないのであります。融通資金の必要は愈々急迫を告げて來る。××さんも連夜神想觀をして無我になつて實相無限の供給の中へ溶込まうと努力される。或る晩、神想觀中に、ふとしも思出されたのはあの融通資金の問題であります。物質に捉はれるやうなことでは可けないと打消

せども神想觀にその問題が飛び出して來て、神の導きか谷口先生に相談して見たらと云ふやうな考へが浮んで來たのであります。そして到頭この問題をどうしたら好いかと云ふ相談狀を私に寄越されたのであります。私はその手紙を讀んだけれども、具體的にどうしてあげたら金が出來るか見當がつかないので、ほかの要返事の手紙と共に三日間私の机の上に××さんの手紙を放つて置いたのです。放つて置いたと云つても唯放つておいたのではない。早速と形の世界で調はない時には『實相』の中へ暫くあづけて放つて置くと、そこから適當な判斷が浮んでくるのであります。三日後に他の要返事の手紙と共に返事をしようと思つて××さんの手紙を開いて見ますと、此の話はHさんに賴んであげたら屹度都合よく行くだらうと云ふ閃きが心に來たのであります。それでHさんに依賴狀を出すと同時に、或る心當りを賴んであげたから金が出來たら早速電報で知らせるから取りに來いと云ふ返事を××さんに出して置いたのであります。宗教の中には信者から金を絞るのがありますが、生長の家では却つて信者に金を循環させてあげるのであります。すると十八日の朝Hさんが袱紗包みのものを持つて來られて『こゝに五千圓あります』と云はれるのです――『これを××さんに送つてあげて下さい』と云はれるのです。『さうですか。それはどうも難有う。××さんがお喜びになることでせう。早速電報

を打つて××さんを呼んで禮を云はせませう』『それほどまでに及びません。唯送つてあげて下されば好いのです。』信じ合つた仲と云ふものは嬉しいものです。私は袱紗包を開いて見ようともしないし、Hさんも披いて見せようともしない『五千圓ある』と云はれゝば『さうですか』です。五千萬圓でも同じことでせう。翌日雨の中を××さんはやつて來られて、翌々日あらためてHさんところへ御禮に行かれた。Hさんとこでは××さんを下へも置かない歡待ぶりなのです。十年の知己のやうに丁寧にもてなされて金を貸して貰つた上で、おまけにお晝の御馳走になつたのであります。神樣はどれだけでも人間によくして下さるのです。それではHさんは金を貸した上に御馳走を食べさせて損をしたかと云ふとさうではない。四五日してから××さんから瀧本さんへ「之を谷口先生にお眼にかけてからHさんに納めて下さるやうに」と云つて正式の借用證を送つてこられた。瀧本さんがそれを私に見せに來られた。見るとそれには『利子年××』と××さんが自發的に書いてゐられるのです。Hさんは借用證一つ要求された譯ではない。從つてさう云ふ高い利子を豫想された譯でもない。たゞさう云ふ立派な人の急場を救けてあげたい深切で、無條件で私の机の上へ放り出された五千圓であります。併し救けられた方では餘り難有くて年利××と書かずにゐられない。この樣な保ちつ保たれつの世界が生長

の家の大調和の世界なのです。誰も損するものはない。金を貸して貰つた上でまだ御馳走が頂ける。それでは金を貸した上で御馳走を食はした貸手は損をしてゐるかと云ふと決して損をしてゐられない、却つて銀行などへ預けて置くより利益になつてゐるのであります。生長の家では金と云ふものは有限なものではない、出せば出すほど殖えるものだと云ふ眞理の一端も斯う云ふ處にも立證されてゐるのであります。この次は首藤さん、遙々大分縣から來て居られるのですから、置土産に貴方の體驗談を皆さんにしてあげて下さい。

首藤――私は大分市外の稙田村の者であります。八年前からひどい喘息に罹りまして凡ゆる醫療を盡しましたけれども治りませんでした。八年前と申しますけれども、遠く遡れば遺傳性のものであつて幼時から時々苦しめられてゐたのであります。發作の激しい時には注射を三本打つてもその苦痛が止らない位でした。もうこの病氣は一生治らないのだらうかと思つてゐましたところが、ふとした機會に聖典『生命の實相』を讀まして頂くやうになりました結果、八年間の病氣が一ケ月ほどのうちにスツカリ解消して了つたのであります。聖典を讀んで、自分の生きる力は自分の力ではない。神の生命が自分に生きてゐるのであると云ふことが悟れますと、其の當座と云ふものは、『虛空の體』と申しますか、妙な感じが體全體に起りました。今迄こ

の體が物質の體であつて、風が吹いて來ればその風に衝突して其の風を撥ね返すと云ふやうな感じでありましたが、聖典を讀んでから後と云ふものは、風が向ふから吹いて來ても此の身體に行當らないで、スーウと拔け通つて通過して了ふと云ふやうな感じでありました。そして私の身體が空氣と衝突する物質の體ではなく、空氣と調和して風が吹いても拔け通つて了ふ虛空微妙の體であると云ふ自覺を得たときに、私の喘息は治つて了つたのでした。一度御禮に來たい來たいと思つてゐましたが旅費や宿泊費がありません。每月『この月は賴母子講に當れば好い、當れば好い』と思つてゐましたけれども、我の心で『當れば好い』と思つてゐる間は到頭當りませんでした。もう當つても當らなくとも、さう云ふ我の願ひは捨てよう、そして神樣のみにお委せしよう當らせて下さるのだと思つたときに賴母子講は向ふから當りました。私は喘息は斯うして治して頂いた。併し近頃また心の亂れから別の病氣が出て參りました。お耻かしい病氣ですから病名は御想像にお委せ致しますが、これは根本から心を建替へなければならないと氣がつきまして一ケ月許りの修行の豫定で當道場に來させて頂いたのであります。今日で十日になりますが意外に早く病氣が全快しましたので、今日の座談會を終りましたら歸鄕致しまして、及ばず乍らお道の宣傳に盡さして頂きたいと存じます。

谷口——お次は木野内さん、貴方の御體驗を皆さまにお話して上げて下さいませんか。此の方は松山市の社會課長をしてゐられる木野内爲次郎氏であります。

木野内——松山に高橋照昌と云ふ人がある、靈覺のある人ですが、此人に私は以前から鎭魂と云ふのをやつて頂いてゐましたので靈感が出來てゐたのであります。高橋照昌さんから『生長の家』のパンフレットを貰つて大變感心しましたので、先般上京の序で乘替の時間を利用して谷口先生にお眼にかゝりたいと存じまして、住吉驛に途中下車致しましたのであります。住吉驛に下車しましたものゝ『生長の家』がどちらにあるか判らない、それで驛前の廣場へ出ると、心の中で『生長の家の神樣、生長の家はどちらでございますか』とお尋ね致しますと、私の首が斯う左へ自然に何者かに向けられるのでございます。『ハハア、生長の家はこちらだな』と思つて暫く歩きますと、大通へ出ました。東西へ大通りが走つてゐてどちらへ行けば好いか分りません。『もう一度神樣にお伺ひしませう』と思ひまして『生長の家の神樣、生長の家はどちらでございますか、もう一度お教へ下さい』と申しますと、私の首が今度は斯う右へ向くのです。到頭私はこの附近にある石屋のところまで參りました。そこで私は今度は人間に聞いて見ようと云ふ氣が起りました。通行人を呼びとめて『生長の家、谷口雅春さんのお宅はどちらで

せうか』とたづねますと『生長の家ですか、生長の家はすぐそこです』と教へて下さいました。早速『生長の家』の玄關の格子戸をあけて這入りますと、皆様はどうか存じませんが、靈感の出來てゐる私にはジーンと感應電氣のやうな感じが全身に感じられるのです。谷口先生のやうな方になると靈的壓力が高いのですなあ。水でも高い所から低い所へ流れる、電流でも電壓の高い方から低い方へ流れる、此のジーンと來るのは靈的壓力の高い方から低い方へ流れて來るのです。今でも私は斯うして谷口先生のお近くにゐますからジーン〳〵と電流のやうな靈的感應を感じるのであります。斯う云ふ靈的感じを受けると否とに拘らず實際上靈的流れは谷口先生のやうな靈的壓力の高い人の側にゐるだけでも絶えず流れ込んで來てゐることは明かですから、私達は一分間でも餘計長く先生のお側にをりたいと思ふのであります。最初私が神想觀を實習しますと、首と肩とが斯う云ふ具合に靈動致しました。これは首と肩との凝りを治すための自然の働きだと思ひますが、唯今では神想觀中には靜かに合掌してゐまして、靈動は起りません。神想觀の終る時間になりますと自然に斯う御辭儀を致しまして何者か知らぬが眼瞼をつまんで引明けるやうな感じがして眼がポツカリ開くのでございます。腕時計を見ますと正に九時半、針が三十分の數字の上にピツタリ重り合つてゐるのであります。私は午後九時の神想觀

の遠隔指導が始まる時にも、身體にジーンと靈波を感じます。役所から仕事を持つて歸つて自宅で一生懸命仕事をしてゐまして、神想觀のことなどスツカリ忘れて了つてゐましてゞも、ジーンと遠隔指導の靈波を感じて來るのでございます。靈波を感じて腕時計を見ますといつも正九時になつてゐるのでございます。それから仕事を止めて神想觀にかゝりますと、家族一同が靜まりかへつて了ふ、私の身體にはジーンと靈波を感じてゐる。これ程私は靈波を感ずることが出來るのですから、他の病氣も治らぬことはあるまいと、女房の肩の凝りに背中の方から兩掌をあてゝ神想觀してやりますと、掌の温みが胸まで抜け通つたやうな氣がしたさうです。『どうぢや肩の凝りは治つたか』と申しますと『肩の凝りがスーツと取れて大變氣持が好い』と云ふのです。これに自信を得まして、今度は私の母の尿閉を治しました。母は六十七歳ですが、どうしたものか尿が五日間も止つて醫療を盡しても小水が出ないのです。『一つお母さん、私が治してあげようか』と申しますと『へえエ、お前のやうな者がよう治すもんかい』と云ふのです。『お母さんは私を自分の兒ぢやから親よりあかん、治す力がないやうに思ふけれども、弘法大師でも親より偉かつたのぢやないか』と申しますと『弘法大師とお前とは異ふ』と云ふのです。『異ふかどうか治して見てやらう』と申しまして、難有味を加へて一層信仰を深めるため

に、此の手をパチ〳〵と二つ拍手しまして、高聲に招神歌を四首となへましてから、やをら斯う母の腎臓部に兩手を當てゝ神想觀致しました。すると、母も又、私の掌の温味が腹まで拔け通つたやうな氣がして好い氣持だつたと云ひまして、卽座に小用が通じました。斯う云ふやうに病氣が治るのでありますから、今度は息子の性質を治してやりたいと思ひました。私には中學×年の息子があるのですが、學校から歸つてくると、グウ〳〵いつまでも眠つてゐて勉強しないのです。いつか役所から歸つて來ますと、やはりこの息子が勉強もしないでグー〳〵眠つてゐるのです。それで、私は息子の側へ坐りまして瞑目合掌神想觀しまして『生長の家の神樣、どうぞ息子の晝寢する癖が治りまして、勉強をよく致すやうになりますやうに』と祈りつゝ精神統一に入りました。暫くしますと私の背中をピシャリと叩くものがあるのです。眼を開いて見ますと、息子が私の横に起きて坐つてゐて、『誰が私の眼をひらくのかと思つたらお父さんがイタヅラをしてゐたのですねえ』と云ふのです。『何もイタヅラしない。お前が勉強するやうに祈つてゐたのぢやないか』『さうでも誰か私の眼瞼をつまんで引明けた』と云ふのです。神樣のお使が息子の眼瞼をつまんで引明けたことだと思ひました。それから、これは先般上京する汽車の中でのことでしたが、二人の朝鮮人が私の前にどうかして眠りたいと色々の姿勢をして工夫を

しても眠れないで苦しんでゐるのです。可哀相だと思ひましたから『生長の家の神樣、あれなる朝鮮人二名が眠れないで苦しんでゐますから、どうぞ眠れるやうにしてやつて下さい』と念じますと五分間ばかりでグウ〳〵寢入つて了ひました。何と神樣のお働きは難有いことでありませう。併し、皆さん、斯う云ふ靈力を惡いことに使つては可けませんぜ。

南――もう、この住吉の出版部のあとを引繼いで下さる方は宮さんに定まつたのでございますか。

谷口――まだハッキリ定つてをりません。宮さんが來て下すつたら好いと思つてゐましたら、宮さんが來たいと被仰つてこられました。そこまではスラ〳〵と行つたのですが、宮さんが唯今住んでゐられる家に比べると、十五圓ばかり家賃が高くなる。この家へ這入つて下さつて、生長の家のお仕事を引ついで下されば要るだけは、それだけ收入が殖えてくるのですけれども、それは心の世界から出て來ることでありますから、形の世界を見てゐる人には、形の世界へ收入がハッキリ殖えて出て來た上でないと判らない。そこで宮さんは無限供給の心の世界の方を見てゐられるからそれで好いのですけれども、何分御老人が『別に收入がないのに家賃の高い家へ這入つてどうなる』とお思ひになられて御承諾にならないかも知れないと云ふ心配があ

りましたので、豫め誰かに一室を貸してその方で超過家賃の償へる事を御老人に現實に見せて置いて御老人を安心させて置いて、この家のアトへ移轉して來ようとお考へになつたゝめに、一室を借りてくれる相手を求めてゐられたのでしたが、それが唯今都合よく行かなかつたのです。ところが、一方では、阪神誌友會の方で會場として一定の日に貸して頂くのだから、その會場費として過剩家賃を出さうと云ふことになつて來ましたので、そのことを私から宮さんに申上げたのであります。すると宮さんが、阪神誌友會から過剩家賃を出して下さることになつたと云ふことを御主人にお話しになりましたら、御主人が『そんな補助まで受けて引越さなくても好い』と云はれたのです。

杉野――家賃を補助すると云ふ意味ではなかつたのです。阪神誌友會としては他を借りてもどうせ會場費を支拂はねばならないのであるから、この家は生長の家見眞道場の發祥の家として吾々に馴染の深い家であるから集りの日に會場として一室を貸して頂きたいと云ふ意味だつたのです。

谷口――それはさうですが、そこに先づ形の方から過剩家賃を準備して置きたいと云ふ處に、心に引つかゝりがあつたのです。それに就て昨夜宮さんから御手紙が參りまして、今日の集りに

も參會させて頂けるかどうか判らない。參會させて頂けたら私から申上げるが、參會出來なかつたら私に代つて話してくれと云ふ話を書いて送つて來られました。それは今年の一月頃のことださうですが、宮さんが無灰炭と云ふのをお買ひになりました。ピッチ・コークスですね。このコークスは無灰炭ストーヴにも使ひますが、火鉢の中へ入れる時には、素燒のつぼの樣なものを置き其上に火と炭をのせ煙突をかけて置くとすぐ火が熾るのです。宮さんの御主人が或る日これを長火鉢に入れられないかナアと申されました。宮さんは『入れられませう』と申されましてすぐ長火鉢の中へスヤキの道具を入れられました。ところが、どうした事かうまく火が熾らないのです。『どうしてゞせう』と御主人に申されますと、御主人が『下の灰を皆とりのけたか』と申されます。宮さんは『少し殘してあります』と申しますと、御主人は『皆のけんから熾らんのだ』と云はれる。宮さんはなんのリクツも顧慮もなしに『ハイ』と申されて、下の灰をすつかり取りのけられました。するとたちまち火がよく熾りました。そこ迄は善かつたのですが、宮さんが別室で用事をしてゐられますと、なんだかものゝいぶる匂ひがして來ましたのです。宮さんは暫く用事をしながら隣りの家でなにかくすべてゐらつしやるらしいと思ひつゝ用事をつゞけてゐました。其内だん／＼にほひは强くなつてまゐりますので、ハテお隣り

で何をいぶしてゐられるかしらと、ヤオラ起ち上つてフスマを開けますと、もう〳〵と立騰る煙に顔を打たれたのでした。宮さんは初めて火鉢に氣づきました。心を靜かにしてよく見られると、まだ火は抽出しには移つてゐない樣子です。『ソツトこのまゝ庭に出したらいゝ』と思はれまして、靜かに二階に上り、御主人に『一寸來て下さいませ』と申されました。御主人は默つてすぐに降りて來られました。『すみませんが、火鉢を昇いて下さいませ』と宮さんが申されますと、御主人は默つて手をかして下さり二人で庭に出して下さいました。その後宮さんがなんとも申されませんのに御主人は默々として宮さんに手傳つて後始末をして下さいました。『瀨戸の火鉢でないといけませんネヱ』と宮さんが云はれますと、『ウム』と唯ひと言、被仰つて、其夕方はチャンと瀨戸の火鉢を買つて來て下さつたのでした。宮さんは其時程自身の一切に和解した力を感じた事はありませんと書いてゐられました。天地一切のものと理窟なしに和解したとき、默々として一切のものが、自分の思ふまゝに良人でさへも調和して動いてくる、卽ち其處に神の子の實相を顯現するといふ事をハツキリ感じられた事でした。宮さんが若し小さい我を出したら『下の灰をとつてしまつたら燒けるではありませんか』と理くつを云つたかも知れない。もしがまんして云はなかつたらブツ〳〵心で不平を云ひ〳〵心配しながら灰をのけた

か又は主人の言葉に從はずに灰を其のまゝにしたにちがひありません。御主人の無茶とでも和解し物理學を超越しておまかせした結果は、無言でゐても、御主人が、こちらの欲しいと思ふやうに手傳つて下さり、こちらの欲しいと思ふやうに瀨戶の火鉢を買つて來て下さつたのであります。ところが、宮さんが、今度この生長の家本部の家をそのまゝ引繼いで、生長の家阪神支部として下さる問題になると過剩家賃の出所を形の上でハツキリ、『此處に出所がある』と定めて置きたいと思はれるやうになりました結果、過剩家賃の出所如何と云ふ『形』に引つかゝられたのであります。形を問題にしなければ既にその過剩家賃は出ることになつてゐるのでありますが、何處から出るかと云ふ形にひつかゝりますと、出所が無いと『無い』と云ふ事に引つかゝりますし、出所があると又『ある』と云ふことに引つかゝるやうになつたのであります。形を主にすればこのやうに『無ければ無いで引つかゝり有れば有るで引つかゝる』のです。それで阪神誌友會の方で、この家と今ゐられる宮さんの家の家賃の差額を出す事にしたいと云ふ阪神誌友會の意見を宮さんが御主人にお話しになりますと、御主人は『そんなに補助までして貰つて引越さなくとも好い』と唯一言被仰つたのであります。火鉢を燒いた時には『此火鉢を舁いて下さい』と云ふと直ぐ火鉢を舁いて下さつた。『瀨戶の火鉢でないと可けませんねえ』と云

はれると、直ぐその夕方瀬戸の火鉢を買つて來て下さつた。我を出さずに、天地のお働きに全てを打ちまかせた狀態で望んだ時には此のやうに何事も自然に整うたのに、今度事物が欲するやうに整はないのは自分が形に捉はれ、我で望んでゐるところがあるからであるから、もう形に捉はれずに自然にすべての事物が動いて、此の家が借りられるやうになるまでは、もう何事も神樣の御手にまかせて、我の心では望まない事にしたから、この事を皆樣の前で懺悔して下さいと云ふやうな反省の深い手紙の文面でございましたから其の意味を、以上御取次させて頂いた譯であります。

木野內――もう少し今日は皆さんの前で私の體驗談をお談しさせて頂きませう。私は坐つて談すよりも起つて談す方が談しよいですから起つて談させて頂きます。私は『生長の家』家族にして頂きますまでは、高血壓症で苦しみました。仕事をしてゐましても頭部に充血して來ましてフーとなつて倒れたことがよくあるのです。醫者に診て貰ふと血壓が二百もある、放つて置いたら何時死ぬか知れぬと云ふのです。今ではこんな元氣な顏をしてゐますが、その頃は恐怖心で蒼ぶくれのやうな顏をしてゐた。誰でも知つてゐる人は『木野內の女房は可哀相なもんぢや可哀相なもんぢや』と云つてゐました。何故可哀相なのかと云ふと『彼女の良人は長生きしない

から、近いうちに寡婦になるに極つとるから、可哀相なもんぢや』と云ふのです。そんな具合で私は仕事をしてゐてもフーとなつて倒れさうになる。役所で執務中も、氷の塊りをタオルで斯う頭にくゝりつけて、溶けて來る水を下へ落ちないやうに鉢卷をして仕事をしたものです。私の頭は、これ御覧なさい、斯う云ふ風に禿げとるぢやらうが、これが皆この氷で無理に冷やしたお蔭である。さう云ふやうに氷で冷やしてゐても時々頭がフーと來たのです。心臟が悪くて少し坂道をあがると直ぐ胸がどき／＼と來る。官用で上京せんならんやうな時には、東海道の汽車を三度位に區切つて間で泊つて行かなければならぬやうな有様でした。それで御存知かしらぬが高血壓を治すと稱する藥にアニマザと云ふ藥がある。あれを始終用ひてゐたが、『生命の實相』を讀んだ結果、藥を用ひずに却つて丈夫になりました。實は女房が『念のために』と云つてアニマザを旅行鞄の中へ入れて呉れましたが、それは少しも服用しないのです。昨夜も、今日の座談會には是非列席したいと思ひまして、汽車を無理しまして、やつとこの座談會に少時間でも顔を出すことが出來るやうになりましたが、そのため昨夜は全然寢ないでブツ通しです。併しこのやうに少しも疲れてゐないし、元氣に少しも變りはないのです。今はこんなに丈夫になりましたが、『生長の家』の家族になりますまでは、先刻申しました通り仕事をして

ゐても、旅行してゐても、何時フーと來て人事不省で倒れて其の儘お陀佛になつて了ふか判らない。それで私は始終ネオヒポトニンと云ふ注射藥を携帶してゐて、頭がフーと來さうになるとその藥を便所へ往つて隱れて注射するのでした。この藥は毒藥でして、太腿の所へ注射するのです。いつでしたか官用で出張を命ぜられて或る停車場で待つてゐますと、例のやうに頭がフーとして來たのです。眩暈がして其の儘そこへ昏倒しさうになる。もう便所へ行つてゐるやうな悠暢な暇などはないのです。仕方がないから『ヤツてやれえ』と思ひまして衆人環視の中で、私はズボンの釦を外し始めました。眼の前に若い娘や紳士淑女がたも交つて列んでゐる。私がズボンの釦を外しまして太腿をまくり出すものですから、皆は一體何をするんだらうと視てゐるのです。仕方がないプスーツと太腿の皮膚を刺して注射をやりました。斯う云ふ危險な生活をしてゐました私ですから、人が『木野内の女房は可哀相なもんぢや今に寡婦になる』と噂されてゐたのも無理はないのです。ところが今ではさう云ふ事は全然なくなつた。毎月必ず十圓位は要りよつた藥代が少しも要らなくなつて、おまけに其上このやうに健康になつたのです。先日も大阪の方面委員諸君を松山市に招待したことがあります。私が社會課にゐる關係上、その方面委員たちの接待役に當りまして、松山城へ案內しました。生長の家を知るまでの

私でしたら、一寸坂道を登りましても早や心臓が破裂しさうにドキ〳〵して來る筈ですのに、その時には私が先頭に立つて、誰よりも先頭に松山城を登つて行きました。そこで私は大阪の方面委員の諸君に對して『生長の家』の德を讃へて、病ひと云ふものは心から起るものである。心が變れば病氣が治る、此處に『生長の家』で發行してゐる『生命の實相』と云ふ本がある。この本の中に書いてあるが、大阪天王寺區の南日東町に何とか云ふ方面委員がある。本人の希望で其の姓名は隱してありますが、話をして病氣を治してゐる人がある。話をしたらそれだけで病氣が治ると云ふと不思議に思ふ人があるかも知れぬが、病氣は氣を病むと書いてある通り病氣と云ふものは心で起るものである。だから話を聞くだけでも心が健康になれば病氣が治る。わしなどは此の『生命の實相』と云ふ本を讀むだけで心が健康になつただけで病氣が治つたのだと色々と說いて聞かしましたら、その、病人を訪ねて話だけで病を治す大阪の方面委員と云ふのは誰それぢやと、さすがに大阪の方面委員同士であるから知つてをりましたわい。聞けば其の方面委員は府から既に表彰されてゐるとのことでした。私は縣の社會課につとめてをりますから、宗教方面の集りに對して思想上の講話をすることがある。さう云ふ講話には佛教諸宗の人もありキリスト教の人もあり、神道の諸派の人もありますので、片寄つて佛教だけの

話をしたり、キリスト教だけの話をする譯には行かない、色々の宗教と和解して思想を善導する話をしなくてはならない。それには此の『生長の家』の話は丁度よい。集つてくれる皆なの宗教が喜んで呉れるのです。思想善導と申しますと、私は職業柄各府縣の社會課の人たちと會ふ機會が多いのですが、さう云ふ人たちに私は常に申すのです。思想善導にはどうしても日本の國體觀念をハッキリ持たせて置くほかない。國體觀念をハッキリ持たせるに日本は神國ぢやから神の實在を知らせなければならぬ。それには此の生長の家は大變都合がよいと申すのでごさいます。それから最後にもう一つ病氣を治した話をして私の此の話を終ることに致しませう。此の病人と云ふのは名前は申しませぬが、現在内閣に時めいてゐる某大臣と同期同窓の人ですが、今は非職になつてゐますが相當えらいところまで往つた人の奥さんである。この人のお腹に塊りが出來て病氣で苦しんでゐると云ふのを聞きましたから、早速訪問して『生長の家』の話をし、手をじつとその腹の塊の上に當てゝ思念してあげました。『生命の實相』には十分間程、思念すれば好いと書いてあるやうに思ひましたが、私は新米ですからその二倍の二十分間位やればきくぢやらうと思ひまして、二十分間思念してやりまして『どうです、治つたでせう』と申しますと、『殆どスッカリ治りました。併しかすかに痛みの痕跡が殘つてゐるやうな氣が

する』と其の奥さんは云ふのです。そこで私は申しました。『そのかすかな痛みは私の責任でない。それは貴方の責任である。私は思念によつて貴方の病氣を治して了つた。もう既に貴方の病氣は治つてゐるのです。もう既に貴方の病氣は治つてゐるのにかすかに痛いと云ふのは、それは今迄の習慣で貴方が痛い筈ぢやと思つてゐるから痛いのであつて、病氣はもう治つてゐるんですよ』と云うて聞かせて歸りましたが、翌朝話を承りますとそのかすかな痛みもなくなつてゐたと云ふことです。この奥さんは近頃大變『生長の家』に熱心になられまして、神想觀中に生長の家の神様のお姿も拜したと云ふことであります。私の話はこれで終ることに致します。

第八章　天地一切と和合する生活

内容――昭和九年七月十五日、生長の家神戸支部に於ける誌友會に於ける座談のうち、自分のものと云ふ考へを去り、我執を捨て、自分尺度を捨て、天地一切のものと和合し、既に調和せる一切のもの、實相を觀ずるとき、人生百般の不幸、家庭苦、病苦その他一切の惱苦が霜露の日光の前に消えるやうに消散する眞理を語られたるものを纂む。

谷口――私の講演が濟みましたから、石橋さん其の後の御經過を報告して下さい。

石橋――實は唯今、谷口先生が御紹介下さいましたやうに、先月十七日の第一回神戸誌友會で、虎の子の二圓を全部献げまして『生長の家』の家族に仲間入りさせて頂きますと五日目の二十二日には大學目藥の標語に當選致しまして五十圓の金が思はぬ所から入つて來たのであります。この五十圓は神樣からの授かり物であるから、私の勝手に使つてはならない、谷口先生の御指圖に從つて、諸方に今迄からある借金を支拂ふことに致しました。それで早速或る一軒の家へ借金拂ひにお金を持參致しました。中々今頃借金を拂つて呉れる筈がないと思つてゐた私が、自發的にお金を持つて往つたものですから大變な喜んで呉れやうです。その喜んでくれる有樣

を見ますと、私は借金を拂ふと云ふことは、拂うて貰ふ當人よりも、拂ふ此の自分の方が嬉しいものであると云ふことを體驗しました。もう私は嬉しくつてたまらなくなつて來たのです。さうなつて來ますと自分のうちに隱れてゐた佛性があらはれて來たと申しますか、何でも彼でも人を救けたうて堪らないやうな氣になつて來るのです。私は其席で、其人の知人が胃潰瘍やら、心臟病やら、痔疾やら色々の病氣を併發して或る病院に入院してもう命旦夕に迫つてゐる人があると云ふ事をきゝましたから、是非この病人を救けたいと思ひまして、その病院の名前や所や、病人の名前などを詳しくきゝまして手帳に控へ始めたものですから、其人が云ふのに、お前、その病人のところへ往つて鍼など勸めようと思つてゐるのかも知れぬが、往つたら可かんぞと云ふのです。何故、可かんかと云ふと迚も重態になつてゐるので側で話をしてもならない位だのに先日祈禱師がやつて來て高聲に祝詞などをあげて祈禱をしたので餘計容態が惡化したと云つて醫者から小言が出た位であるから、君が往つて鍼でも勸めようものなら大變だと云ふのです。

忌部——祈禱したゞけではない、腹部の按擦などもしたので苦情が出たんだつたと云ふぢやないか。

石橋――往つて惡いと云ふのなら別に行かうとは思ひませんがこれは一寸參考に病院の名と病人の名を伺つたまでゞすと申しまして歸りましたが、その名前によつて其の晩神想觀中その病人に對して思念を送つてあげました。二三日してどうしても其の病人を救けたい。私はまだその病人の顏も見たこともない見ず知らずの間柄で、その病人の方からは私の名前も知らないのでありますから、私が訪ねて往つても面會謝絶を食ふかも知れないのですけれども、私が救はれたのであるから、何としてもその病人を助けたい氣がしてなりませんので、生長の家神戸支部の山下さん宅へ參りまして小册子一揃ひ買ひに參りましたが、生憎六册しかなかつたので、その六册を買ひまして、面會謝絶を食つたら此の小册子を渡して來るだけでも好い。本人が讀めないほどに重態なら、附添の人に側について靜かに默讀して貰ふだけでも好いと思つて其の病院を訪れて病人の名前を申しますと、好い具合に病室へ通れと云つてくれたのです。取次の者はその病人と私とは知人の間柄だと思つてゐるのです。一寸私は躊躇致しました。通つて見ても向ふも此方の顏を知らないし、此方も向ふの顏を知らないのです。その時私は思ひました。肉體は知らなくとも人間は神の子だから互ひに兄弟であるから思切つて會つてやれ、斯う思ひまして病室へ這入つて行きまして來意を述べ私が救はれたのだから貴方も救けたいと思つて來

たと話しますと、先方の病人は、話に聞いたよりも餘程容態が良いのです。私が此の病人の話を聞いて、是非とも此の病人を救けたいと切に思つた其日から、念の感應と申しますものか、今迄どうも難かしい狀態だつた此の病人が容態が急によくなつたのださうです。生長の家のパンフレツトを渡しましたら、自分でそれを讀むだけの元氣がもう出來てゐるので、熱心に讀んで益々速かに恢復されました。其後も別の生長の家パンフレツトを買うて持つて往つてあげましたら『もうお蔭さまで明日は退院するやうになつた』と云はれまして、其の時始めてその方の住所を伺つたやうな譯でした。斯う云ふやうに一生懸命に他を救けたい助けたいで働いてゐるときが一等私の樂しみになりました。これも生長の家のお蔭であります。それからもう一つ會計報告でありますが、あの五十圓の中から一ケ月分の家賃を封筒に入れまして、管理人が來ましたら渡さうと思つて待つてゐましたら、丁度管理人が私の家の前を通るのです。『××さん、一寸』と私は管理人を呼び止めますと、管理人はちらと私の方を向いて『今日は、ちよつと勘忍してくれ』と云つて、小走りに忙がしさうに逃げて行くのです。その翌日も管理人が私の家の前を通りますから『ちよいと〳〵』とまた呼び止めますと、今度も昨日のやうに『今日は勘忍して呉れ！』と云つて逃げて行くのです。妙なものですねえ。先日までは家の管理人が『家

賃を拂へ家賃を拂へ』と請求すると、私の方が『今日は勘忍してくれ』と管理人を逃げるやうに逃げるやうにしてゐたのです。ところが、今では私の方から『家賃を拂うてやらう』と云ふと、管理人の方から『今日は勘忍してくれ』と云ふやうになつたのです。變な具合になつたもんだなア、神樣を信ずるとこんなにも變つて了ふ。難有いもんだなアと思ひまして、その翌日また管理人が家の前を通る時に『ちよいと〳〵』と呼びますと、今度は『一體こないだからわしを呼んでばかりゐるが何用ぢや』と管理人が這入つてまゐりました。『何用ぢやではない。こないだから家賃を拂はう、拂はうと思つて斯うして狀袋へ入れて呼んどるのに、何故はいつて吳れんのや？』『さうか、まだ月末にならんから、わしは、錢の患者を世話せいと請求されるかと思つて、さう請求されては敵はんと思つて逃げとつたのや』と云ふ答へです。前には向ふが請求するので此方が逃げとつたのが、今度は此方が請求するので向ふが逃げるやうになつたのです。神樣の力で位置が顚倒して了つたのです。今迄鬼のやうだと思つてゐた管理人が深切な大の仲好しになつて了つたのです。

斯んな譯で、生活は極樂のやうになる。患者の方もズン〳〵來て下さいますので喜んでゐるのであります。今迄は、一人でも患者があれば、どうかして、この患者を繫ぎ止めて置いて十錢

でも餘計儲かるやうにしたいと思つてゐましたから、そのさもしい根性が言動にもあらはれると見えまして、患者が來ても却々それが續かなかつたのであります。ところが、此頃は金を儲けねばならぬと考へたことはない、どうぞして此の患者を治してあげたい。それも肉體だけではない、心も救つてあげたいと思ふものですから、次へ次へと患者が來て下さるのであります。その代りまた滑稽なこともあります。先日も母親が一人の子供を連れて來まして『此處の灸をして貰へば、寢小便がよく治ると云ふことですから連れて來ました。この子は夜間常に寢小便をはづしますので私は困つてゐるのです。寢小便によくきく灸を据ゑてやつて下さい』と云ふのです。それで私が型の通り灸點をおろしまして小さな灸を据ゑようと致しますと、その母親が『先生、そんな小さな灸で効きますか。この子は却々言ふことをきかんのですから、よく効くやうに大きな灸を据ゑてやつて下さい』と云ふのです。『さうか、大きなよく効く灸が欲しいのですか。そんなら好い灸がある。それはカンセツ灸と云うてそれは〱よく効く灸ぢや、少し熱いがそれでもかまはんか』と申しますと『そのカンセツ灸と云ふ熱い灸を据ゑて下さい』と答へるのです。『さうか、そんならいまカンセツ灸を据ゑてあげるから、貴女着物を脱いで背中を出しなさい』と申しますと、母親は變な顏をして『寢小便をするのは、私ぢやないのです。

此の子が寢小便をするので親の私が困つてゐるのです。いくら氣を付けて寢小便をするなと云つても言ふことをきかないから、よくきくやうに熱い奴をこの子供に据ゑてやつて下さい』と云ふのです。『貴女、この子は本當の子か』と私は申しました。『本當の子なら、私は云ひ分がある。出來るだけ小さい、熱くない灸を据ゑてやつて下さいと云ふのが、本當の親の慈悲と云ふものぢや。それに貴女には本當の親の慈悲と云ふものがない。貴女に子を思ふ本當の親の慈悲と云ふものがなくて、子供はどんな熱い目をしても、親さへ樂であれば好いと云ふやうな冷たい心を有つてゐるから、その冷たい心の反映で子供のお腹が冷えて寢小便をするのぢや、親の心が温くなつたら子供のお腹が温もつて暖うなるから寢小便をしなくなる。だから、先づ貴女の心を温うしてあげるために此の間接灸と云ふのが一番よう効く。子供の病氣は親の心の病氣。子供自身に据ゑるのは直接灸と云ふので、親に据ゑて間接に効かすのは間接灸と云ふ。直接灸は子供に据ゑるから熱くないやうに小さいのを据ゑるが、間接灸は親に据ゑるから大きいのを据ゑる。これが鍼灸の極意ぢや。間接灸がよろしいか直接灸がよろしいか』と申しますと『先生それでは直接灸でよろしい』と本性をあらはすのです。そんな話をしてゐますと、子供が親を悪く思つたり輕蔑したりすると可けませんと思ひますから、子供に向つて『今のは冗談ですよ。

お母さんを吃驚さしてあげたんですよ。お母さんは大變貴方を可愛がつてゐるんですから、温順しくして暫く辛抱しなさいよ。この灸は、小さくて熱くないけど、非常によくきく灸だからこれを据ゑると一遍にお腹が温まつて寢小便しなくなる。若し小便がしたくなれば自然に眼があいて便所へ往つてする』と暗示して置いて灸を据ゑてやりました。それは一遍に子供に効いたか、親に効き過ぎたのか、それ一度で來なくなりました。(一同笑ふ)

病氣の話は他のことばかり話しまして、自分のことは經濟上の話ばかり致しまして、病氣の話は致しませんでしたが、實は今迄は經濟が行詰つてゐまして、經濟の救はれる方が大變で、病氣の事など話す餘裕がなかつたのでございます。併し實は病氣の方でもお蔭を頂いてゐるのであります。先日私が外出から歸つてくると、娘が熱を出して苦しくて仕方がないと云つて寢てゐるのです。一寸足首をつかまへて見まして『何この脈なら大丈夫だから直ぐ治る』と申しました。『お父さんは私を馬みたいに脚を持つて脈を見るから、そんなことでは賴りないから、手を持つて見てくれ、大變熱があるやうだから』と云ふのです。『わしのやうになると手を持つても、脚を持つても、どの位の病氣かと云ふことは判る』と云ひながら手を持つて見ると、手が熱い、脈が激しく打つてゐるのです。『何、そんな大した熱でもない、脈も好い脈だ』と私は落

付いたものです。以前の私なら、そら熱さました、そら濕布だと大騷ぎをする處なんですけれども、生長の家の敎へを受けてからの私ですから、落付いたものです。ところが生憎職業柄そこに檢温器があつたので、娘が手を伸ばしてそれを腋の下へ挿んでしまつたのです。檢温した結果娘は『三十九度三分ある。大變な熱だ』と云ふのです。『いや、この檢温器は狂つてゐるんだよ。新しいのを買はうと思つてゐるんだけれど。何、熱は高いほど早く治るのだ。』と申しまして、靜かに娘に手を當てゝ神想觀を致しました。すると暫くのうちにスヤ〳〵と眠つて了つたのです。それから二時間ほどして體に觸れて見ますと、もう熱がさめてしまつて平熱になつてゐるのです。斯うして他人治療上に神想觀の功德を體驗致しまして大變難有く思つたのであります。

それから最後に自分の病氣ですが、自分は以前から喘息の持病があるのです。朝目がさめると一時間位は息ぐるしくて動くことが出來ないので、一時間位すると徐々にをさまつて來て起きるのです。その位ですから、坂を上つたり、バケツに水を入れて提げると息切れがして喘息のやうになる。ところが『生長の家』の家族にして頂いてから、それがスツカリ止まつてしまつたのです。先日、私の家の前を三間ばかり登つたところでサイダーを一杯積んだリヤカーが小

僧の力だけで登れなくなつて止つてしまつたのです。前の私なら、喘息の持病があつてバケツに一杯の水さへ提げたことのない私ですからそんな場合に其のリヤカーを押してやる氣持になどならないですが、『生長の家』の家族にならせて頂きました私ですから、喘息の持病があると云ふことも忘れてしまつて、そのリヤカーを後押しをしてやる氣持になつたのです。御存知の通り、私の家は夢野橋の袂にあつて、そこから突當りの熊野神社まで五町ほどは大分嶮しい坂になつてゐる。三丁ほど登ると左側に市場がある。サイダーを運ぶのだから多分その市場のところまで三丁程のところを後押しすれば好いと云ふ氣持が私の心の中にあつたのですが、その市場のところまで往つてもそのリヤカーは止らない。力を弛めるとリヤカーが後へ戻して來るので、休む暇がない。たうとう突當りの熊野神社まで五町の急坂を私はリヤカーの後押しをして登つて了つたのです。それで了ひかと思ふとまだ仕舞ひでない、右へ廻ると下り坂だから押さなくとも好いと思つてゐますと、意地悪く左へ廻る。左はまた坂道になつてゐるのです。その坂道を二丁ばかり、合計七丁ほどの坂道を汗だくになつて後押しして行つたのです。するとやつと平地に來ました。『小父さん難有う。一寸休まう』と小僧さんは云ふのです。一緒に休んでゐますと、『小父さんは一體どこまで附いて來るのや』と云ふのです。『どこまでゝもこの

先坂がなくなつて、君一人で大丈夫と云ふ所まで附いて行つて後押してやらうと思うとるんぢや』と答へますと、『さうか。うちの店は、もうつひ其處や、もうこれから坂道はないから歸つて頂戴』と云ふのです。『さうか、そんなら歸るわ』と私は云つて歸る途すがら考へたことでしたが、今迄バケツ一杯の水を提げても、喘息が起つて苦しくなつて來る自分が、七丁の坂道を一生懸命汗だくになつてリヤカーの後押しをしてやつても少しも喘息の發作が起らないのは何とした難有いことぢやらう。あの小僧さんがリヤカーを後押させて呉れたので私がそんなに健康になつてゐることに氣付かせて頂いた。あの小僧さんは謂はゞ、それを氣付かせて下さるための神の御使ひであると思つて心のうちで手を合はせて其の小僧さんを拜みました。私の今日のお蔭話はこれだけでございます。

谷口――田村さん、貴方の近頃の御體驗談を皆樣の功徳のためにお話し下さいませ。

田村夫人――私の子供は頭に白なますが出來まして、その白なますから白毛が生えてゐるのでございました。親類からの勸めもありますので、生長の家一筋に行かない。醫者にも通ひながら手をあてゝ神想觀も致しましたが、兩々相俟つて大分その白なますが小さくなつて來たのでございますが、まだ一、二箇所かたまつて毛の白い所があるのでございました。ところが子供が

私の側にゐますときには、どうしても感覺で見えるものは『有る』と思つて心がそれに捉へられますので神想觀をしまして、『神の造り給うたこの世界にそんな白なまずのやうな不調和なものはない』と念じましても、『そんな不調和は無い』と云ふ念が徹底しないのであります。『白なまずは無い』と思つても、眼に見えるから『有る、有る』と思へて、『無い』と云ふ念が徹底しないのであります。ところが最近、親類のものが參りまして、子供を東京へ連れて參りました。その序でに東京の醫者にも診察して貰つたらと云ふので、たゞ一回診せただけで、治療はして貰ひませんでした。それで子供が側にゐないので、感覺で『此處に白なまずが有る』と云ふ觀念に捕へられにくいのを幸ひ、神想觀を致しまして子供の無病の實相を見るやうに致しましたら、今度歸つて來た子供を見ますと、暫くの間に、その白なまずが見違へるやうに小さくなつてゐるのでございます。醫者には診せたゞけで治療は致しませんでしたから、醫療のおかげではありません。今度の體驗で、五官で現象を觀て『病氣がある』と思つてゐたら病氣は却々治らない。現象を五官で見ないで實相を見るやうにすれば病氣が治ると云ふことをしみ〴〵と體驗させて頂きました。

木村夫人 —— 先生に永らく御無沙汰致しました。忙がしいために出られないなどとは口實にも申

されませんので、誠に申譯がないとお詫びするほかはないのでございます。昨日、田村さんが深切に御訪問下さいまして、色々結構なお話を聞かせて頂きましたので、これを機會に今後集りの日には是非寄せて頂きたいと思つてをります。實は神庇は山ほど頂いてをりますので、いつも心では御禮申上げてゐるのでございます。長男が肋膜を惡くしました際一度長男を連れて先生のお宅へお訪ね致しました。先生が長男の胸へ手を翳して下さいますと、長男は其時は息が詰まるやうに苦しかつたと申します。併しそれからメキメキ元氣になりまして、唯今では上の學校へ行く準備として、午前二時三時頃迄も勉强致しますが、すこしも疲れもしなければ病氣にもならなくなりました。あの時先生が被仰つて下さつた『人間は勉强する程達者になる、勉强は人間の藥だ』と云ふ言葉が大變長男の心にひゞいたと見えまして『お母さん、もうそろそろお藥のんでもよろしいか』などと云つて勉强をするのでございます。だから『勉强する』と云ふことゝ『達者になる』と云ふことゝは、あれ以來、私の宅では同意語になつて了つたのです。『もうそろそろお藥お飲みなさいよ、こんなによく効く藥はない』と云つて勉强させるのでございます。斯う云ふ點で非常な神庇を頂きまして難有うございます。また二男が赤痢で心配致しました節は御世話になりまして、たゞ一夜で治して頂きまして難有うございます。

谷口――唯今、木村さんの奥さんが被仰つた御子さんを初めて連れてお越しになつた時に、私が木村さんに話しました話は、矢つ張り肋膜をお患ひになりまして、自分の身體は弱いもの、到底上級の學校へ入學するほどの勉強に耐へないものだと思つてゐられました青年が二度ばかり生長の家へお越しになりまして、人間は無限力、身體の弱るのは其の無限力を自覺しないからである、その無限力を自覺しさへすれば、勉強するほど達者になるものだと云ふ話を其青年にしてあげましたらそれから健康に自信を得て毎日午前三時頃まで勉強しても疲れない、疲れないばかりか、眠らないで勉強するほど體力が增進して肥えて來ましたので、その友人たちが不思議がつて『君の身體は妙な體質だねえ、眠らないで勉強するほど肥えて來る體質だ』と不思議がつたと云ふ實話をしたのでした。この例でもわかる通り、弱い體質とか、強い體質とか云ふけれども、本來そんな一定した體質などと云ふものはないのであつて、心で體質を弱くも強くもするのであります。此の青年は唯今某大學に入學して水泳の選手をして、毎日五千米突もクロールで泳いで競泳の猛練習をしてゐられると云ふことですが、それが往年肋膜で、上級學校への入學試驗に耐へられないと思つてゐた身體で、さう云ふ過激な運動をなすつても何ともなくなつたのであります。

此の青年は、母一人子一人の間柄であつて、お父さんが亡くなつてから、母親が或る學園を經營する努力によつて息子を今日大學に出されるやうになつたのであります。ところがその息子に近頃戀愛關係らしいものが出來たのであります。相手はその母親即ち園長の教へ子であつて現在その學園で園長の片腕をしてゐられるお孃さんなのであります。何となく雙方の素振りでそれが感ぜられる。息子から母へ來る手紙の思想が、そのお孃さんの思想にだん／＼變つてくるのが感じられるのです。母親にして見れば、母一人子一人で今迄築き上げて來た愛情である。息子と云へば、いゝ、自分の息子だと云ふ氣がする。その天にも地にもたつた一人の息子の思想が何とはなしに自分に背いて來たやうであるのです。自分に共鳴するよりも、そのお孃さんに共鳴して來るやうなのです。折に觸れて自分に冷然と反抗したりするお孃さんの態度その儘が近頃の息子からの手紙にあらはれてゐるのです。何故みんながもつと調和してくれないのであらう。息子の戀愛を邪魔しようとする私ではない、私はじつとその正しく育つのを見ようとしてゐたのである。若い者同士が戀愛するのは好い。たゞ調和して二人ながら母親の中へ溶け込んでくれゝば好いと思ふのです。それが二人だけ結びついて、母から離れ去つて了ふのは耐へがたい悲しみだと思はれたのです。生長して母からひとり立ちしようとする息子を見詰めながら

長いあひだ苦しんでゐられました此の母親は、私にその事を打ち明けて、どうしたら此の悩みから救はれるかと云ふことを御相談になつたのです。最初はたゞ『何故その敎へ子であるお孃さんが私に反抗するのでせう』とおたづねになつたのです。『私はそれは貴方が息子を奪はれまいと思ふからです。その心持で、貴方とそのお孃さんとは反撥し合つてゐるのです。』と答へました。すると其の母親は『そんなことはありません。奪はれまいと思つたことはありません。正しい愛ならば育てゝやりたいと思つてゐた位です』とお答へになりました。『併し、矢つ張り貴方に息子を自分の息子としていつまでも自分の手許につなぎとめて置きたい心があるのですよ。いつまでも自分のものとし、自分の思想を思想せしめ、自分の思ふ方向に歩いて欲しいと云ふやうな、矢つ張り奪はれてはならないと云ふやうな氣持が多少はあるのですよ』と私が申しますと、その母親は暫く考へてお出でになりましたが『矢つ張り私の心の底に、息子を私に、私の思想に、私の愛情につなぎ止めて置きたい心があつたのでございます』とシミ〴〵とお泣きになるのでした。

私は申しました。誰でも親は一度は此の悲しみを經過しなければならないのです。蜜蜂の親は子供が成蟲になつたとき、その巣のすべてを子供に與へて、自分はさすらひの旅に旅立つて行

くと云ひます。いつまでも自分のものとして、自分の依りかゝり場所として自分の子供を見ないのです。そして子供の生活を子供自身にまかせて、自分は飄々として立去つて別のところを探して巣を營むのです。折悪しく天候が悪かつたり、風が烈しく吹いたりして、好い巣をかける場所が見付からなかつたにしても息子に讓つた元の巣へは歸らないのです。雨風に激しく打たれのたれ死にして了つてさへも、大人になつた子供の生活は、それ自身を伸びさせるために干渉しないのです。親と云ふものは一度はこの悲しみを嘗めねばならないのです。京都の石川さんの奥さんは唯今では大變深い心境にゐられますが、子供を眞に生かす道は子供を自分のものだと云ふ我執から放してしまふことである。子供を自分の子供だと思はないで、神様の子である。神様の子は神様に委せなければならない。あの大空に凧の糸目を切り放つて、それ自身の道を歩ませるために、自分と云ふものに繋ぎとめてある心の紐をぷつゝり切つて了はうと決心されてからも、あの石川さんでさへも、ともすれば『自分の子供だ』と云ふ『自分』が出て來る。そして、それを自分の子供ではない、神様の子供であると思切るのには半年の間、泣けて泣けて仕方がなかつたさうです。今ではスツカリ、子供の生活が子供自身の手に委ねられてゐるので『お母さんがあんなに信じてゐられるから、悪い事しようにもしられない』と云つて

ゐられるさうです。子供の生活を、神様の御手に、そして子供自身の中に宿る神様の御手に委して了つたときに、その子供は却つて親の手許に歸つてくるのです。大阪の誌友の××さん。この人も深い心境にゐられる方であります。その二男さんが學校を一度縮尻つたら、學友たちが『落第生だ、落第生だ』なんて惡い言葉で云ふものだから、學校が嫌ひになり、人生に前途の希望がなくなつて暗い氣持になり、その暗い氣持をまぎらすために、カフェなどへ繁々と行かれるやうになつた。毎日二十圓三十圓と云ふ金をカフェなどで消費して來て夜の三時頃に歸つて來てはトン〳〵と自分の家の戸を叩くのです。それでも××さんは何とも苦情を云はれない。だまつて自分で戸口へ往つて扉をひらいてあげられる。そして『よう無事で歸つて來たねえ。カフェなどには無頼漢が居ることがあるから、そんなものに引つかゝつて怪我のないやうに注意しなさいよ』と、どこまでも子供の生活を子供自身の管理の手にまかせて、優しく見戍つてゐてあげると云ふやうな狀態が暫く續いてゐましたが、近頃ではその息子さんはカフェにも行かなくなり、朝も殆ど皆と一緒に起きて店を手つだふと云ふ風になられたさうです。自分のものだと思はないで息子自身に宿る神様にまかせて了つたとき、その放したものが自分のところへ歸つて來るのです。繋ぎとめて置いて自分のものとしてゐるのより、放して了つて向ふ

の方から歸つてくるやうにする方がどんなに幸福だか知れませんぜと申しますと、まだ連りに泣いてゐらつしやいましたが『皆な私の心の影でした。よくわかりました、難有うございます。』と御禮を云はれてお歸りになりましたが、それから一週間ほど後にはその母親の心持が變化した影響で息子の心持も變り、その愛人である敎へ子の心持も變り、その敎へ子は反抗しなくなり、息子からは大變理解のある手紙が來ましたと云つて、その母親の方が大變喜ばれてお禮に來られました。要するに何でも子供にせよ、良人にせよ、妻にせよ、自分のものだと云ふ縛り付けの感じがあるあひだは却つて自分から離れて行かうとし、自分のものだと云ふ縛りつけの感じがなくなつたとき却つて自分のところへ歸つてくるものであります。

それから、これは別の話ですが、最近『生長の家』誌友で實相を觀ずることによつて『家ダニ』を退治た方が二人あります。ダニでさへも心の力で動くのですから自分の息子が心の力で自分についたり離れたりする事は不思議なことではないのであります。その一人は大阪の方で汽車會社へつとめてゐられる方であります。最近御主人が一ケ月に八回大喀血をせられましたが、病氣でありながら病氣でない實相を見て、その翌日は平然と起きてゐられるのです。生長の家へ來られた時は第三回目の喀血後だつたのですが、夫婦揃うて來られて神想觀を實修してお歸

りになつたのです。それから後、自宅の御風呂へ入つて上らうと思つてゐられると今度は最大の喀血が來たのです。ガバツ〳〵と大量の血が咽喉から噴出して來た。出ると口を水で漱ぐ。また出る。浴室一面唐紅になつたさうです。『出るだけ出よ。自分の生命は血でない』と云ふ氣持がして、血を吐いてゐる自分を平然と上から眺めてゐる自分を見出したさうです。良人の背中を流すために浴室へ入つてをられた奥さんは良人の喀血するのを見てゐたがいつまで經つても血がとまらない。人間として施すべはない。丁度裸であつたから、湯槽の中へ入つて瞑目合掌して靜かに神想觀をはじめられたのです。すると不思議やピタリとその大喀血が止つて了つたさうです。斯う云ふ激しい體驗を經ながらもその人の病氣はズン〳〵よくなつて、缺勤屆の關係上會社の社醫に見てお貰ひになりますと、約一ケ月後の今日、殆ど治つて了つてゐて、こゝ一週間程、體温表をとつて見て熱が出てゐなければもう出勤しても差支へないと醫者の方から自發的に云つてくれるやうになつたさうです。此の人が先日住居を移轉されたのですが、引越す先の家に家ダニがゐると云ふ噂であるから、本當かどうか、本當にゐるならば殺蟲消毒して入りたいからと家主に聞合はせになつたのでありますが、どうも本當ともウソとも返事が得られない儘に家の都合で引越して了はれたのであります。ところが矢張り本當に家ダニ

がゐた。御主人は喀血して血が減つてゐる加減か家ダニが遠慮して血を吸はないが、よく肥えてゐられる奥樣や子供の血を旺んに吸ふのです。家ダニが血を吸うた痕は南京蟲の食ひ痕のやうに腫上つて痒くて仕方がない。それでフォルマリン瓦斯の密封消毒を二回もせられたけれども、それでも依然として家ダニが絶えないのであります。その時に聖典『久遠の實在』に出てゐた林博三さんの神想觀で赤ン坊を南京蟲に食はせなかつた話を思出されたのであります。南京蟲が逃げ出す位なら家ダニも逃げ出すに違ひないと思つて『この家は人間の住む家であつて家ダニの住む家ではない。全ては調和して家ダニは家ダニの住む所へ去つて了ふ』と念じて奥さんが神想觀をされたのであります。すると其翌日にはスツカリ家ダニがゐなくなつて了つたさうであります。斯う云ふことはどうも一つの實例だけでは偶然の出來事だと思はれるかも知れませんが、この話を聞いた翌日、唯今白なますのお話をなすつた田村さんが私のところへお越しになつてやはり家ダニ退治のお話をして下さつた。何でも田村さん宅から三軒目の煙草屋に家ダニが澤山ゐたのを燻燒消毒か何かした。すると家ダニが逃げて來たのか、それとも鼠にでも搬ばれて來たのか、田村さん宅にも家ダニが出て來るやうになつたのです。此の田村さんも矢張り『久遠の實在』にある南京蟲の話を思出されたのださうであります。それで早速神想

觀をして家ダニのゐない人間の住む調和した家の實相を想ひ觀ぜられましたら、その翌日から、田村さんとこには家ダニがゐなくなつたさうであります。

小永井――此席にも大分、私の病院へ來られて顏見知の人がありますが、私は神戶衞生病院に勤めてゐる醫者であります。此の衞生病院は主として藥劑を用ひないで水治療法により自然療能を喚起して病氣を治すのでありますから、生長の家の主張とあまり衝突しないのであります。先月、妙な御緣で三澤さんから生長の家の話を承りまして第一回の神戶誌友會によせて頂きまして、色々御話を承りまして感心致しまして今日は二回目に參會させて頂いた譯であります。實は私は『病氣は無い』と云つて神經衰弱の患者を治した體驗がありますので、生長の家のお話しに早速共鳴することが出來た譯であります。その患者は態々東京から私の衞生病院を訪ねて來たのでありましたが、診察して見まして、私は『これは治らん』と申しました。患者は態々東京から治して貰はうと思つて訪ねて來たのですがこれは治らんと云はれるものですから變な顏をしてゐるのです。そこで私は申しました。『君はこれを病氣であると思つてゐるから治して欲しいと考へてゐるが、病氣なら治るが、私が治らんと云ふのは君は病氣でないからだ。たゞ病氣だ、病氣だと自分で考へてゐるから、病氣のやうな氣になつてくるのだから、病

氣でないと思つた時に、もう君の病氣は治つて了つてゐるのだ。君は病氣ではないんだから、もう水治療法を受ける必要もないんだが、折角來たんだから五日間治療してあげよう、本來無い病氣だからこれで心氣一轉して治つて了ふ』斯う云つて五日間治療してあげますと本當に治つて了ひました。

斯う云ふ風にして諸方の醫師に通つても治らない神經衰弱がたゞ五日間、私の言つた言葉の働きで治つて了つたのです。誠に『生長の家』の云はれる通り言葉の力で病氣が實際治せることを體驗したのであります。それで退院の許可を出すことにしますと、病院の會計の方で苦情を云うて來ました。『五日間位で退院させてそれで好いのか』と云ふのです。『治つたら退院させるほかはない』と申しましたら、『五日間位では本當に治つたか、治らんかは判らん』と云ふのです。會計の方では長く入院してゐてくれる方が好いのですから無理もないのです。幾分讓り合ひまして十日間入院して貰ひまして、それで其人は完全に治つて歸京されました。さう云ふ風に神經衰弱患者を病氣は無いと云ふ言葉によつて治した體驗が二三あるものですから、三澤さんから生長の家の話を聞きました時、すぐ共鳴致しました。が、今迄私は『病氣は無い』と云ふ信念と言葉で治し得るのは神經性の病氣ばかりだと考へてゐたのでありますが、『生長の

家』では機質的な具體的な病氣でも『病氣は無い』と云ふ信念と言葉とで治してゐられる話を澤山承りまして、やがては私も皆樣のやうにどんな種類の病氣でも『病氣は無い』と云ふ信念と言葉とで治し得るやうになれることだと思つてゐるのであります。

石橋――先刻申しました通り私の持病の喘息は、私が信仰に入りまして心が變ると共に治つて了つたのでありますが、或る日其の喘息が私の心の働きで再發したのであります。その話を申しませう。私の娘は或るミシン裁縫所に每日通つて仕事をしてゐるのでありますが、その裁縫所の奧さんが姙娠して、產婆の間違ひかも知れませんけれども、十二ケ月目になつても生れない。やつと此間產氣づいて來たのでお祝を持つて行かねばならないから、祝ひ物を買ふためにお金を吳れと云つて娘が歸つて來たのです。十二ケ月もお腹の中にゐたのですから、果して健全に產れるかどうか分らない、それに生れる子供が男か女かも知れないのだから、祝ひ物をするにも男の物を買つたら好いか、女の物を買つたら好いか判らないから、明日生れて、男か女か判つてから買つたら好いぢやないかと私は娘に申したのです。すると娘は『一緒に祝物を買ひに行きませうと云つてお友達が、もうあそこまで來て待つてゐるから今更止める譯には行きません』と云ふのです。『さうか、それぢや仕方がない。』と云つて私は娘に金をやりました。娘は

ベビー服とか云ふものを買つて來てゐました。これなら成る程男女どちらでも嬰兒には共通に着せられさうなものなのです。どうしたものか、その日から私は急にまた喘息が起つて來たのです。朝だけではない、晝も夜も引つ切りなしにゼイ〳〵云つてゐて苦しくて仕方がないのです。これはどう云ふ自分の心の間違ひから起つて來たものであらうか、どこが私の心が中心を外れてゐたのであらうかと色々と反省致しましたが、どうも其の原因が判らないのです。翌日娘が仕事から歸つて來ますと、仕事先の奥さんは昨晩お產をしたと云ふのです。『どうぢや、安產したか』と私は云つて『死んで生れとらなんだか』と言葉をつがうとしてハツと私は氣がついたのです。何に氣がついたかと申しますと、娘は、生れる兒が男か女か判らないうちに祝物を買ふと云つて主張しまして、私が男か女か判つてから買へと云ふのをきゝませんでした時に『祝物は買つたが、死んで生れたとしたら好い氣味だなア』とフト思つたのです。何故そんなことを思つたかと云ふと、十二ケ月も胎内にゐたのでありますから、難產に違ひないから死產するとも限らない、だから自分の意見に反いてそんなに生れぬ先から慌てゝ祝物を買つて若し死產したら好い氣味だなアと思つたのです。その考へはホンの空想のやうに私の頭を掠めたのでありまして、その儘自分の潛在意識の底深く押込まれて忘れられてゐたのです。それを

今『さうぢや、安産したか。死んで生れとらなんだか』と思はず云ひさうになつて、ハツと私は氣がついたのです。あの時私は『お前の云ふやうに祝ひ物を買つて置いて、死んで生れたら好い氣味だナ』と思つたことに氣がついたのです。『あゝ私の病氣の原因は判つた。これが惡かつたんだなア。當り前なら自分の娘が世話になつてゐる家の奥さんがお産をするのだから、たとひ難産になるところでも安産しますやうにと祈らねばならんところなのですのに、アベコベに死んで生れたら好い氣味だ』と云ふやうな忘恩的な人を呪ふ心を起した。この忘恩的な呪ふ心が惡かつたと氣がついたのです。それで早速神様どうぞ赦して下さいと心の中で一心に神様にあやまりました。さうしたら其の激しい喘息がケロリとまるで憑物でも落ちたやうにスーツと靜まつて了ひまして、それ以來今日まで喘息が起らなくなりましたのです。

谷口――喘息と云ふものは醫學的には氣管枝の痙攣であるとか何とか申しますが、肉體を心の影として見るときは、それはイキが激しく擦れ合ふ病氣で、スレ合ふ心、卽ち人と爭ふ心、人を呪ふ心の象徵としてあらはれて來たものでありますから、その擦れ合ふ心、爭ふ心、呪ふ心を捨て去つたら、その病氣が治るのです。喘息に限らず、大抵の病氣は此の爭ふ心、擦れ合ふ心呪ふ心で起つてゐるのです。此の爭ふ心、擦れ合ふ心、呪ふ心がなくなれば大抵の病氣は治つ

て了ふのです。ところが同じ爭ふ心を持つてゐても或る人は病氣に罹らない、あんな惡い人が病氣に罹らないと云ふやうな人もある。或る人は肺病になる、或る人は神經衰弱になる、或る人は喘息になる、――斯う云ふやうに色々と、其の顯れて來る形態が變つて來るのはどう云ふ譯かと申しますと、『爭ひ』なら爭ひの念だけでは、まだ病氣が具象化して來ないのです。爭うても病氣にならぬと云ふ觀念の強いものは病氣にならない。だから爭鬪心の強い者でも病氣にならぬ人が澤山ある。又、病氣になつてゐても『病氣は本來無い』と云ふ念が強く作用すれば爭ひ心を持つてゐる儘でその病氣が治つて了ふ。聖典を讀んで『病氣本來無い』と悟つて早くも病氣が治るのはそれである。却つて其人が信仰のある人で、惡い心を持つたらすぐ神樣からお注意を頂いて病氣になるなどゝ信じてゐる人は、その信念が作用して惡い心を起したらすぐ病氣があらはれて來たりするものです。聖フランシスのやうな人はそんな人である、神信心をしてゐるのにあの人は始終病氣をしてゐると云ふやうな人は此の種の人です。斯う云ふ人は一擧手一投足毎に『あゝまた今度も失敗した。御注意を頂いて病氣になるだらう』と始終思ふ。それで却つて病氣になるのです。それで、さう云ふ場合、どう云ふ病氣になるかと云ふことは本人の今迄の念の惰力によるのであつて、ある人は石橋さんのやうに喘息を起す。或る人は肺

病になる、或人は皮膚病になると云ふやうになるのです。つまり病氣と云ふものは病氣ありと云ふ念と、善くない心を起した惡い念との化合で起るのです。それで本人の有つ念の種類で病氣の形が變つて來るのです。これが『病氣は念の具象化だ』と云ふことです。『病氣は念の具象化』であると云ふことも、これを知つても此の『病氣は念の具象化』と云ふことに捉はれて了つては却つて病氣や不幸を起す原因になる。佛教で云へばつまり業障海に沈淪することになる。佛教で云ふ業と云ふのは宿念の運動慣性即ち今迄に積まれた念の具象化せんとする惰力である。業障海に沈淪すると云ふのは、此の念の惰力に虜にせられて了ふことである。それで『どう云ふ念はどう云ふ病氣を起す』と云ふやうなことをあまり知り過ぎ、あゝ今もこんな念を起したから病氣になるだらうと、始終ハラ〳〵してゐるやうになつて了ふと、却つて業に捉はれ業障海に沈淪して了ふことになるのです。此の業と云ふものは善業は實相の延長であるが、惡業は有るやうに見えても假存在であります。それは暗みたいなものであつて、暗はあるやうに見えても無い。暗を光の前にほり出して吟味すれば消えて了ふ。それと同じく惡業もあるやうに見えても神の創造でないから無い――非存在であるから、神の前へ放り出したら消えて了ふ。だから神樣に懺悔をする――私はこんな惡念を起しましてどうも濟みませんでした。

赦して下さい――と懺悔をする――この懺悔をすると云ふことは、神樣の前に罪を抛り出すと云ふことである、光の前に暗を抛り出したことになる、實在の前に非實在をほり出したことになる。それで罪と云ふものは神樣の前へほり出したら消えて了ふ。石橋さんが『死んで生れたら好い氣味だなア』と云ふ惡念を起しても、神樣即ち『實相の光』の前へその罪を出して懺悔したら、その罪は消えて了つた。それで忽ち石橋さんの喘息が治つたのです。此のやうに神樣の前へ罪をほり出したら罪が消えるのは本來、罪が非實在だからです。『南無阿彌陀佛、々々々々々々』と稱へて總ての罪を阿彌陀佛、即ち實相佛にまかせて了つたら、吾々が救はれると云ふのも、實在の光の前に、非實在の罪をまかせ切つて了つたら、その罪は消えるほかはないからです。普賢菩薩行法經に『懺悔せんと欲せば實相を念へ、すべての罪は太陽の前の霜のやうに消えて了ふ』と書いてあるのも、實相の光の中へすべての罪の暗を溶かし切つたら、一切の罪は本來無の相をあらはして消えて了ふからです。念佛も實相觀即ち神想觀と同じことです。實相に歸一すれば『惡念の具象化』と云ふことはないのです。『念の具象化』とか、因緣々々と云つてそれに捉はれてゐる間は、まだ實相を悟つてゐないのです。假存在のウソの存在の罪の尻を追つかけ廻してゐることになつてゐるのです。神の前に、實相の前に、罪をほり出したら

消えて了ふ。因縁も消えて了ふ。これが生長の家で教へてゐる『罪はない』と云ふこと、因縁は超越できると云ふことなのです。何でも實相ばかり念じたら一切の悪いものは本來無いのだから消えるほかはないのです。難有いことでありますなア。

それから病氣と云ふものはスレ合ふ心、爭ふ心、呪ふ心で起ると申しましたが、さう云ふ念がどうして起るかと申しますと『我』であつて、こちらが何でも我を突張らうとするから、周圍の人も我を突張らうとする、それで周圍と衝突することになつて調和を缺く心になるのです。

石橋さんは、先刻のお話のやうに、見ず知らずの病人でも救つてあげたいと思つて、本賣りか無心云ひかと間違へられさうでも生長の家の小冊子を持つて往つておあげになつたほどに深切な人である。その深切な石橋さんが何故またそんなに娘の勤め先の奥さんのお産に『死んで生れたら、好い氣味だなア』などゝ思はれたのでありませう。それは石橋さんが『生れて後にお祝ひを持つて往つたら、その方が合理的だ』と云ふ自分の尺度を有つてゐられた。ところが娘の方は別の尺度を有つてゐて『いや、もう友達が祝ひ物を一緒に買ひに行かうと云つて待つてゐる』と云ふ。兩方の見る尺度が違ふ、こちらはこちらの尺度で三尺あると云ふ、あちらはあちらの尺度で測つて見て二尺あると云ふ。持つてゐる尺度が双方とも違ふのだから寸法が合ふ

害がない。それで互ひに心で爭ふ、そこで、石橋さんは自分の有つた尺度が勝つために『死んで生れたら、そら見よわしの尺度が勝つたらう』と云ふことが出來る、それで此の自分の有つてゐる尺度を勝たせるために此んな深切な石橋さんでも『死んで生れたら好い氣味だなア』と思ふことになつたのです。自分の尺度を持つてゐなければ、さう云ふ樣な氣持は起らない。從つて病氣も起らない。だから、病氣が嫌ひなら此の自分の尺度を捨てると云ふことが肝要であります。佛教では『自分の尺度』のことを『我見』と云ふ。自分の尺度を握つて離さないことを『我見を執する』と云つて、悟りを開くに大變邪魔になるものとせられてゐるのでありま す。もう一つ例を引いて見ますと、人の道教團では病氣を治して頂くのに御神宣と云ふ神樣のお示しを頂くことになつてゐる。その御神宣は大抵共通であつて『我を捨てよ』と云ふ意味のことが書いてある。つまり、我見を捨てよ、自分の尺度を捨てよと云ふ意味である。我見があり、自分の尺度があるので互ひに衝突して和合が出來ないのでありますが、この自分の尺度、我見と云ふものを捨てると、爭ふ心がなくなる、爭ふ心がなくなると、聖典『生命の實相』の卷頭に書いてある『汝ら天地一切のものと和合せよ』の敎への『和解』が出來て來る。すると一切のものは吾々を害することが出來なくなる。全世界が天國になり、國家が安穩になり、家

庭が平和になり、各人間が幸福になり健康になつてくる。人の道教團では病氣の人がお伺ひをたてると御神宣と云ふものを呉れる。それは互ひに誰にも見せたら可かぬといふことになつてゐて祕密になつてゐますが、大抵『もうこれから我を一切立てません』などといふやうな意味が書いてある。互ひに見せ合ふと、『君も同じことか、何ぢや』といふことになつて、『我を捨てよ』といふ教へをおろそかにして實行しないことになる。それでは折角の御神宣が何にもならぬことになるから、内容祕密主義にしてあるのです。併し、要は此の『我を捨てよ』といふことである。そして此の御神宣を實行すると病氣が治る、八十パーセント實行すると八十パーセント病氣が治り、百パーセント實行すると、百パーセント病氣が治る。その理由は『我を捨て』我見を捨て、自分の尺度を捨てると天地一切のものと和解出來るからであります。

第九章　種々の宗教問題に答ふ

一、久遠實相の世界に就て

上澤——何に遇つても恐れない無畏怖の境地に入りたいと思ふのですが、それに就ての心得と云ふやうなものを承らして頂きたうございます。

谷口——神が創造せられた久遠實相の世界、此の世界の實相のみを觀るやうにして、移り變る現象世界を實在と見ないで、假の相、非實在と觀ずるのです。さうすると心が現象世界の變轉に捉へられなくなります。久遠實相の世界のみが實在の世界ですから、そのほかのもの丶變化に心を動かすことは要らないのです。

上澤——久遠實相の世界とは、如何なる世界のことでありますか、これを外の言葉で云へば、神界靈界と云ふほどの意味でございますか。

谷口——久遠實相の世界と云ふのは、神界靈界と云ふやうな意味ではありません。單に『實相の世界』と云つても宜しいのであります。『久遠』と云ふのは、生滅常なき現象世界に對して、永遠不壞の實相世界を形容したのであります。『實相世界』を靈界のことだと思ふ人がありますが

靈界と云ふのは現象界の一部で靈魂の住む世界でありまして、そこには迷へる苦悶せる亡者の靈魂も居りますが、『實相世界』とは神の創造り給うた儘の完全さは今も永遠つゞいてゐる世界でありまして、現象世界の奥にと云はうか、内面にと云はうか、背後にと云はうか、今も實在してゐるのでありまして、此の實相の世界に於てはあらゆるもの凡て至妙に、あらゆるもの凡て至美に、あらゆるもの凡て完全に、一切のもの凡て神の創造せる儘に、神の無限智と無限愛と無限生命と無限能力とを體現してゐるのであります。

上澤――この御言葉の由つて生るゝ根據ともいふべきものを拜承いたしたいと思ひます。どうもさう云はれましても吾々はその『實相』の世界を眼に見ることが出來ません。

谷口――『實相世界』は五官に觸れたり、六感に觀えたりする世界ではありませんから、立論の根據を、眼に見えるものを持つて來て、これは斯うであるから、實相世界に存在するものは美しいとか完全であるとか申すことは出來ないのです。たゞ吾々が『實相世界』と云ふ完全な世界の存在を知るのは、實相覺と云ふ一種の靈覺によるのでありまして、此の悟りが天來の光線のやうに降つて來るので、『實相』の存在と云ふことがパーッと明るくなるので判るのです。喩へて見ますと、現象界は暗の世界ですから、暗を手搜りで探つて見ても實相の有様は判らないので

す。大體その手觸りから見當をつける人もあります。例へば現象界の色々の法則の整然たることや天體の運行の誤りなきことや、植物の種子に宿つてゐる生命の發芽と云ふことや――色々現象界の事柄から綜合結論して實相世界の存在と云ふことを歸納する賢者はありますが、現象界の事實から見ての結論はまだ實相覺と云ふことは出來ないのです。實相の扉をひらいて實相を知る最も簡單なる鍵は神想觀をなして、存在の實相と自己生命の實相とを正觀することであります。

上澤――『實相の扉をひらいて實相を知るには』たゞ神想觀をすればよろしいでせうか。

谷口――『實相』を知るには前に申しましたやうに、現象界を暗中模索して、それから結論を下してゐるだけでは、頭腦の智慧で知つたゞけで實相を悟つたとは云へないのです。實相を覺るにはどうしても神想觀をして存在の實相と、自己生命の實相とを正觀することが必要なのです。

上澤――『存在の實相と自己生命の實相とを正觀する』と申しますと？

谷口――存在には實相と假相とがあるのです。假相と云ふのは現象のことです。現象と云ふのは存在するやうに見えても本當に存在するのではないから、時々刻々瞬々移り變つてゐるのです。その移り變るものを見詰めてゐても捉へどころがないから、移り變る現象を觀ることを止めて

望遠鏡で視力を集めて天を覗くやうに、心の視力を集めて實相を靜觀するやうにするのです。これが神想觀でありまして、神想觀によつて吾等が心の方向を一轉して存在の實相を靜觀しますと、あらゆる存在の奥の奥に横たはる圓滿具足の本質を悟ることが出來るのです。

上澤――此に被仰る『あらゆる存在』とは、『あらゆる人、物、事』と解してよろしいでせうか。

谷口――さうです。あらゆる人、物、事にも假相と實相とがある、それで常に人に對し事に對し物に對し、假相の不完全な姿を見ないやうにし、圓滿具足の本質を見るやうにするのが好いのです。

上澤――『圓滿具足の本質』とは、『神性』といふやうな意味でせうか。

谷口――さうです。神性と云つても佛性と云つても宜しい。一切衆生佛性ありと釋迦は云はれましたが、生けるものだけではなく、一切の物事の奥にも實相があり圓滿具足の本質があるのです。此の實相は五官や六感で知ることは出來ないから實相覺で直覺するほかはないのです。

上澤――『實相覺で直感する』といはれる、その意味を詳く御教へ下さいませんでせうか。

谷口――實相のみが實相を知る、五官は感覺的事物のみを知る、これは類の波長が類の波長を感知するのでありまして、これには感覺的事物を追ひ廻してゐたら、實相の波長と、感覺的事物の

波長とが混信して、不完全なラヂオ機械が二重放送を分解し得ないやうに實相を分離して感知することが出來なくなりますから、暫く五官を蕩盡して實相に自分の全存在を委ねるのです。すると『自分の實相』が直接『存在の實相』に觸れ生命の實相に觸れ、充たされ、またそれにとり圍まれてゐることを直接體驗として悟得するのです。

上澤――先生が『存在の實相』とか『生命の實相』とか被仰いますのは言葉のアヤで同じことを別の言葉で被仰るのでございますか。それとも全然別の意味のことでございますか。

谷口――『存在の實相』と云ふのは『モノソノモノの本當のスガタ』と云ふやうな意味であります。萬物の實相と云つても好いでせう。吾々の五官で見る世界は『モノソノモノのホントノスガタ』ではないことは既に說明した通りであつて、色々不愉快な事物や事件などが現象界に起つてゐるのは、本當にそんな事物や事件が起つてゐるのではない、吾々の念で賦彩して、不快でない幸福な事物事件を、さう云ふ不快な出來事のやうに見せてゐるのです。例へば『生活難』と云ふやうなことでも、『實相の人間』には生活難はないのですが、實際無いところの生活難を現象の上では『念の力』で假創造してゐるのですが、それは現象世界のことであつて、實相界にはそんな生活難はないのです。それで吾々は『存在の實相』を見、即ち『モノソノモノの

ホントノスガタ』を見るやうにして、そこから自然法爾に動き出せば、生活難と云ふやうなものも消えて了ふのです。即ち吾等は、存在の實相の完全さを如實に現象界にあらはすことになり、自己が『神』なる人間本來の實相をそのまゝ現象の世界にも完全にあらはすことゝなるのです。それでは『存在の實相』とは同一意味であるかと申しますと、存在するものはすべて『生命』であると云ふ意味から申しますと、『存在の實相』と云ふ言葉も『生命の實相』と云ふ言葉も結局同一意味になるのでありますが、『存在の實相』と云ふ語は概ね人間を離れての事物事件環境周圍などの實相と云ふ意味に用ひ、『生命の實相』と云ふ言葉は人間の本質――本當の人間の實相――延いては『大生命即ち我が生命なり』の自覺に立ちますと、『生命の實相』とは天地に滿つる大生命の實相と云ふやうな意味に用ひます。

それで、人間が吾が周圍の存在物の實相の完全な相を常に觀るやうにしますと、周圍が自分の念で光明化されて來ますから、吾が周圍には不完全な相や、缺乏の狀態が現實に見られなくなつて來るのです。要するに神の創造り給へる『實在世界』には不完全や不幸はないのですからその人の周圍に不完全な狀態、缺乏の狀態等があるのは、その人の『念』が賦彩して、『實在の完全なる實相』を歪めて現象化したのですから、吾々が『念』を淨めて實相のみを見るやう

にすると環境は幸福となり、肉體の方から云つても、我等が常に『實在の完全なる實相』を意識するとき全細胞に滲透してゐる念は健全となり絶對健康の觀念はつひに吾等の全細胞の組織を改造するに到るのです。

上澤――こゝに云はれる『實在の完全なる實相』とは『神の完全なる實相』と解してよろしいか或は『實在の世界に在る、自己生命の完全なる相』と、解する方が適正でありますか。

谷口――『實在の完全なる實相』と私が申しました其の『實在』と云ふ意味は『本當にアルもの』と概括して考へて宜しい。『神のみが實在である』と云ふ立場から行きますと、『實在の完全なる實相』とは『神の完全なる實相』と云ふことにもなります。人間自身にとつて云へば、『實在の完全なる實相』とは、『實相人間の完全な實相』のことになります。此の實相の人間即ち人間本來の面目と云ふものは常に健全を離れたことがないのであります。今、現に肉體が病氣してゐても、實相の人間は病氣ではないのです。

上澤――その病氣してゐても病氣でない『實相の人間』とは、『靈としての人間』或は『生命としての人間』と解してよろしいでせうか。

谷口――『靈としての人間』と云つても、混同し易い言葉になります。『靈』と云ふ語は、『普遍靈』

と云ふ意味にも、『個別靈』と云ふ意味にも用ひます。『個別靈』と云つても『實相の個性生命』と『假相の個性生命』とを分けねばなりません。『實相の個性生命』は『神の子』そのもの、『佛子』そのものでありますが、『假相の個性生命』とは所謂る『迷つてゐる靈』『亡者の靈魂』と云ふことになります。だから、單に『靈としての人間』と云ふだけでは、『亡者の靈魂』やら『實相の個性生命』やらハツキリしないことになります。『實相の人間』と云ふのは『實相の個性生命』と云ふ意味でありまして、神に創造られた其儘の本物の完全な個性生命のことになります。そして吾々の『念』が正念であつて、神に創造られた其儘の人間の實相を完全にうつし出すやうな狀態になつてゐるならば、人間の生命は實相の世界から眞直に直射して來て、本來の自由自在な人間本性が完全に現象世界に投影せられ、現在世界に完全な自由人が出來上るのであります。

現象世界と申すものは『生長の家』の思想によりますと、『念』によつて『實相世界』が投影せられた複製の世界とも云ふべきものでありまして、此複製の世界が『現物の世界』（即ち實相の世界）に完全に似て來ると、此複製の世界（現象世界）實相世界がそのまゝに完全になるのであります。此の現象世界と云ふ複製の世界を現像するためのレンズが吾々の『念』であつて、念

のレンズ即ち吾々が念々『存在の實相』を自覺し『神』なる自己生命の實相を描いて、活きるとき、吾らの念は曇りなく完全な複製用レンズとなる譯です。從つて自己の現實人間は完全に神なる人間本來の實相をうつし出すことになるのです。茲に環境も幸福、肉體も健康な『肉體人間』(實相人間の完全な複製)が出來上ることになるのであります。

二、我の正體に就いて

上澤――『我れ神なり』とは、我れとは生きる力であると觀ることだと思ひますが、さうすると、『ニセ物の我』や『本物の我』などと云ふ區別はない、小我と雖も矢張り『本物の我』――生きる力の一顯現であつて、この本物の我が物質に向つて働きかけた場合にそれが小我となる。小我とは生くる力のわれが物質に對して動く場合に現す姿で、決して自分の生きる力以外に僞せ者と云ふものが出て來るのではないと思ひます。『生長の家』では、『ニセ物の我』と『本當の我』とを截然區別するところに、その思想の特徴があるやうに思ふのですが、私の考へでは『ニセ物の我も本物の我も畢竟一つの生きる力の種々相であり、決して別物でなく完全に歸一してゐる』のだと思はれるのです。これについて先生の御說明を伺ひたいと思ふのでありま す。

谷口――『われとは生きる力』であると云ふ説明を與へたのは古くは印度のヴェダ哲學の神我説がそれであり、近世の大思想家ショーペンハウエルがそれであり、最近ではロマンローランの思想や、ベルグソンなどの思想も恐らく大別すればこれに當ると思ひます。釋迦はヴェダの神我説を否定して、般若經によつて『無我々々』と說いて、そんな『我』と云ふものは無いものぢやと否定して了つたのであります。『五官の我』即ち『五官的存在の生きる力』を『我れの正體』だと見る限り、近代の自然主義的肉慾滿足は『われの正體』の正しき當然の發展となり、『生きる力』と『生きる力』との衝突（生存競爭）も、『五官的存在として生きる力』を實在として肯定する限り、そのまゝ善しと肯定しなければならなくなるのであります。ショーペンハウエルなどは、宇宙全體を一つの『生きんとする意志』の展開として觀ましたけれども彼は是によつて少くも『聖俗の間に出入して障礙なし』などと云ふ解脱的境地に達することが出來ず、古今未曾有世界第一の大厭世哲學を築き上げたのであります。だから、『五官的存在として生きる力』を我れ自身の實在的半面であるとして肯定する限り、ショーペンハウエルの例をもつてしても判ります通り、本當の解脱自由と云ふことは出來ないのであります。今迄『自分』だと思つてゐた『罪惡深重の自分』は本當は、『僞存在の我』であつて、そんなものは非實在

と悟つて、心がクラリと眞自我の方へ一轉して、『光明遍照の自我』を體驗するのが生長の家の悟りであります。『生長の家』で說くところの『僞存在の我』と云ふものは、決して『僞存在』ではない、非存在でもない眞我の一顯現だと說くやうな人が假にあるとしますたらば、その人は迷ひに落ちたのであります。

例へば、我々が、他を倒して自分が榮えようとする利己主義の我が出ることを『僞存在の我』が出たと生長の家では云ふのですが、それは『僞存在の我』ではなく、眞我の三態の顯現中の一つとして肯定することになるならば、利己主義も眞我の一顯現であるから、利己主義大いにやるべしと云ふやうな誤解をも招き易いのです。また利己主義同志で互に傷け合つてゐる。戰爭、盜賊、詐欺などと云ふことも眞我の一顯現であり、それも顯現であり、大いに可と云ふことにもなるでせう。そんな說は『生長の家』では說かないので、眞我卽ち『實在の我』には利己主義的な傷け合ひは存在せず、戰爭、盜賊、詐欺などの狀態も、それは實際に存在しないのに『衆は諸々の憂苦あるこれらの狀態を存在せりと誤信し妄想してゐるのだ』と法華經壽量品の自我偈同樣に說くのが生長の家の正說でありますから、誤解のないやうにお願ひ致します。

三、雜念妄想は實相を妨げず

神崎――神想觀によつて實相に歸入するには雜念妄想があつては可けないのですか。

谷口――雜念妄想があつても決して神想觀を妨げるものではないのです。實相の念と云ふものは積極的な念であり、實在の念でありますが、雜念妄想は積極存在の念ではなく、本來非實在の念なのですから雜念妄想は幾らあつても實相の念を打ち消すことは出來ないのです。雜念妄想そのまゝで實相を念じてゐたら、それで好いのです。實相を念ずることは阿彌陀佛を念ずることも同じことです。法然上人は『和語燈錄』十二箇條の中で、『念佛の淨摩尼珠を投ぐれば、心の水のおのづから淨くなりて往生を得ることは念佛の力なり。わが心をしづめ、この障りをのぞきて後、念佛せよとには非ず、たゞつねに念佛してそのつみを滅すべし』と云つてゐられますやうに、雜念妄想を鎭めてから實相を念ぜよと云ふのではなく、實相を念じてゐたら、淨摩尼珠と云ふ水を淨める珠を投げ入れると自然に水が淨まるやうに雜念妄想が淨まつて來るのです。雜念妄想を淨めるのが先でなく實相を念ずるのが先なのです。

河原――先づ實相を念ずるとしまして、雜念妄想が淨まつて來なければ神想觀は效果がないのでございますか。

谷口――雜念妄想が淨まつて來なければ神想觀の效果がないなどと思ふのは、雜念妄想に何か實

在のカがあるかのやうに思つてゐる迷ひです。雜念妄想そのまゝで實相を念じたら、闇を消さうと努力しないでも、闇のまゝで火さへ點じたら闇が消えて了ひますやうに、雜念妄想の効果が自然に消えて了つて、實相を念ふ効果ばかりが實現して來るのです。法然上人に或る人が『手に念珠をとれども心にそゞろ事をのみ思ふ。この念佛は往生の業にはかなひがたく候や』と訊いたら、法然上人は『念佛の時、惡業のおもはれるのは一切の凡夫のくせである。さりながら往生の心ざりを以つて念佛したならば、決してさはりとなるものではない。後嗣ぎの約束を固く結んで置いた親子は、その約束さへ本人が捨てるつもりがなければいさゝか位は心がそむいても親子相續の約束を破棄して了ふものではないと同じである』と答へてゐますが、これは親子の約束に譬へられてゐますが、吾々が『實相』を念ずるのは、阿彌陀佛と云ふ佛が自分から離れたところにあつてその佛と親子相續の約束を結んだと云ふやうな頼りないものではない、『實相』は自分自身の本來なのだから、その本來相を觀るつもりでさへあれば、幾ら雜念妄想があつても自然に『本來相』があらはれて來て、雜念妄想は少しも障りにならないのです。

四、神想觀と食物

瀧本――私は神想觀を毎朝起床後一時間宛行ふやうになりましてから、朝食が大變美味しくたり

それ迄は、やつと二碗を味噌汁をかけて流し込んだものですが、近頃は五杯六杯の朝御飯が美味しく頂けて一日中愉快であります。神想觀を行ふと肉體が靈化するから、御飯のやうな物質的なものは次第に食量が減じて食べなくともよくなると云ふ人もありますが、私は正にその反對の現象を起してゐるのであります。神想觀は果して食量を増加せしめるものでせうか。減少せしめるものでせうか。

谷口――神想觀は完全なる我が實相を觀ずるがために、その完全さが外の世界に現はれる過程として、神想觀後は今迄になかつたやうな狀態を起すことがあります。食量は殖えるのが正しいか減るのが正しいかと云ふお尋ねは、『水は蒸發して下から上へ昇るのが正しいか雨となつて地へ降るのが正しいか』とお尋ねになるのと同樣であります。水は蒸發して上へ昇るのも正しく、雨として下へ降るのも正しいのです。では雨は、澤山降るのが正しいか、澤山降らぬのが正しいかと問へば、どうお答へになりますか。田植時には雨は澤山降る方が好いし、秋の刈入時には澤山降らぬのが好いのです。すべて形に捉はれることは『生長の家』の生き方ではないのであります。多くも可、少きも可、時に從ひ、人に從ひ、行雲流水、行くが如く、停るが如く、流るゝが如く、行かざるが如く、空手千變萬化すべて可し。皆可。惡しきものは吾らが實

相を觀る限り起らないのであります。徒らに食量の増減多少に捉はれないのが好いのであります。増すべき必要ある時には増し、減るべき必要ある時には減るのであります。

五、斷・不斷煩惱得菩提

豊田――或る人は『達人でも、やはり常人と變りはない。つまらないことはつまらないのである。……唯、達人の業が達人の業であるのは、執着を斷つてゐることに因るのである。……執着せずに眞劍にやれるのが眞實の達人である』と云はれます。私の考へでは、『本當の達人になつたら、詰らないことは無い』のでありますまいか。自己が實相を悟つたら、自己の内部から光明が輝いて來ますから、自己の向ふところすべてが光明輝くものとなつて來て、詰らないことは影を消し、詰らないものは無くなるのではありますまいか。

谷口――嘗て達磨大師が三人の弟子に對つて、煩惱と菩提との關係をお問ひになつたことがあります。一人の弟子が答へて云ふのに『煩惱を斷じて菩提を得』と答へました。これは『執着を斷つてゐることに因る』といふ言葉と一致します。すると達磨大師は『汝は我が肉を得たり』と賞めたと云ひます。もう一人の弟子が答へて云ふには『煩惱卽菩提』と。煩惱は卽ち菩提であつて、煩惱を離れて菩提はない、其の儘が菩提である、娑婆を離れて淨土はない、娑婆卽ち

寂光土である、痛みは治る相である、症狀そのまゝが生命の病氣を自壞さす作用である、と答へた譯であります。すると達磨大師は『汝は我が骨を得たり』と賞めたと云ひます。すると第三番目に慧可が答へて『煩惱本來なし、たゞ菩提あるのみ』と申しました。すると達磨大師がまた『汝は我が髓を得たり』と云つて讃嘆しました。『生長の家』もその眞髓から云ひますと『煩惱本來なし、たゞ菩提あるのみ。現象本來無し、たゞ實相あるのみ。肉體本來無し、たゞ生命あるのみ。』であります〻、影があらはれてゐるのは其奧に光があるからであるやうに、煩惱が現はれてゐるのはその奧に實相があるからでありますから、煩惱を離れて『實相』に到達するのではなく、煩惱を生きつゝ實相を生きるのです。煩惱が實相から光線の曲折なく射して來る歪みのない影となれば、其處に煩惱卽菩提となり、慾望を斷ずることなくして心のまゝにして其處に實相が生きてゐることになるのであります。此の境地に於ては執着が自然に斷たれてゐて、而も慾望が生々として何事にも熱意をもつて從事する事が出來るのであります。

六、實相と現象、眞象と僞象に就て

中村——私は『生長の家』の眞理を知人に傳へるべく努力致して居りますが、知人から逆襲されて來る質問で私としては充分明快の說明を與へ得ませんものがあります。その第一は何故、

神は善人のみを作らず惡人をも作つたかと云ふことであります。その第二は神の愛は平等であるべきを原則と思へるのに、富者と貧者とが存在するのは神の惠みの不公平を物語るものではないかと云ふことです。その第三は神想觀の修行に依り、病氣の癒ゆることは『生長の家』誌上にも度々發表あり、また私自身も治病の體驗者であるから、疑ひは毫もありませんが、富は神から何億萬圓でも無限に與へられてゐると『生長の家』誌上に說かれてゐますが、其の惠まれたと云ふ實驗例は『生長の家』が生れて五年餘にもなるから、もう好い加減に致富の體驗者が出現しても好いではないか、それにさう云ふ人が少いと申します。無論この知人の質問の仕方を考へますと、物質に惠まれたり、健康に惠まれたりする代償として神を信仰すると云ふに在るものゝ樣で、自己の修養を主とし其の結果富も得られ自體も健康を惠まれたと云ふのとは異つて先に代償物を求むる信仰で不純の樣に考へられるのでありますが、斯う云ふ程度の心境にある人にもわかりやすいやうにお答へ下さりたいと存じます。

谷口――此の質問は現象世界と實相世界とを混同してをられます。『生命の實相』全卷を充分にお讀みになれば判りますやうに、神は決して惡人をお造りにはなつてはゐないのです。『神は惡人を造らないから、惡人は無い。』これが『生長の家』の根本思想なのであります。その『生長の

家』に對して『何故神は惡人をも作つたか』と質問なさるのは一寸見當外れの觀があるのであります。では、『神が惡人を造らないのに何故この世に所謂る惡人があるか』と云ふ質問に貴方の御質問は變化して來るべき性質のものであります。それにはかう答へます——神は惡人を造らないけれども、吾々の念が惡人を假創作して現實界にそれを顯はし、本來存在しない所の惡人をあるかの如く見えしめてゐるのであります。だから本來惡人は無い、皆なその本來相に於て善人であり、善人でありながら善人の實相を自覺せず、自分を惡人だと思ふ『自心の展開』として現象的には惡人らしくあらはれても惡人は本來存在しないのであります。

『實相』動いて『現象』あらはれ、現象は『實相』の創化力のあらはれであるから、實相即現象である、實相は大海の如く、現象は大海の表面に浮ぶ波のやうなものであるから、如何なる現象と雖もこれ悉く實相の顯はれだと云ふ說を爲す人がありますが、さうではありません。現象を區分して『實相の念』の顯れとしての現象即ち眞象と、『妄念』の顯れとしての現象即ち僞象とに分ち、『實相の念』の顯れとしての現象(眞象)は實相界の完全な相をさながらその儘に體現してゐますから實在に卽した存在でありますが、妄念の顯れとしての現象(僞象)は實相とは似も似つかぬ相であり、それは蜃氣樓の如く、ありと見ゆれども實際は存在しないのであります。

そしてお尋ねの『悪人』と云ふものは、この妄念の假作せる僞象でありますから、ありと見ゆれども實際には存在しないのであつて、實際に存在する『本當の人間』とは似もやらぬ非實在の人間なのであります。

現象全部を『あり』と肯定することは素朴的實在論と申しまして、哲學史を見ますと、野蠻人原始人などはいづれも此の說をとつてゐます。現象を以てすべて大生命の現れであると云ふ說は古代より今日に到るまで唯心的傾向のある哲學者宗教家などの多くが採用してゐる說ですが此の說では、現象の不完全なる相を観て、斯くの如き不完全なる現象を創化し出したところの大生命（神）を不完全非力量なりと観ることになり、吾等が『大生命の子』であり、『神の子』であると云ふことが『不完全なるものゝ子』であると云ふことになり、一向難有くないことになるのであります。だからショーペンハウエルなどは此の世界を『唯一つの偉大な意志と現識との創造』と観じながら厭世思想に陥つてゐるのであります。現象に眞象と僞象あり、不完全なる僞象は妄念の投影するところであつて ありと見ゆれども非實在である、完全なる現象は實相完全の世界の投影として、實相の顯れであり虛假不實のものではなく、實相が感覺世界に姿を映出したものなのであります。

そこで第二の問の『神は何故富者と貧者とを作つたか』と云ふ疑問も自然に解決いたしませう。『生長の家』に云はせればすべての人間は神の子であり、神によつて無限の富者に作られてゐる、一人も貧者は存在しないのであります。夜間、淺草公園を彷徨してゐるルンペンも、金殿玉樓に美饌を貪つてゐる千萬長者の主人公も共に神の子であり無限の富者たる神の後嗣に相違ないのであります。だから彼等兩者はいづれも、その實相に於ては無限億圓の富者なのであつて、乞食小屋のルンペンも、金殿玉樓の富者も實相に於ては異る所はないのであります。然るに現象の上では斯くの如くルンペンと富豪とに相異つた顯はれをしてゐるのは何故でせうか。

これは、實相は神の創造力の展開でありますから完全圓滿豐富無限であるほかはないのでありますが、現象界は『自心の展開』でありますから、時には實相に一致した念（正念又は實相の念と謂ふ）の展開として豐富無限の眞相をあらはし、時には實相に一致せぬ念（妄念又は妄心と云ふ）の展開として實相には似もやらぬところの貧窮の僞象をあらはすのであります。だから吾々は念に從つて富むことも貧しくなることも自由自在に出來るのであります。

そこで遂に貴下の提出せる第三問に到達いたします。『生長の家』が『人間神の子、本來無限の富者なり』との眞理を說き始めましてから五年に達しますから、無限の富者がもうソロ〳〵

その實證としてあらはれて好いものだとの御説は御尤もであります。併し『無限の富者』とは固定せる富の億萬長者の意味ではないことを知らねばなりません。億萬長者と雖も『無限の富者』にくらぶれば貧窮の一市井人たるに過ぎないのであります。本當の『無限の富者』と云ふものは、何億圓とか何兆圓とか限られたる數量の固定の富を有する者ではありません。必要に從つて幾らでも富が流入し、彼は貪慾者ではありませんから、必要なき時には自然に流入量を減じて必要を調和し、伸縮自在の『無』にして『無限』の富を有するものであります。この事が判明しますと、『無限の富者』となると云ふのは現在經濟界の癌腫になつてゐる『富の偏在』を起すやうな富豪を作る意味でないことがお判りになりませう。本當を云へば、『富の偏在』を生ぜしめてゐる富豪の如きは、『放したら減る』との觀念に支配せられて、搾取の非難を受けつゝ放すこと少くして掻き集めた富でありますから、一種の『迷ひ』の顯れであり、『實相無限の富』の顯れでないことを知らねばなりません。だから實相を知つた者が、現代の所謂る富豪にならないかと云ふのはこれ又見當違ひの質問なのであります。

自然に欲しいものが集つて來る底の『無限の富者』ならば、『生長の家』の誌友には澤山あるのであります。一例を擧げますと、群馬縣總社町に福島博氏と云ふ方があります。三年病臥

齒磨粉を買へない程の貧窮の底にゐられたのでありますが、『生長の家』を讀むと共に病ひ悉く癒え、今度ある修行所をお建てにならうとお思ひになりますと、木材を獻納しようと云ふ人、大工賃を奉仕したいといふ人、土地を提供しようと云ふ人が交々にあらはれ、風呂釜や、最近にはまだその建造物の出來ない先から、修繕は私に奉仕させて下さいと云ふ大工さんまで出て來たのであります。而も福島博さんは私財は殆んど零である。私財は零であるが欲しいと云ふものは自由に集つて來るのであります。この福島博さんが外出する時になると、降りかけてゐた雨でも歇んで了つて天氣になつて了ふ。附近の町民、氏を噂して『赤城の山神が福島さんを守護してゐる』と云ふ位であります。億萬長者でも天候を左右する精巧な科學的機械を作ることは出來ない。ところが福島さんは無一文であつて而も必要だにあれば億萬長者も成し能はざる程に環境を征服支配することが出來るのであります。これが本當の無限の富者と云ふものである。富者と云ふものは、金を手許に持つてゐるだけであつて、必要なものを必要に從つて驅使し得なければ、何も富者の效能はない。金がなくとも必要なものを必要な時に、億萬長者より以上に驅使し得れば、その人は億萬長者以上の富者だと云へるのであります。無限供給と云ふのは全てに亘つて無限供給であつて、金ばかり固定偏在せしめて置いて、ほかの點で不自由

不如意なのは無限の富者ではないのであります。

七、人格的交通の祈に就いて

田中――『いのちのはやて』所載の『實相を顯現する祈り』を讀んで大いに教へられました。實相に於てはすべてのものは祈らずとも與へられてゐると云ふことはよく解りました。併し祈りはたゞ自心の整理であつて、祈りに神が感應して靈驗を顯はし給ふのではないと云ふのは、何だか淋しい氣がします。祈り頼んで與へられると云ふ方が、神と人間との人格的交渉を深めるやうな深い宗教的な感じがして懐かしいのであります。併しこれは在來の宗教的習慣から來る私の迷ひでありませうか。先生も生長の家の神樣にお祈りになつたと云ふ記事が聖典『生命の實相』や神誌『生長の家』に出てゐます。その場合の先生の祈りも、先生はたゞ自心の整理のためのみに、お祈りになつたのでせうか。それとも父と子との間に於ける人格的な交渉のやうな意味に於て、子が父に求める如き意味に於てお祈りになつたのではないでせうか。これは實に重大な問題でありますのでハツキリした返事を是非お伺ひしたうございます。

谷口――祈りと云ふものは『自心の整理』であり、自分の心を實相の方へ照準し、實相の方へ焦點を合はすための行事であると共に父と子との人格的交りの意味でもあるのです。あの論文は

實相を顯現する祈りを說いたので神と人格的に交る祈りを說いたのではありません。前者のみでは『理』として遍在する如き神のみを認めて、人格として吾々に生きた關係をもつてゐる神を認めないことになり、偏寄つた神のみを認めることになるのであります。神は遍在的な『理』として存在し給ふのみならず、人格的な姿を顯はし物言ふ神としても存在し給ふのであります。私が祈るときにも『何々を與へ給へ』と祈ることが無論あります。現に招神歌にも『生きとし生ける者を生かし給へる御親神、もと津みたまゆ幸へ給へ』と『給へ』と云ふ祈りの言葉を使つてあります。既にみたまを與へ給うてゐるのであるから、今更みたまを幸へ給へと祈るのは間違つてゐる。この招神歌は『幸へ給ふ』と改むべきだと生半可な理窟を云つた方もありますが、決して此の招神歌は間違つてゐないのです。實相の神は南無阿彌陀佛と呼べば、阿彌陀佛の姿を現じ給ふ神樣であり、生長の家の神樣と呼べば生長の家の神樣の姿を現じ給ふ神樣であります。吾々が實相の神に祈るのは、現象界へ實相の神を呼ぶのであります。『衆生佛を憶念すれば佛衆生を憶念し給ふ』と云ふ語がありますが、神は實相界に遍滿し給ふ神でありますが呼んでも呼ばなくとも滿ちてゐ給ふ神樣でありますが、呼ぶとき其處に人格的交渉があらはれ人格神として應現し給ふのであります。神を父に喩へて見ますならば、父は『お父さん』と呼

ばなくとも父の守りは一家内に滿ちてをり、萬事萬端完全に滿ち備へて置いて下さるのが父でありますが、子供が『お父さん』と呼んで抱きつくとき、其處に人格的交渉が顯はれるのであります。祈りには實相を顯現する祈りと人格的交渉の祈りとがあるのです。

それから、實相界は絕對無相の世界であり、神と人との對立、父と子との對立などはない、陰陽の對立を生じたのは既に絕對界ではないから、それは現象界であつて實相界ではないと思つてゐる人がありますが、さう云ふ風な說き方は異說であつて、『生長の家』ではないのでありま す。

若し、實相界を絕對界と稱し、絕對界と云ふものを陰陽對立以前の無相の世界であつて、陰陽相分れて對立するやうになつてからの世界は現象界であると云ふやうに說きますならば、以前以後によつて實相絕對界を限ることになり、絕對界は現象界と對立する世界になり、それは絕對界と稱すと雖も既に相對界に對立する一國土の名稱に過ぎないことになり、實相界は陰陽對立以前には存在するが、それ以後には存在しない從つて現在の吾々には何の關係もない世界になります。吾々が說いてゐる『實相世界』は陰陽剖判以前にはあつたが今はないと云ふやうな世界でなく、『今も昔も久遠に在る世界』なのです。それは絕對界ではありますが、相對界に

對立してゐるのではなく一切の相對を自己の內に圓融包容してゐる世界です。假りに絕對界を『一圓相』をもつて圖示すれば、圓周內の無數の諸點が相對的存在であり、絕對界はそれら無數の諸點を自己の內に包容しつゝ、それ自身は絕對的な存在なのであります。

で、吾々が『神と一體に融會せる存在』だと云ふことを說きますると、神と一體であるから吾々は神に祈る必要はない、祈ると云ふことをするのは神と自分とを離れた對立的な存在だと思ふから起るのだと疑問を起す人がありますが、『圓』內の無數の點は『圓』の內に包容融合された存在でありながら、同時にその『點』から『圓全體』に對して呼びかけることも出來るのであります。『圓全體』に對するこの呼びかけが『人格的交りのための祈り』であります。圓內の無數の點は『個我』であり、圓全體は『大我』であり、大我を稱して『神』と稱し、『父』と稱し、親樣と稱し、『個我』と名付け、又『神の子』と稱するのであります。而もその『神の子』は圓內の一點として圓全體の力によつて支へられ、圓全體の智慧によつて導かれ、圓全體の愛と生命とを受けて生かされてゐるのでありますから、個我は『一點』であると同時に全實在の神と一體であり、神全體がその一點に流れ込んで生きてゐると云ふ譯であります。併し、個我が單なる個我として大我と離れたバラ／＼の存在でない自覺を顯はすためには、心によつて、言葉に

よつて、個我が大我に結びついてゐる事實を確認することが必要であり、この確認が『祈り』となつてあらはれるのであります。

八、人は現象を通して悟るか、現象の裂目を通して悟るか

野中――『現象は存在しない、實相のみが存在する』と云はれますが、現象は實相の動き、實相の剖判展開でありませう。だから何人も現象を通してのみ實相を悟ることが出來るのでせう。だから現象を空無として排斥するのは間違つてゐる。現象を離れて實相は無い、現象即實相でありませう。

考へて見ますに、吾等は實相と云ふものを直接は知ることが出來ませんから唯、現象を通してのみ實相を悟ることが出來ると云ふことは事實です。現象が御說の如く『非存在』のものならば、本來『非存在』なる現象を通して吾々が悟ることはあり得ない筈でありますのに、現象を介して吾々が悟りに入ることがあるのは何故でありませうか。

谷口――貴方は現象を通して人が實相を悟ると云ふ風に云はれますが、人は現象を通して實相を悟るとは、人自身の實相に依るのです。間違へないやうにして下さい。現象をいくら分析して見ても實相は出て來るものではない、肉體人間をいくら分析して見ても實相人間の完全さは判

つて來るものではない、吾々が實相を知るのは『自己の實相』と『天地の實相』とが直接相觸れてカチ〳〵鳴る底の直接認識（實相覺）によるのであります。この直接認識によらざる悟りは、實相を如何に悟つたやうに見えやうとも、それは悟つたやうに見えてゐる心境に達してゐるだけであつて、實相そのものゝ直接認識ではないから、それを反對に立證するやうな現象にブツ突かると、その悟りが崩れて來るのであります。例へば醫療を排して病氣が癒つた現象を見たゝめに『人間は神の子だ』と悟つたとしますならば、その反對の現象『醫療を排しても病氣が治らなかつた現象』をたま〳〵見たならば、『人間は神の子だ』と云ふ悟りは崩れて了ふのであります。だから現象を通して『人間、神の子』の實相を悟ると云ふことは悟りに似たものを得るだけで、本當に悟りを得ると云ふことは望めないのであります。

現象界の秩序整然たる相を觀て神の存在を覺る、と云ふやうに說く人があります。工學博士の田中龍夫氏や佐藤定吉氏などは專門が工學方面なので此の種類の說き方をするのであります。例へば物質分子の原子量を重いものより輕いものに順にならべて行けば、原子を構成してゐる電子の配列に一定の數學的秩序があり、そこに單なる偶然とは說明し難い神の智慧が働いてゐることを肯定しなければならないとか、星辰の運行に一定の秩序があるとか等々……と云ふ風

に現象界を眺めて其處に秩序ある意志を發見して、その秩序ある意志を神とするのであります。併し斯う云ふ觀方は、現象をそのまゝ『有り』として現象の創造主を神とするので、この觀方では決して『生長の家』で說いてゐる『物質無』の悟りには到達しないのであります。有るが如く見える現象をありと觀て理論を立てるのは最も容易な事でありますが、それも一種の哲學ともなり、或る派の宗教學說ともなりますが、『生長の家』の說くところは普通五官で觀て『有り』と感ぜられる所を『無し』と宣言するのですから、餘程達識の人でないと解らないのであります。例へば『生長の家』では『病氣は無し』と申します。併し病氣は五官で觀ればある。病竈の一部の組織を採つて、それを物理化學的に試驗をすれば、それは或る分子組織をなしてをり一定の原子量を有つてをり、一定の電子配列を呈してをり、明かに物理化學的には『有る』のであります。卽ち田中龍夫博士や佐藤定吉博士が汎神論の根據としてゐる物理化學的研究の上では病氣はあるのであります。併し『生長の家』では物理化學的には『有り』と證明される病竈を『本來無し』と云ふのであります。これは、現象を觀て現象を精査して歸納して行く論理上の歸納法によつては、その立論の根據が現象を脚場としてゐますので、若し、現象を『無し』と宣言する時は立論の根據が破壞され、理論の脚場が壞れて行きますので、到底『現象本來無

し』の結論に達するものではありません。『現象本來無し』の悟りは、あなたのやうに『吾人は現象を通してのみ悟り得る』などゝ云ふ立場からは到底摑み得る悟りではないのです。『現象本來無し』の悟りは『現象を通してのみ』得られるのではなく、却つて『現象を通さなくなつた時』――現象への捉はれが完全に放下された時にのみ得られるのです。雲が無くなつた時にのみ吾々は太陽をハツキリ見得るのです。たま〳〵自身が薄雲を通して太陽の薄光を眺め得たからとて、その自分の體驗によつて『吾人は薄雲を通してのみ太陽を見るのだ』と云ふ結論を下したら滑稽でありませう。薄雲を通さなければ、尚一層太陽がハツキリ見得るのであります。一切の現象を放下し去つた時、吾々は本來神の子なる實相を見得るのです。雲が破れたとき太陽が見えたからとて、太陽を見るべく雲が破れるためには、雲が先づ存在する必要があると云へば滑稽でありませう。雲がなければ一層太陽はハツキリ見えるのであります。そのやうに或る瞬間パツと現象の雲が破れたとき吾々は實相を悟るのであります。

現象を通して吾々が生命の實相を悟ると云ふ場合は、例へば、(1)藥とか、一切の治療法とかへの執着を放下し、心が捉はれから解放されて其の心的解脱の反映として病氣が治ると云ふ事實や(2)たま〳〵愛他的行爲をなした場合、自己の現象的存在(肉體)は苦しいにも拘らず心

が法悦とも云ふべき歡喜に滿たされる實感により、現象的存在（肉體）としては『彼』と『我』と互ひに相離れてゐるけれども、その實本來一體なる實相を悟るが如き場合であります。（1）の場合は病氣が治ると云ふ現象を通して吾々は生命の實相を悟るやうに見えますけれども、事實はさうではない。色々と現象界の藥や方法を漁つて見たけれども、つひに治す藥のないのに愛想をつかして、藥や治療法と云ふ色々の現象界の存在に頼らなくなり、肉體の物質的變化と云ふ現象界の存在にも心が捉へられなくなつた時、そこに現象の雲が破れて實相の雲が輝き出し、現象が實相の姿を反映して健康體を現出したのであります。悟りが先きであつて健康と云ふ現象は後にあらはれるのであります。こゝが肝腎であつて、健康と云ふ肉體現象を通して悟つたなどゝ考へてゐますと、不健康な肉體現象に接すると其の悟りがフラつき出し、悟つたなどと云ひながら、その悟りは『現象の變化』によつて咬へて振り廻される底の薄弱なものたるを免れないのであります。（2）の場合の愛他的行爲によつて本來自他一體の實相を悟ると云ふことも愛他的行爲と云ふ現象界の行爲を通して實相を悟るがやうに見えますけれども、それは雲が破れたときに雲の裂目を通して太陽を見るが如く、現象の裂目を通して實相を見たのであります。雲の裂目を通すことを、『雲を通して』などゝ語法によつて云ひますけれども、『雲の裂

目を通して』と云ふことは、『雲の無い所を通して』の意味であつて、決して本當は『雲を通して』ではありません。

吾が愛他的行爲を通して實相を悟ると云ふ場合も、現象を通して實相を悟るやうに見えますが、實は、『現象の裂目を通して』實相を悟るのであります。五官現象としての人間(肉體人間)は個々別々の存在であつて、甲の快感は必ずしも乙の快感ではない、甲が美食をしても乙は美味しくない程度に、甲、乙、丙、丁各人は別個の存在であります。ところが此の五官現象としての人間が、五官に當然感じられるところの各人別個の感じを超越して、自他一體の感じを味ひ彼の歡びを吾が歡びとして感じ、彼の快感を吾が快感として感ずるのは、明かに個別的存在としての五官現象の裂目であり、五官の雲の裂目だと云はねばなりません。だから、吾々は五官現象を通して實相を悟ると云ふがやうに見えますけれども、實は五官現象の裂目、五官的認識の否定を通して實相を悟るのであります。

九、靈山靈地の靈驗に就て

松田 ―― 私は小豆島のものですが、四國八十八ケ所を縮めた樣な小豆島の八十八ケ所巡りを、先生は御存知でありませんか。その八十八ケ所の巡禮者は、今一番多い時です。私も一度は巡禮

して見たいと思つてゐるのですが、私は一寸恐ろしい事があるので御座います。それは八十八ケ所の中のある寺では、鐘をつかうと思ふと女の人の髪がその柄に捲き付いたり、又或る所では鎖に手がついて、離れないとの事です。實際あつた事なのです。これは惡い事をした人はその報として佛樣に罰を與へられるのだと言はれてゐます。生長の家では、神樣は罰を與へたりなんかしない……とありますが、これは如何なる理由で鐘の柄に髪が捲きついて、はなれなかつたり、鎖に手がくつゝいてはなれなかつたりするのでせうか。私だつて今までには惡い事をした事もありますから何だか參拜するのが恐ろしい氣がするのです。

谷口――靈地靈山等には其處を中心にして衆生濟度に當つてゐる靈界の諸靈たちの一群が棲んでゐるものであります。貴下の云はれるやうな心靈現象はこれらの諸靈たちが、濟度の方便として行ふのであります。斯う云ふ現象は物理的心靈現象（Psychophysical phenomena）と申しまして、實驗室でも時として出現し得る現象であります。これは宇宙普遍神の神罰と云ふやうなものではありません。個別的人格を有する或る靈魂の作用のあらはれに過ぎません。

宗教的欲求から靈地を巡禮すると云ふ習慣は古來からあり、また現在もありますが、これは本當は正しい宗教的要求ではありません。奇蹟を喜び、靈驗を歡ぶのは本當の宗教的要求では

ないのであります。奇蹟と云ひ靈驗と云ふのは現象界の利益でありますから、さう云ふ現象界の利益を求めるのは、一つには怪異に對する好奇心であり、一つには異常能力に對する人間の憧憬であり、また一つには人間以上に異常能力ある何物かに賴つて物質的利益を得んとする心であります。其のやうなものを求める心は本當の宗教的信仰とは云へないのでありまして、當り前の生活の中に神が顯はれてゐるのが難有いと云ふやうになるのが本當の宗教的信仰であります。

四國地方は古來から各種の「靈」の巢窟とせられてゐるのでありまして、弘法大師の巡錫以來、物理的心靈現象の旺んなる土地であります。弘法大師のあらはした奇蹟的靈驗は如何にしてあらはされたかは存じませんが、有名なる物理的心靈現象の靈媒にて嚴重に兩手兩足を緊縛されたまゝ、一番下の襦袢だけを裏返しに着て見たり、上衣は着たまゝでシャツだけを脫いで見たり、手足を緊縛せる線金繩を、縛つた原形のまゝで繩拔けしたり、不思議な現象を演ずるこの異常な物理的心靈現象を起してゐる靈魂は物理的現象を起すに相應しいやうな物質的波動に近い體を備へた靈魂であります。

十、神世復古と生長の家の使命

松山――先日或る豫言者にお逢ひしました。其豫言者が云はれるには、來る可き神世復古のため其の生みの苦しみの人智を盡しての暗黑時代がやつて來る。其の動亂から選ばれた數人の民がハコブネとなつて神に自覺の縁のないものを乘せて救ふのであるといふやうなお話を伺ひました。此の豫言は恐らく信じ得ることなので御座いませう。が、知つてこだはる可きことではないと存じました。此の時に、堅牢なハコブネとなる爲に私どもは生長の家でなくてはならぬと其の時に、自覺いたしました。それで、凡てのものが救はれるのでありませうと申しますと、其豫言者は、救はれぬ靈があると申されました。其の時は、肉體は本來なしといふことを其豫言者にお話いたしますと、肉體もある、靈もある、御親神は、タカミムスビ神を靈の神とし、カミムスビ神を肉の神として創造り、この二神合して力――天照大神（天照大神と申されたと存じます）を生み給ひ、靈肉力の三つが地上を運轉して居る。今は肉が靈を壓して居るのでこれが迷ひの元であると申されました。靈肉一致して神世復古が始めて成され得るのだと說かれるのであります。其の時に私は、肉體本來なしの悟りこそ靈肉一致の實際を顯揚する道であることを悟りましたので、生長の家が眞の惟神の道を得て居ると思ひ、其のまゝ其豫言者の御說を受け入れました。が、救はれぬ靈がある、其の靈を救はうとして神が努めて居られるが、歎き

の日に裁かれる者はある』と申されますので、それは何うなりますと反問しますと、『消えて無になる』と申されました。私には、救はれぬ靈があるといふのは、迷ひの靈、惡靈であると悟れて居りましたので、押して、『救はれぬ靈はない筈です』と質しますと、『いや、ある』と答はれるのです。其の時、直感で、私の思索と其豫言者の說が同一であると解りましたので、大膽になつて、『全能であり、愛である神が、何故救はれない靈を造つたりするのですか』と追求しますと、『理窟ではありません』『理窟でなしに伺ひます、救はれぬ靈といふのは惡靈ですね』『さうです』『その惡靈は神から生れた靈ではありませんね』『いや、神から生れた靈です』『しかし、神から生れた靈は完全な靈だけでせう』『さうです、が、神は眞水で靈を創造し給うたのであるが、其の眞水が、濁つて來た、それが惡だ、それをも救はうとして神はつとめて居られるのです、けれども救はれぬものは救はれません』『では、何故にごりが生じました』『解らない、神にお訊きなさい』押問答になりました。その時私は『解りました』とお答へしました。唯用語の差だけのことだと悟つたので御座います。それから、いろ／＼お話します內に、其豫言者は、人は、靈と肉の二重人格だと申されますので、私は、『「生長の家」の眞理では肉の方の人格はなしと悟り一重人格にならうとつとめて居るのです』と申しますと、『神さまは今の世で

はそれは出來ない、神世復古して始めて完きを得るのだ』と申されました。これも肯定出來ると存じました。更にいろ／＼生長の家による私の信念をお話いたしますと『神さまはから被仰られる、あらゆる宗教の祖をつかはしていろ／＼の門から不二の山頂に登ることだけは明してある、一切宗教は不二の山頂で一つになる。こゝ迄は說いてある。が、神世復古の大業は山頂に登るだけでは出來ない、山頂から更に雲を招べと仰せられる、雲を招ぶことを工夫して頂き度い、其のことを成し得た人が選ばれた民となり救世主ともなるが、これは自力ではない、神にさせられて能ふのだ』と言はれました。

選ばれた人となり得ることは、其の時、私の心底には沸々と湧く自覺で御座いましたが、これは勿論、私の當意成心によるのではありませんから、唯正しき道を行じたならばよろしいのだと思ひました。惟神の道は、生長の家の眞髓でありますし、雲を招べと言はれる其のことは、生長の家によつて充分に示されて居ると思ひました。生長の家は、神世復古の大業の爲に不二の山頂より雲を招ぶ爲に現はれて居るのだと自覺出來たので御座います。

其豫言者の言はれる、『神世復古』の御代は、現象界にはある時を轉機として顯はれるので御座いませうが、實際には、無始無終にある實相の世がこの神世で、今日は唯、隱蔽されて居るに

過ぎなく、其の實相を證しするものが、生長の家であると信じて居ります。生長の家の眞の使命が歴然と見えて參りました。あるひは、如上の事は、先生は既に御承知のことではあるまいかとさへ思つて居ります。其豫言者が、昨日、私宅からの歸途、いろ〳〵の宗教の人々にもお逢ひはしたが、生長の家の方々程、心から美しく思つて嬉しくお逢ひ出來た方々はない、實にキレイにニゴリがない、谷口先生と申される方は御立派な御方と思ふ、折を得たらお會ひ申し度いと思ふなど言はれましたのを、さもあらうと會心の事で御座いました。尚、其の豫言者の說では、祖先靈を神道に移し祭ることを勸めますので、之は、實相を悟つて眞日本人たるを自覺した、キリスト教佛教の指導下の靈が、謂はゞ外國の國魂神の領から、惟神道なる日本へ歸國するやうなものだと思ひますが、如何のものでせうか。

谷口――最後の審判に『燒き滅ぼされる靈』があると云ふ話に就いて私の意見を述べて見ますと『靈』と云ふ用語の內容によつても異ることですが、神から生れた靈とは、『實相の生命』であつて、今も常に今後も眞清水の如く淨らかで少しも濁りません。

『生長の家』に言はせれば『實相の生命』は現に今も永遠にも濁つてゐないのであるから、何故濁るかの問が成立しないのであります。ところで『吾々の實相生命』――（これのみが本當

の自分自身でありますが）――これは濁らず、從つて素より燒きほろぼされることがないとすれば、燒き滅ぼされると言ふのは『如何なる靈』のことでせうか。それは吾々の實相生命ではない。それは吾々の『業』なのです。佛教では『靈』と言ふ言葉を使はず、生れかはるのも『靈が生れ代はる』と言はず、『業が輪廻する』と言ふのです。業に善業と惡業とあり、惡業とは實相と波長の合はぬ念波の集積であり、善業とは實相と波長の合ふ念波の集積であります。この場合、『靈』と言ふ言葉と『業』と言ふ言葉とは同じなのです。惡靈が燒き滅ぼされるとは、惡業が完全に壞滅することなのです。これは當然のことなのです。惡業は『實相の念』にあらざるが故に壞滅するのは當然なのです。惡業が輪廻しなくなる、即ち『惡靈が生れ代らなくなる』のです。それが何故恐ろしいのでせうか。吾々はたゞ『實相生命』の實在のみを知り、惡業の結局自壞することを常に說き、惡業の自壞によつて、却つて本當の自分が完全に開顯することを說いてゐるのです。『燒きほろぼされる靈』と申しますが、それは『靈』といふことばを『生命』と誤解したがために、自分自身が燒き滅ぼされるやうな感を抱いて恐怖するのでありますが、『靈』と言ふ言葉をば『輪廻する業』と言ふ正しい意味にとるときは、燒き滅ぼされるのは自分自身ではなく、惡業が燒き滅ぼされ、自分自身の實相は却つて一層完全に開顯するのですか

らどこまで往つても『生長の家』は恐怖の宗教にはなりません。悪業が燒きほろぼされることを恐れる人は自分の實相生命を知らず、自分とは『業』だと思つてゐるのです。

十一、他人の不幸を如何に扱ふか

平田――聖典『生命の實相』は私の一生離さず御守りとして何處〳〵までも自分の迷ひを御氣付けして戴く積りであります。私は今度こそは本當に悟つたと思つて居ましても、其の思を持續して色々と生活して僅か四五日すれば又わが思が慢心で有つたと、失敗を氣付くのであります。こんな事ばかりを繰返して誠に辱かしう御座います。仲々わが生命の本當の相は容易に悟れません、慢心ばかりにつき當るのです。然し乍ら御蔭樣で人間とは肉體にあらず、自由自在な『心』で有ると云ふ事は十分判らせて戴きました。そして自分と云ふ『心的存在』の環境にあるものは、『形』ではなくて各々また心的存在である。自己の放送する通り環境の人たちも思ひ、悪を放送すれば悪が集り善を放送すれば善の思ひが集まり、ある思ひを自己が發信すれば、その發信の通り相手又は環境があらはれて、自己の思ひの通りが集ることを本當に事實判らせて戴きました。聖典にあります通り、悪を分析すれば迷ひの深入りで却つて眞理に遠ざかり直さうと思つた性格も悪の念ひをうけて一層惡くなる。人間は心が本體だから思ふ通りに

何時迄も益々惡になる。惡を直さうと思へば、惡を分析せず、ほむべき點卽ち相手の神性を見出して、神性を思はせよとは事實だと思ひます。若し相手が惡い樣に見えるならば、私の五感『ニセの自分』が惡いので有る。相手は私に宿り私を生かす神の思ひを思ひとして生くる神の子だから絕對に完全で有る、怒りでも憎みでも同樣、本來よい神の子を惡いと思つたり、怒つて居ると思つたり、憎んで居ると思つたりするのは私の五感の間違ひである。一切の存在は思ひが本體だから、思つた通り私が惡かつたのです。然し私も神の善き思ひを思ひとして生きて居るのだ。それ故、私も神の子で惡くない。そして宇宙に惡は存在しない。性格などは、斯樣に惡を分析せず消滅させる事が出來ますが、こゝに一例ですが、今相手の子供が死亡したと致します。言ふまでもなく、相手は大不幸です。私は、嗚呼氣の毒に不幸で有つたと思ひます。そして御悔みを申さうとする。此の時です。相手は自由自在な無形な神の子で、不幸はない。不幸に見えたのは自分の五感の間違ひで有る。相手は神性で不幸はない。不幸に思つたのは思つた自分が不幸で有つたのだ。然し乍ら自分も神の思ひを思ひとして生くる神の子で完全で不幸はないと御悔みの御言葉御挨拶も述べずに居るのは、事實不人情で有る樣です。不幸を分析すれば不幸になる、何時迄も不幸より逃れる事は出來ぬと云つても、不幸の言葉を述べねば仕方がな

いでは有りますまいか。又相手が目の前で苦しんで居る、然し乍ら相手は神の思ひを思ひとして居るのだから本當は自由自在な生命で相手は苦しんで居るのではない。相手は苦しいと思つたのは私の五感の迷ひだと只相手の神性を拜んで居ますと、相手が不幸に遇つても實際同情が出來ません。苦しんだ様に思つたのはそれは私の五感がさう思つたのだから私が苦しかつたのである。然しながら私も神より出た神の子だから苦しくないと言ふ様になれば、事實惡も不幸も分析せず、善ばかりが殘る様になりますが、これでは餘り不人情に思ひます。こゝの私の迷ひを御啓き下さい。

其の反對に、私を生かす、私に宿る神の思ひを思ひとして生きて居る萬物は善の思ひの神の子で惡く見えるのは私の五感のニセ物だと思つて居りますから絕體に相手を尊び又、私を生かす神の思ひを思ひとして居る自他なれば如何なる事でも目上の人の申す事は勿論、公の事でなしに只相手と自分の間柄の事なら私に不利な事でも、否、不利に見えたのは私の迷ひ、相手は神の子だからと思ひ、相手の言ひなりになる事も出來ます。又よき思ひ、よき言葉も發する事も次第に御力に委せて出來得る様にもなります。が不幸、悔み、見舞に對して述べねばならぬ言葉を相手に見出した時、貴方は幸福でせう、あなたは神性で不幸はないのですと言ふ様な顏付

きで居るのは、餘り不人情の樣です、此處の迷ひは如何すれば宜敷ろ御座いませうか。

谷口――『誠に、このたびはお氣の毒なことでございました』と普通に御挨拶になつたら好いでせう。それから一轉して、その不幸は現象界に於ける悲痛なる事實では一應ありますけれども、必ずしもそんなに悲しみにばかり溺れなければならない出來事でないことを徐々に知らせてあげなければなりません。このことは「薄情に見える』どころか、深切の極の極である譯でありま す。悲しんでゐる人に出會うて救ふ道には『せめて一緒に悲しんであげよう』と云ふ同悲の心が起ります。此の時の同悲と云ふは、單に一緒に悲しむと云ふやうな單純なものであつてはなりません。此の時の『悲』とは『拔苦與樂』の『悲』でなければならないのです。大悲觀世音菩薩の大悲でなければならないのです。究極に於て大いなる悟りに導く大悲でなくてはならないのです。悲しみに嬌やかし、悲しみに溺れさせ、再び起てなくして了ふやうでは、相手を一層悲しみのドン底に突き落すことになります。病人を『可哀想だ、可哀想だ、もつと安靜にしてをれ、そんなに動いては危い、またブリ返すかも知れない』と云つて適當の時期に病床から起たせることを忘れたやうな可愛がりかたをしてゐましたら、却つてその病人を惡くすることがあります。それと同じやうに、不幸に逢つて悲しんでゐる人にいつまでも『可哀想だ、可

哀想だ』と云ふ言葉の雨で、益々御本人を不幸の感情に陷れて了つては、そこには救ひは成立たないのです。

貴方が『悲しみは本來ない』と云ふ眞理を知られ、『死はない』と云ふ實相を知られましたならば、それは貴方だけの悟り、貴方だけの救はれであつてはならないのです。『自分だけ救はれてゐたら、それで好い』と云ふやうで、自分の悟りを他に及ぼして他を救はうとしないのではそれこそ貴方の云はれる『薄情』でありませう。人間の不幸と云ふものは何のために來るか、それは生あるものは必ず滅し、滅するものは本來實在ではないと云ふ眞理を知らしめ、そして本當の永遠不滅の『久遠實在の我』を究極に於て悟らしめんがためなのです。常に生滅を繼續してゐることは現象界の事物の常なのです。現象界には永遠不滅のものは一つもない。吾々のこの肉體でも五十年なら五十年間チャンと不斷に少しも變らずにゐるかと云ふと決してそんなものではない、吾々の肉體細胞は間斷なく死滅しそして新生してゐるのです。今日見える肉體はもう昨日の肉體ではないのです。吾々の肉體がせめて生きてゐる間だけでもチャンと一つの永續したやうに見えるのは、本當は永續してゐるのではなく、間斷なき死滅と更代とによつて永續してゐるかのやうに見えてゐるのです。それは單に見えてゐるのみです。それは丁度活動

寫眞に映し出されてゐる一個の人物が、一個の變らぬ人物の動きに見えてゐませうとも、それは實に數千數萬のフィルム面の交替によつてさう見えてゐるのと同じなのです。だから、生滅すると云ふことゝ永續すると云ふことゝは同じなのです。私は時々人に冗談らしく斯う云ふことがあります。『私は每日死につけてゐます』と。金光教祖は『日に〳〵生くるが信心なり』と被仰つた。日に〳〵死するからこそ日に日に生きてゐるのです。日に日に生きることゝ、日に日に死することゝは同じことの裏表なのです。數千數萬のフィルムが死んで、暗の中へ隠れて了ふことによつて、一個の人物が動いてゐるやうに見えてゐるのです。『現象人間は本來無い』――それは活動寫眞のやうなものなのです。死によつてのみあらはされてゐる永續なのです。本當に永續するものは現象人間ではない――現象人間をあらはしてゐる背後の生命です――その生命が本當の人間なのです。活動寫眞の一人物は一映畫が終ればもう映畫のなかには無い。それは本來無いからです。併し映畫を映し出させてゐた映寫技師はその一映畫が終つても矢張り生きてゐませう。活動寫眞が始つたり、終つたりするのは、さうした映畫の生滅によつて生滅しないところの映寫技師の存在によるのでせう。その如く、吾々肉體人間をあらはしてゐるところの『生命』なる映寫技師が『本當の自分』なのであります。この『本當の自分』を知る

ものは悲しみのなかにあつて悲しみに捉はれないのです。映畫の悲劇を見ても、それが本當に深刻なものであれば吾々は泣くでせう。『あゝ、可哀想だねえ』とも云ふでせう。泣いても宜しい。『可哀想だ』と云つても宜しい。それは挨拶であつて人生に柔らかさを與へてくれるものです。泣くことによつても人間は喜べます。吾々は歌舞伎を見るのに、泣く快感を味ひに行くこともあります。舞臺の悲劇は實在でなくとも、實在でないと知つても泣けるのです。併しそれが實在でないと知るが故に悲しみの中にゐて捉はれないのです。近親者の不幸に會つてゐる場面に面したら一緒に泣いてあげなさい。泣いてもたゞその悲しみに捉はれないことが必要です。自分が泣くのは相手を救ふために泣くのでなければなりません。沈んでゐる者を救ふには上から『浮いて來い』と云ふだけでは薄情でせう。自分も沈んで行つて、その沈んでゐる者を抱きかゝへて、水面へ泳ぎ上つてくるのでなくてはなりますまい。一緒に泣いてあげて、そして一緒に光明世界へ泳ぎ上つて來るのが、これが不幸に出遇つてゐる人に對する本當によい挨拶であります。

十二、神想觀の時、息苦しいのはどうすれば好いか。

大島——私も『生長の家』を通じて先生に救つていたゞいた者で御座います。只々病氣を恐れて

居りました私が、去年元日早々喀血致しました。何うにもならないと知りつゝ來る日も焦りつゞけ、夜の睡眠も充分致しかねる有様でございました。其の時能登半島の義兄より『お前の救はれる道はこれより無い。これを御讀みなさい』と生長の家のパンフレットを送附致して呉れました。前に送つて呉れてありましたのと二冊を幾回も拜讀致しました。其のおかげで大變自分の前途が明るくなつた樣な心持が致します樣になり、劇しい咳も不淨物が外に送り出される作用と思ふ樣になりましたため、如何に傍の人々が心配致す程でありましても、別段の惡い變化もなくなりました。あれだけの喀血と不充分の眠りに、私自身今さら後をふりかへつて見まして如何なつて居た事かと思ふ程でございます。

それから、私は聖典を頂きましてから、それに隨ひ神想觀を致して居りましたが、祈りに入りますとどうも充分息が出來かねたのでございます。一心に祈りましてもどうも息がつまる樣でしつかり出來ませんでした。それでも神の子として救はれたく、我が心の目を開きて神の子たる事實を悟らせて下さいませと祈りましたが、毎晩まだしつかり神の子たることを祈りきれないで居る自分を罪深き者と思つてどうしても涙がながれて仕方がなかつたのでございます。そして猶祈るのでございましたが、或晩泣きつゝ涙ふきつゝ祈つて居りました。するとそれでむせ

たためか咳が一寸はげしく出ましたので、それをしづめ、この樣なことでは駄目だと、猶祈りのために再び合掌を始め、も一度招神歌を默誦一回（始めの歌のみ）次に『吾が生くるは吾が力ならず』と默誦致して居ります最中、突然自分の身體が大變輕くなりあるにはある樣なれどやはりない樣な丁度合掌も致して居りますが、それも只腕の骨とでも言ひませうか、それのみが輕く自分があはせて居るとより思はれないのでございます。坐つて居ります足に重みもございません。猶不思議なことには誰か私を輕く支へて居る樣でありながら、それで私は動けなく且胸も背も何となく暖かく何とも言へない今迄のつまつた樣な心持とはまるで異つた感じが致すのでございます。誰も居ないのに、たしかに誰か居るとより思はれませんでした。あとでもう一度先程の氣持と比較すべく合掌致して見ましたが、明に體重で足が痛みますが先程は其の樣なことはありませんでした。祈りの後、前までぜい／＼致して居りました音がなくなり、息が樂になつた樣に思はれ、何回も呼吸を致して見ました次第でございます。屹度生長の家の神樣だと幾回も伏しをがむだのでございます。

私が神想觀を『生命の實相』にもとづき正しい形式の下に始めましたのは今晩で四晩目でございまして電燈を消しましたのは三晩でございます。其の以前二月の始から祈ることは祈つて居

りました。充分に息が出來なくどうも思ふ様に精神統一の出來ないのを悲しく思つて居りましたが神様の御助けであつたと存じます。まことにありがたうございました。

谷口――神想観の時息ぐるしくなつたり息が却つて急速になつたりして『生命の實相』に書いてあるやうに呼吸が出來ないと被仰る方は往々ございます。最初十回位『生命の實相』に書いてある通りに深い呼吸をしてゐられるうちに、さう云ふ狀態が起つて來る場合は、その息ぐるしさその急速な呼吸そのものが治す働きであるのであります。だから、さう云ふ場合には息は自然にまかせて宜しい。否、まかせるのが一層好いのであります。

それから、貴方の守護神（誰にでも守護神がついて護つてゐるのですが）その守護神が貴方の宗教的進歩の急速ならんことを願つてゐられるのに、貴方自身の心がノラクラしてゐて、その進歩がたど／＼しい場合には、守護神の心が焦つてゐてイラ／＼してゐますので、その焦りの心が、神想観中具象化して、激しい呼吸となつて現はれることがあります。さういふ場合には、『わが守護神様よ』と心の中で呼びかけて、『私の魂の進歩が遲くて申譯ありませんがこれから心掛けて、尚一層勵みますから貴方もさう焦らないで下さい。貴方が焦れば焦るほど私の心が落付かず、修行がおくれますから、どうぞ心を落付けて私と共に不動靜寂に歸つて神

想觀をして下さい』と下腹に力を入れた低聲で力強く二三回云つて御覽なさい。貴方の云ふ意味が守護神の心に徹底したらその激しい呼吸は治るものであります。又呼吸器病などの方で肺臟炎の呼吸容積の關係上呼吸を深くすることが苦しい方は、たゞ出來るだけゆつくり靜に呼吸せられるだけで宜しい。要は心の有ち方が主であります。

十三、對人恐怖は如何にすべきか

村井――私は某銀行の支店長をしてゐますが若い時分から現在に至るまで左記の性癖があつて常に私の心を暗くさせます。卽ち、衆人の前で私の意見を述べやうとしますと、落付きを失ひ、動悸が強く打ち、聲すら十分出ぬやうになり折角の意見も述べずに終るか、又は十分に發表出來ず仕舞になります。それから、人の前で字を書く場合でも同樣で手がふるへてかたくなつて十分の力が出ませぬ。このためどれだけ私が苦しんで居るか知れませぬ。就きましては、これを矯正して落付のある性格を得やうとするには、如何に祈り、如何に修養したらよいでせうか御指導をお願ひ致します。いつも三四月頃には風邪を引いて患ひ勝ちの私が今年は一日も病に犯されず、勤めさせて頂く事は全く『生長の家』のお敎へによる事と存じます。光明叢書の一冊は常に私のポケットに入れてゐるのであります。

谷口――對人恐怖が起るのは、大抵祕密性の强い人でありまして、他人が自分の缺點を看透しはしないかと思ふから起るのです。自分の缺點を看透かされるのが恐ろしいのは、自分を自分の價値以上に見られたいと云ふ念があるから起るのです。言ひ換へると人に打勝ちたい欲望です。百點に見られたい、八十點に見られたらそれこそ大變だ。自分の缺點はこんなのである、これを知られたら世間に顏向け出來なくなる。斯う思ふものですから、人に對すると自然に缺點を蔽ひ隱さうとして、戸惑うて、ドギマギして了ふのであります。八十點しかない値打なら八十點に見られて好い、六十點なら六十點に見られても好い、常に正札で掛引ない値段で見て欲しいと云ふやうな氣持になつて、缺點があるならば缺點を隱さうとしない氣持で、缺點をわざと出して見せよう、正札を出して皆に見て貰はう、そのために嘲笑はれても、それは嘲笑はれるだけの値打だけしか自分には持ち合せがないのである。人前で字を書いて手が顫へるならその顫へる實際を正直に見て貰はう。人前で物を云つて言葉が下手ならその下手の實際を見て貰はう。自分にはそれだけの價値しかないのであるから、せめて、人前で掛引してよく見て貰ふよりも、本物を見て貰ふやうに、出來るだけ缺點を晒け出して人に見て貰はうと云ふ心になりますと、却つてその缺點が出なくなるのであります。缺點を出すまい出すまいと恐れるから

恐れるもの皆來るで、却つて缺點が出て來るのであります。これは別の話でありますが、毎夜睡眠中遺精をする習慣のある人がある、遺精をしたら身體の榮養分が無駄に排泄されて身體が衰弱すると思ふものですから、『何とかして遺精をやめねばならない』と遺精のことを氣にかければかけるだけ、遺精を益々やるのであります。これは遺精に心が引つかゝつてゐるからであります。この人が或る日、或る心理學に達してゐる醫者にかゝると其の醫者が云ふのに、それは『遺精は恐ろしい、遺精をしまいしまい』と思つて寢るから遺精をするのだ、遺精なんて恐ろしいものではない。『今日から一つ遺精を出來るだけやつてやらう』と眠りしなに思つて寢て御覽、もう遺精はしないから――と斯う云はれましたのです。その患者は眠りしなにその通り實行しましたら、その夜から遺精しなくなりました。

生命の實相(第九卷完)

昭和十年八月二十日印刷納本
昭和十年八月二十五日發行

生命の實相(全集豫約)
第九巻（定價二圓送料・內地十錢）

版權登錄

著作者　東京市澁谷區穩田三丁目七十六番地
谷口雅春

發行者　東京市澁谷區穩田三丁目七十六番地
佐藤勝身

印刷人　東京市牛込區山吹町一九八番地
山本禎男

印刷所　東京市牛込區山吹町一九八番地
宗文社印刷所

製本所　東京市神田區三崎町一丁目八番地
成島製本所

發行所　東京市澁谷區穩田三丁目七十六番地
光明思想普及會
電話青山(36)四四三一番
振替東京五五五一九番